

ユーラシア草原地帯東部における青銅器文化の研究

松本, 圭太

<https://doi.org/10.15017/1398292>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

ユーラシア草原地帯東部における青銅器文化の研究

松本 圭太

九州大学大学院比較社会文化学府

平成 25 年 6 月

ユーラシア草原地帯東部における青銅器文化の研究

目次

序言	1
第1章 先行研究における課題と本研究の目的、方法	5
第1節 ユーラシア草原地帯東部の青銅器文化に関する学史の現状	
（1）前2千年紀前半におけるユーラシア草原地帯東部に関する議論 中国初期青銅器とユーラシア草原地帯東部の青銅器 チェルヌィフの冶金圏 初期青銅器とユーラシア北方 草原地帯の青銅器との対比 セイマ・トルビノ青銅器群の西漸説	7
（2）前2千年紀後半から前1千年紀初頭、いわゆるカラスク期に関する議論 モンゴリアと南シベリアの関係についての諸説 剣とA・B説 刀子とA・B説 A・B説以外の青銅器研究	14
（3）前1千年紀初頭、いわゆる「初期遊牧民文化」成立に関する議論 「初期遊牧民文化」出現期のユーラシア草原地帯東部 青銅器と鹿石	19
第2節 問題の所在	
（1）前2千年紀前半の研究における問題 土器文化の中での青銅器 セイマ・トルビノ青銅器群西漸モデルにおける問題点	23
（2）前2千年紀後半（カラスク期）の研究における問題 A・B説における青銅器の系譜関係抽出とその方法論（分析手法における問題） A・B説を含めた考察上の問 題	26
（3）いわゆる「初期遊牧民文化」の発生についての研究における問題	30
（4）小結	31
第3節 本論における目的と方法	
（1）本書の方針	32
（2）各章における方法と資料	33
第2章 セイマ・トルビノ青銅器群の検討	
第1節 有蓋矛の検討	
（1）分類 形式分類、型式分類（鍛造製品） 型式分類（鑄造製品：三叉矛） 脊形態による区分（セイマ・トルビノ、 サムシ・キジロボ有蓋矛の区分基準） 型式分類（鑄造製品：菱丸矛）	37
（2）編年と各系譜の派生関係	44
（3）金属成分と型式	45
（4）分布 型式分布 金属成分分布	46
（5）小結	49

第2節 有銚斧の検討

(1) 分類.....49
 形式分類 (大別形式) 形式分類 (鑄造有銚斧の細別形式) 型式分類 (有銚斧Ⅱ類の分類)

(2) 編年と各系譜の派生関係.....52

(3) 金属成分と型式.....53

(4) 分布.....54
 型式分布 金属成分分布

(5) 小結.....56

第3章 新疆、長城地帯の初期青銅器とユーラシア草原地帯の青銅器文化

第1節 新疆、長城地帯における初期青銅器の分類

(1) 利器.....57
 有銚鬮斧 有銚斧 有銚矛 鏃 刀子 無銚斧 鑿 錘 鎌 斧状ハンマー ヒ 錐 針

(2) 装身具.....60
 装飾品

(3) 分類結果.....61

第2節 初期青銅器とセイマ・トルビノ青銅器群

(1) 初期青銅器の有銚矛Ⅱ類について.....62

(2) 初期青銅器有銚矛Ⅱ類とセイマ・トルビノ青銅器群有銚矛C類.....63

第3節 初期青銅器の分布

(1) ①a、c、②、③、④群 (有銚矛B類以外) の分布.....63

(2) 有銚矛Ⅱ類の分布.....66

第4章 カラスク期における青銅器様式の展開

第1節 劍の検討

(1) 分類.....68
 形式分類 型式分類 (B1類) 型式分類 (B2類)

(2) 編年と形式間関係.....74
 各型式の年代 形式間関係 期の設定

(3) 分布.....77
 劍第1期 劍第2期 劍第3期

(4) 小結.....78

第2節 刀子の検討

(1) 分類.....79
 形式分類 型式分類 (B類)

(2) 編年と形式間関係.....84
 各型式の年代 形式間関係と期の設定 劍との対比

(3) 分布.....87

(4) 金属成分の検討.....88
 当該期の金属成分分析について 刀子の諸型式と金属成分 金属成分の地域間比較

(5) 小結	91
刀子第1期 刀子第2期 刀子第3期	
第3節 様式の設定	92
第4節 その他の器種の検討	
(1) 有蓋鬮斧	93
前2千年紀後半の有蓋鬮斧 分類 編年と祖形 分布	
(2) ヒレ付き装飾品	96
第5章 青銅器様式から見た「初期遊牧民文化」の出現と動物意匠	
第1節 剣の検討	
(1) 分類	98
B1c類 B1e類 B1d類 B1c'類およびB2c類 B3a類 B3b類	
(2) 編年	100
(3) 分布	100
第2節 刀子の検討と青銅器様式	
(1) 刀子 Bc類の形態変異と金属成分	101
(2) ポストカラスク青銅器様式	102
第3節 青銅器様式と動物表現	
(1) 青銅器における動物表現	102
(2) 鹿石における動物表現との関係	105
鹿石Ⅰ、Ⅱ類と青銅器様式 各青銅器様式における鹿石動物紋の位置づけ	
第6章 ユーラシア草原地帯東部における青銅器文化の形成と展開	
第1節 前2千年紀前半における動態	
(1) セイマ・トルビノ青銅器群分布の背景	108
西漸説の再検討 セイマ・トルビノ青銅器群とサムシ・キジロボ青銅器群 セイマ・トルビノ青銅器群の性格	
(2) 初期青銅器分布の背景	110
境界1における青銅器の変化について 境界2における青銅器の変化について 初期青銅器とセイマ・トルビノ青銅器群 新疆、長城地帯の初期青銅器における2系統性	
第2節 前2千年紀後半から前1千年紀初頭における青銅器様式の動態	
(1) 前2千年紀後半における青銅器様式の起源	115
(2) 各青銅器様式の内容	118
(3) 青銅器様式の変化過程	119
後期カラスク青銅器様式の発生 モンゴリア様式からカラスク様式への変化 ポストカラスク様式への変化	
(4) 青銅器様式変化の背景	121
終章 青銅器時代から初期鉄器時代のユーラシア草原地帯東部	132
結語	142

図版出典	145
表出典	150
参考文献	150

図版目次

図 1-1 ユーラシアにおけるユーラシア草原地帯とその地理区分	1
図 1-2 ユーラシアにおける銅器、青銅器の拡散	3
図 2-1 ユーラシア草原地帯東部の地理的状況	5
図 2-2 冶金圏と小冶金圏の概念図	8
図 2-3 EAMP の拡散	8
図 2-4 EAMP (アンドロノヴォ文化) の青銅器	9
図 2-5 セイマ・トルビノ青銅器群の青銅器	9
図 2-6 増田による耳環の比較	10
図 2-7 新疆、アガールシャンデボの青銅器	11
図 2-8 キルギス、シャムシデボの青銅器	11
図 2-9 学史に基づく前2千年紀前半のユーラシア草原地帯の様相	12
図 2-10 チェルヌィフによる前2千年紀以降の冶金拡散状況	13
図 2-11 チェルヌィフによる SEAMP の範囲	13
図 2-12 学史によるモンゴリアと南シベリアの関係	14
図 2-13 カラスク式短剣	15
図 2-14 曲柄剣	15
図 2-15 学史における刀子の系譜関係の問題	17
図 2-16 李剛による有蓋斧の対比	18
図 2-17 スキト・シベリア動物紋の例	20
図 2-18 ネコ科の動物像を柄頭に持つカラスク式短剣	20
図 2-19 高濱によるカラスク式短剣と西方の剣の対比	20
図 2-20 I 類の鹿石	22
図 2-21 II 類の鹿石	22
図 2-22 新疆における土器文化	24
図 2-23 水涛による、新疆における要素伝播図	24
図 2-24 二里頭併行期における銅器・青銅器と土器文化	24
図 2-25 チェルヌィフによる青銅器の金属成分分布状況	25
図 2-26 クジミナによる有蓋斧の変遷図	25
図 3-1 有蓋斧の主な形態変異	38
図 3-2 形式分類の為の属性変異模式図	38
図 3-3 形態測定箇所	39
図 3-4 形式間比較のための資料	39

図 3-5	チェルヌィフ氏による三叉矛の全長（縦）、身長（横）の相関	40
図 3-6	三叉矛における全長と幅の相関	40
図 3-7	法量と形態の相関	40
図 3-8	法量と形態の相関	41
図 3-9	法量と形態の相関	41
図 3-10	鉤付き C 類	41
図 3-11	脊形態の変異	42
図 3-12	表 3-2 の図化	42
図 3-13	菱丸矛における法量と形態の相関	43
図 3-14	菱丸矛における法量と形態の相関	43
図 3-15	菱丸矛における法量と形態（釜口厚の有無）の相関	43
図 3-16	菱丸矛における法量と形態（耳の有無）の相関	43
図 3-17	ボロディノデポ出土の C 類、HB 類	43
図 3-18	セイマ・トルビノ有釜矛の変遷図	44
図 3-19	表 3 の図化	45
図 3-20	表 3-4 の図化（割合）	45
図 3-21	分布のための便宜的地理区分	46
図 3-22	表 3-5 の図化（割合）	47
図 3-23-①～②	型式ごとの成分分布	47
図 3-23-③～⑦	型式ごとの成分分布	48
図 3-24	有釜斧 T 類	49
図 3-25	有釜斧 S 類	50
図 3-26	EAMP の鋤	50
図 3-27	有釜斧の計測箇所	50
図 3-28	サムシ・キジロボ青銅器群の有釜斧	50
図 3-29	チェルヌィフらによる有釜斧の法量	50
図 3-30	紋様構成の変異	51
図 3-31	帯紋様の変異	51
図 3-32	II 類における X、Y 値と、耳形態の相関	52
図 3-33	I 類における X、Y 値と、紋様構成の相関	52
図 3-34	セイマ・トルビノ有釜斧の変遷図	53
図 3-35	表 4 の図化	54
図 3-36	表 3-7 の図化	54
図 3-37-①～④	型式ごとの成分分布	55
図 3-37-⑤	型式ごとの成分分布	56
図 4-1	新疆、長城地帯の初期青銅器、骨器と EAMP の青銅器	58
図 4-2	新疆、長城地帯の初期青銅器と EAMP の青銅器	60
図 4-3-①～③	セイマ・トルビノ有釜矛 A～C 類と初期青銅器有釜矛 II 類の対比	62
図 4-4	各地区における青銅器出土数	63

図 4-5	各地区における青銅器出土割合	64
図 4-6	各地区における型式群の割合	65
図 4-7	各地区における型式群の割合	65
図 4-8	各地区における型式群の割合	65
図 4-9	各地区の型式群①a、①c における型式の割合	66
図 4-10	初期青銅器の分布に見られる各境界の位置	67
図 5-1	柄頭形態の主要変異	69
図 5-2	柄の構造の主要変異	69
図 5-3	柄頭下の小環の変異	69
図 5-4	剣における諸形式の例	70
図 5-5	柄断面の主要変異以外の剣	70
図 5-6	朱開溝遺跡出土剣と対比可能な剣	70
図 5-7	B1 類における刃の基部形態の変異	72
図 5-8	B1 類における鏢形態の変異	72
図 5-9	B1 類における脊形態の変異	72
図 5-10	図 5-9 (B) の例	72
図 5-11	B1 類における柄断面の変異	72
図 5-12	B2 類における鏢形態の変異	73
図 5-13	各型式と期の設定	76
図 5-14	剣の型式分布状況把握のための地域設定	77
図 5-15	主要地域における型式割合	78
図 5-16	柄断面形態の変異	80
図 5-17	背部形態の変異	80
図 5-18	紋様の変異	81
図 5-19	全体の形状の変異	83
図 5-20	柄刃部境界の変異	83
図 5-21	型式の例	84
図 5-22	柄頭形態の変異	85
図 5-23	表 5-19 のグラフ化	85
図 5-24	刀子 B 類と剣 B1a 類の比較	86
図 5-25	刀子、剣の型式と画期	86
図 5-26	表 5-20 のグラフ化	87
図 5-27	刀子 A、B、C 類の金属成分比較	89
図 5-28	刀子 A、Ba 類の金属成分比較	89
図 5-29	刀子 A、Bb 類の金属成分比較	90
図 5-30	刀子 A、Bc 類の金属成分比較	90
図 5-31	各地域における A 類の金属成分比較	91
図 5-32	青銅器様式の変遷	93
図 5-33	有蓋鬲斝	94

図 5-34	有蓋鬮斧	94
図 5-35	有蓋鬮斧の変遷	95
図 5-36	ヒレ付き装飾品	97
図 5-37	ヒレ付き装飾品 I a、I b 類の鋳型	97
図 6-1	カラスク式短剣に後続する剣の変遷	100
図 6-2	刀子 Bc 類における(古)と(新)	101
図 6-3	刀子 Bc 類における金属成分比の比較	102
図 6-4	各青銅器様式に典型の動物紋	103
図 6-5	オクネフ文化の岩刻画にみられる虎像	104
図 6-6	オーシギーン・ウブル 15 号鹿石	104
図 6-7	ジャルガラント・ソム 13 号鹿石	105
図 6-8	シルスト・ソム 2 号鹿石	105
図 6-9	シルスト・ソム 3 号鹿石	106
図 6-10	モドティン・アム鹿石	106
図 7-1	セイマ・トルビノ青銅器群拡散の状況	108
図 7-2	サムシ・キジロボ青銅器群拡散の状況	108
図 7-3	境界 1 以西の土器	111
図 7-4	境界 1 以東の土器	111
図 7-5	新疆、長城地帯における EAMP の欠落的伝播の様相	112
図 7-6	ユーラシア草原地帯東部における中国初期青銅器の位置づけ	114
図 7-7	前 2 千年紀半ばのユーラシア草原地帯東部	117
図 7-8	青銅器様式構造の比較	118
図 7-9	オラーン・オーシグ I 1 号ヘレクスル	121
図 7-10	ブリヤーチャにおける板石墓(手前)	121
図 7-11	ズニ・ゴールにおけるヘレクスルと鹿石の複合	121
図 7-12	ツビクタロフによる青銅器時代後期から初期鉄器時代のモンゴリアの文化圏	122
図 7-13	遺構の種類に基づく文化圏とモンゴリア青銅器様式の広がり	124
図 7-14	カラスク文化の墓葬における囲いと建て増し	125
図 7-15	オクネフ文化の石柱	125
図 7-16	遺構の種類に基づく文化圏と後期カラスク青銅器様式の広がり	127
図 7-17	チャルガラタ 2 号ヘレクスル	128
図 7-18	チャルガラタ 2 号ヘレクスル出土帯扣と玉皇廟墓地 M261 出土帯扣	128
図 7-19	アルジャン古墳平面図	129
図 8-1	ユーラシア草原地帯東部の地理状況	132
図 8-2	ユーラシア草原地帯東部における青銅器文化の編年	133
図 8-3	前 2 千年紀前半における青銅器の動態	134
図 8-4	ユーラシア草原地帯東部の前 2 千年紀前半における文化動態と時代区分	135

図 8-5	前 2 千年紀半ばにおける青銅器の動態	136
図 8-6	ユーラシア草原地帯東部の前 2 千年紀半ばにおける文化動態と時代区分	136
図 8-7	前 2 千年紀末における青銅器の動態 (1)	137
図 8-8	ユーラシア草原地帯東部の前 2 千年紀末における文化動態と時代区分 (1)	137
図 8-9	前 2 千年紀末における青銅器の動態 (2)	138
図 8-10	ユーラシア草原地帯東部の前 2 千年紀末における文化動態と時代区分 (2)	138
図 8-11	前 1 千年紀初頭における青銅器の動態	140
図 8-12	ユーラシア草原地帯東部の前 1 千年紀末における文化動態と時代区分	141

表目次

表 2-1	ユーラシア草原地帯東部の各段階における青銅器文化と主要な議論	5
表 2-2	韓による新疆の土器文化の編年表	23
表 3-1	形式分類の為の資料	38
表 3-2	型式 A~C 類と脊形態 a~g の相関	42
表 3-3	金属成分比の相関	45
表 3-4	型式と金属成分の相関	45
表 3-5	型式の分布	47
表 3-6	耳の有無と紋様構成、帯紋様の相関	51
表 3-7	セイマ・トルビノ有蓋斧における金属成分の有無と型式の相関	53
表 3-8	型式の分布	54
表 4-1	型式と各地の出土数	64
表 4-2	各地区の出土状況における青銅器出土個数の比較	67
表 5-1	柄構造と柄頭形態の相関	69
表 5-2	柄形態と形式の相関	69
表 5-3	柄頭下の小環と形式の相関	69
表 5-4	B1 類における柄断面、脊形態の相関	72
表 5-5	B1 類における鏢形態、脊形態の相関	72
表 5-6	B1 類における鏢形態、柄断面の相関	72
表 5-7	B1 類における刃の基部形態、柄断面の相関	72
表 5-8	B2 類における鏢形態、脊形態の相関	74
表 5-9	B2 類における鏢形態、刃の基部形態の相関	74
表 5-10	B2 類における刃の基部形態、脊形態の相関	74
表 5-11	型式と柄頭形態の相関	75
表 5-12	型式と柄形態の相関	76
表 5-13	型式と柄頭下の小環の相関表	76
表 5-14	型式と脊形態の相関	76
表 5-15	各地域の型式数	78

表 5-16	柄断面形態と背部形態の相関	82
表 5-17	范線、模様と形式の相関	82
表 5-18	全体の形状と刃柄境界表現の相関	83
表 5-19	各形式の柄頭変異	85
表 5-20	型式の分布	87
表 6-1	刀子 Bc 類における柄頭形態と紋様の相関	101
表 7-1	前 2 千年紀におけるユーラシア草原地帯中～東部の青銅器文化の年代	113
表 7-2	第 1 期～第 2 期のミヌシンスクにおけるモンゴリア様式要素	119
表 7-3	第 3 期の長城地帯 (モンゴリア) における後期カラスク様式要素	119

序 言

本論は前 2 千年紀から前 1 千年紀初頭、つまり青銅器時代のユーラシア草原地帯東部(図 1-1)¹の特質を、主に青銅器の分析を通じて明らかにするものである。ユーラシア草原地帯の範囲は東ヨーロッパのハンガリーから中国北方におよぶが、歴史的には「中央ユーラシア」という空間にしばしば組み込まれることが多い。



図 1-1 ユーラシアにおけるユーラシア草原地帯とその地理区分

「中央ユーラシア」とはおおまかには、中央アジアに東ヨーロッパの中心部までを含めた単位であると言われ(森安 2007)、草原や砂漠などの乾燥地域を多く含むこれらの地域においては、牧畜を主な生業とする諸民族が歴史上、居住してきた。「中央ユーラシア」という用語自体は、前世紀の半ば頃、言語学、歴史学から生じてきたものである(Sinor1990)。

考古学においても物質文化や生業における当該地域の特異性は古くから認識されており(江上・水野 1935)、近年ではこの「中央ユーラシア」という用語がよく使用されるようになってきている(藤川 1999)。「中央ユーラシア」と呼ばれる場合、この空間がいわゆる四大文明圏(エジプト、地中海、メソポタミア、中国中原)の中間に位置し、それらを繋ぐ存在であるとともに、騎馬遊牧民の出現地であるなど、「中央ユーラシア」が世界史で果たしてきた役割を積極的に評価する傾向にある(岡田 1990、森安 2007)。このように、世界史におけるユーラシア草原地帯の重要性は高まりつつあるが、近年さらにその中でアルタイ以東の草原地帯東部が中、西部に与えた影響について注目が集まっている。13 世紀におけるモンゴル帝国の広まりはその代表ともいえるが、青銅器時代、鉄器時代においても東から西への影響が指摘されている。例えば、本格的な騎馬遊牧を伴って草原地帯全体に広がる、いわゆる「初期遊牧民文化(スキト・シベリア文化)」は黒海のスキタイ文化の東漸であると考えられていたが、前世紀後半以降、草原地帯東部にその最初期の要素が見出されるようになった。これに加えて、本格的な騎馬遊牧自体の出現も草原地帯東部にその起源を求める声が存在する(Koryakova,

¹ ユーラシア北方草原地帯を地理的に区分する際、ウラル山脈を挟んで東西に分けることもできるが、本論ではアルタイ以東を東部、ウラル山脈より東を中部、西を西部とする考え(藤川編 1999)を採る。

Еrimakhov 2007)。さらに、ユーラシア草原地帯における青銅器の開始は、近東からの冶金技術の広まり、つまり時期差を伴う西から東への流れで捉えられてきた(図 1-1)。しかしながら、近年になって、青銅器時代においてもユーラシア北方草原地帯東部から西部へという逆向きの文化拡散の方向が指摘されるに至っており、本論でも論じるセイマ・トルビノ青銅器群(Черных, Кузьминых 1989)や、「初期遊牧民文化」直前のいわゆる「キンメリア」、「カラスク」的器物の拡散(高濱 1995、Bokovenko 1995)がそれにあたる。以上のように、ユーラシア草原地帯東部が拡散の起点となった可能性のある事象は、それらがユーラシアの他の地域に与えた影響も考慮すると極めて重要であると言えよう。しかしながら、ユーラシア草原地帯東部において、西へ影響を与えうるような青銅器文化がどのように展開し、騎馬遊牧社会の成立に結びつたのかは明らかになっていない。本論者がユーラシア草原地帯東部に注目する最大の理由はここにあり、ユーラシア草原地帯、ひいてはユーラシアにおける東から西へという大きな文化的な流れの発生プロセスを明らかにする意図がある。ところで、ユーラシア草原地帯東部をさらに東からの視点で見るとどうであろうか。歴史的に東アジアという概念を捉える場合、中国中原を中心とする中国文明の広まりを念頭に置く場合もある(西嶋 1970)が、ユーラシア草原地帯東部を中国中原と対比する「北方」として捉え、中国中原、「北方」をそれぞれ核とする二項の相互関係または対立が、東アジアの歴史進展の基礎であったとする考えも存在する。二項対立的に東アジアを捉える視点は、考古学においても古くから唱えられており、青銅器でも彝器を中心とした中国中原に対する、実用的な工具が発達した「北方」というような二系統性が考えられている(江上・水野 1935、佐野 2004、宮本編 2008)。さらに、宮本は新石器時代以来の生業形態の差異に東アジア二項対立の基礎を見出しており(宮本 2000、2005)、それに基づく両項の社会構成の差異とその相互接触を指摘している(宮本 2007a)。つまり本論でその実態および特質を明らかにしようとするユーラシア草原地帯東部は、草原地帯における東から西への大きな文化的流れの原点として、また、東アジアの歴史進展における中原に対するもう一方の極として、その歴史的重要性が学史的に認識されてきたのである。なお、本論では、「中央ユーラシア」、東アジアの「北方」という概念それぞれが、以上のような歴史上の解釈を伴うことに留意し、より地理的な単位であるユーラシア草原地帯東部という語を用いている。

次に、本論の対象となる前 2 千年紀から前 1 千年紀初頭とはどのような時期であるかを考え、本論の目指す歴史像をさらに明確化したい。当該時期には、ユーラシアの多くの地域が青銅器時代に入っており(図 1-2)、さらにある地域では青銅器時代から鉄器時代への変化が起こりつつあった。石器時代や鉄器時代に比してごく短期間である青銅器時代の意義は古くから認識され、冶金術をはじめとする様々な技術進展、それに伴う分業化、さらに経済的広域化が起きたとされ、文明への幕開けと言われた(Childe 1930)。ユーラシア草原地帯東部では、前 2 千年紀に青銅器が広く開始され、前 1 千年紀初頭に本格的な騎馬遊牧が始まって、そしてその直後に鉄器時代へと変化していくといわれる。当該地域とほぼ同じ頃、中国中原においても青銅器の生産が一定量を示すようになる。中国中原では副葬や祭祀の道具としての彝器が青銅器の開始時点からの特色であった。その生産と流通は階層化および専門化の進展に密接にかかわっているとされる(宮本・白編 2009)。ユーラシアの東端に位置する朝鮮半島、日本では、中国中原やユーラシア草原地帯

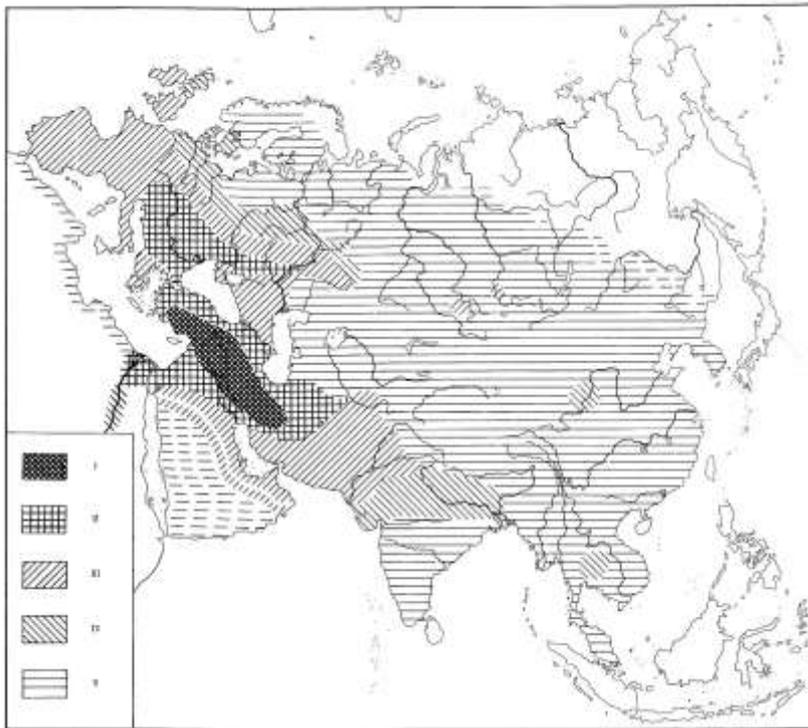


図 1-2 ユーラシアにおける銅器、青銅器の拡散

(西アジアを中心とする地域が最も古く前 7 千年紀に遡る (I)。その後しだいに黒海沿岸に広まり (II~IV)、さらにその東には前 2 千年紀以降に拡散するとされる (V)。

東部に影響を受ける形で、前 1 千年紀の前半に青銅器を含む金属の利用が浸透していく (宮本 2007a、2011)。以上のように、ユーラシア各地において、同時期とは言えないまでもかなり限られた期間に起こった以上のような変化を如何に説明できるのかに筆者の関心はある。さらに、歴史上における様々な文化の固有性を評価するためには、それらを同一時空上で関連付けて説明する必要がある。世界史において

ある地域だけが完結して成り立っていることはなく (川又 2006)、互いの関係性の中で各文化の固有性を評価する必要があると考えるのである。文化間を広く関連させて論じるモデルとして、古いものでは伝播論的モデルが挙げられるが、個々の地域の進展プロセスが論じられていない点や、そして年代含め様々な事実関係においても多くの批判がある (Renfrew 1973)。以後、広域の伝播現象や関連性自体を扱う研究はかなり少ない傾向にあったが、90 年代以降には、技術やモノの広域的拡散を論ずる方向が再び生じている (Chernykh 1992、Roberts、Thornton、Pigott 2009)。特にチェルヌィフの論考はその視野の広さにおいて、欧米の学会にも広く影響を与えたものである。このような研究方向において、地理的にユーラシアの中央に位置するユーラシア草原地帯は注目を集めている地域といえよう。しかしながら、広域の伝播現象を扱う当該地域の研究が文化的、個別主義的な解釈に陥りがちであったことも指摘しうる点である。このことが、伝播現象の背景、そして広域的にみられる交流や影響が、ユーラシア草原地帯の各地域あるいは地域全体、さらにはユーラシア全体における青銅器時代から鉄器時代への変化プロセスにいかに関与したかに関して、従来十分に解明されてこなかった要因ともいえるのである。本論で扱う地域においてもそれは例外ではない。広く分布する青銅器は広範囲の影響関係を扱う材料として使用されるが、その他の物質文化 (墓葬、祭祀遺構など) で論じられる小地域ごとの社会動態が併せて検討されることはきわめて少ないといえる。このような状況下で近年出版された、ユーラシア草原地帯を

検討したコールや宮本の研究（Kohl2007、宮本編 2008）は広範囲を対象とし、かつ社会論まで踏み込む方向を持つものとして評価でき、本論でも大いに参考とするものである。しかしながら対象地域において、コールの研究では主にユーラシア草原地帯西部（ウラル山脈より西部）が、宮本の場合は、モンゴル高原・長城地帯が主な対象であり、それらと中国中原との相互接触の解明により重点が置かれている点において本論とは異なる。

以上をまとめると、本論ではユーラシア草原地帯東部という、ユーラシア全体の青銅器時代の理解に当たって極めて重要な地域を検討することに意義があり、従来漠然と指摘されてきた、ユーラシア草原地帯における「東方からの影響」、東アジアにおける「北方」の生成過程および実態を明らかにしようとするものである。さらに、本論で明らかにしようとする草原地帯東部における内外の様々な影響関係は、前2千年紀から前1千年紀にかけての青銅器時代から鉄器時代への変化というユーラシア全体で連動した変化の中で理解されるべきである。つまり、ユーラシア草原地帯東部内部における青銅器時代を通じた、鉄器時代へと向かう文化変化プロセスをなるべく他地域と比較可能な形で説明する必要があり、このことによって、従来指摘されてきた様々な影響の起源地としてのユーラシア草原地帯東部の特異性は、はじめて世界史的意義を有すると考えられる。ユーラシア全体の歴史をユーラシア草原地帯東部から見直すと同時に、各個別の交流や影響といった歴史的事象と、より一般的な文化変化プロセスの説明の統合を図る本論の試みは、個々の文化や地域の固有性の存在意義を世界史上で評価することにつながると考えられよう。

第1章 先行研究における課題と本研究の目的、方法

本論は、青銅器時代のユーラシア草原地帯において近年注目されている東から西への影響の原点ともいえる草原地帯東部の実態を主に青銅器を用いて解明するものである。当該地域における青銅器以外の資料には各地域の調査状況によって偏りがあり、汎地域的に文化動態を論ずる資料として青銅器が最も適している。詳細な学史の検討に入る前に、ユーラシア草原地帯東部における青銅器時代から初期鉄器時代の大まかな流れと、学史上および本論で扱う論点を、ユーラシア北方草原地帯全体の青銅器文化を扱ったチェルヌィフの論（Chernykh1992）に基づいて示しておこう（表2-1）。

表2-1 ユーラシア草原地帯東部の各段階における青銅器文化と主要な議論

年代		ユーラシア草原地帯東部における青銅器文化 (各地域の代表的な文化)	主題となる議論
前2千年紀前半	青銅器時代	EAMP、セイマ・トルビノ青銅器群 (南シベリア：アンドロノヴォ文化、オクネフ文化、 モンゴリア：齊家文化、朱開溝文化、夏家店下層文化)	東方的要素の拡散開始 (セイマ・トルビノ青銅器群) モンゴリアにおける 青銅器の開始
前2千年紀後半		SEAMP(カラスク期の青銅器文化) (南シベリア：カラスク文化 モンゴリア：李家崖文化、魏家子文化)	SEAMPの起源 (南シベリアとモンゴリアの影響関係)
前1千年紀初頭	器初期 時代鉄	「初期遊牧民文化」の青銅器文化 (南シベリア：タガール文化 モンゴリア：チャンドマン文化、夏家店上層文化)	前段階(SEAMP)との連続性 、差異



図2-1 ユーラシア草原地帯東部の地理的状況

銅と錫の合金である青銅が顕著に使用され出す時期は、小アジアやカフカスでは前4千年紀に遡ると言われる。そこで、チェルヌィフは北方ユーラシア全体の青銅器時代の開始（「青銅器時代初期」）をこの時期にあてる。さらに前3千年紀の「青銅器時代中期」を経て、草原地帯東部まで青銅器が広く拡散する時期（前2千年紀）を「青銅器時代後期」としている。従って、ユーラシア全体では「青銅器時代中期」であるが、前3千年紀以前の草原地帯東部ではごく僅かな銅器しか知られない、一般的にいうところの金石併用期、銅器時代的な様相を呈している。本稿では、草原地帯東部において青銅器文化が顕著に展開しはじめる、前2千年紀以後を論じる。チェルヌィフによれば、前2千年紀前半のユーラシア草原、森林草原地帯では、大きく2つの青

銅器文化の系譜が存在する。一つは草原地帯の大部分に、黒海付近に源を発して東に広まるユーラシア冶金圏 (EAMP) (学史上の用語については以下で詳述するが、各地域の文化を複数含んだ、青銅器の様式圏とひとまず考えておく) であり、もう一つは主に森林草原地帯で、その逆の動きを見せるセイマ・トルビノ青銅器群である。特に後者はユーラシア草原地帯ではじめて広く拡散した東方的要素として取り上げられることが多く、その特徴である錫を多く含んだ青銅はさらに草原地帯西部にも影響を与えたといわれる。草原地帯東部においてこのような大きな影響を持つ青銅器文化が突如として発生した要因、その背景が現在の課題となっている。

EAMP、セイマ・トルビノ青銅器群は、おおよそアルタイ付近までは分布が知られるが、これより東南に位置するモンゴリアを中心とする地域 (モンゴル、新疆、長城地帯) では、前 2 千年紀前半は青銅器の開始期にあたる。これらの地域で青銅器がどのように開始されるのかは、当該地域のみならず、中国中原を含んだ東アジア全体の冶金開始を考える上で重要な議論である。というのも、中国中原においてもほぼ同時期に青銅器が開始されており、これをユーラシア全体の中で位置づけるには、中国中原の隣にあたるユーラシア草原地帯東部の様相解明が不可欠であるからである。本論では、近年の調査によりまとまった資料が存在する、新疆、長城地帯における中国初期青銅器 (前 2 千年紀前半以前における中国出土の青銅器を慣例的にこのように呼ぶ) を分析することにより、この問題に迫ることとする。

前 2 千年紀後半になると、以上の二つの青銅器文化とは別に、草原地帯東部で東アジア草原冶金圏 (SEAMP)¹ が発生し、EAMP の存在していた西部へ広まっていくといわれる。チェルヌيوفのいう SEAMP の青銅器は、南シベリアミヌシンスク盆地のカラスク文化にみられ、類似したものは、モンゴリアでも多数確認されている。さらには、殷墟からも似た青銅器が出土している。チェルヌيوفの SEAMP の概念は本論の結論から言えば問題を含んでいるので、これらの青銅器をカラスク期の青銅器文化とここでは仮に呼んでおこう。カラスク期の青銅器文化 (SEAMP) の起源について、チェルヌيوفは前のセイマ・トルビノ青銅器群との関連を説き、アルタイ、南シベリアにその中心をおいている。しかしながら、一方で、カラスク期の青銅器文化の成立についてモンゴリアからの強い影響を指摘する声もある。カラスク期の青銅器文化の起源問題は、本論の中核をなすものであり、以前にも、南シベリアと中国中原 (商) における青銅器や動物紋様の影響関係を論じる中で取り上げられたことがあった。さらにカラスク期の青銅器文化は、次の段階にユーラシア草原地帯全体に広まる青銅器文化の基礎といわれ、その起源については、学史上非常に重要なものとして半世紀以上論争が続いている

前 1 千年紀初頭以後は初期鉄器時代と捉えられる場合が多く、チェルヌيوف (Chernykh1992) はこの段階以降は扱っていない。前 1 千年紀初頭はいわゆる「初期遊牧民文化 (スキト・シベリア文化、スキタイ系文化)」の段階である。「初期遊牧民文化 (スキト・シベリア文化、スキタイ系文化)」とは、前 1 千年紀初頭に北方ユーラシア草原地帯全体に成立したといわれる、類似した諸文化の総称である²。この時期の草原地帯東部では、鉄器は地域的にも数量的にもごく限られた

¹ チェルヌيوفは、この冶金圏を従来「CAS」 (=「内陸アジア冶金圏」) (Chernykh1992) と呼んでいたが、より適切との理由で Chernykh2008 において改められている。

² 「初期遊牧民文化」は騎馬遊牧の存在よりむしろ、草原地帯全体における文化諸要素の類似という現象によつ

ものでしかないが、この段階に前後する形でユーラシア草原地帯において本格的な騎馬遊牧が開始されたとされており、「初期遊牧民文化」以前と以降で大きく時期区分を行うのが学史上の通例となっている（藤川編 1999、Боковенко2011）。ユーラシア草原地帯の中でも、その東部は「初期遊牧民文化」がいち早く出現した地域として注目されつつある。しかしながら、草原地帯東部でその前段階（カラスク期）からどのような過程を経て「初期遊牧民文化」が成立したかは明らかになっていない。本論ではこれを検討し、当該地域の青銅器時代から初期鉄器時代への移行期の時期区分についての再評価を行うと同時に、以降の鉄器時代の文化動態についての見通しを得る意図を持っている。

以上のように、当該地域の従来の研究では、前 2 千年紀前半、同後半、前 1 千年紀初頭という 3 つの時期に主要な論点に分かれている。この要因としては、例えば、前 2 千年紀前半に関しては、中国全体を含めた東部ユーラシアの冶金開始に、前 1 千年紀初頭ではユーラシア草原地帯全体における「初期遊牧民文化」成立に多くの関心が集まるといような、各時期において当該地域を超えて議論されるような大きなトピックの一部として当該地域の状況が議論されてきたことが挙げられる。従って、草原地帯東部の青銅器時代から初期鉄器時代の動態を通時的に明らかにしたものは殆どない状況にある。本論では各時期の資料を統合的に検討し、時期を通じた動態を明らかにしたいが、各トピックはそれだけで非常に重要な問題であり、また学史を詳述する際の便宜上、以上の流れに沿ったテーマごとに述べることにする。そのうえで、第 6 章以後で全体的な議論を行うことにしたい。

第 1 節 ユーラシア草原地帯東部の青銅器文化に関する学史の現状

(1) 前 2 千年紀前半におけるユーラシア草原地帯東部に関する議論

初期青銅器とユーラシア草原地帯東部の青銅器

近年の中国では、中原の二里頭文化に併行する時期（前 2 千年紀前半）の遺跡から多くの青銅器が発見されるようになった。それらは一般に中国初期青銅器（以下、初期青銅器 と記す）と呼ばれている³。初期青銅器は中国全体における冶金開始と関連して論じられることが多い。その議論全体に関してここで詳細には記さないが、中国中原における冶金発生独自説と西来説は古くから知られている。また、冶金の発生は別にして、中国中原（二里頭文化）において容器を製作するという独自性が、二里頭時期から発揮されたことは一般に認められるところである（佐野 2004、宮本 2005、宮本編 2008）。この現象は、青銅器を受容した社会の発達度および生業基盤の差異によって、中原と長城地帯にそれぞれ新たな青銅器文化が生じたものと理解されている（宮本 2009）。一方で、中国中原の北方に位置する長城地帯の初期青銅器に類似性を見出し、長城地帯相互の関係を認める説も出現した（林澐 2002、佐野 2004、宮本 2005、宮本編 2008）。さらに

て定義づけられる傾向にあり、特にその初期ではスキト・シベリア動物紋などに示される一連の文化系譜という意味合いが強いように思われる。従って、本論ではこのことに留意し、「」を附して「初期遊牧民文化」と記すことにする。

³ 二里頭期併行以前の金属器（宗日文化や小河墓地の銅器類）も少数ながら知られており。それらは重要ではあるが、話題が多岐に及ぶので今後の課題とする。

長城地帯の初期青銅器はユーラシア草原地帯の青銅器と類似することがしばしば指摘されており、相互の影響関係が問題となっている。

本論で問題にしたいのは、指摘されてきた様々な影響関係の内容である。すなわち、初期青銅器の類似性や独自性を、ユーラシア草原地帯東部のなかで、あるいは後の時期と比較してどのように評価できるのかということである。この問題と関連するものとして、いわゆる「北方系青銅器」の開始問題が挙げられる。「(中国)北方系青銅器(または、綏遠青銅器、鄂爾多斯式青銅器)」とは、長城地帯を中心に分布する青銅器を中国中原との対比および、ユーラシア草原地帯全体における共通性を基に「北方」と呼んだものである(高濱 2005)。この名称も様々な問題を含むものであるが、ここで注目したいのは、学史において「北方系」として指摘された長城地帯の青銅器の類似性が、それぞれの段階でいかなる意味を示すのかということである。「北方系青銅器」の開始はこの時期(前2千年紀前半)にあてられることが多いが(林漢 2002、高濱 2005)、例えば長城地帯の初期青銅器と、商代併行の「北方系青銅器」との系譜関係や分布状況の差異如何で「北方系青銅器」の開始の議論もさらに深まると考えられる。

チェルヌィフの冶金圏

初期青銅器の比較対象としてしばしば取り上げられる、ユーラシア草原地帯の青銅器を論じたチェルヌィフの論(Chernykh1992)は重要であるのでここで紹介しておこう。チェルヌィフは主に(青)銅器の特に生産面から、当該地帯の青銅器文化の編年を行い、その文化動態を考察した。青銅器を重視する理由として、それが社会進化に果たした役割の重要性、冶金圏(以下参照)の拡大が文化の構造的変化をもたらすこと、そして、当該地帯全体で連動した変化を考えるというローカリズムの克服を挙げている。その論の中心をなすのは、青銅器編年網の構築であるが、そのように編年網を組んだ結果、ヨーロッパや近東あるいは中国からの影響をあまり濃厚に受けずに、ユーラシア草原地帯で独自に生まれ、さらにヨーロッパなどに影響を与えた青銅器文化がいくつかありうるということを示したことは世界史的に重要な成果である。チェルヌィフは、新疆以東の青銅器に関しては殆ど取り扱っていないが、そこで用いられる諸概念は重要であると考えるので、以下に記しておく(図2-2)。

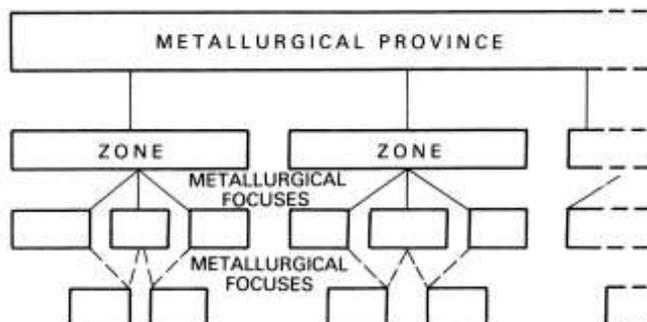


図2-2 冶金圏と小冶金圏の概念図

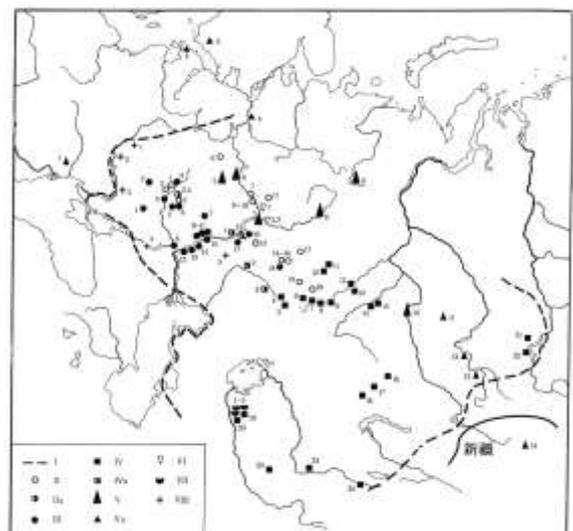


図2-3 EAMPの拡散(破線の内側)

・ **Metallurgical focus** (小冶金圏)

類似した金属器が、特定の工人集団によって製作される地域で、青銅器の形態、技術、成分、生産組織により設置される。小冶金圏は文化と一致する場合も、複数文化を包含する場合もある。なお、冶金圏より下の単位はすべて focus とされている。

・ **Metallurgical province** (冶金圏)

互いに密接に関連した focus がシステムの的に連合した、古代最大の歴史的生産システムで、範囲は数百万平方キロメートル、存続幅は数千年におよぶという。

ただし、地域は基本的に分布論から解釈として見出されるものであり、複数の工人集団の生産する金属器が一地域に入り乱れることは十分ありえる。したがって、「特定の工人集団によって製作される地域」なるものが、そうどこでも純粋に存在するものか疑問が残る。このように、現象(分布)から生産、集団を導くまでにはより詳細な検討が必要なのである。とはいえ、チェルヌيوفの行った全ての分析を原資料から詳細に検討することは出来ないので、ここでは青銅器の生産や形態的特徴から見出すことのできる最大の様式(圏)として冶金圏、その下部単位としての小様式(圏)を小冶金圏ととりあえずみなしておくことにする。

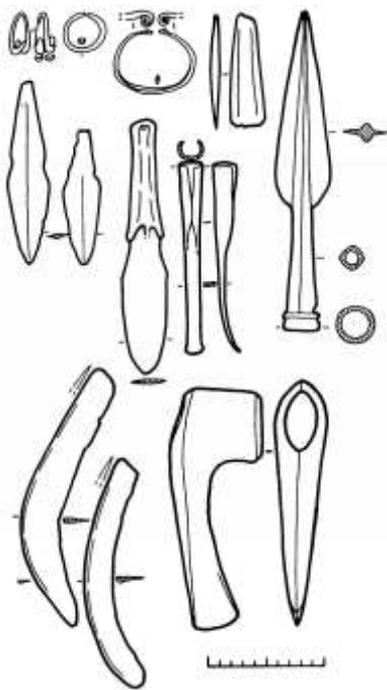


図 2-4 EAMP (アンドロノヴォ文化) の青銅器

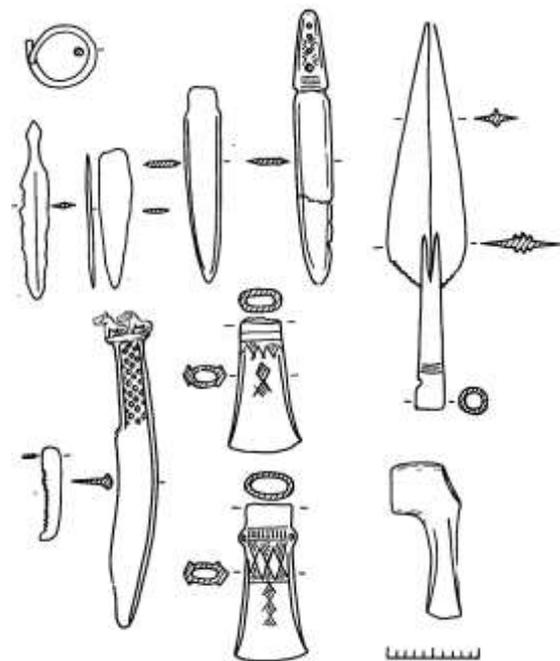


図 2-5 セイマ・トルビノ青銅器群の青銅器

チェルヌيوفによれば本稿に関係する中央ユーラシア青銅時代後期～終末期においては2つの冶金圏が存在するという。1つは EAMP (Eurasian Metallurgical Province : ユーラシア冶金圏) (図 2-3、2-4) (Chernykh1992) であり、基本的には CMP (Circum-Pontic Metallurgical Province : 周ポントス冶金圏)から発展し、ドニエプル地域～エニセイ川中流域にその領域を持つ。EAMP の前半では、そこに含まれる文化として、アヴァシェボ (Abashevo)、スルブナヤ

(Srubnaya)、アンドロノヴォ (Andronovo) の3つが存在し⁴、その年代は前2千年紀前半である。この冶金圏の文化伝統自体は東漸し、新疆に接するか否かのところまで来ることになっている。また、EAMP と同時かつ同領域かそれ以上に、EAMP とは区別できるセイマ・トルビノ青銅器群 (図 2-5) が広まるといわれる。なお、EAMP の後半は以下の SEAMP に侵食される状況が認められるという。もう一つは SEAMP (Steppe East Asian Metallurgical province : 東アジア草原冶金圏) (図 2-7) であり、起源に関して不詳であるが、草原地帯東部で盛行する。SEAMP の青銅器には南シベリアに分布の中心をもつカラスク文化の青銅器や、それに類似するモンゴリアの青銅器が含まれ、年代は前2千年紀後半である (本節 (2) 参照)。したがって、年代的に初期青銅器に関わるのは一般的に EAMP の特に前半、あるいはセイマ・トルビノ青銅器群ということになり、学史上その諸青銅器と初期青銅器の対比が行なわれてきたのである。



図 2-6 増田による耳環の比較

初期青銅器とユーラシア北方草原地帯の青銅器との対比

研究史においては、初期青銅器とユーラシア草原地帯のどの青銅器を関連付けるかに注意が払われてきた。上述のように、新疆と長城地帯の青銅器と比較する場合、EAMP でも東に位置するアンドロノヴォ文化 (図 1-4) (Chernykh1992) やセイマ・トルビノ青銅器群 (図 2-5) (Chernykh1992) が注目された。アンドロノヴォ文化の青銅器は長城地帯の青銅器と比較される場合が最も多く、増田精一 (1970) によるラッパ状耳環の対比がその早い研究である。高濱 (2000b) はその他の斧なども含めて青銅器の諸要素の類似性を指摘し、長城地帯全域でアンドロノヴォ文化に対比できる段階を見出した。林灑、梅建軍、烏恩などもこの段階の出土青銅器を整理し、アンドロノヴォ文化の青銅器に対比させている (林灑 2002、Mei2003、烏恩 2008)。アンドロノヴォ文化の研究者ではクジミナが新疆の青銅器との比較を行なっている (Kuzimina2001) (図 2-7、2-8)。一方で、セイマ・トルビノ青銅器群は EAMP の青銅器よりもやや後出するものと比較される傾向にある。例えば、ラーは商代併行の刀子や剣などとセイマ・トルビノ青銅器群のそれを対比している (Loehr1951)。岡崎は殷墟の出土の矛を編年し、最も古いタイプが既に完成された形態であることに注目した。さらにその起源についての仮説の一つとしてラーの説を引き、セイマ・トルビノ青銅器群の矛を挙げている (岡崎 1953)。高濱は齐家文化～卡約文化のものとされる矛や商代併行の有蓋鬲斧との比較を行なっている (高濱 2000b)。

総じて、西方からの影響の主体は1つでなく複合的であるという指摘もある (高濱・梅 2003)。

⁴ 青銅器を含め、土器、墓葬などから複合的に設定された文化。冶金圏とはもちろん厳密に対応するわけではないが、EAMP に3者が重なりつつ並んでいるとイメージしておく。

また、このような諸影響を認める一方で、青銅器の発見数の多い甘粛西部を中心に、新疆、長城地帯の青銅器の独自性を見るのが近年の共通した見解である(林漢 2002、高濱・梅 2003 など)。ただし、当該段階の青銅器の伝播ルートにより詳細な想定となると、若干異論がある。一つはトルキスタンから長城地帯への東西ルートを、商代併行以後の南シベリアと長城地帯のつながりと対比的に捉える説 (Mei2003) であり、烏恩もアンドロノヴォ文化と長城地帯の耳環を対比した際、南シベリアよりも、甘粛青海地区を介した西からの影響を想定している。一方では、当該段階においても中国西北部と南シベリアの関係を認める説 (佐野 2008、宮本 2008) も存在する。また林漢は、前 2 千年紀かそれ以前から新疆北部における 3 流域の河谷が、東西交渉において重要な位置を占めていたことを指摘した。氏はアンドロノヴォ文化およびセイマ・トルビノ青銅器群が新疆北部を通じて東に影響したとする一方、カラスク式短剣はオルドス地区に起源し、新疆北部から西へ伝達したと考えている (林漢 2011)。なお、近年ではユーラシア全体においても相互関係の下、冶金術が各地域で受容されたとする論考が発表されており (Roberts, Thornton, Pigott2009)、そこでも新疆、長城地帯とユーラシア草原地帯の青銅器を関連づける梅建軍らの考えは引用されている。

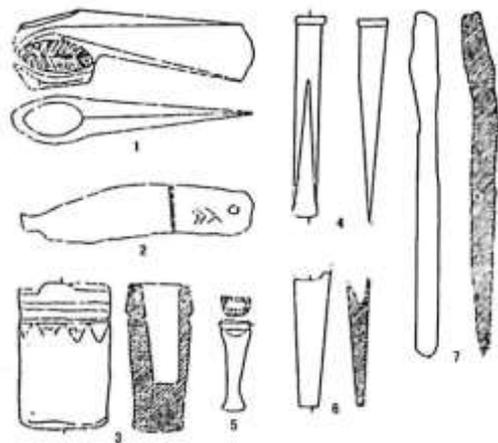


図 2-7 新疆、アガルシャンデポの青銅器



図 2-8 キルギス、シャムシデポの青銅器

セイマ・トルビノ青銅器群の西漸説

セイマ・トルビノ青銅器群とは、前 2 千年紀前半にバイカル地方からフィンランド附近のユーラシア北方草原森林地帯に広がる特定の青銅器群である。この青銅器群は、EAMP (図 2-4) が、黒海周辺の青銅器文化を起源に、西から東へ広まってくるのに対し、アルタイ附近に起源を持ち、そこから西へ広がったとされている。当該青銅器群は、EAMP の非常に早い段階と同時期に成立しているにもかかわらず、複雑な器形や錫青銅といった、EAMP からは純粋にはたどれない技法を多く持っており、ヨーロッパを含めたユーラシア全体における冶金拡散を考える上で独特のものとして注目されてきた (図 2-9)。セイマ・トルビノ青銅器群の殆どは、青銅武器を副葬する墓や青銅器単独の発見である。また、セイマ・トルビノ青銅器群の後、同範囲にサムシ・キジロボ青銅器群が拡散する。サムシ・キジロボ青銅器群はセイマ・トルビノ青銅器群とは対照的に集落

から鑄型がよく発見され、分布範囲もセイマ・トルビノ青銅器群より狭いという。

当該青銅器群の西漸は、古くはギンブタス (Gimbutas 1957)、ティホノフ (Тихонов 1960) らによっても唱えられているが、総合的に検討を加えたのはチェルヌィフである (Черных, Кузьминых 1989)。チェルヌィフの論は藤川繁彦 (1999)、高濱秀 (2000b、2006) らにより近年日本で広く紹介されたが、ここでも近年の代表的な考えをまとめておこう。

前述のように、チェルヌィフら (Черных, Кузьминых 1989) は、セイマ・トルビノ青銅器群と EAMP (ユーラシア冶金圏) を区別し、後者は黒海を中心とする冶金圏 (CMP) から派生し東漸したとする一方、前者はアルタイ附近に起源を持ち東西に影響したとする。セイマ・トルビノ



図 2-9 学史に基づく前 2 千年紀前半のユーラシア草原地帯の様相

青銅器群の主体となったのは戦士かつ鑄物師の集団であったという。一方、クジミナ (Kuz'mina 2004、2007) は、セイマ・トルビノ青銅器群について、ユーラシア草原地帯西部に主体のあるアヴァシェボ (チェルヌィフの論では EAMP の早い段階) とセイマ墓地に見られる東方

的影響の結果とする。東方的要素に関しては、東カザフスタン附近のアンドロノヴォ文化フェドロフカタイプ (チェルヌィフの論では EAMP に包括されるが、アヴァシェボよりは時期的に晚い) にその起源があり、そこから拡散したとされる。クジミナによればセイマ・トルビノ青銅器群の一部はチェルヌィフが EAMP に含める文化から発生したことになっており、両者の差となっている。なお、クジミナは人の移動は主張するものの、戦士集団に関しては否定的である。しかしながら両者はウラル以東からの要素や影響を指摘することでは共通している。その大きな根拠はスズ青銅の流行であり、豊富なスズ鉱源を東カザフスタンやアルタイなどに求めるところから、このような見解を採るのである。セイマ・トルビノ青銅器群の起源を東方に置くことでは、ギンブタスも同じである (Gimbutas 1957)。ギンブタスによれば当該青銅器群の有蓋斧は、石器の原型から直接発展し、北アジアの東方 (アルタイ以東) に起源が求められるという。

セイマ・トルビノ青銅器群の青銅器には、有蓋の刀子や装具などの比較的器形が単純で型式学的操作が難しいものも存在するが、有蓋矛や有蓋斧 (「有蓋」とは柄の差込口がソケット状になっていることを指す) は特徴的な器形を有し、数量的にもまとまった程度発見されている。例えば、有蓋矛のあるものは、脊の基部がフォーク状に分岐し、また鉤状のものが柄の基部から片方にとび出す特徴を持つ (図 3-10)。また、有蓋斧は蓋口が丸く、身の中ほどの断面は六角形を呈し、両端がエッジ状に立ち上がるものが多い (図 3-27)。一方で、後続するサムシ・キジロボ青銅器群は、セイマ・トルビノ青銅器群と類似するが、有蓋矛ではフォーク状に分岐した基部がなく、

有蓋斧では孔の開かない耳（偽耳）を伴うなどの差の他、分布も若干北に偏るという。さらに、チェルヌィフは青銅器の形態上の特徴から、例えば有蓋斧では、東により装飾が豊かで耳が附されるものが多いというように、セイマ・トルビノ青銅器群に関して大きく東西の地域差があることを指摘している。

なおチェルヌィフは次段階の SEAMP（the Steppe East Asian Metallurgical Province、カラスク文化を含む冶金圏）の発生に関しても、セイマ・トルビノ青銅器群との関連を示唆し（Chernykh1992、2008）、アルタイ付近に前 2 千年紀以降の青銅器文化の中心を継続して置いている（図 2-10）。新疆や長城地帯をはじめ、初期青銅器にセイマ・トルビノ青銅器群の影響を見る考えは前項のように多く存在するが、チェルヌィフの戦士集団移動モデルなどをその際どのように考えるのかについてはほとんど言及がないのが現状である。

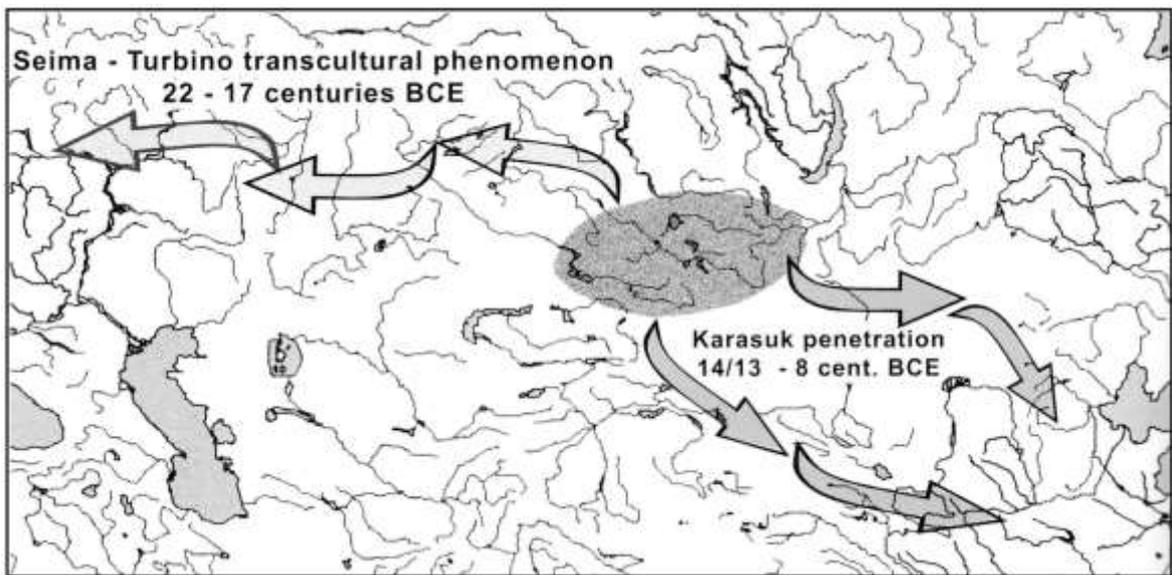


図 2-10 チェルヌィフによる前 2 千年紀以降の冶金拡散状況

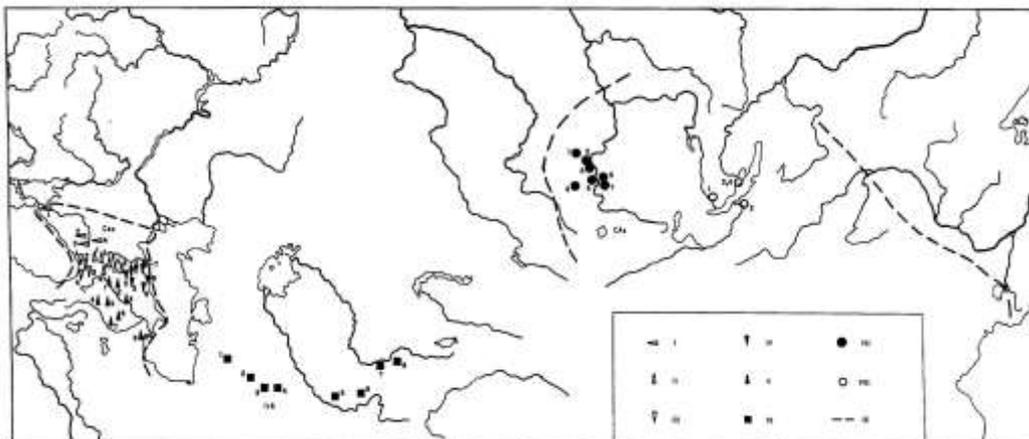


図 2-11 チェルヌィフによる SEAMP の範囲（図上の右側の点線の範囲内）

(2) 前2千年紀後半から前1千年紀初頭、いわゆるカラスク期に関する議論

モンゴリアと南シベリアの関係についての諸説

前2千年紀後半には、長城地帯を含めたユーラシア草原地帯東部全体で前段階と比較してかなりの量の青銅器の分布が知られるようになる。この時期の南シベリアでは大量の青銅器が発見され、それらはカラスク文化の所産とされる。カラスク文化の青銅器と器種や文様などで類似が認められるモンゴリアにおけるそれらも、カラスク青銅器と呼ばれる場合がある(Новгородова1989)。また、前述のようにチェルヌيوفは前段階のEAMPに替わり、SEAMP(東アジア草原冶金圏)(図2-11)の出現と拡散を主張する。なお、チェルヌيوفのSEAMPはカラスク文化およびそれと同段階のモンゴリアの青銅器双方を含んだものである。

当該段階におけるモンゴリアと南シベリア(カラスク文化)の青銅器の類似性から見出される、両地域の関係は、カラスク文化全体の発生および、かつてカールグレン(Karlgren1945)とラー(Loehr1949)の間で行なわれた、中国中原とシベリアにおける動物紋様の起源の議論にも関わるものである。現在、カラスク文化の発生に対しては、大きく二種の説が唱えられている(図2-12)。

A説: カラスク文化は南シベリア、特にミヌシンスクの在地、あるいはより西方の文化(ルリスタンなど)に起源を持ち、ミヌシンスクで在地的に発展した(Членова1972、1976、Максименков1975)。

近年では、レグランドが南シベリアにおけるアンドロノヴォ文化とカラスク文化の継承性を、土器と墓葬の分析から示している。冶金に関しても、ミヌシンスクの東方(モンゴリアなど)に対する影響の大きさが指摘されている(Legrand2006)。チェルヌيوفも前段階のセイマ・トルビノ青銅器群に引き続き、SEAMPの起源や拡散におけるアルタイやミヌシンスクの影響力の強さを主張している(Chernykh2009)。

B説: カラスク文化は、その南部(モンゴリアや長城地帯など)の文化の影響を強く受けて成立した(Новгородова1970、volkov1995、田、郭1988、烏恩2007)。

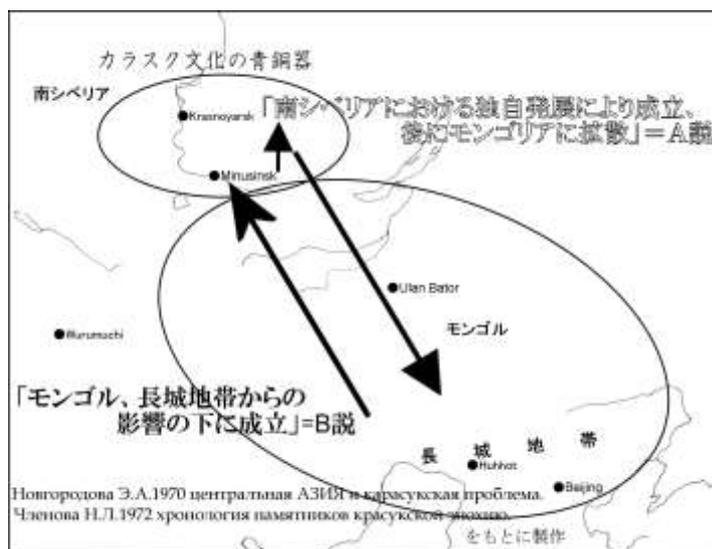


図2-12 学史によるモンゴリアと南シベリアの関係

ノヴゴロドヴァはモンゴリアからミヌシンスクへの集団の移動を想定し、ヴォルコフも同様に南から北への影響を考えている。B説は中国の研究者らによって支持される場合が多い。特に前2千年紀半ばに位置づけられる内蒙古自治区朱開溝遺跡の青銅剣や刀子に基づいて、長城地帯の青銅器文化が南シベリアのカラスク文化に先行することが示唆される。

A説を採れば、前段階に引き続き南シベリア付近を、ユーラシア草原地帯東部における青銅器文化拡散の中心として、きわめて高く評価することに

なる。一方で、B 説の場合は、ユーラシア草原地帯東部の最も東に位置し、直前まで初期青銅器段階にあった長城地帯を中心に、新たな青銅器文化が独自に発展し、拡散したことになる。このように、A・B 説は、ユーラシア草原地帯東部内の各地域の青銅器文化の変化のみならず、ユーラシア草原地帯東部を主体とする青銅器文化の形成、拡散について言及する場合にも、避けて通れない問題であり、以下は両説の議論に基づいて学史をやや詳細にまとめることにする。もちろん A・B 説の議論そのものにも問題が含まれることは後述のとおりである。また、A・B 説は物質文化全体を取り扱うものであり、青銅器はその一部分である。とはいえ青銅器は両説のなかで非常に重要な位置を占めている。南シベリアから長城地帯をまとめて説明するには、広汎にかつ比較的数多く分布する資料が必要であり、青銅器の特に剣と刀子がそれに最もよく適合するのである。

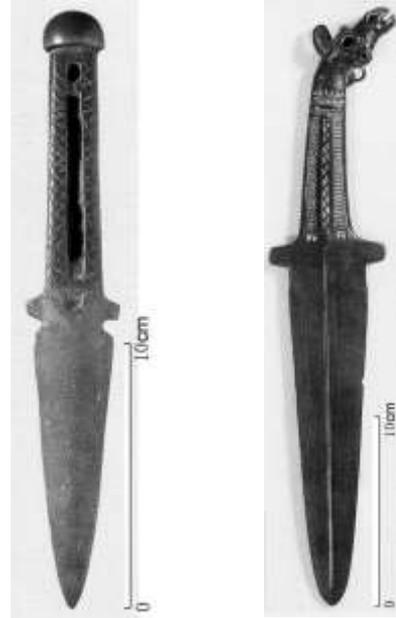


図 2-13 カラスク式短剣

図 2-14 曲柄剣

剣と A・B 説

まずはカラスク式短剣という非常に特徴的な剣を紹介したい（図 2-13）。その多くは、キノコ形の柄頭（柄の先端部）を持ち、柄にはスリットが入り、それを渡すブリッジが何ヶ所かにかける。この種の剣は南シベリアのミヌシンスク盆地で多く発見され、カラスク文化の所産と考えられているが、科学的発掘に基づくものは非常に少ない。一方、長城地帯でもカラスク式短剣は見つかっており、そこでは中原の彝器、武器と共伴する例があって、凡その年代を知ることが出来る。例えば、カラスク式短剣を持つ北京市昌平白浮墓葬は西周の早期から中期に併行すると位置づけられている。カラスク式短剣は、確実に商代併行に遡る遺跡からの出土例がない。そのかわり、商代併行の遺跡からは曲柄剣（図 2-14）が発見される。そこで、商代併行の曲柄剣と、それに続く西周併行に位置づけられるカラスク式短剣の関係が、上記 A・B 両説での議論の対象となってきた。

チレノヴァは、カラスク式短剣の起源をイランあるいはカフカスに求め、それがミヌシンスクにはいつてからの在地的発展を考えた（Членова1976）。その論では、カラスク式短剣はモンゴリア周辺に分布する曲柄剣とは排他的な関係にあり、両剣は系譜関係を持たないことになっている。ラーはカラスク式短剣を長城地帯で最古の短剣とし、それがより多く発見されるミヌシンスクにその起源を求めた（Loehr1949）。このように、A 説ではカラスク式短剣のミヌシンスクでの在地的発展、およびカラスク式短剣と曲柄剣とが系譜関係をもたないことが重視されている。また近年、楊建華は剣を柄頭形態によって分類し、茸柄頭剣（ここでいうカラスク式短剣）の起源をミヌシンスクに、獣首、鈴首剣（ここでいう柄曲剣）の起源をモンゴリアに考えた（楊 2008）。李

剛も柄頭を基準に分類し、楊とほぼ同様の結論に至っている（李 2011）。楊、李の論考では両剣に系譜関係を認めないのであるから、A 説に近いと言えよう。ただし、両者の論考では南シベリアにおけるカラスク式短剣の発生については不問に付されている。李はカラスク式短剣の流入後、柄曲剣は消失したとしており、一方で楊はそれほどの排他性とは捉えていないようである。

一方 B 説であるが、ノヴゴロドヴァはカラスク式短剣の変遷が鏢部の発達によって追えるとし（I、II、III類）、最古のカラスク式短剣がモンゴリア的要素を有していることを示した。従って、カラスク式短剣はモンゴリアからの影響を強く受けて成立した遺物の一群に含まれている（Новгородова1970）。烏恩は曲柄剣（I 型）とカラスク式短剣（II A 型）の系譜関係について明言はしていないが、年代的にカラスク式短剣の長城地帯での先行を示唆した（烏 1978）。内蒙古オルドスの朱開溝遺跡で前 2 千年紀半ばに遡る、いわゆる北方系の短剣と刀子が発見されると、B 説への支持はさらに強くなる。田広金・郭素新は、曲柄剣とカラスク式短剣の起源を朱開溝遺跡の剣に求めた（田・郭 1988）。近年では烏恩もこの起源説をとっている（烏恩 2007）。林雲は、カラスク式短剣の最も古いものを朱開溝の短剣とし、ミヌシンスクに伝わったとしているので、B 説である。ただ、氏は前述のように、この伝播経路の中継地としての新疆北部を重視している（林雲 2011）。最近では李明華（2011）が烏恩の説を支持しており、典型的な B 説である。以上のように B 説では、長城地帯を中心に、カラスク式短剣が曲柄剣からスムーズに移行、あるいは年代的に長城地帯がミヌシンスクより早いことが重視される。

以上のように、A・B 両説では、曲柄剣およびカラスク式短剣の形態に基づいた系譜関係、および長城地帯を中心とする年代的位置づけが非常に重要な位置を占めている。

次に A・B 説どちらかの立場に直接かかわるわけではないが、両説にとって重要な論考を挙げておく。高濱（1983）は諸外国の博物館に所蔵される採集資料も含めた分類を行っており、型式をやや緩やかに捉えて、曲柄剣（A I、A II類）とカラスク式短剣（B I、B II類）を大別した。曲柄剣がおもに長城地帯を分布の中心とし、それが全体として後出のカラスク式短剣の文化伝統とは異なることを示唆するが、両剣の中間タイプの存在も示している。A、B 両類は主に柄の断面形態により区分され、B I 類（断面 C 字形の柄）、B II 類（扁平の柄）に関しては時期差が想定されている。さらに、カラスク式短剣を含む長城地帯における西周併行の器物に、スキト・シベリア文化（「初期遊牧民文化」）につながる要素が見られることが示されている（高濱 1995）。宮本はエルミタージュ美術館の資料を検討する中で、カラスク式短剣（A2 式）が主にミヌシンスクに分布する一方、曲柄剣（B1 式）が長城地帯に主体を持つことを確認しており、基本的に高濱の分類案と共通している（宮本 2007）。さらに、中間タイプ（I 式）を介した曲柄剣からカラスク式短剣への発生、またカラスク式短剣の生産がミヌシンスク地方に中心を持ち、長城地帯に影響を与えたこと、そして、カラスク式短剣の一種と考えられる宮本の III 式銅剣（高濱（1983）分類の B II 類）もミヌシンスクなどの内陸部で発達したことを示唆した。高濱、宮本は A・B 説に関して慎重な立場であるが、その分類は両説にとって重要な位置を占めている。高濱の成果は、曲柄剣とカラスク式短剣の型式的排他性と、一部での中間タイプの存在を、中国側の年代と伴に示した点にあるといえる。その成果を基礎に、宮本は長城地帯を中心とする柄曲剣からミヌシンスクを中心としたカラスク式短剣の発達と、そのカラスク式短剣の長城地帯への影響を示唆するに至っ

ている。このように宮本は A・B 説両方の影響を認めているのであるが、青銅器文化の中心は長城地帯にあり、モンゴリアからのベクトルの方が強いと考えている（宮本編 2008）。なお、柄曲剣を殷（中国中原）的なものと捉える見解（李亨求 1984、甲元 1991）もあるが、この種の青銅器がモンゴリアを中心とする長城地帯以北に広くみられる一方、殷墟ではむしろ異質であることが考慮されておらず、近年ではこれらを支持する論考はあまり見られない。

刀子と A・B 説

ここで言及する刀子は柄と刃部を含む本体が一鑄のものである。キセリョフは南シベリアにおける刀子を大きく形態から 3 種に区分した（屈曲型、凹型背型、弧形背型）⁵。このうち屈曲型はカラスク文化に後続するタガル文化や、南シベリア以外（モンゴル、長城地帯）ではほぼ見られない。そしてこの屈曲型と弧形背型の関係をどう考えるかで大きく見解が分かれる（図 2-15 上）。A 説を採るチレノヴァは屈曲型から弧形背型への漸移的变化を考える（Членова1972）。一方、B 説の代表であるノヴゴロドヴァは、南シベリア由来の屈曲形とモンゴリア起源の弧形背型に関して、両者の排他性を主張する（Новгородова1970）。鳥恩もミヌシンスクにおける刀子は屈曲型が主であることを注意し、それ以外の刀子については年代的に早いモンゴリア起源を考えている（鳥恩 2008）。呂学明も鳥恩の考えに同意し、モンゴリアでは刀子の発展が明確に辿れるとしている（呂 2010）。

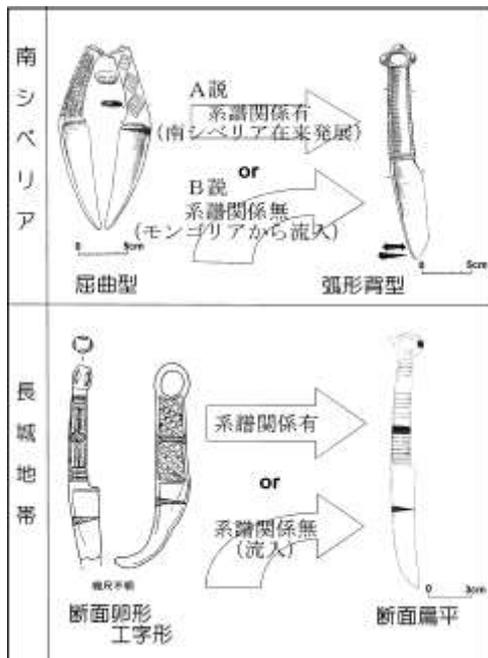


図 2-15 学史における刀子の系譜関係の問題

ここでも、A・B 説の明確な立場をとるわけではないが、両説に関わる検討を行ったものを紹介しよう。特に長城地帯において刀子の研究は盛んであるが、既に述べたように、長城地帯を含むモンゴリアに屈曲型は殆どないので、それ以外を細分することになる。江上、水野は柄の形態(断面が扁平なもの(第一類)、断面が工字形のもの(第二類))によって全体を二分した後、柄頭によって双方を細分している（江上、水野 1935）。この大別両類が年代差をある程度反映しているものとして捉え、新中国やロシアにおける出土品との対比を行なったのは高濱（高濱 1980、東京国立博物館編 1997、2005）である。高濱は断面工字形や卵形の刀子が商代併行に遡ること、また断面が扁平なもののうち柄に幾何学紋を伴うものは、南シベリアのカラスク文化のものと類似性が高く、中国出土

品では北京西揆子窖藏（西周後期併行）と比較しうることを示した。以上の諸研究で重視されてきた柄の断面形（工字形、卵形、扁平）は、型式（属性の複合）としては確認されていないが、高濱の示した年代と矛盾するような資料はその後の中国出土資料でもほぼなく、また、南シベリ

⁵ これらの訳語に関しては既に高濱によるもの（高濱 1980）があり、それに従う。

アでカラスク文化に後続するタガール文化において殆どの刀子の柄断面は扁平であることから、現状ではこの属性が年代を示す最も有効な指標である可能性が高い。ただし、この両断面を持つ刀子が各々同一組列上にあるのか、異なった系譜を持つものかは明らかになっていない(図 2-15 下)。柄の断面を分類基準に用いない論考として楊建華、李剛のものがある。楊は柄頭で刀子を区分し、獣頭や鈴首を柄頭に持つものはモンゴリアに、カラスク式短剣と同じ茸形のはミスシンスクに起源を求めた。数多い環状をなす柄頭の刀子に関しては起源地に関して明確な言及を避けている(楊 2008)。李剛は有茎、一鑄で大きく区分した後、柄頭でそれぞれ細分を行った。茸形柄頭を持つものはミスシンスクに起源を求め、チレノヴァのように屈曲型から凸背型への変化を考えている。一方、獣首刀はモンゴル西部に分布する鹿石上によくみられるとし、そこを起源地とした。李はこれらのカラスク文化および鹿石文化の要素が前 2 千年紀後半に黄河中下流域に浸透したとしており、剣で考えた獣頭を持つ柄曲剣とカラスク式短剣のような排他性には言及していない(李 2011)。なお後述のように、柄頭に獣頭や傘など特殊な形態のものが付属するのは少数であり、大部分は環形など単純かつ後代まで存続する変異で占められている。従って、柄頭を主要な分類基準とすると、資料の大半を評価できない危険性に陥ることを先に指摘しておこう。

A・B 説以外の青銅器研究

A・B 説とは別の視点で青銅器文化を論じたものでは、長城地帯における地域性抽出の研究が挙げられる。林灑(1987)は長城地帯における当該段階の青銅器に関して、太行山脈を挟んで東西で大きく地域性があることを指摘した。宮本(2008)はモンゴリアのうち長城地帯において、甘肅青海地区を中心とする西部と、内蒙古中南部以東の東部で青銅器の質的差異が認められるとし、このうち後者が南シベリアとの結びつきが強く、前者は鉄器化による西部からの異なった文化伝播を想定している。また、近年では地域をさらに細分化していく傾向が認められる(三宅 1999、李海栄 2005)。これらの研究では、青銅器の各器種を相当に細かく分類する傾向があり、例えば

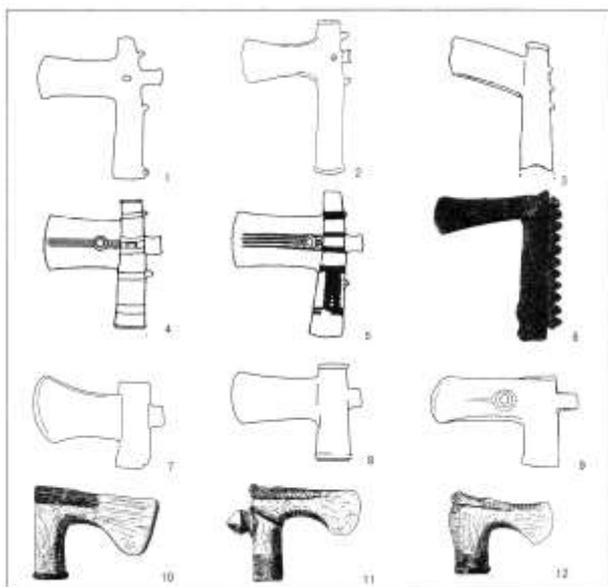


図 2-16 李剛による有銚斧の対比

(6、10、11、12 はイラン由来。他は長城地帯出土)

上記の剣、刀子では柄頭の形態ごとに分類単位を見出している。三宅(1999)は抽出した分類単位がある一定の地域(オルドス地区、河北省北部、遼寧省西部等、現在の省あるいはその半分程度の空間)にみられることから、各地域の製作集団と独自の青銅器の出現を示唆した。李海栄(2005)、楊建華(2008)は遺構が集まる一定の地域や時期に基づき「群」や「組合」を設定し、各群をその時期の土器文化に帰属させることもある。その後「群」「組合」における各種青銅器を分類し、各群における特徴や外部の青銅器文化(中国中原、シベリア等)との関係を論じている。

またエルデネバートル (Erdenbaatar2004) は、外モンゴルにおける青銅器時代の遺物、遺構を総合的に整理し、当地独自の青銅器生産を示唆している。ただし、ここで言われる青銅器時代とは前 2 千年紀から匈奴の始まりまでを含む、幅広い意味であることには注意する必要がある。

他では、ユーラシア草原地帯西部以西の青銅器と、長城地帯の青銅器が直接比較されることがある。例えば当該段階における長城地帯の有蓋斧は西アジア、イランのそれらと対比されることがかなり多い (鳥恩 2008、李剛 2011) (図 2-16)。たしかに有蓋斧全体の形態は両地域で似ていなくはないが、双方の分類や製作技法に関わる細かな属性の指摘が行われているわけではない。類似の解釈に関しても、影響の可能性を指摘する域を出ておらず、筆者には説得力があるようには思えない。他に、有蓋斧に関しては、他に高濱が「内」の部分に注目し、当該段階の長城地帯の有蓋斧とシンタシュタ出土品を比較している (高濱 2000b) (図 5-33、5-34 参照)。また、楊建華、リンダフ (楊・Linduff2008) は山西省北部出土の匙形器について、黒海北岸先スキタイ期の出土品との対比から馬具のヒョウであると考え、両地域の馬具の相互発展および、モンゴリアに極めて早くから馬具が存在することを強調した。しかしながら、匙形器がヒョウであるとする根拠は長城地帯に位置する山西省北部の吉県上東村で同一墓から 2 件出土したこと以外にはなく、その結論も受け入れ難いと言わざるを得ない。

(3) 前 1 千年紀初頭、いわゆる「初期遊牧民文化」成立に関する議論

「初期遊牧民文化」出現期のユーラシア草原地帯東部

前 1 千年紀のいわゆる「初期遊牧民文化」の時期は、ユーラシア草原地帯は初期鉄器時代に位置づけられることが多く、チェルヌィフによる青銅器の冶金圏の考察はこの段階には及んでいない。黒海沿岸における「初期遊牧民文化」はスキタイ文化であり、鉄器時代の開始とされる。一方で、南シベリアやモンゴリアの「初期遊牧民文化」の初期において鉄器は顕著でない。しかしながら、当該段階におけるユーラシア草原地帯全体の社会、経済変化を重視し、「初期遊牧民文化」の出現を大きな画期とみなすのが通常である (Боковенко2011)。「初期遊牧民文化」には黒海沿岸のスキタイ文化、ミヌシンスクのタガール文化の他、中央アジアのサカ文化、アルタイのバジリク文化等が含まれ、その年代は前 1 千年紀の初頭から前 4、3 世紀までとなる。「初期遊牧民文化」の出現は学史上、注目を多く集めてきたが、本論では当該文化の最初期の段階と以前のカラスク期の関係という視点で本段階を取り上げることとする。

草原地帯東部において、カラスク期に連続すると考えられる、「初期遊牧民文化」最初期の資料はあまり多くは知られていないが、その時期に位置づけられる青銅器の出土資料としては、長城地帯東部の夏家店上層文化、トゥバのアルジャン古墳出土の資料が最もよく知られている。南シベリアのミヌシンスクではタガール文化初期の青銅器がこの段階にあたり、長城地帯やモンゴルにおいても当該段階に属すると考えられる採集品が多数知られている。青銅器以外に主な資料として鹿石 (後述) や板石墓があるが、これらに関しては「初期遊牧民文化」の所産と考えるかどうか議論がある。

当該段階の青銅器資料は、「初期遊牧民文化」要素の広がりに関する研究に使用される場合が多

い。これらの研究は本来、「初期遊牧民文化」がユーラシア草原地帯全体の東西いずれに起源する



図 2-17 スキト・シベリア動物紋の例
(左：トゥバ アルジャン古墳 右：アルタイ出土)

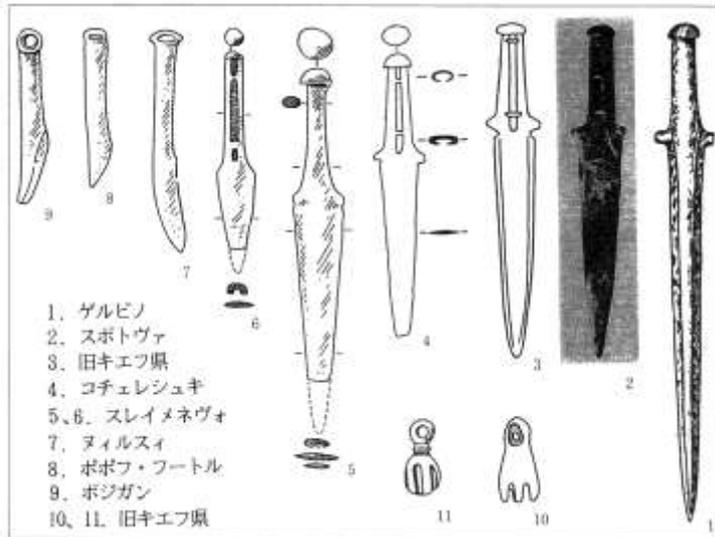


図 2-19 高濱によるカラスク式短剣と西方の剣の対比

図 2-18 ネコ科の動物像を柄頭持つカラスク式短剣

かという議論から発展したものである。長城地帯では、江上・水野（1935）が今でいう「初期遊牧民文化」期を境として、青銅器文化を初めて大きく区分した。文化変化の解釈としては、当時一般的であったスキタイ系文化の東漸と考えると大きかった。長城地帯の夏家店上層文化やトゥバのアルジャン古墳において、いわゆるスキト・シベリア動物紋を持つ青銅器が前 8 世紀に遡る可能性が出てきてからは、多くの研究者がユーラシア草原地帯東部に「初期遊牧民文化」の早い要素を求めるようになった。これらの研究では、特徴的な「初期遊牧民文化」の要素であるスキト・シベリア動物紋（多様な動物紋が知られるが、出現期にあてられるものとしては、体を丸めたネコ化の動物、つま先立ちの鹿、猪の表現が挙げられる（林俊雄 2007）。（図 2-17））、青銅製冑、フク、竿頭飾などが各々比較され、モンゴリアを中心とする地域のそれらが西方よりも年代的に遡ることを指摘する意見が多い（高濱 1992、1993、1995、烏恩 2007、2008）。烏恩（2008）は長城地帯における「初期遊牧民文化」の青銅器が、それ以前のカラスク式短剣、当該段階以前（商代、西周併行）の刀子、冑からの系譜をたどれるとする。高濱は剣の分類において、夏家店

上層文化でよくみられる、格に鏢状の切れ込みの入った剣をC類とし、カラスク式短剣の系譜をひくものであるとしている（高濱 1983）。高濱は他にもフク、冑、勺形飾金具などを当該段階以前（カラスク期）の青銅器と関連付けている（高濱 1992）。さらに、青銅器において、典型的なスキト・シベリア動物紋の一つである「体を丸めたネコ科の動物」のモチーフがカラスク式短剣にみられる（図 2-18）ことを指摘している（Takahama1984）が、これはスキト・シベリア動物紋の一部が当該段階以前の時期（カラスク期）に遡ることを示した点で重要である。さらに、高濱は以上の諸要素の一部が「初期遊牧民文化」の時期の直前（つまりカラスク期）に、ユーラシア草原地帯全体に広まっていった可能性を示唆する。特に、カラスク式短剣がスキタイのアキナケス剣の祖形となった可能性（図 2-19）、およびユーラシア草原地帯全体に分布する竿頭飾や冑と、前 2 千年紀後半（商代併行）の長城地帯のそれらとの関連性が指摘されている（高濱 1993、1995）。つまり、「初期遊牧民文化」段階におけるモンゴリアから西へ向かう影響を、それ以前のカラスク期にまで遡らせて考えるわけである。この考えは、ヴォルコフの論考にも現れている。ヴォルコフはカラスク期の剣⁶と鹿石（後述）全体を先スキタイ期（初期遊牧民文化）以前とし、黒海沿岸のキンメリアと関連付ける（Volkov1995）。そして、このようなカラスク期キンメリア文化圏（community）が次の初期遊牧民文化（スキタイーサカーシベリア文化）の基礎となったと考えている。このように、現状では研究者の多くが、モンゴリアにおけるカラスク期と「初期遊牧民文化」期の文化的連続性を指摘し、その西、北方向への影響を考えているといえよう。ところで、高濱は「初期遊牧民文化」という画期は認めるものの、自身が指摘する直前段階のユーラシア草原地帯における文化的類似性と、当該段階のそれとの間に、時期差の他にどのような差異があるのか明確化しているわけではない。また、騎馬の普及に関しても、カラスク期にまで遡らせる考えもある（林俊雄 2009）。さらに、宮本は長城地帯における「初期遊牧民文化」期（宮本の第 4 期）を、文化要素の類似する画期としてとらえるより、むしろ地域的な特色が強まる時期と捉えている（宮本 2008）。以上のように、近年の草原地帯東部においては「初期遊牧民文化」という画期の意義に問題を投げかける論考が増加しているのである。一方、モンゴリアからのベクトルが向く方向であるはずの南シベリアでは、当地の「初期遊牧民文化」であるタガール文化の発生に際して、アフアナシェボ、アンドロノヴォ文化的要素を認める見解もあるものの、在地のカラスク文化が起源の主体であるとみる見解が多い。ボコベンコ（Bokovenko2006）は墓制から、ラザレトフは青銅器でも系譜的連続性が確認できるとし、カラスク文化からタガール文化最初のバイノヴォ期までの移行期としてカミノロズ期を考えている（Лазаретов2006）。なお、ユーラシア草原地帯全体における「初期遊牧民文化」の背景を捉える場合は、騎馬遊牧の発生に伴う部族の連合化（Bokovenko1995）あるいは宗教的共通性（Bokovenko2006）を広い範囲で想定するものがあるが、いずれにせよこの段階には文化的な類似性と繋がりを強調する見解が多い。

青銅器と鹿石

鹿石とは、モンゴリア西北部を中心に分布する、動物紋や人面などが全体に刻まれた石柱のこ

⁶ ボルコフの論考中ではカラスク期の剣として曲柄剣とカラスク式短剣の両方が挙げられている。ボルコフが両剣の区別にさほどこだわらないのは、(2) の B 説（双方ともモンゴリアの伝統）を採るからであろう。

とである（図 2-20）。近年、モンゴル国を中心として、当該段階の遺構と考えられる鹿石やヘレクスル、板石墓の調査が進んでいるが、中でも鹿石は青銅器と共通する動物紋を持ち、「初期遊牧民文化」との関連が長く議論されてきた（畠山 1992）。鹿石には様式化された鹿をびっしりと刻むもの（図 2-20）、典型的なスキト・シベリア動物紋を持つもの（図 2-21）、動物紋がほとんどないものという 3 種が確認され、ヴォルコフによってこの確認が確認されている（氏によれば、上の順に、モンゴル・ザバイカリエタイプ、サヤン・アルタイタイプ、全ユーラシアタイプ⁷。本論では以下、説明の為に順にⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類と表記する）。鹿石の石柱自体の形態による分類も存在する（Худяков1987）が、以上の 3 種分類が使用される場合が多く（Членова1962、Новгородова 1989、潘玲 2008、林俊雄 2011）、3 種すべてが「初期遊牧民文化」の段階に属するのか、あるいはあるものはそれ以前に遡るのかが論点となっていた。

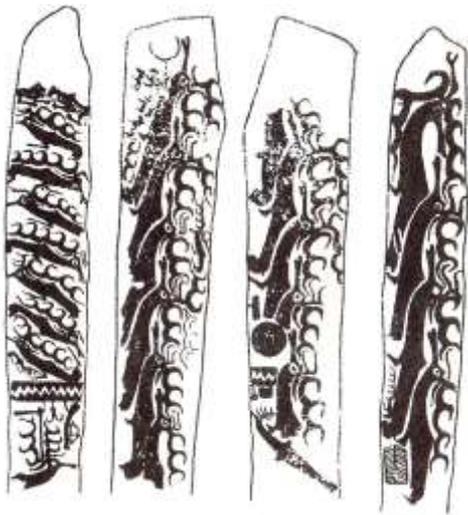


図 2-20 Ⅰ類の鹿石

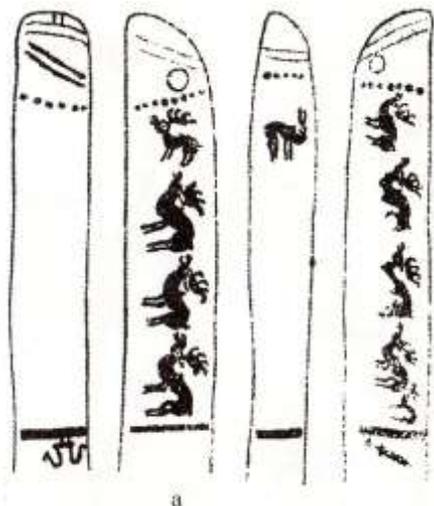


図 2-21 Ⅱ類の鹿石

当該期の議論に関わるのは、このうちⅠ、Ⅱ類である。例えば、チレノヴァは鹿石を「初期遊牧民文化」以降とし、Ⅰ、Ⅱ類の鹿の差は当該文化内での系譜差と考えた。さらに、鹿石がモンゴル西部に多いことに注目し、東部に多い板石墓と対比的に捉えた。また前者をユーロペイドとし、キンメリアに結びつけ、後者をモンゴロイドの所産としている（Членова1962）。チレノヴァは前者から後者への影響（移動）を想定し、さらにカラスク期についてはA説（本節（2）参照、南シベリアからの影響説）を採るのであるから、上のヴォルコフや高濱らとは正反対の見解ということになる。ノヴゴロドヴァ（Новгородова1989）はⅠ類を「初期遊牧民文化」以前（カラスク期）とし、鹿石発生の理由に関しては、当該地での社会複雑化を想定している。Ⅰ類をカラスク期とする根拠は鹿石上に刻まれた武器表現（カラスク式短剣など）である。武器の表現から鹿石の上限をカラスク期とする年代観は、近年広く受け入れられている（畠山 1992、高濱 1999、2001、潘玲 2008）が、それらでは3類の違いを認識しつつも、ノヴゴロドヴァのように必ずしもⅠ類→Ⅱ類とされているわけではない。また、Ⅰ類とⅡ類の紋様を混合した鹿石が知られることを重視し、両者を同時併存とする考えもある（林俊雄 2011）。総じて現状では、鹿石は年代的

⁷ 以上の訳語は畠山（1992）によって提示されたものを使用した。

にはカラスク期に遡るものがあり、かつ「初期遊牧民文化」的要素（動物紋）を持つので、その分布するモンゴリアにおける「初期遊牧民文化」の年代を遡らせる根拠の一つとして鹿石は取り上げられている。ところで、ノヴゴロドヴァは鹿石をユーロペイド、板石墓をモンゴロイドの所産とし、モンゴル東部から西部への影響を指摘する（Новгородова1989）。これは、前段階の B 説における東から西への影響が念頭にあるとも見えるが、そうするとモンゴル東部の影響が強い中で、モンゴル中、西部を中心とする鹿石の動物紋がどのように拡散したのかについては疑問として残ることになる。他では、フジャコフは鹿石全体を青銅器時代（カラスク期）の所産とし、スキタイ（「初期遊牧民文化」）期とは対比的に捉えている（Худяков1987）。

第2節 問題の所在

（1）前2千年紀前半の研究における問題

近年、特に長城地帯や新疆で調査が進み、初期青銅器とユーラシア草原地帯の青銅器との対比が盛んになってきたことは評価できるものである。しかしながら、従来の多くの研究で、器物の類似性から導かれる解釈の殆どが、何らかのルートや関係の存在を示唆するにとどまっている点は不十分であるといえる。すなわち、従来では、新疆、長城地帯の各地にそれ以西の文化要素が見られ、地域間に何らかの関係が存在したことまではわかるものの、その具体的内容の評価が困難であった。この要因としては、型式、出土状況面に関する情報が統合的に整理されていないことが挙げられ、その背景には次に記すところがあると思われる。

表 2-2 韓による新疆の土器文化の編年表

時期区分 小 区	青銅時代	早期鉄器時代			
	第一段階	第二段階			第三段階
	第一期	第二期	第三期	第四期	第五期
	1900 - 1300BC	1300 - 1100BC	1100 - 800BC	800 - 500BC	500 - 100BC
哈密盆地—巴里坤草原	哈密天山北路文化	焉不拉克文化			
吐魯番盆地—中部天山北麓	克爾木青銅遺存	半截溝類遺存	蘇貝希文化		
阿勒泰		?			
羅布泊	古墓溝文化	?			
塔里木盆地北緣	新塔拉類遺存	察吾呼溝口文化			
塔里木盆地南緣					
伊犁河流域	安徳羅諾沃文化	?	伊犁河流域文化		
米蘭		香宝室類遺存			?
塔城		?			
石河子—烏蘇	水泥廠類遺存	?	伊犁河流域文化		

土器文化の中での青銅器

新疆や長城地帯において交流を論ずる場合、上記研究以外に青銅器単独で分析が行なわれることはあまりない。青銅器の形態を論ずる場合でも、その基礎には土器文化の概念がある。中国考古学では一般に、区系類型論に基づき、時空間における一定のまとまりを示す概念「文化」が設定される。これは墓葬や青銅器も含めた文化総体に基づき設定されるものであるが、多くの場合は主に土器によっている。そのようにして設定された特定の文化に、他の文化の要素が混じるこ

とがしばしばあり、それによって関係や交流を示唆する論が多い（韓 2005、水 2001）（図 2-22、23）。この場合、青銅器の分布圏は一般に土器文化より広いものなので、文化間関係を示唆する要素としてとりあげられる。これらの研究では土器の編年研究進展、土器に基づく地域間関係の考察の成果がある。また韓建業の土器の分析によれば、アンドロノヴォ文化そのものが新疆西北部にまで達していたという。しかし、青銅器自体の系統、形式、型式の広まりに対して、まだ検討の余地が残っている。領域間の関係や交流の内容を明らかにする為には、各要素への評価および、それら要素が青銅器全体でどこに位置するのか、つまり分類単位の階層的把握が必要と考えられる。また青銅器が、より広域の動態把握のために有効な資料であることにも注意したい。

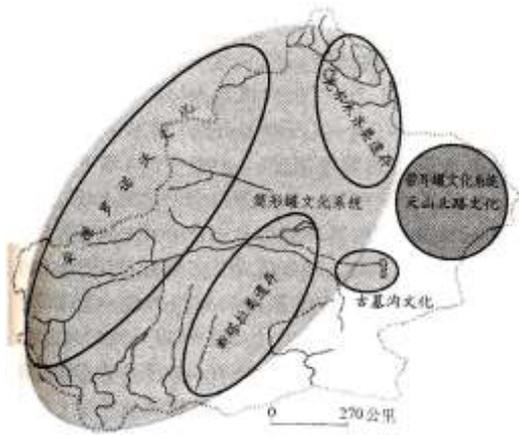


図 2-22 新疆における土器文化

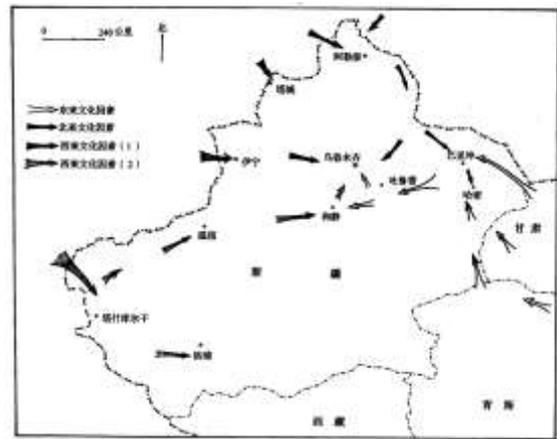


図 2-23 水涛による、新疆における要素伝播図

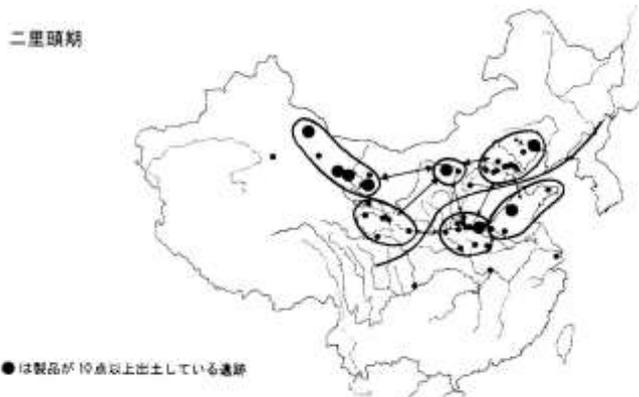


図 2-24 二里头併行期における銅器・青銅器と土器文化

この点、佐野の論考では、新疆、長城地帯の初期青銅器に関して、器種構成、墓地分析から青銅器の社会的地位が考察されており、中原と長城地帯との差異が明瞭になっている（図 2-24）（佐野 2004）。しかしながら、佐野の関心は主に新疆、長城地帯の銅器の出現過程にあり（佐野 2004、2008）、ユーラシア草原地帯の諸青銅器のとの比較という観点から

すれば、検討の余地がある。また近年、宮本は中国西北部における青銅器の自立的な起源の可能性も示しつつ、基本的にはチェルヌィフのユーラシア冶金圏拡大の中で、当該段階における長城地帯の青銅器文化の成立を位置づけている。さらに、当該段階の長城地帯内部において、西から東へと青銅器文化様式の欠落していく様相が指摘されて、東西の情報伝播の中での受容者側の主体性を認めるに至っている（宮本 2008）。宮本の論考は、上述の交流の質に注目したものとして、特に重要と思われる。ただ、そこで主張されるユーラシア冶金圏との関係は、地理的にも隣接する新疆西部を含めた場合、より明確に成立の様相を捉えうると考えられる。また、この地域

の検討から、現在見解の一致をみていない青銅器伝播ルートの問題に関しても、何らかの手がかりを得られる可能性がある。ルートに関して、特に林澐は新疆北部を要として、西からの影響と同時に東からの文化要素を指摘している点で興味深い。ただし、氏が東からの要素とするカラスク式短剣について、それが氏のいうようにオルドス起源かどうかは未解決の問題である(前節(2)、本節(2)参照)。従って、この問題によっては、氏の主張に対する評価が変わってくる可能性がある。

セイマ・トルビノ青銅器群西漸モデルにおける問題点

チェルヌيوفが唱える青銅器群西漸の主な根拠になっているのは金属成分分析であり(図2-25)、東の錫青銅が西の砒素銅地域へ侵食していったと考えている。ほかでは、東西において形態差が大まかに認められることも指摘している。これらの分析が非常に説得的らしく、現在では解釈はともかくとして、セイマ・トルビノの東方起源説がこれといった批判なしに引用されることが多い(Kohl2007、Koryakova, Epimakov2007など)。しかしながら、チェルヌيوفの行なっている分析(Черных, Кузьминых1987, 1989)では、型式、成分、分布差の関連が明らかになっていない部分が多い。つまり、古い型式が草原地帯東部に存在し、それらには錫青銅が多いというところまでは示されていないのである。草原地帯の東西に形態、および成分で大まかに差があるということ以上を言うには、さらなる型式学的検討が必要と考えられる。

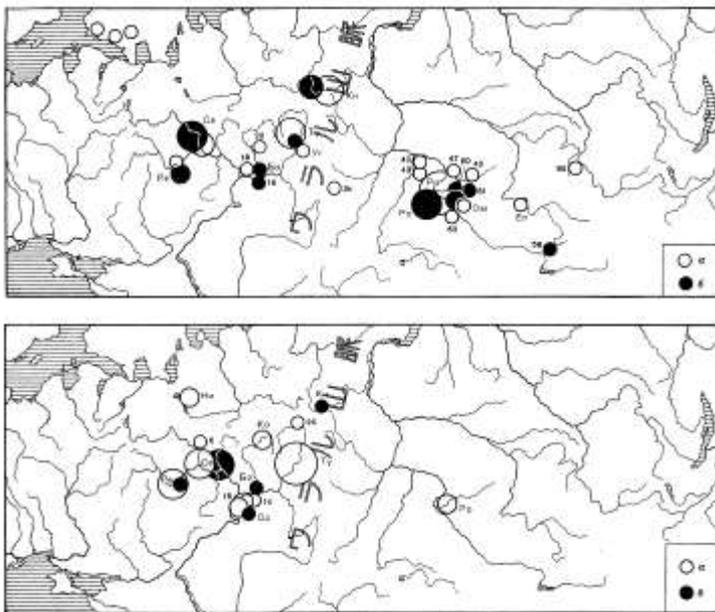


図 2-25 チェルヌيوفらによる青銅器の金属成分分布状況
(上：錫青銅(砒素入は黒)、下：砒素銅(鉛入は黒))

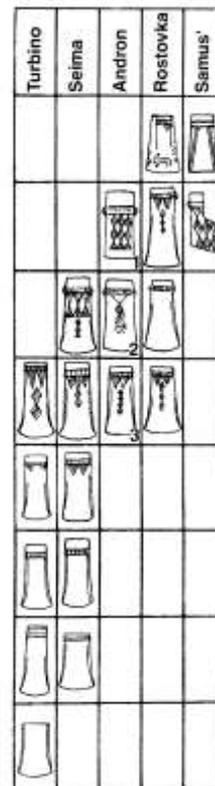


図 2-26 クジミナによる有蓋斧の変遷図

また、チェルヌيوفの論をとればユーラシア草原地帯東部に突然、高度な青銅器文化が出現し

たことになる。西漸モデルの再検討もさることながら、当該地域におけるその成立プロセスを青銅器自体から説明するということが重要な課題である。なお、他に西漸説を唱える、ティホノフ、クジミナの結論は主に青銅器の型的検討によっているが、主に器物の特徴的な属性を個別に比較、その類似性から器物間の系譜性や年代の近さを示す方法であり、次のカラスク期における諸研究と同様、客観性に欠ける面がある。例えば、クジミナの示す有蓋斧の変遷（図 2-26）ではセイマ・トルピノ、サムシ・キジロボ青銅器群を含めて、凡そ模様や耳の単純から複雑な方向への変化が考えられているが、分類基準や方法の詳細は明らかではない。

（2）前 2 千年紀後半（カラスク期）の研究における問題

A・B 説における青銅器の系譜関係抽出とその方法論（分析手法における問題）

まずは、A・B 両説の青銅に関する具体的な立論根拠をまとめておこう。まず、剣では柄曲剣とカラスク式短剣の系譜関係が問題であり、両剣を排他的に捉える場合は A 説、系譜関係を認める場合は B 説となる。一方、刀子では南シベリアを含めた場合は屈曲型と弧形背型の系譜関係が、主にモンゴリアでは弧形背型の柄断面形態の 2 種（工字形、扁平）の系譜関係が問題になっているといえる。刀子の場合、屈曲型と弧形背型に系譜関係があり、弧形背型における 2 種間には系譜関係がないとすれば、A 説に有利となり、その逆（屈曲型、弧形背型では系譜関係がなく、弧形背型における 2 種間は系譜関係がある）であれば B 説ということになる。つまり、A・B 説の当否は青銅器に関する限り、その型式学的操作に左右されるといってよいのである。しかしながら、以上に挙げた多くの研究史においては、捉えられた系譜関係が型式としての実態に基づき、客観的に認めうるかという点で大いに不足がある。すなわち、型式ではなく各個体間における類似性が説明の根拠となっていることが多く、そのため系譜関係の説明に客観性を欠いている。また、型式間における時間差を示す場合でも、属性の変異のスムーズな移行が示されていない場合が多かった。以下やや煩雑ではあるが、上記の研究のいくつかにおける分類編年上の問題を、剣と刀子を中心に例示してみる。

・チレノヴァ（Членова）1972、1976 における方法

刀子の曲がり具合（柄曲度）を厳密に測定した上で、屈曲形から凸背形への変化を想定する⁸。分類では柄曲度を基に、13 型式に区分される。剣ではカラスク式短剣を主に長短で二分し、短いものから長いものへの変化を考えている。刀子、剣とも年代に関して、多くは中国中原や西アジアなどとの対比によって導いている。モンゴリアの剣（柄曲剣）とカラスク式短剣が排他的関係

⁸ この想定は、チレノヴァが各種刀子への力のかかり方と、実際に刀身が折れている頻度を調べた結果、屈曲形より凸背形のほうが折れにくいとするところからくる（機能の強化）。しかしながら、この想定自体に不明な点が多い。例えば、機能上、力が刃の先端に向かってかかるとされているが、その根拠は明らかではない。さらに計測方法でいえば、凸背形も含めて、同じ基準で角度を測ろうとすれば、刀子の両端と、それらから均しい距離にある 1 点がなす角度を測るなどが考えられる。そうすると、背も刃側もスムーズな曲線をなすものでも、カーブがきつければ屈曲形になり、反対に、折れの角が明瞭でも、やや広いものは凸背形になる可能性がある。確かに、折れが明瞭なものには、比較的屈曲するものが多いことは確かであるが、屈曲形は、その名前が示すように、途中で角をなして折れているということが重要な点であって、以上のように厳密に角度をはかることが出来、さらにまた、それが機能上の強化を示すという点についても疑問である。

にあるというのは、型式学的論証としては不十分である⁹。

チレノヴァの主張する刀子における屈曲形から凸背形への変化や、剣におけるある種の排他性の中には、結果的には妥当なものも含まれる。しかしながら、方法としては以下のような問題点が多数存在する。まず、チレノヴァは細かい属性分析（属性変異の相関関係を求める分析：柄頭、紋様、屈曲度、紋様頻度 etc）を多用している。それが分類編年の根拠となるには少なくとも、属性変異のスムーズさと、ある種の相関が認められねばならないが、両方とも十分とはいえない。属性分析で対応しない部分についてはそのまま話がすすめられることが多く¹⁰、刀子では分類できないものが相当数存在する。また、主要器種である刀子と剣が互いにどのような関係にあるのかが、分類単位としてよく検討されない点も問題として挙げられよう。論全体として、最初に想定する型式変化の方向性が最初に決定的なものになっているといえる。

・ノヴゴロドヴァ（Новгородова）1970 における方法

刀子に関しては、屈曲形、凸背形、凹背形、直形に形式分類した上で、屈曲形ではさらに時期区分（型式分類）している¹¹。チレノヴァとの違いは、形式分類、それも前1者と後3者の排他的関係を示しているところにある。この関係は論中で示された属性間の対応表で幾分検証されており、加えて屈曲形が南シベリア主体であることを示したことによって、ある程度は客観性を得たものとなっている。また、ミヌシンスクの剣に関しては、鏢の発達度合いから3型式に分類する。そのうち特に早い型式¹²に、凸背形刀子との共通点（柄頭、紋様など）が認められることから、これもモンゴリア起源のグループに含めるわけである。このように、ノヴゴロドヴァの主張するモンゴリア起源説は、方法論上でもある程度の妥当性が確認される。

しかしながら問題も残っている。まずは、チレノヴァ同様変化の方向について、方向性のスムーズさを示す属性がほぼ1つ（刀子では柄曲度、剣では鏢形態）に限られることである。各々最後の型式がタガール文化の青銅器に近いことは認められるものの、層位的検証が不可能に近い現状では、変化の方向性の検証としては不十分である。また、示された属性分析では屈曲形刀子とその他の形式では、排他性が認められつつも重なり部分が多いことや、刀子形式後3者（凸背形、凹背形、直形）に関する形式分類としての妥当性が不問のままとなっている。さらに、形式間関係（併行関係、派生関係など）の不明瞭さが大きな問題である。つまり、剣や屈曲形刀子それぞれの型式分類に基づく編年が、青銅器全体の様式設定において生かされていないのである。結果として、青銅器全体は東西群としての二グループ化されるのみで、年代としてはカラスク文化全体で1時期となっている。

・田広金、郭素新 1986 における方法

刀子の柄の断面形態(A類:扁平 or 卵形,B類:I字形)による形式分類後、柄頭形態の変化が時期差

⁹ 柄曲剣やそれに付随する動物柄頭を西周併行に下げ、カラスク式短剣に発展することはないという主張であろうが、その年代的根拠もよくわからない。

¹⁰ 例えば、刀子において屈曲形から凸背形へは、数型式間に限って、他の属性に相当な変化が起こることが指摘されているが、それに関しては「新伝統」としか言及されず、全体的に屈曲形から凸背形へは緩慢な変化であると主張される。

¹¹ 直形に関しては他より後出とする。

¹² 早い型式でもある程度はオルドス方面からの借用（紋様など）を認めているので、ミヌシンスクのみでノヴゴロドヴァの言う型式変化が生じたかどうかは明らかでない。

を示すものと考え、主に柄頭によって両形式を細分している。結果的にはA類は早商～西周併行以後も存続、B類は商代晚期併行にA類から分化、その後西周併行まで存続したという。論の問題点としては、まず、想定する属性変化の方向性が極めて理解困難な点にある。例えば柄頭では、孔だけのものから、獸頭を持つものに突然変化するなどの想定が多用されている。しかも層位関係や属性分析などによって、変化方向の裏付けがなされない場合が多い。また、形式間の併行関係の説明が曖昧な点、及び全く異なる動物像が一括されたり、部分的に柄頭以外の属性で柄頭と等価の型式を設定したりする等、分類自体も問題として指摘できる。

・鳥恩 1978 における方法

劍の分類では、曲柄劍（I型）と柳葉劍（II型）に区分、II類を3分しており、そのうちのII A型がカラスク式短劍である。その後各型式の年代を、共伴関係を有する資料から求めている。全体の形状から分類を行っており、分類としては妥当な部分も多いが、I型とII型で区分基準が異なるなどの問題も含む。I型とII A型の年代的前後関係は上記方法で判明したと考えて凡そよいと思われるが、各属性の変化が論じられない以上系譜関係は明らかになったとはいえない。

・三宅 1999、李海榮 2005、楊建華 2008、呂 2010 における方法

これらは編年のための分類とは言えないが、分類法の問題をここで挙げておく。楊は劍、刀子に関して柄頭でまず分類を行う。さらに各柄頭の劍（組列）に関して劍身や柄の構造の変化を示唆する。従って、楊の分類で柄曲劍とカラスク式短劍が同一組列上になるが、その根拠は柄頭が獸頭形で共通しているという以外にはない。また、組列上の変化である柄の構造の漸移的変遷をうまく示せているとは言い難い。三宅は柄曲劍に関して、柄頭で細かく分類を行っている。また、柄曲劍が機能上、刀子と共通したものであることを指摘し、劍と同様の柄頭を持つ大型の刀子は、劍と同じ分類単位に含めている。この分類では、示された柄頭による区分単位が客観的であるかどうかの検討がなされていない点がまず問題として挙げられよう。また、柄曲劍が刀子と共通する、切る機能を持ち合わせていたことには筆者も同意するものであるが、分類単位として、柄曲劍と刀子が同一に扱えるかどうかは別問題であると考え。李海榮は青銅器全般に関して、呂は刀子において、柄、刃部、柄頭形態などから極端に細かい分類単位を作成しているが、上の研究と同じく、単位認定の分析を欠いている。また、それら細かい単位は考察で意義づけられることもあまりない。

以上のような問題がある程度解決したものとして、劍では高濱（1983）、宮本（2007）の論考が挙げられる。しかしながら、A・B説で重要であるミヌシンスクの資料を含めて統合的に見た場合でも同様の結果が得られるかどうか検討の余地があり、また両者のカラスク式短劍の中での変遷に関して筆者に異論がないわけではない。刀子に関しては、その排他性あるいは漸移的変化を客観的に示すのは、劍に比してかなり困難であったとみえ、南シベリアからモンゴリア全体で、方法論的に妥当な分類案は出されていない。特にその要因として考えられるのは、従来抽出された各属性が、特徴的な変異をある程度は含むものの、大多数は簡素な変異（例えば、柄頭では環状のもの、紋様では無紋のもの）により占められていることである。しかも簡素な変異は存続期間が長い特徴をも備えている。従って、仮に属性間の相関を検討して客観的な単位を見出そうと

しても、分類単位同士に大きく重なり合いが出てしまうのである。

A・B説を含めた考察上の問題

A・B説がユーラシア草原地帯東部における青銅器文化の理解の上で重要であることは既に述べたとおりであるが、A・B説そのものにも問題がある。まず一つは、両説が地域間の影響関係の方向性の議論に集中しており、影響の内容、背景についてはあまり論じない傾向にあることである。A説を採るチェルヌイフは冶金における南シベリアやアルタイから東南（モンゴリア）への影響は指摘するものの、それがいかなる要因で、また具体的にどのようなプロセスを経ていたのかは明らかにしていない。B説におけるノヴゴロドヴァの論考では、モンゴリアから南シベリアへの集団移動が示唆されているが、特に近年では影響や交流の存在を指摘するのみの論考が多いと言えよう。特に長城地帯においては、カラスク期の主たる青銅器はモンゴリアが起源であるが、一部は南シベリア起源（傘形柄頭を持つ器物）であり、さらに別の一部は西アジア起源（有蓋鬮斧）であるといったような、同時期に様々な方向性を持つ影響がみられるという、いわば「パッチワーク的交流関係」を結論とする意見が大半である。交流関係の意味内容が不明である大きな要因として考えられるのが、影響や交流の存在を想定する際、細かい要素や型式の類似性を個別に指摘していることである。見出した各種類似性を青銅器全体で位置づけ、類似の度合いを評価するという事は殆ど行われていない。例えば近年、鳥恩（2008）や李剛（2011）は前2千年紀以降の長城地帯の青銅器をユーラシア草原地帯と比較する形で通時的に論じており、その点では評価できよう。しかしながらそれらでは、各時期にそれぞれ異なった外的影響があったということの指摘、および各外来要素の起源の議論に始終する傾向がある。そして、指摘した個々の影響の内容が具体的にどのようなものであり、またユーラシア草原地帯東部の青銅器文化全体の変化にとってどのような意義を持っていたのかという説明が分析に基づいてなされることはない。従って、ユーラシア草原地帯東部におけるある種の要素が西部よりも時期的に早いということは指摘するものの、それらが草原地帯全体でいかなる意義を持つものであったのかは明らかになっていないのである。例えば長城地帯において、青銅器の開始の時期から初期鉄器時代直前までのプロセスを、他地域からの影響の有無やそれらの方向性という極めて個別的な事情によって評価しようとするのは、学史的に言えば文化史の段階に相当する。多様な影響が、ユーラシア草原地帯東部あるいは地帯全体の文化変化にどのように寄与していたかを解明しようとする本論の目的から考えれば、以上の点に関してさらに検討する余地があると考えられる。

さらにこのことに関連して、A・B説は南シベリアとモンゴリアの関係を主に取り扱ったものであり、地域内部における文化動態の復元が不足するという問題点を指摘できよう。青銅器を用いて、文化領域内部の社会動態を復元する方法として、墓葬や祭祀遺構における青銅器の取り扱いから当該領域集団における青銅器の位置づけを探る、あるいは主に青銅器の分布から文化領域内部の諸集団間の関係の粗密における変化を読み解くことが挙げられる。調査例が増加している長城地帯において、地域性を抽出しそれらの関係性を求めていく近年の研究方向自体は、この特に後者の面で肯けるものである。しかしながら、学史に挙げた地域性抽出研究は必ずしもこの

方向に沿ったものではない。というのも、分布を検討する際に、地域がア priori に設定される傾向が強いからである。例えば、上述のように、李海榮や楊建華は地域や時期に基づいて青銅器をグループ（群）化し、その後に各群における青銅器の在り方を分類等によって検討するという論法を採っている。群の範囲はおおよそ土器文化と対応しており、群にあたる何らかの集団領域が存在した可能性は否定しないが、群が青銅器の型式分布そのものから導かれたものではないことには注意する必要がある。つまり、ここでも本節（1）で指摘した、「土器文化における交流」と同様の問題があり、青銅器そのものの動態が見過ごされているのである。三宅は青銅器の型式分布を検討しているが、考察時の小地域は型式、分布論以前に設定した地域区分に基づいており、李、楊の論法と類似する面がある。以上の考察上の問題を一定程度解決するものとして宮本の論考が挙げられよう。宮本は、前 2 千年紀以後の各段階における社会様相をヘレクスルなどの墓制などから想定しており、前 2 千年紀後半のモンゴリアの一部の地域では首長制社会に達していた可能性を示唆している（宮本 2008）。このことは、ユーラシア草原地帯東部の社会変化についてより具体的に説明を行おうとするものとして評価できよう。また宮本は、長城地帯東西における地域差が、ユーラシア草原地帯東部の他の地域との関わりによって現れている可能性を指摘しており、この結果も現象面として重要な指摘である。ただし、そこで指摘された地域間の関係が、想定される社会面での変化にどのような影響を及ぼすかについては言及が少なく分析の余地が残る。

（3）いわゆる「初期遊牧民文化」の発生についての研究における問題

ユーラシア草原地帯全体では、その東部に「初期遊牧民文化」の早い要素を認めるようになっているので、「初期遊牧民文化」全体を西方からの影響と捉えるものは現状では少ない。これと同時に、近年の青銅器研究においてはカラスク期と「初期遊牧民文化」期の両者間に深い関係を認める論が多くなっている。また、カラスク期の物質文化の広がりや西方のキンメリアと関連させ、「初期遊牧民文化」の広まりの基礎とするものもある。そうすると、カラスク期と「初期遊牧民文化」期における文化の広がりについて、年代以外にどのような差が考えられるだろうか。既に指摘したように、学史的にはユーラシア草原地帯全体で共通性が高いとされる「初期遊牧民文化」であるが、当該期における地域性の現出を示す見解（宮本 2008）もあり、カラスク期と「初期遊牧民文化」期の境界の再考を促していると言える。この問題を端的に表しているのが鹿石の諸研究であると考えられる。鹿石全体としての年代がカラスク期（前 2 千年紀後半）に遡ることは、近年の共通見解と言ってよい。しかしながら、鹿石全体がカラスク期からの連続として捉えられるかどうかに関しては、現状の学史はかなり混乱した状況にある。鹿石全体が青銅器時代に遡るとするフジャコフの論（Худяков1987）は、カラスク期と「初期遊牧民文化」期の間に画期を認めるものといえる。しかし、自身の論中、あるいは畠山（1992）も指摘するように、フジャコフは鹿石の武器表現にカラスク式短剣を認め、青銅器時代の根拠とする一方、同じ鹿石に描かれる鹿紋様をスキト・シベリア文化（＝「初期遊牧民文化」）の動物紋と捉え、矛盾をはらんだ結論となっている。なお、フジャコフの分類は上記鹿石Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ類とは別の独自のものであるが、その分類単位が検証されているわけではなく、方法的にも問題を含むものといえる。鹿石Ⅰ類をⅡ

類より遡らせる説のうち、ノヴゴロドヴァは鹿石の紋様をスキト・シベリア動物紋につながると考えており、この点では「初期遊牧民文化」期に連続性をみる見解といえる。ところが論中には、鹿石は青銅器時代の所産で、騎馬を特徴とする「初期遊牧民文化」期のものではないとする箇所もあり、フジャコフと同様の画期を匂わせる表現もある(Новгородова 1989)。潘玲(2008)もⅠ類の年代をⅡ類より遡らせ、あるものはカラスク期に位置づける説であるが、両者の文化的連続性については明確ではなく、「初期遊牧民文化」との対応も不明である。畠山(1992)や高濱(1999)は、鹿石のうちあるものはカラスク期に遡るとしているが、Ⅰ、Ⅱ類の年代差については明確には記していない。氏らの論旨全体からすると、「初期遊牧民文化」につながるカラスク期の要素として鹿石が言及されているように思え、次の林の見解に近い面がある。林俊夫(2011)はⅠ、Ⅱ類の共通特徴を重視し、両者が同時併存かつ「初期遊牧民文化」期まで続くと考えているが、そうすると、カラスク期と「初期遊牧民文化」期との間にはほとんど差がないことになる。ただし、カラスク期に遡るような武器表現を持つのはⅠ類の方であって、型式としてはⅠ類のほうが古い可能性が高い。林の論点は、型式としてよりも、Ⅱ類に描かれるような典型的なスキト・シベリア動物紋がⅠ類と共にカラスク期に既に出現していることを強調する点にあると思われる。これらを踏まえると、現状での問題は、鹿石の年代がカラスク期に遡るかどうかではなく、カラスク期に遡る鹿石(の特に動物紋)が「初期遊牧民文化」期まで同じ状態で存続するのか、あるいは「初期遊牧民文化」期にはなくなる(少なくとも衰退する)のか、あるいは途中で何らかの変化(Ⅱ類の出現のような)を見せるのかということになる。この問題の要因は、「初期遊牧民文化」の指標としてスキト・シベリア動物紋が学史上極めて重視されていること、そしてそのようなスキト・シベリア動物紋がカラスク期の特徴を有する鹿石から既に出ていること、という両者のズレによるものと考えられる¹³。つまり、スキト・シベリア動物紋がカラスク期に出現していることをどう評価するのかによって見解が分かれるのである。この点は非常に重要なことと考えられる。なぜなら、カラスク期に存在する青銅器あるいは鹿石の諸要素が、カラスク期に隆盛し、「初期遊牧民文化」期には残存するのか、逆にカラスク期に出現し、「初期遊牧民文化」期で隆盛するのかによって、カラスク期自体、および「初期遊牧民文化」期を挟んでの画期の評価が全く違ってくるからである。これはさらに平たく言えば、カラスク期はあくまで青銅器時代なのか、「初期遊牧民文化」期に近い、その後の鉄器時代とほぼ同様の段階として評価できるのか、あるいは実質的な過渡期なのかということである。この点を解決するには、両段階について共通の指標で分析を行い、青銅器時代以後の社会動態を踏まえつつ、時代区分の基準を設ける必要がある。スキト・シベリア動物紋についても、始めから「初期遊牧民文化」の決定的指標とするのではなく、あくまで文化様式全体の一要素として捉えるべきである。

¹³スキト・シベリア動物紋とそれを遡る武器表現がみられ、学史上の問題となってきた点は、畠山(1992)によって既に指摘されている。畠山は武器表現の年代から、スキト・シベリア文化(「初期遊牧民文化」)の起源を遡らせることによって、この問題を解決しようとし、この傾向は近年の多くの論考に見られる。しかしながら、氏のように考えると、本文で記すようなカラスク、「初期遊牧民文化」両期の区分問題に直面する。従って、ここで一番の問題であるのは、動物紋の年代というより、動物紋という要素自体にどれほど時期的、文化的区分の重みづけを与えるのかということであると考えられる。

(4) 小結

以上のように、ユーラシア草原地帯東部においては、大きく3つの段階において様々な青銅器文化による多様な方向への影響や相互間の交流が指摘されている。それらの説明には大きく2通りが存在し、チェルヌィフやレグランドのようにアルタイからミヌシンスク付近に青銅器文化の中心を置く考えと、烏恩や李剛、楊建華のように、各時期において多様な影響関係がパッチワーク的に存在したとするものがある。上で指摘した通り、双方には型式学的操作等の個別の問題も存在するが、大きな問題として、前者では特定の影響の中心地なるものがどのようにして形成されたかが不明である点、後者では指摘された多様な影響の内容や要因について殆ど言及されず、ユーラシア草原地帯東部に起源を持つ影響に対する歴史的評価が難しくなっていることが挙げられよう。ユーラシア草原地帯東部から西部に広がる影響は最近になって注目されるに至っているのであるが、それに対する上に挙げた2通りの説明においては、その内容はきわめて漠然としたものになっているのである。

要するに、セイマ・トルビノ青銅器群、カラスク期の青銅器、「初期遊牧民文化」の青銅器は、いずれも草原地帯東部の何処かに起源を持ち、そこから拡散したとされるのであるが、その広まりの背後にある事象、つまり人や物、情報の動きは同様なものであるのか、それぞれ違ったものであるのかに関しては、従来ほとんど考慮されてこなかったのである。例えば、「初期遊牧民文化」の拡散はユーラシア草原地帯全体の時期区分の指標として、長きにわたって重要視されてきたが、それ以前の段階の文化の拡散とは質的にどのように異なるのであろうか。本格的な騎馬遊牧が「初期遊牧民文化」を特徴づけるものであるとしても、それぞれの開始時期の微妙な前後関係に関して、考古学的に論証することは非常に難しい。事実、騎馬遊牧の出現が「初期遊牧民」以前に遡る可能性も指摘されており、「初期遊牧民文化」の広まりも動物紋などの物質文化の広がりによって定義づけられる傾向がある。「初期遊牧民文化」の出現の意義は、当該文化とその前段階に広まる物質文化の動態双方を考古学的に検討し、その背景を考察して初めて明らかになるものと考えられる。セイマ・トルビノ青銅器群やカラスク期の南北方向の影響についても、従来、人が移動したという解釈は存在したが、それらの移動の要因については触れられない場合が多い。以上のことは、学史において各段階のテーマが分離し、それぞれに対する個別的説明が優位になっていることにも関連しているよう。

第3節 本論における目的、方法、資料

(1) 本論の方針

序言で示したように、本論で対象とする前2千年紀から前1千年紀初頭は、ユーラシア全体で青銅器時代から鉄器時代へと変化していく時期であり、以上に示した多様な影響や交流はこの大きな変化の中で評価され、はじめて歴史的な位置づけがなされるものである。草原地帯東部においても青銅器の開始段階からいわゆる「初期鉄器時代」への変化、騎馬遊牧社会の成立が本論対象の時期に含まれ、各段階の様相、段階間の変化のメカニズムを他地域と比較しうる形で説明し、それに上記の影響関係がいかに寄与したかを考える必要がある。もちろん、青銅器時代の社会様

相やその変化の説明は、青銅器のみから可能なものではないが、資料に基づいた上で可能な限り一般的なモデルを構築することは重要であると考え。そこで、本論では以下の方法を採用。

- i : 青銅器に基づく多様な文化圏の抽出と、それらの相互関係のあり方の把握
- ii : i で抽出された文化圏の内容、および相互関係の背景の解明

i は本論の中核をなすものであるが、学史を踏まえると、特に、文化間の系譜性や、各文化圏を比較する際、文化全体においてそれぞれのどの部分が関係づけられるのかを明確にする必要がある。この点を解決するため、第 2 章から第 5 章までの分析に相当する部分では、青銅器、鹿石について、主に様式論的観点から検討を加える。つまり、考古学的に扱いうる最小単位としての型式の位置づけを、文化（様式）全体において明確化すると同時に、そのなかで型式間の系譜関係を把握していく意図がある。

第 5 章までの分析を踏まえ、第 6 章では ii について考察を行うが、青銅器に加え、鹿石、ヘレクスル、板石墓などの動態を、学史を踏まえつつ考慮し、文化動態の背景およびより具体的な集団動態の解明を目指すことにする。詳しくは第 6 章で述べるが、青銅器以外の遺存については、分布が特定の偏りを見せ、また青銅器を含むものがそれほど多くないために、主にそれらの分布する地域に限って社会復元に用いられることが多かった。ii では青銅器で見られた対象地域全体における集団動態と、より小規模な社会動態とを関係づける意図があり、この試みも本論を特徴づけるもののひとつである。

終章ではユーラシア全体の時代変化を視野に入れ、ii で得られた青銅器を媒介とした当時の諸集団の結合の仕方に基づいて、当該地域の青銅器時代について大きく時代区分を行う。これにより、当該地域の青銅器時代を世界史的に位置づけ、さらには後の鉄器時代へと続く発展の見通しを得ることが可能となろう。

(2) 各章における方法と資料

第 2 章から第 5 章では、前節に挙げた具体的なそれぞれのテーマについて、問題の解決を行うものであり、第 6 章ではそれらに基づいた集団動態の復元を行う。

第 2 章ではセイマ・トルビノ青銅器群についての分析を行ない、学史上で指摘されてきた前 2 千年紀前半における東部から西部への影響について再考する。具体的には、アルタイに影響の中心を置くチェルヌيوفの戦士集団西漸モデルの再検討を課題とする。セイマ・トルビノ青銅器群には、器形がシンプルであり型式学的操作は難しい器種も含まれ、本論では比較的属性が豊富な有蓋斧、有蓋矛について分析を行なう。資料はチェルヌيوفの用いたもの(Черных, Кузьминых 1989)を使い、チェルヌيوفの行なった型式学的操作や金属成分分析との対比などの主に方法論における妥当性を検討するが、その後発表された資料も若干含めている。分析手順として、まず分類を行う必要がある。学史での分類は、その根拠が明示されていないところに問題があった。分類単位としての型式は当時の規範に基づくものであり、恣意的纏まりではない。型式の存在を客観的に示すために、本論では複数の属性の組み合わせを検討することにする。本章で分析対象となるのは、有蓋斧、有蓋矛の 2 器種である。それぞれの器種について形式分類を行ない、通時的な系統を見出すことにする。本来形式とは一系統の器物群からなる一様式内で機能差を反映す

るものであるが、本論では一組列に含まれる型式群を指すことにする。さらに各形式の単位について型式分類を行なうが、ここでは時間的になるべくスムーズに移行する属性を用い、一つの型式にある程度の共時性を持たせることにする。編年後、各段階の分類単位を金属成分と対比しつつ分布を把握する。以上において、アルタイを中心とした地理勾配的狀況が確認されるかどうか、チェルヌيوفのモデルを検証する際に重要なポイントとなる。さらに第6章第1節(2)において、青銅器の形態から想定される性質やコンテクストを考慮し、その分布の背景について考察を行う。

第3章では新疆および長城地帯における前2千年紀前半に位置づけられる初期青銅器を検討し、第2章とは逆に、草原地帯東端における西からの影響の実態を解明する。本論の関心は初期青銅器の広まりがいかなる意味をもつかという、分布の背景の解明である。つまり、初期青銅器の分布が、EAMP およびセイマ・トルビノ青銅器群の分布と比べてどのように評価できるのかということである。学史上の問題を踏まえれば、土器様式圏(文化)をひとまずはずして、青銅器のみで現象を把握する必要がある。第3章では基本的に佐野(2004、2008)の器種分析、状況分析と類似した手法をとるが、そこではあまり論じられていない、EAMP やセイマ・トルビノ青銅器群との比較に基づいた形態的観点を含めた青銅器自体の分布を盛り込むことにする。分類においては、高濱(2000、2006)や宮本(宮本編 2008)による学史の成果を基礎に、器種で分類(全体の形が明瞭に異なるもの。斧、刀子、鏃のレベル)後、同一器種でも明らかに形態が異なるものを型式に細分する。その後、分布を調べて各分類単位での境界を見出す。さらに第6章第1節(2)において、既に考察を行ったセイマ・トルビノ青銅器群の分布の背景を考慮しつつ、各境界の意味内容について考察する。資料は年代(二里頭期併行)や出土地がわかる資料を中心に検討する。基本的に佐野の集成(佐野 2004)によるが、新疆出土のもの及び、新たに報告されたものを加える。資料抽出の際の土器文化の編年、併行関係は長城地帯では宮本(2000)、新疆では韓(2005)(表 2-2)に従う。齐家文化は存続期間が長い為、後半のもののみ(皇娘娘台遺跡出土以外のもの)を扱い、それに後続する卡約文化は周代に併行するものもかなり存在するため含めない。新疆の一部では土器を伴わないため、EAMP などとの比較によってしか年代のわからないものがある。そこで、チェルヌيوفが挙げた EAMP のアンドロノヴォ文化の青銅器、およびクジミナによる新疆のアガールシャンデポ(図 2-6)とキルギスのシャムシデポ(図 2-7)の比較(Kuzmina2001)を参考に、これらとほぼ同様の形態のものを抽出することにする。なお、既述の煩雑さを避ける為、図面で具体的な形態がわかるもののみをここでは扱い、1 個体程度しか知られない用途不明の特殊な器物は分類上省くことにする。

第4章ではカラスク期の青銅器について分析し、特に A、B 説の解決および従来指摘されてきた影響の解明を目指す。採集資料が当該期の資料の殆どを占めていることを考慮し、学史において主に議論の対象となってきた剣と刀子によって様式の核たる部分を最初に設定する。2 器種のみで様式を設定することは資料不足の感が否めないが、対象地域全体から万遍なく出土しているのはこの器種のみであり、分類についても安定した数量が得られることから、このような分析手法を採った。他器種の動態については、後に改めて分類し、主要 2 器種の様式動態と併せて論じることとする。分類では、A、B 説それぞれの問題点が青銅器の型式学的操作にあることを踏ま

え、型式の存在を客観的に示すために、前にも述べたように複数の属性の組み合わせを検討することにする。特に刀子においては分類単位における大幅な重複の解消が必要となる。そのためには、刀子全体で変異に偏りのない普遍的な属性を見出さねばならない。そこで本論では刀子の製作技法に注目しつつ、属性を抽出する。製作技法はすべての個体に普遍的であることがその理由の一つであるが、これにより、見出した属性群（＝型式）の意味もより明確な形で捉えられよう。さらに青銅器によって空間内にみられる影響の内容を考察するには、青銅器全体において見出した各单位を類似の程度によって階層的に位置づける必要がある。そこで本論では土器における様式論（田中 1982、岩永 1989）を参考にする。剣、刀子などの全体の器形に基づく大きな単位を器種とし、器種内の系譜に基づく組列単位を形式、各組列内で時間を示す単位を型式と捉え、形式が一定の時空内にまとまりとして現れる場合、それを様式とする。手順としては、属性間の相関により形式を設定し、その形式に最も適した製作技法を想定する。さらに一部の形式については時間差を示す属性を用いて型式分類を行ない、主に中原の青銅器との共伴関係から各型式の年代を求め段階設定を行なう。以上の編年に基づき、各段階における分布の偏りを見出す際、以前に論じた剣の動態と併せて様式を設定し、その変化を把握することとする。なお、第 4 章では金属成分についても検討しているが、詳しくは当該箇所（第 4 章第 2 節（4））を参照されたい。さらに第 6 章第 2 節において、器種および形式に加え、精製、粗製の区別を行ないつつ、様式の内容、背景を考える。製作時により複雑な技法を要し、それが機能性以外を目的としていると判断される型式を、その型式を含む様式を持つ集団においてより価値づけられたものとするのである。なお、製作技法を含めることにより、精粗の区別は見た目の精粗以上に客観的なものとなりうる。その後、鹿石なども含め、様式構造変化の背景について迫ることにしたい。資料について、剣ではミヌシンスクから長城地帯にかけて（ミヌシンスク、クラスノヤルスク、トゥバ、バイカル、モンゴル、新疆、長城地帯）の曲柄剣とカラスク式短剣を対象とする。具体的にはチレノヴァ（Членова1976）、グリシン（Гришин1971）、高濱（1983）の集成したものを主に扱い、近年新たに発表されたもの若干を加えることとする。刀子は製作技法に関わる新たな属性が分類の主な基準となり、それらの属性の把握は、従来の実測図や写真等では極めて困難であるので、分析の主たる部分は以下に挙げる筆者の実見した資料のみを用いることにした。実見資料は長城地帯のものと南シベリアのミヌシンスク盆地の採集資料に限られているが、従来取り扱われた主要な特徴を持つ器物はほぼ網羅しており、製作技法上の単位を見出すには十分な量と考えられる。長城地帯の資料については、商代から西周併行と考えられている京都大学（43 点）、黒川古文化研究所（10 点）、天理参考館（9 点）、東京大学（14 点）、内蒙古鄂爾多斯青銅器博物館（12 点）各機関所蔵の刀子、南シベリアではカラスク文化の所産とされるアバカン博物館（20 点）、ミヌシンスク博物館（157 点）の各機関所蔵のものを対象とした。見出した新たな属性と、従来指摘されてきた属性が正の相関を示す場合、後者を基準として非実見資料に関してもある程度は形式や型式の推定が可能であり、編年や分布を把握する際に用いることとする。もちろん非実見資料に関しては、今後調査を進める必要があるが、本論では多様な刀子の形態的特徴全てを個々に検討するのではなく、製作技法を基とする単位の抽出および単位間関係の把握に重点を置くことにしたい。

第5章ではいわゆる「初期遊牧民文化」の出現について、カラスク期の文化動態との比較という観点から考える。「初期遊牧民文化」は重要な画期とされつつも、その前段階と併せて分析された事例は少なかった。ここでは、両時期の青銅器自体の動態を明らかにし、「初期遊牧民文化」の出現で特に重視されてきた動物紋の意義付けを行い、両時期の区分について考えたい。青銅器の分析は剣、刀子について行う。剣の分析では第4章で得られた分類単位およびその方向性を考慮して、型式設定、編年を行い、分布を把握する。剣は「初期遊牧民文化」出現期に相当する長城地帯の夏家店上層文化、トゥバのアルジャン古墳出土品を基準に、チレノヴァ（Членова1967、1976）、高濱（1983）の集成から、当該段階に相当すると考えられる資料を抽出する。刀子では金属成分比と型式の相関で得られた興味深い結果を示し、剣の動態を併せ、当該段階の様式を設定する。次に、動物紋の意義付けであるが、前章も含めた分析で得られた各青銅器様式において動物紋がどのような位置にあり、どのように変遷するかまず確認する。次に、鹿石の動物表現が、青銅器における動物表現のどれにあたるかを検討し、各種の紋様が鹿石でどのような位置（主、従）を占めているかを明らかにする。鹿石はボルコフの集成（Волков1981）を基礎とする。さらに考察（第6章）では青銅器様式+鹿石という文化様式全体での動物紋の位置づけを考える。ここでは、他の遺構（ヘレクスル、板石墓）についても、学史の紹介を交えつつ文化様式の考察の材料に含めて検討する。以上のように、動物紋、青銅器など特定の要素のみで段階を決めるのではなく、文化様式全体から復元される当時の集団の有り方で評価を行うのが本論の方針であり、終章においてより客観的な時期区分の設定を目指すものである。さらにユーラシア草原地帯全体における、東部の位置づけについて述べ、当該地域、時期における文化変化の特質を捉えることにしたい。

第2章 セイマ・トルビノ青銅器群の検討

前2千年紀前半のユーラシア草原地帯では大きく2系統の青銅器文化（EAMP、セイマ・トルビノ青銅器群）が見られ、EAMPはユーラシア草原地帯西部から東部へ広がっていくのに対し、セイマ・トルビノ青銅器群は、アルタイに起源し西へ広まっていくといわれる（Черных, Кузьминых 1989）。セイマ・トルビノ青銅器群はユーラシア草原地帯西部へ影響を与えたのみならず、当該段階の後の草原地帯東部（カラスク期）の青銅器文化とも関連が示唆されている（Chernykh 2009）。本章ではこのようなセイマ・トルビノ青銅器群のアルタイ拡散モデルについて、型式、分布論から再検討を行う。当該青銅器群には形態が単純で型式操作が困難なもの、あるいは数が限られた器種が多いので、本章では対象を有蓋矛および有蓋斧に絞って、各節で分析を行う。まず、それぞれの器種において形態的特徴から分類、編年を行う。さらに各分類単位と従来指摘されてきた金属成分を対比し、それぞれについて分布を検討することで、アルタイを中心とする地理勾配が見られるかどうかを確認することにする。

第1節 有蓋矛の検討

(1) 分類

前章で述べたとおり学史においては、セイマ・トルビノ青銅器群がサムシ・キジロボ青銅器群より先行すると考えられている。そこで、まずこの両者の矛を型式上区分することを考えよう。両青銅器群を区別する基準として、チェルヌィフは主に脊形態を挙げている（図3-1：サムシ・キジロボ青銅器群にはS2、S3が該等）。脊形態を他の属性と関連させてみたが、よく関連する属性は見当たらない（後述）。そこで、セイマ・トルビノ、サムシ・キジロボ青銅器群の区別という観点から離れ、矛全体の分類をひとまず考えることにする。

形式分類

ここでは、非常に大まかに矛全体を区分することを試みる。チェルヌィフが分類の属性として最初に注目しているのは造り方と、脊の形態であり（図3-1）、区分したのは鍛造製品（T）、鑄造製品のもので、三叉脊（S）、偽三叉脊（S2）、三脊（S3）¹、菱形脊（H）、丸型脊（M）である。これらを、柄の基部に付属する耳や帯（図3-2）と関連させて、形式的妥当性を確かめる（表3-1）。関連させると、H、Mで1グループ、S、S3で1グループのように凡そ纏まりがみられる。脊形態以外の属性では、ないもの（0）が相当数見られるために、脊で分類を行うのが良いと考えられる。TやS2を上での纏まりのどちらとみなすかが問題となるが、今のところは、矛全体の機能とかわる脊を重視して、S2はS、S3グループに含ませ、Tは独立させる。形式は以下のとおりである。

¹ 偽三叉脊（S2）に関しては、チェルヌィフは三叉脊（S）との関連を指摘している。発表者は三脊（S3）に関しても三叉脊（S）との関連を想定するため、S、H、Mと等価の単位にせず、Sの仲間とした。

鍛造製品 (T)、三叉脊矛 (S、S2、S3)、菱形および丸形脊矛 (以下、菱丸矛) (H、M)

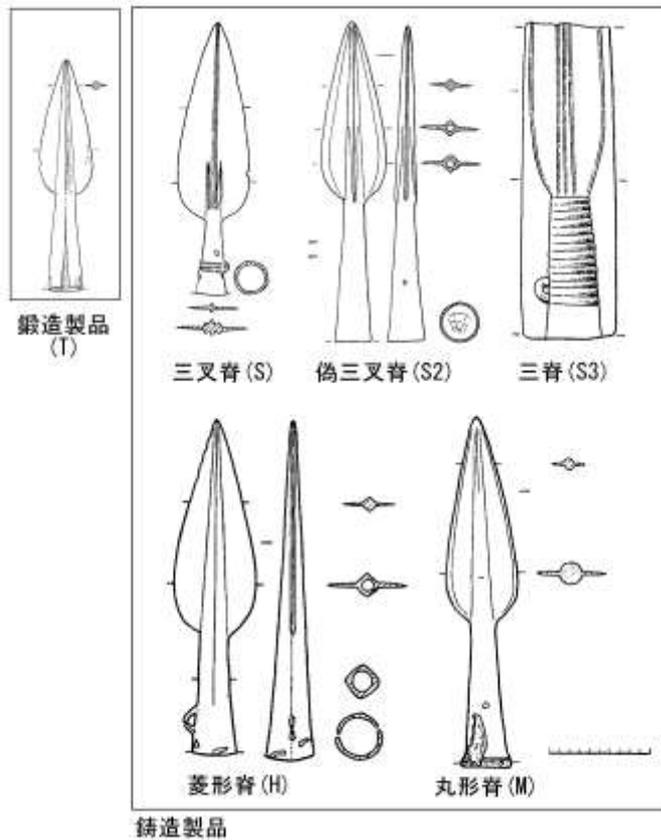


図 3-1 有銚矛の主な形態変異

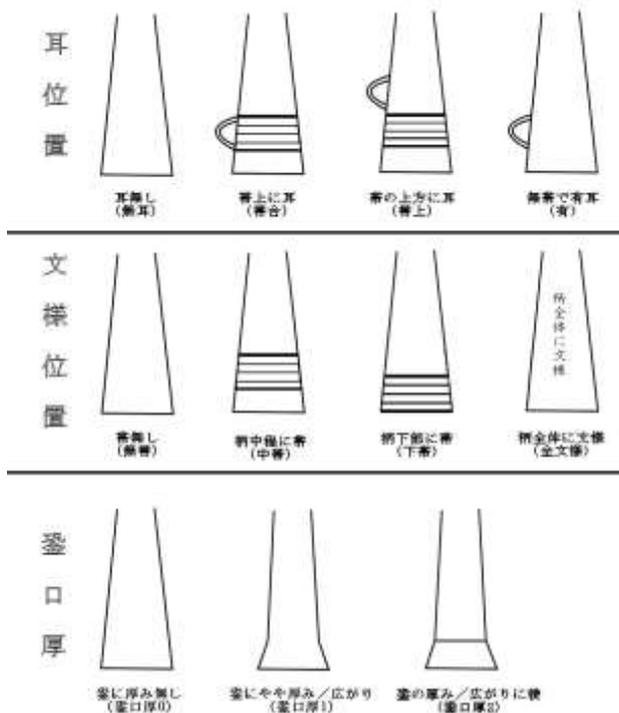


図 3-2 形式分類の為の属性変異模式図

表 3-1 形式分類の為の資料

(耳と脊の対応)

		耳→			
脊↓		0	帯合	帯上	有
	H	7	3	3	22
M	8			3	
S	11	31	1		
S2	4				
S3		3			
T	8				

(帯位置と脊の対応)

		帯→			
脊↓		0	中帯	下帯	全体に文様
	H	28	6		1
M	12				
S	4	35	4		
S2	4				
S3		3			
T	8				

(銚口厚と脊の対応)

		?口厚→		
脊↓		0	?厚1	?厚2
	H	11	8	15
M	8		4	
S	43			
S2	4			
S3	1			
T	8			

型式分類 (鍛造製品)

型式分類では法量の分析に加え、形態も属性として扱うことにする。形態は、器物各所の法量 (図 3-3) の比で示すこととする。

他の特徴では全長/a (1.7~1.9、一点のみ 3.4) がある (図 3-4 上)。この値は、他の形式 (特に三叉矛) に比して大きいものである。つまり、全長に比して葉が短く、柄が長い傾向にある。またこの一群は法量でもまとまりが強い (図 3-4 下)。なお、この矛の基部には孔が2つほど開けられるものが大部分で、チェルヌィフは柄に装着するためのものと考えている。

法量上のバリエーションが少なく、セイマ・トルビノ青銅器群と同段階の EAMP 初期の諸文化にも知られ、実用品として発達してきた可能性があるが、この点については別に検討を要する。細分は困難で全体を T 類とする。

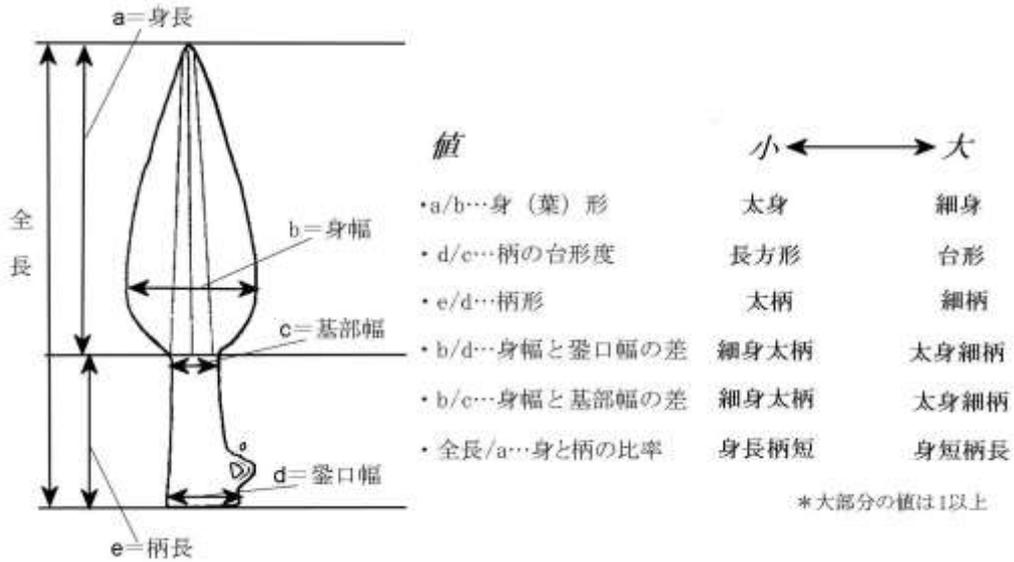


図 3-3 形態測定箇所

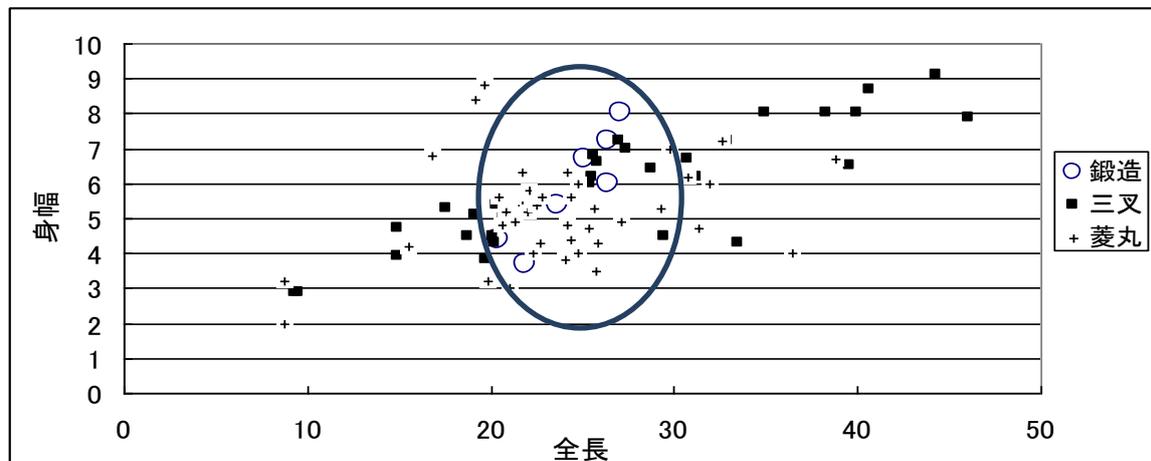
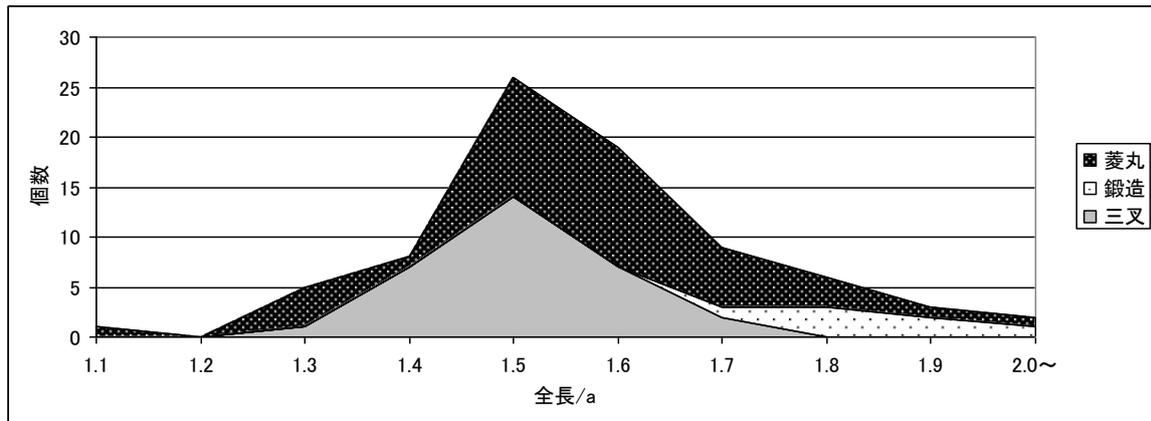


図 3-4 形式間比較のための資料 (上：全長/a 値、下：法量の比較)

型式分類（鑄造製品：三叉矛）

鑄造の矛としてはユーラシア草原地帯において非常に早い段階の出現である。

チェルヌيوفは法量で3群に区分し、その後耳や鉤の有無などにより細分している。本発表では、従来では全体的には触れられていない矛の各所の形態を数値化し、他の属性との対応関係により型式を設定する。まず、チェルヌيوفの行なった3群の分類であるが、示されたグラフでは3群は排他的に相関している（図3-5）。全長と葉幅の相関（図3-6）を新たにみると、小、中は比較的明瞭に区別できるが、中、大は截然とは区分できない。そこで、チェルヌيوفの分類に若干手を加えたものを任意に設定し²（小：～21cm 中：21～32cm 大：32cm～）、形態との相関を試みると（図3-7～9）、形態各属性とは重なりあいながらも相関することが確かめられた。大きくなるにつれて、全体が細くなる傾向が読み取れるが、釜の細身化が比較的明確であり、形態が漸移的に変化していることがわかる。中型、大型は一般的な矛と比べてもかなり大きく、実用品としてはあまり適さないように思われる。また、このような大型のものを柄に装着し、支えるはずの釜部の細身化も実用的でない方向である。型式設定であるが、小型のものは法量でも比較的纏まっている。中、大型の区分は検討を要するが、鉤付きのもの（図3-10）は1点が中型のほかは大型に偏り、やはり3群に区分可能と考えられる。以上を基に、小：～21cm（A類）中：21～32cm（B類）大：32cm～（C類）とし、比較的よく相関した釜の各形態（ $e/d > 3.5$ …C類、 $e/d \leq 2.5$ …A類）や、身長を参考にして、破損品の型式判別をおこなうことにする。A類、B類、C類は漸移的变化と考えられる。

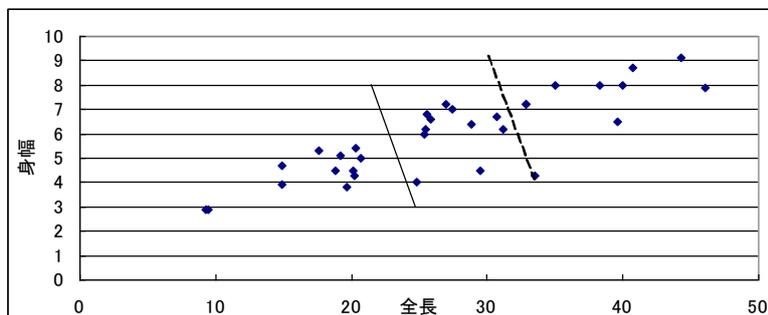


図3-6 三叉矛における全長と幅の相関

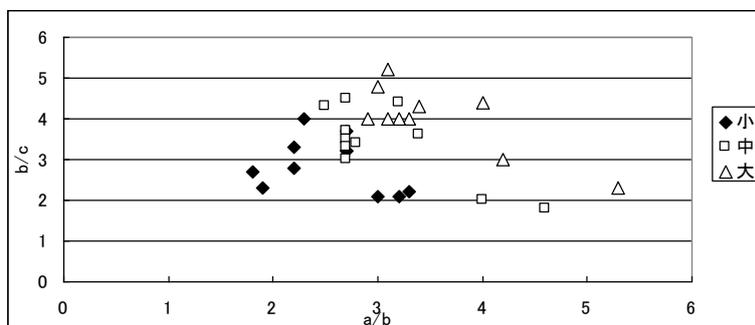


図3-7 法量と形態の相関（横 a/b, 縦 b/c）

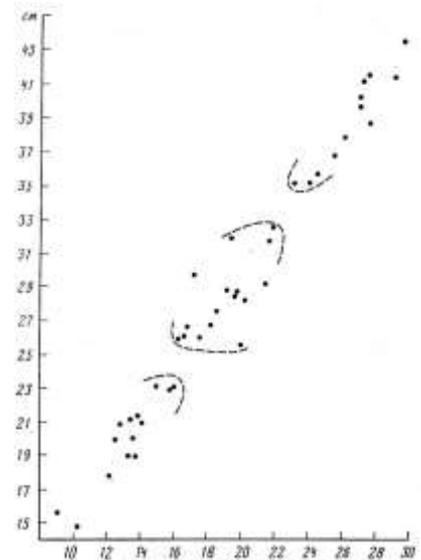


図3-5 チェルヌيوف氏による三叉矛の全長（縦）、身長（横）の相関

² チェルヌيوفは、小型、細長型、長型と区分しており、分類において形態を考慮している。

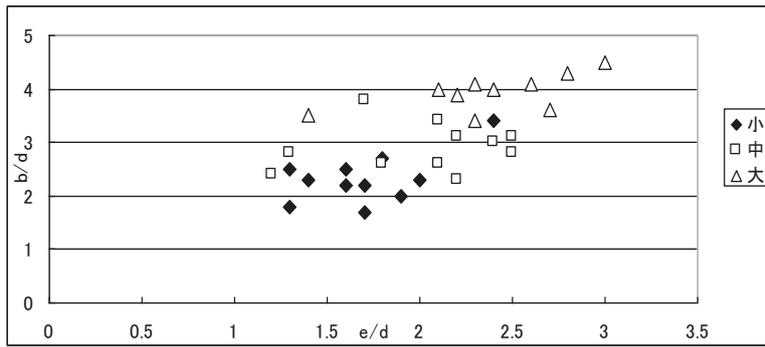


図 3-8 法量と形態の相関 (横 b/d, 縦 e/d)

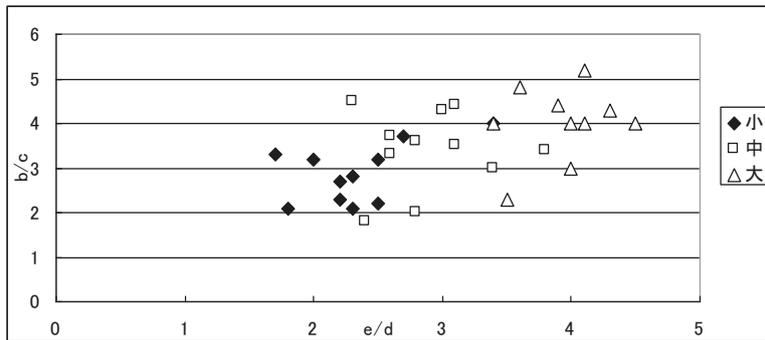


図 3-9 法量と形態の相関 (横 e/d, 縦 b/c)

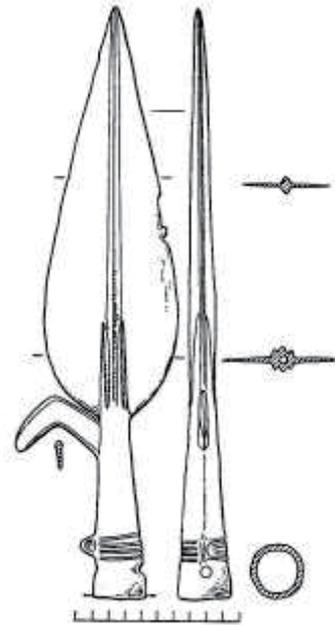


図 3-10 鉤付き C 類

脊形態による区分 (セイマ・トルビノ、サムシ・キジロボ有釜矛の区分基準)

もう一つ、漸移的な変化が想定される属性がある。この属性は、チェルヌィフがセイマ・トルビノ、サムシ・キジロボ両青銅器群 (有釜矛) の区分において注目した特徴に関わる³、脊のバリエーションである。これらの形態を、単脊からの変化と考えるならば、図 3-11 のように、脊の上に沈線を二本刻み、そこから両側が徐々に独立していく変化が考えられる。e は三叉が其々完全に独立するものである。さらに f では独立した三叉が身 (上) あるいは柄 (下) 方向に伸び、サムシの特徴とされる (図 3-1 : S3)。g も偽三叉と呼ばれるサムシの特徴 (図 3-1 : S2) であるが、図のように真ん中の稜の外両側は低くなっており、最初から 3 つの山を突出させていくというここで想定する三叉 (a~f) の変化とは異なるものである。前の型式 A~C 類と、a~g を相関させた (表 3-2、図 3-12) が、明確な相関は読み取れない。a→f の変化の方向性は検証されず、A~C 類のなかで各変異がランダムに用いられた可能性がある。ただし、C 類に f や g が見られないこと、f や g がサムシ IV 遺跡で集中的に見つかることを考慮し、三叉脊矛のうち、脊形態 f、g の変異を持つものを D 類として区別しておこう。もちろん、これらは現段階では型式としては仮定の

³ チェルヌィフはサムシ・キジロボ青銅器群とされるものの認定に関して、サムシ IV 遺跡出土品の特徴によっている。サムシ IV 遺跡は共伴する遺物などにより、セイマ・トルビノ青銅器群よりは遅いものと考えられている。両者が明確な層位で確かめられたわけではないから、慎重さを要するが、一般的にセイマ・トルビノ→サムシ・キジロボ青銅器群が認められており、本論文でもそれに準じている。なお、現状では、サムシ・キジロボ青銅器群に関しては、セイマ・トルビノ青銅器群のような独立した特殊な青銅器と考えるよりは、森林草原地帯の在地文化のなかで考えられる傾向が強い。

段階である。しかしいずれにせよ、脊形態 f や g の出現は、A～C 類の変化とは全く別であることは間違いない。D 類（サムシ・キジロボ有蓋矛）は、セイマ・トルビノ有蓋矛 A～C 類の大小変化とは別の系譜として出現したと考えられる。また表 3-2 から考えて、D 類は A 類または B 類から派生したものであろう。

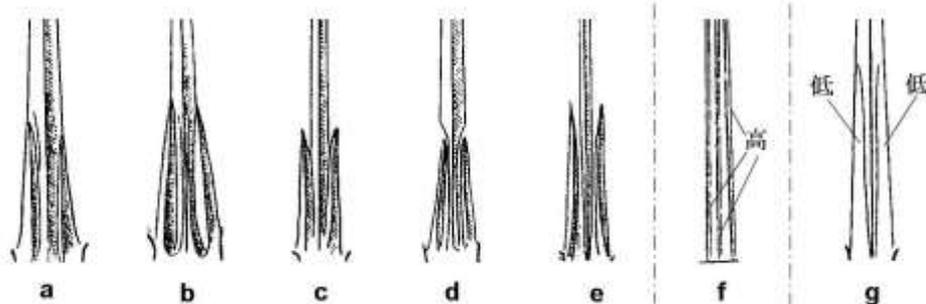


図 3-11 脊形態の変異

表 3-2 型式 A～C 類と

脊形態 a～g の相関

	A	B	C
a	2	1	1
b	3	5	0
c	1	1	3
d	2	4	6
e	5	3	3
f	2	3	0
g	4	1	0

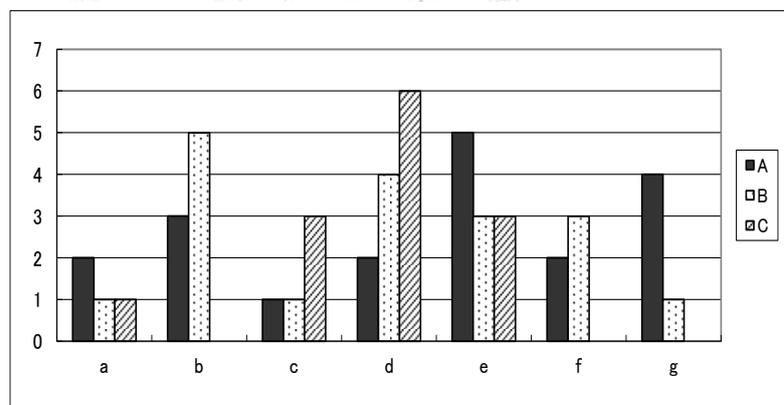


図 3-12 表 3-2 の図化（型式 A～C 類と脊形態 a～g の相関）

型式分類（鑄造製品：菱丸矛）

チェルヌィフは大きさによる区分を認めており、菱丸矛には三叉矛のような大型品が見られないことに言及している。また、数点の小型品が見られることも指摘したうえで、蓋端部の膨らみや耳の有無などによって、全体を分類している。新たに法量分析を試みたが、区分は難しい（図 3-13）。ただし、20cm 以下の小型品に関しては、全長/a 値が非常に低く（蓋部が極端に短い）明らかに区別できる。小型のうち、全長/a 値が 1.3 以下のものを HS 類とする。

先ほどの三叉矛と同様の傾向がないかどうか確かめるために、ここでも便宜的に、大型（30cm 以上）、中型、小型（10cm 以下：HS 類以外の 1 点）に分け、形態との相関をみると、大型のものがグラフの右上に偏る傾向が若干認められる（図 3-14）。さらに、蓋口の広がり（蓋口厚）の有無、耳位置などの形態（図 3-2）との相関を確かめた⁴ところ、蓋口厚の有無で重なり合いつつも相関が認められた（図 3-15）。形態と耳の有無はあまり相関しなかった（図 3-16）。これをもとに、蓋口がそのままのものを HA 類、蓋口に広がりや厚みが認められるものを HB 類とする⁵。HA、HB 類の区分も、セイマ A～C 類と同様、漸移的なものである。以上により、丸菱矛にも法

⁴ 蓋口厚の変異と形態とを相関させる場合、d 値は蓋口厚形成に伴って自動的に拡大するので、d 値を含まない値をみている。

⁵ 従って、チェルヌィフの分類が蓋厚を重視している点は評価できる。ただし、他の属性も等価に用いていることなど、本発表の案とは異なる点も多い。

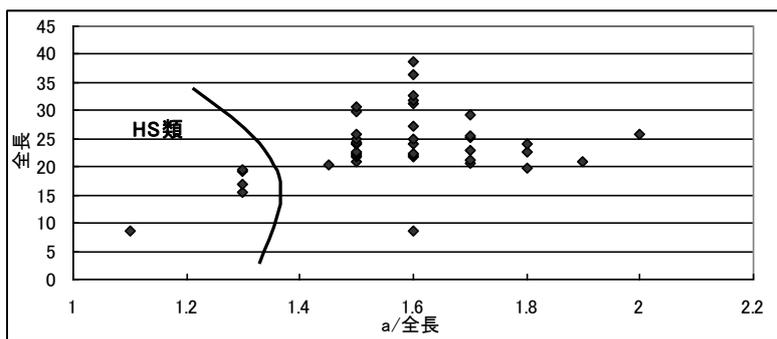


図 3-13 菱丸矛における法量と形態の相関（横：a/全長、縦：全長）

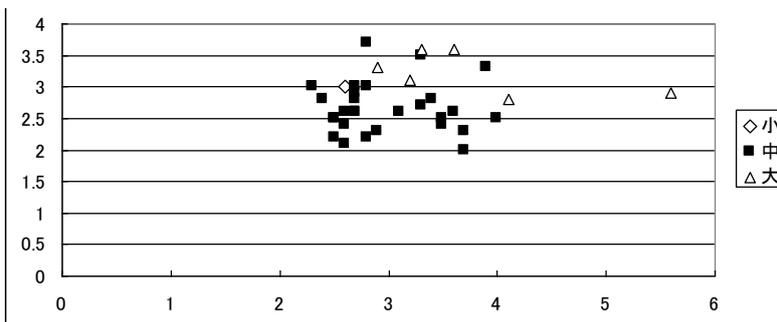


図 3-14 菱丸矛における法量と形態の相関（横 a/b, 縦 b/c）

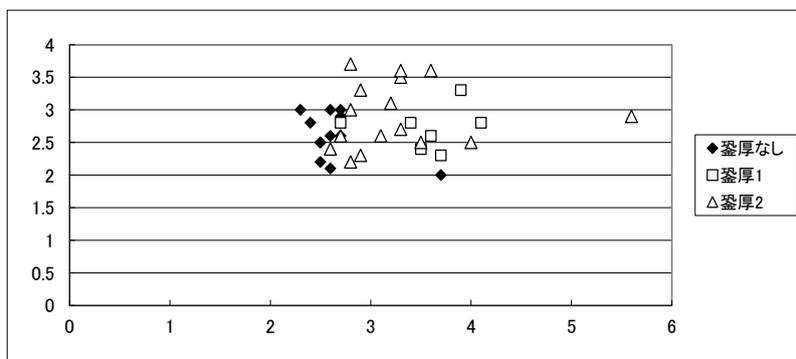


図 3-15 菱丸矛における法量と形態（釜口厚の有無）の相関（横 a/b, 縦 b/c）

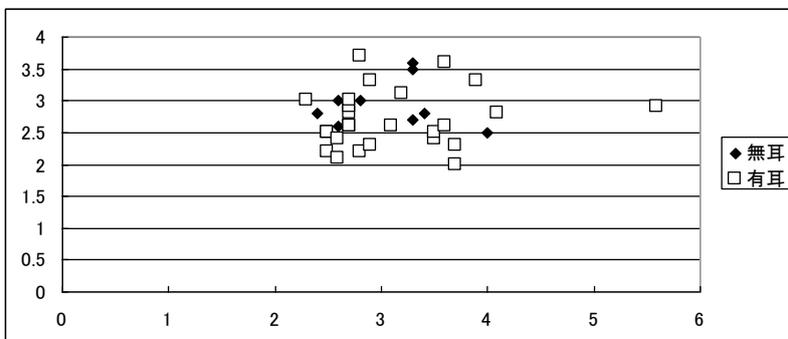


図 3-16 菱丸矛における法量と形態（耳の有無）の相関（横 a/b, 縦 b/c）

量の大型化もある程度は認められ、三叉矛と同様の変化があったことが認められる。しかし、大型化は徹底して進まず、大型のものが特に三叉矛に類似しているというわけではない（大型のものには、三叉矛の特徴である、帯と同位置に耳の付くもの（図 3-2: 帯合）がない）。三叉矛とは組列上は排他的な関係にあり、こちらの方は釜口を発展させる方向に向かっていたと考えられる。分類の結果は以下



図 3-17 ボロディノデポ出土の C類（右）、HB類（左）

のとおりである。

T類…鍛造

A類、B類、C類…鑄造三叉矛。脊形態 a～e。A→C で法量の大型化、銚を中心とする細身化

D類…鑄造三叉矛のうち、脊形態 f (三脊)、g (偽三叉) (仮説段階の型式)

HS類…鑄造丸菱矛で、小型で銚が非常に短いもの

HA類…鑄造丸菱矛で、銚口がそのまま終わるもの

HB類…鑄造丸菱矛で、銚口が広がる、或いは厚くなるもの

(2) 編年と各系譜の派生関係

A類、B類、C類を時間差と考えた場合、大型→小型、小型→大型の両方があるが、鍛造(T類)や丸菱矛の多くはA～B類の大きさに該当し、B～C類の大型品が特殊なものと考えればC→A類は考えにくい。

1つの墓地でもA～C類、HA、HB類が全て見られ、墓地単位の出土の差が年代を決める手がかりにはならない。現状では前2千年紀前半という年代をさらに区分し、各々に年代を与えることは困難である。また、A～C類と、HA、HB類の併行関係の問題がある。両者が共伴した稀な例として、ボロディノ(Borodino)デポがあり、C類、HB類が出土している(図3-17)。これらの事例は、上記型式設定で記述した両形式の特徴から言っても問題ない。A→C類とHA→HB類の両系統は各々異なった方向で変化していったと考えられる。さらに、

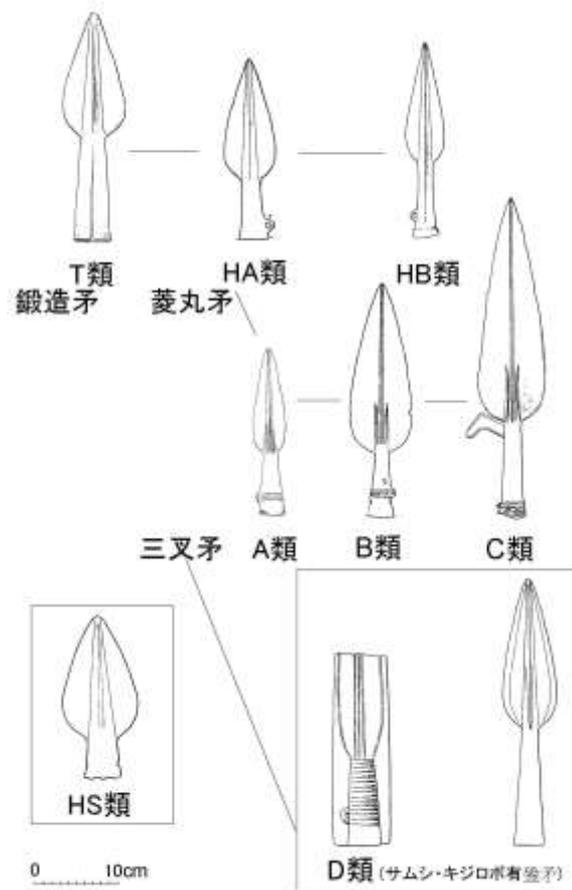


図3-18 セイマ・トルビノ有銚矛の変遷図

A類、HA類の発生について、セイマ・トルビノ青銅器群内部で考えるなら、どちらもT類をもとに作られた可能性があるが、A類に関しては、このような特異な脊がT類(鍛造)から突然出現したというより、HA類(鑄造)を媒介としてそこから派生したとする考え方もある。

D類に関しては、脊の形態からいって、A類またはB類より派生したと考えられるが、いずれが祖形かは確定的ではない。HS類に関しては、ロストフカ墓地ではC類との共伴が知られる。HS類の小ささを考えると、その他の型式とは違った器種である可能性もある。以上により、現在想定される型式間関係を図3-18に示しておく。

(3) 金属成分と型式

チェルヌيوفの論の中心をなしていた成分（砒素と錫）と、設定した型式との対応関係を検討する。両成分とも製品の硬度を増すことが知られ、一般的には砒素銅（鍛造）から錫銅（製錬、合金技術を伴う铸造）という変化が認められる。ただし、ここで扱うものの場合、錫青銅といっても中国中原の製品のような含有量が20%を超えるものはない。まずは錫、砒素の対応関係を見る（表3-3、図3-19）。両者に正負の明確な相関は認められないが、1%を超え

表 3-3 金属成分比の相関（錫と砒素）

(1%以下(0)、10%未満(1)、20%未満(2)、ある程度含まれる情報のみ(●))

		錫→			
		0	1	2	●
砒素↓	0	13	14	9	9
	1	4	1	2	
	●	6			5

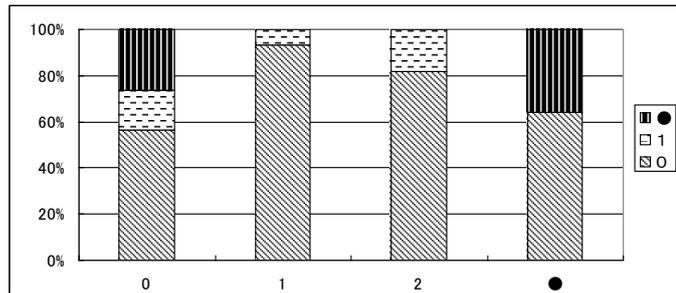
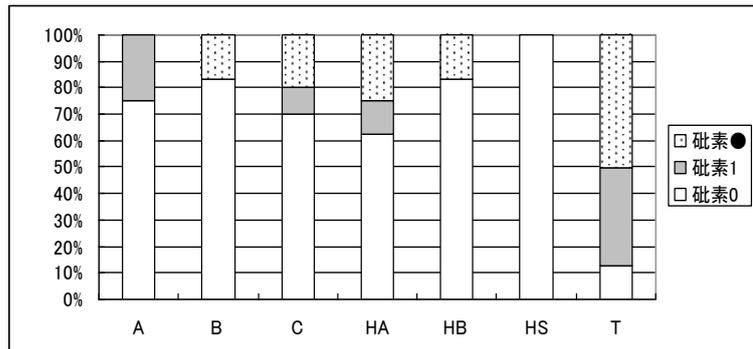


図 3-19 表 3 の図化（割合）

表 3-4 型式と金属成分の相関（上：砒素、下：錫）

		砒素成分→		
		砒素0	砒素1	砒素●
型式↓	A	6	2	
	B	10		2
	C	7	1	2
	HA	5	1	2
	HB	10		2
	HS	4		
	T	1	3	4



		錫成分→			
		錫0	錫1	錫2	錫●
型式↓	A	1	2	2	3
	B	3	3	3	3
	C	1	4	3	4
	HA	5		1	2
	HB	6	1	2	4
	HS		4		
	T	7			

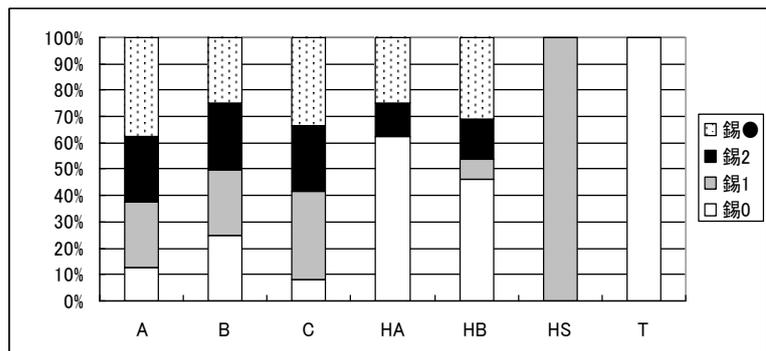


図 3-20 表 3-4 の図化（割合）（上：砒素、下：錫）

る砒素と、10%以上の錫の両使用は少ない傾向にある⁶。サムシ I、II 類に関しては、成分が不明

⁶ 錫青銅は砒素銅より後出であり、砒素を全く含まない青銅もあるが、全ての錫青銅の成分中から砒素が完全に消えることはない。これは、銅鉱自体の成分に由来すると考えられる。

である。

各成分と型式との関係（表 3-4、図 3-20）⁷であるが、まず明確に区別できるのは T 類（鍛造）であり、錫を含むものはなく、殆どが砒素銅である。セイマ A～C 類は錫が大半を占めるものの、砒素も各類均等に含んでいる。セイマ各類の錫の多少と砒素の多少は全く相関しないので、セイマ A→C 類が認められれば、これらは最初から錫青銅が大部分であったと見られる。一方で、HA、HB 類はセイマ A～C 類に比べ、砒素、錫の割合が逆転する。また、HA、HB 類でも互いに錫、砒素の割合で若干の排他が認められる。従って、HA 類は成分でも過渡形として注目できると考えられる。HS は判別可能なものは全て錫青銅である。

（4）分布

各単位の数量、割合を示す為、便宜的に地形により区分を行なって検討を行なう（図 3-21）。

型式分布（表 3-5 図 3-22）

T 類…ボルガ川中流域～トランスウラル地方に分布

A 類…ボルガ川中流からエニセイ川まで分布

B 類…ボルガ川中流からオビ川まで分布

C 類…ボルガ川中流からオビ川まで分布するが、それらよりずっと西の黒海沿岸に 1 点ある。

D 類…トランスウラルからエニセイ川流域に分布

HA 類…ボルガ川流域からトランスウラル地方に分布

HB 類…バルト海沿岸からイリテシ川流域まで幅広く分布するが、数量的に最も多いのはボルガ川流域

HS 類…カマ川流域に 1 点ある他は、イリテシ流域に分布



図 3-21 分布のための便宜的地理区分

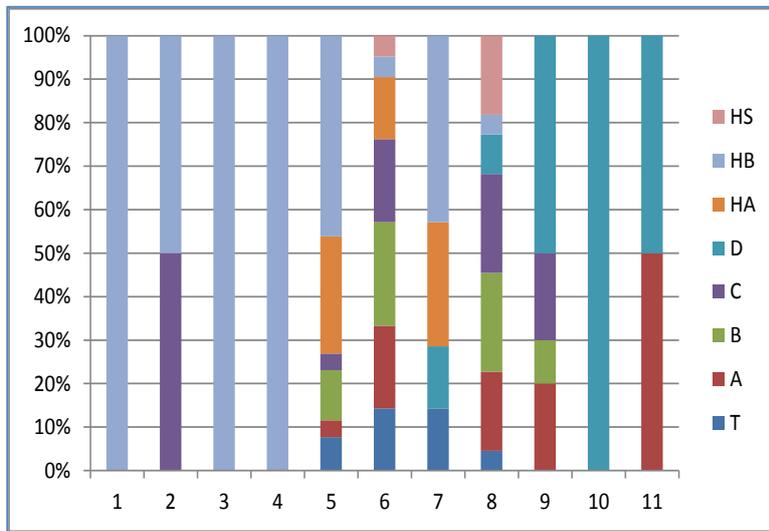
総じて言えば、HA 類、T 類はウラル地方中心に比較的限られて分布し、HA 類はその中でもやや西に偏る。HB 類はウラル山脈より西側にその中心がある。セイマ A～C 類は、ボルガ川中流からオビ川を中心に広がる。この間では、各型式の割合や数量において、目立った分布差はみられない。一方で D 類（サムシ・キジロボ青銅器群）は、ウラル

⁷ 表 3-4、図 3-20 の示し方であるが、錫 0 は錫 1% 未満、錫 1 は 10% 未満、錫 2 は 20% 未満、錫●は錫を含むという情報のみ得られたことを示す。砒素も同様であり、砒素を 10% 以上含むものはなかった。

表 3-5 型式の分布 (表上の番号は図 3-21 に対応)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
T類					2	3	2	1			
A類					1	4		4	2		2
B類					3	5		5	1		
C類		1			1	4		5	2		
D類							2	2	5	2	2
HA類					7	3	4				
HB類	3	1	1	3	12	1	6	1			
HS類						1		4			

山脈より東側に分布し、ここでも割合、数量を考慮した場合、現状では分布圏内での型式差は見られない。以上のように、HA、HB、T類に比してA、B、C類は東に、D類はさらに東に分布が偏っていることが把握できる。



金属成分分布

簡略化し、砒素、錫成分の有無によって型式ごとに比較する(図 3-23-①~⑦)。A~C類では錫は東西においてそれほど偏りを見せない。砒素に関しては、ウラル山脈より西(番号 6(カマ川流域)より左)に若干多い。HA、HB類において、錫なし、砒素ありは、ウラル山脈より西に多いが、東に比べて錫が少ないとはいえない。

図 3-22 表 3-5 の図化 (割合)

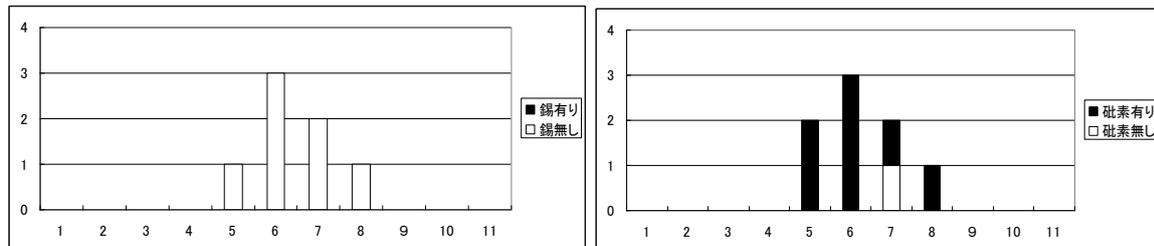


図 3-23-① 型式ごとの成分分布 (T類 左: 錫の有無、右: 砒素の有無)

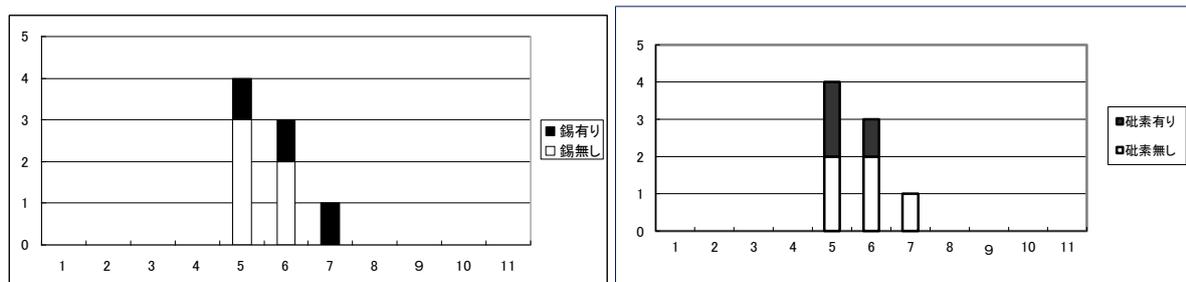


図 3-23-② 型式ごとの成分分布 (HA類 左: 錫の有無、右: 砒素の有無)

総じて、HA 類や A 類当初からウラル以西にも錫青銅は存在したといえる。T 類には満遍なく錫青銅は含まれない。

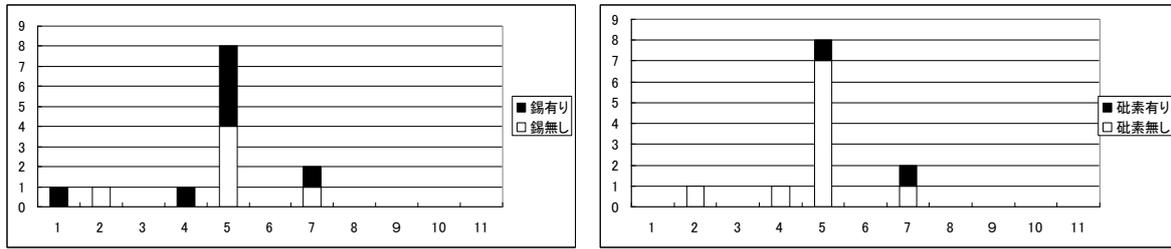


図 3-23-③ 型式ごとの成分分布 (HB 類 左：錫の有無、右：砒素の有無)

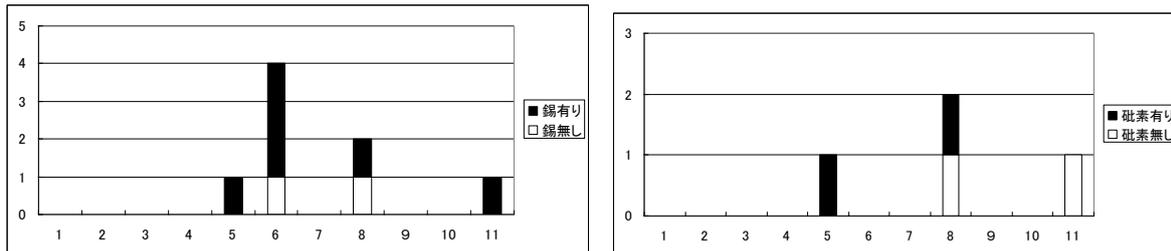


図 3-23-④ 型式ごとの成分分布 (A 類 左：錫の有無、右：砒素の有無)

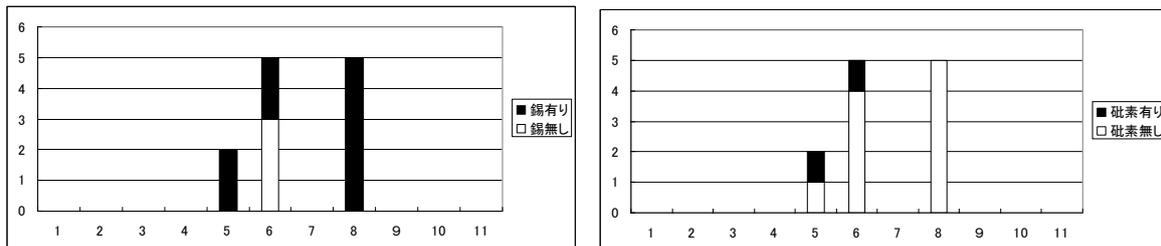


図 3-23-⑤ 型式ごとの成分分布 (B 類 左：錫の有無、右：砒素の有無)

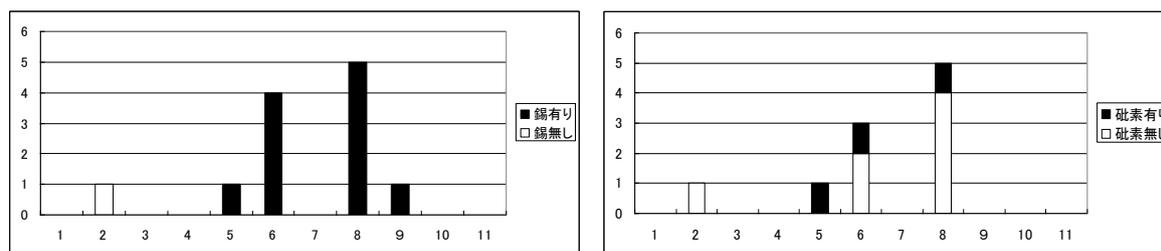


図 3-23-⑥ 型式ごとの成分分布 (C 類 左：錫の有無、右：砒素の有無)

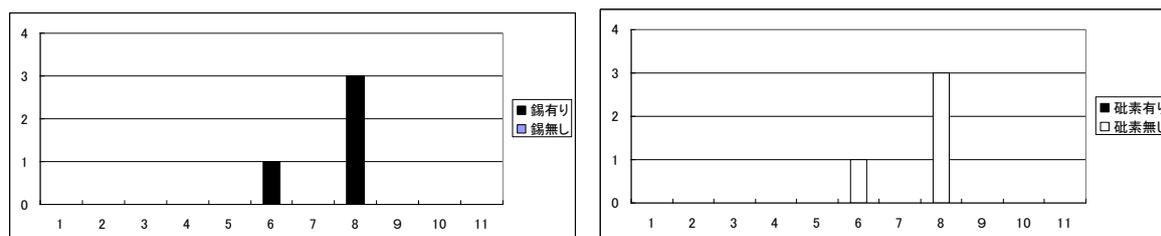


図 3-23-⑦ 型式ごとの成分分布 (HS 類 左：錫の有無、右：砒素の有無)

(5) 小結

得られた現象を整理しよう。セイマ・トルビノ青銅器群で最も特徴的な有蓋斧 A~C 類は、A 類を古形とした場合、徐々に大型、細身化する。また、この変化は A~C 類の時期を通じて、ボルガ川からオビ川附近までは確実に共有されている。有蓋斧 HA、HB 類は、A~C 類と形式（系譜）的には、排他的な存在であるが、その大型、細身化という変化に関しては、A~C 類と一部共通する。ただし、HA、HB 類の変化は C 類ほど徹底されず、かわりに蓋口部が膨らんでいくという特徴が見出せる。HA、HB 類も広く分布するが、その中心は A~C 類に比べて西である。以上のようなセイマ・トルビノ有蓋斧の変化は、それに後続すると考えられているサムシ・キジロボ I、II 類の有蓋斧を生み出すのとは根本的に異なる変化である。このことは、セイマ・トルビノ青銅器群の有蓋斧 A~C 類、HA、HB 類が変化の特徴を一部共有しながら東西に幅広く分布するのに対して、サムシ・キジロボ青銅器群の有蓋斧 I、II 類の分布がウラル以東に限られることとも符合する。錫、砒素成分に関しては、ウラル山脈を挟んだ成分の東西差に関してはチェルヌイフ氏の指摘するとおりであったが、アルタイ（イリテシ、オビ川上流など）から錫青銅が地理勾配的に西に拡散する状況は型式ごとの比較でも読み取れなかった。T 類、HA、HB 類、A、B、C 類の形式 3 者間に関しては、前から後へ徐々に錫青銅が増大する。この 3 形式が比較的安定して存在するのはウラル山脈附近（ボルガ、オカ、カマ川流域、トランスウラル）である。

第 2 節 有蓋斧の検討

(1) 分類

形式分類（大別形式）

セイマ・トルビノ、サムシ・キジロボ両青銅器群の有蓋斧は蓋口が丸く、身の中ほどの断面は六角形で、両端がエッジ状に立ち上がるものが多いが、チェルヌイフも指摘するように、他に若干の特異な形のものが含まれる。まずは鍛造品の斧が挙げられ、ラシノアとセイマ各遺跡から 1 点ずつ知られる（図 3-24）。以上を有蓋斧 T 類とする。他には鋤状斧がある。これは蓋部を除いて身が平らなものである（図 3-25）。鋤状斧はセイマ・トルビノより南に分布する EAMP（アン

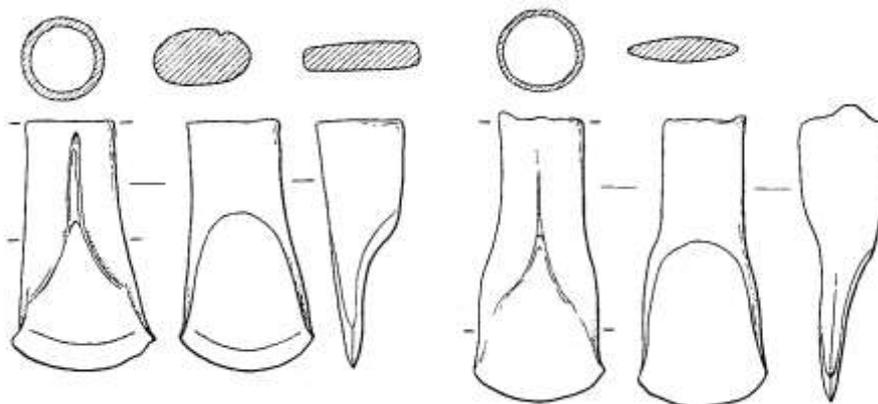


図 3-24 有蓋斧 T 類（鍛造）（左：ラシノア遺跡、右：セイマ遺跡出土）

ドロノヴォ文化)によくみられる鋤（図 3-26）と何らかの関係がある可能性がある。以上を有蓋斧 S 類とする。上記以外の物を鑄造有蓋斧として以下に分析を加える。

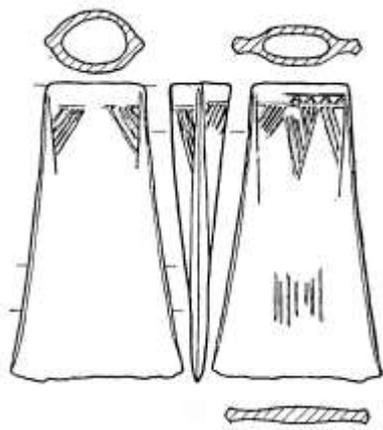


図 3-25 有銚斧 S 類
(ロストフカ遺跡出土)

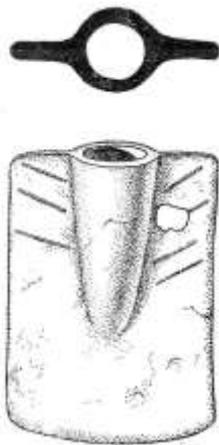


図 3-26 EAMP の鋤

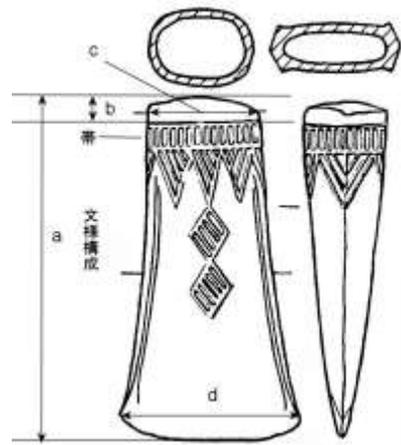


図 3-27 有銚斧の計測箇所
($a/b=X$ 値 $c/d=Y$ 値)

形式分類 (鑄造有銚斧の細別形式)

セイマ・トルビノ、サムシ・キジロボ両鑄造有銚斧 (以下、鑄造有銚斧の分析の項では有銚斧と記す) の違いを認識したチェルヌィフの法量分析では一定の結果が出ておる (図 3-27 の右上)。また、チェルヌィフは全体の形状の差異、耳の孔の消滅 (偽耳化)、を挙げている。さらに、図 3-29 の左の散布図は斧の長さとの幅の相関であるが、セイマ・トルビノ有銚斧 (●) に比べてサムシ・キジロボ有銚斧 (+) は相関幅が広く、サムシ・キジロボ有銚斧では型式の規範が緩むことが指摘されている。以上のように、両有銚斧はおおまかには区分できると思われるが、チェルヌィフはサムシ遺跡出土のものは無条件にこのグループに入れるなど、厳密な区分方法に関しては示されていない。

先の有銚矛同様、セイマ・トルビノ、サムシ・キジロボ両有銚斧の区別よりも有銚斧全体を大まかに区分することを考えよう。そこで、まず一見して変異の豊富そうな、耳の有無、帯の紋様、



図 3-28 サムシ・キジロボ青銅器群の有銚斧

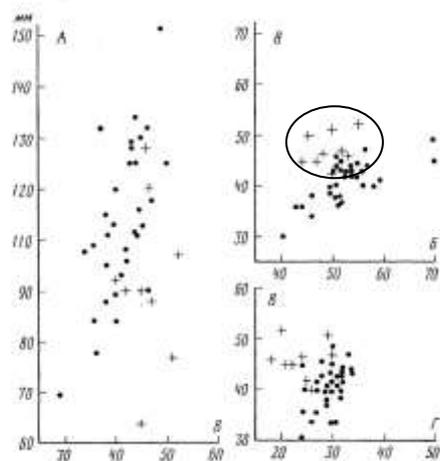


図 3-29 チェルヌィフらによる有銚斧の法量

(●がセイマ・トルビノ / +がサムシ・キジロボ青銅器群)

(上下の (幅同士) でよく相関 (右上))

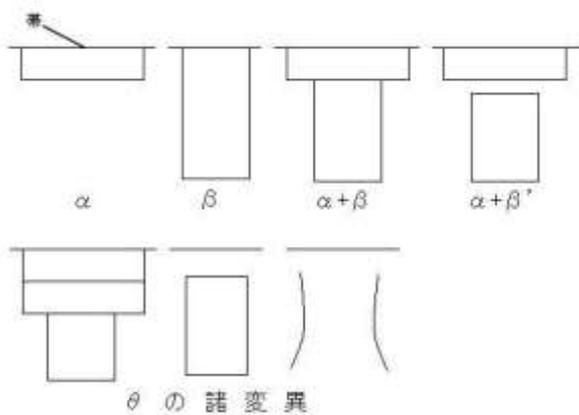


図 3-30 紋様構成の変異

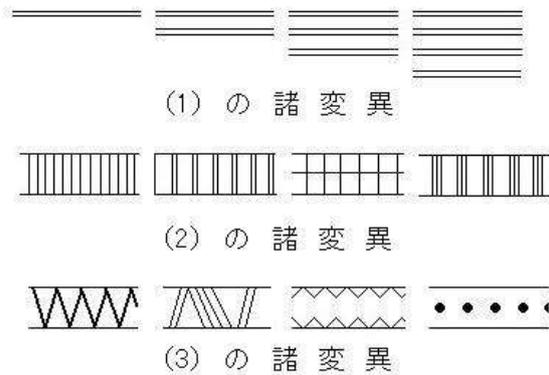


図 3-31 帯紋様の変異

紋様構成に注目する。耳はチェルヌイフの指摘するように多様な変異を持つが、まずは有無で二分しよう。次に、紋様が付加されるセイマ・トルビノ有蓋斧においては、蓋部開口部付近に一周帯が周り、その帯の下に連続する形で幾何学紋が線で表現される場合が大部分である。帯自体には、刃に水平方向の併行線で表されるもの (1)、平行線の中にそれと垂直方向に狭い間隔で線が入るもの (2)、平行線の中に垂直線以外の紋様 (幾何学紋、点列紋など) が表されるもの (3) という変異がみられ、ないものは (0) とする。次に、帯の下にみられる幾何学紋の配置のパターン (紋様自体の変異は問わない) であるが、幾何学紋と帯は接して施される場合が多い。帯の下に、刃に水平方向付される 1 列の紋様を α 、刃に垂直方向の 1 列の紋様を β とする。これらの幾何学紋の線には、帯内部の垂直紋様の線から連続するものがあり、帯の続きとして幾何学紋が刻まれた場合が多いと考えられる。 α と β が一列ずつ組み合わせるものを $\alpha + \beta$ とし、 α と β が離れるものを $\alpha + \beta'$ とする。これら以外のややイレギュラーな紋様構成 (例えば α が二列以上ある、帯から離れたものなど) を θ とし、紋様のないものは 0 とする。

表 3-6 耳の有無と紋様構成、帯紋様の相関

		紋様構成→					
耳の有無		0	α	β	$\alpha + \beta$	$\alpha + \beta'$	θ
↓	無耳	132	37	7	9	11	1
	有耳	7	12	5	7	2	22
		帯紋様→					
耳の有無		(0)	(1)	(2)	(3)		
↓	無耳	29	77	83	3		
	有耳	0	9	25	22		

以上の 3 属性を相関させたものが、表 3-6 である。表裏で異なる紋様を持つものが多少あるため、面ごとに集計している (従って、表の合計は個体数のほぼ倍となっている)。表では、耳の有無によって大まかに傾向が異なり、紋様構成では

無耳のものは、紋様なしが最も多く、その次に α 、 β およびその組み合わせがみられ、 θ が最も少ない。帯紋様では (1)、(2) が最も多く、その次に帯なし、(3) は 1 例のみである。一方で有耳のものは紋様構成 θ が最も多く、無紋は少ない。帯紋様においても同様、無耳のものとは逆の傾向を示している。各属性は明瞭に排他的ではないが、無耳 (有蓋斧 I 類)、有耳 (有蓋斧 II 類) の大きく 2 グループに区分することは妥当であると考えられる。非常に大雑把にいうと、有蓋斧 I 類は耳がなく、紋様についてはシンプルなものが多い。有蓋斧 II 類は耳があり、比較的装飾豊

かなものが多い。なお、従来のサムシ・キジロボ有蓋斧は偽耳を持つものが多く、ほとんどがⅡ類に含まれる。

型式分類（有蓋斧Ⅱ類の分類）

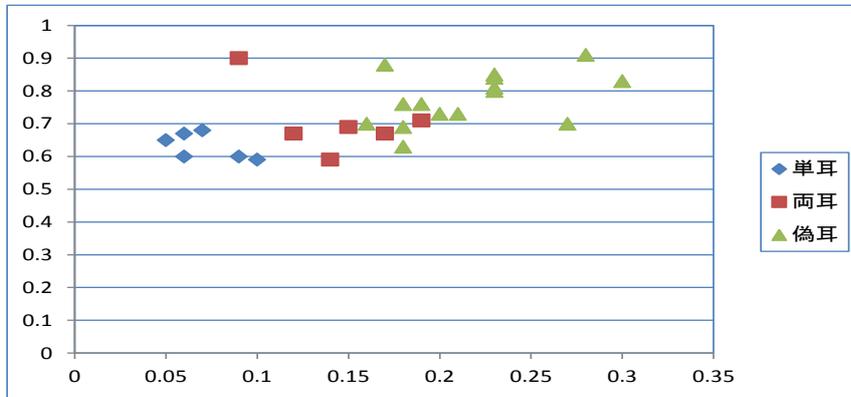


図 3-32 Ⅱ類における X（横）、Y（縦）値と、耳形態の相関

型式分類は有蓋斧Ⅱ類のみで可能である。従来のサムシ・キジロボ有蓋斧がⅡ類に含まれることは上述のとおりであるが、サムシ・キジロボ有蓋斧の特徴としてチェルヌィフが指摘した耳や法量の変化以外に、斧の上部に

見られる帯の位置がセイマ・トルビノ有蓋斧に比べて、サムシ・キジロボ有蓋斧では下にあることが看取される。そこで、器の最上部から帯の上部の長さ、全長の比率を X 値と呼び、チェルヌィフが使用した上部幅と刃部幅の比率を Y 値とし（図 3-27）、法量と耳の変異の相関を見てみよう（図 3-32）。耳に関しては単耳（1）、両耳（2）、偽耳（3）に区分した。結果、単耳から偽耳を伴うにつれて、グラフの左から右への漸移が認められる。耳による型式設定も考えられるが、両耳と偽耳の重なる部分も大きいことから、X 値 0.15 を基準にこれ以上を有蓋斧Ⅱa 類、未満をⅡb 類とする。サムシ・キジロボ青銅器群はおおよそⅡb 類に相当する。

（2）編年と各系譜の派生関係

有蓋斧Ⅰ、Ⅱ類は斧全体の器形では類似しており、両縁が立ち上がる特徴も共有されるものである。有蓋斧Ⅰ類には無紋のものや紋様の比較的単純なもの

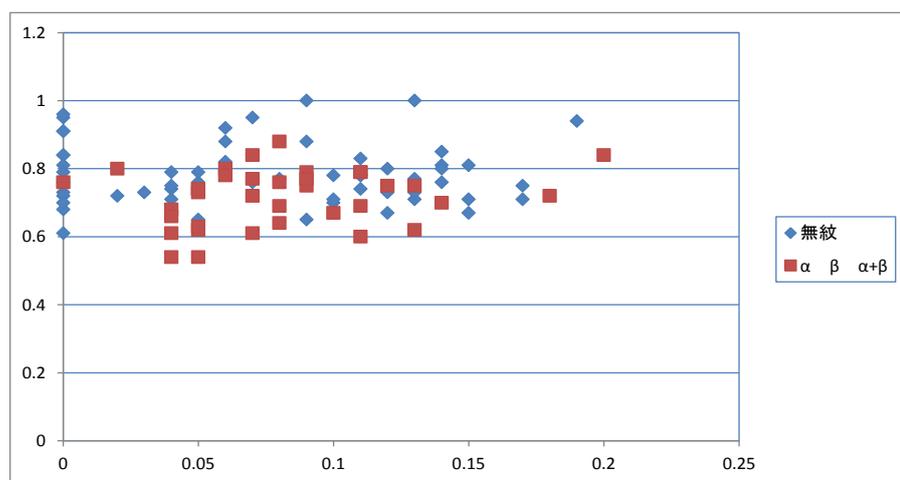


図 3-33 Ⅰ類における X（横）、Y（縦）値と、紋様構成の相関

が多く、鍛造有蓋斧は耳を持たないものであるから、有蓋斧Ⅱ類はⅠ類から発生した可能性が高い。念のため、有蓋斧Ⅰ類の紋様の多少においてもⅡ類同様の変化が追えるかどうかを確認しよう（図 3-33）。結果、紋様の多少と法量との相関（例えば無紋から有紋への X 値増大など）は確認できなかつた。また、X 値 0.15 以上は有蓋斧Ⅰ類ではわずかであることも確認できた。従って、有蓋斧Ⅱ類における変化は当該形式における独特のものであることが知られる。有蓋斧Ⅰ類は紋様の変異が比較的ランダムに現れる形式であり、その一部から耳がつく系統のⅡ類が派生したと考えられるのである（図 3-34）。

有蓋矛、有蓋斧が同一の墓地から発見されることは多いが、一括資料や層位によって以上の型式編年を検証することは難しい。こ

では有蓋矛との数少ない共伴例を挙げておく。ミノシンスク盆地のムルガデポでは有蓋矛 A 類と、有蓋斧Ⅰ類が共に発見されている。また、ロストフカ墓地では、有蓋矛 C 類と有蓋斧Ⅱ a 類、そして有蓋矛 C 類と鋤状斧の共伴例が知られる。

（3）金属成分と型式

有蓋斧に関しては、金属成分分析の数値まで公表されたものが少なく、チェルヌイフらが示した各成分の有無の記載に従う。

型式ごとに比較すると（表 3-6、図 3-34）、Ⅰ類では錫有りの割合が相対的に低い、砒素有りの割合は高い。T 類（鍛造）は錫を含むものはなく、砒素を含む。一方で、Ⅱ類は殆どが錫を含むもので、砒素を含むものは僅かである。S 類は錫を含むものが多いが、砒素を含むものも一定程度存在する。

表 3-7 セイマ・トルビノ有蓋斧における金属成分の有無と型式の相関（左：砒素 右：錫）

型式 ↓	砒素の有無→	
	有	無
T類	2	
Ⅰ類	56	11
Ⅱ a類		3
Ⅱ b類	1	2
S類	3	3

型式 ↓	錫の有無→	
	有	無
T類		2
Ⅰ類	28	42
Ⅱ a類	3	
Ⅱ b類	3	
S類	5	1

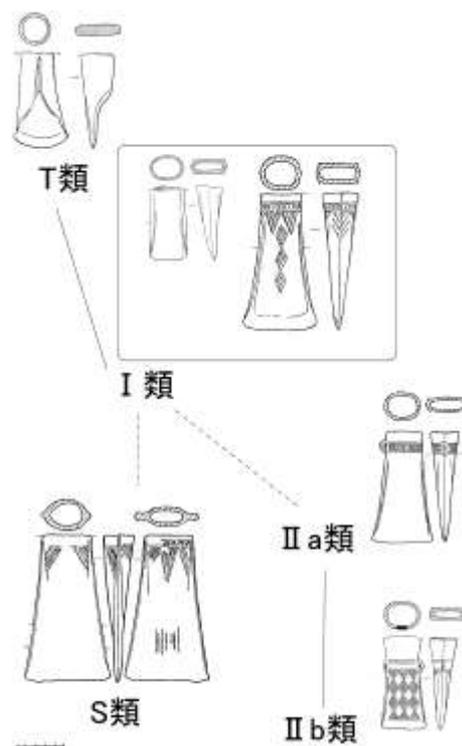


図 3-34 セイマ・トルビノ有蓋斧の変遷図

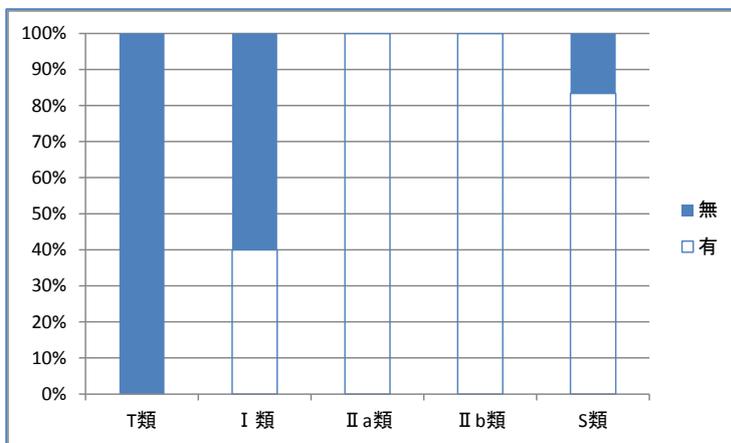
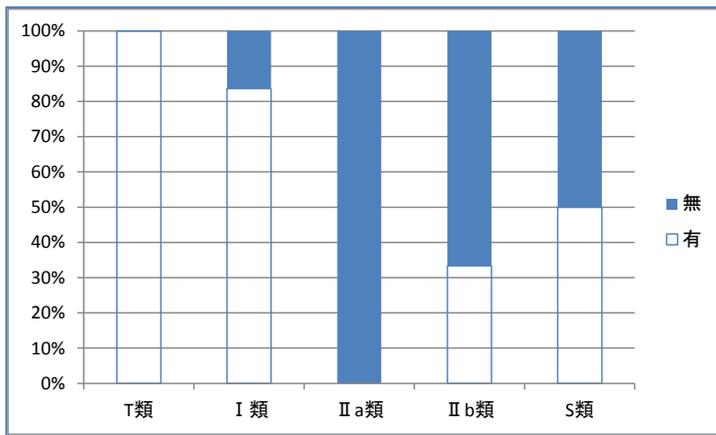


図 3-35 表 4 の図化 (割合) (上: 砒素、下: 錫)

表 3-8 型式の分布 (表上の番号は図 3-21 に対応)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
T類					2						
I類	5				25	52	4	10	7		4
II a類				1		1		7			
II b類					1	1	5	1	9		5
S類					1			4	2		1

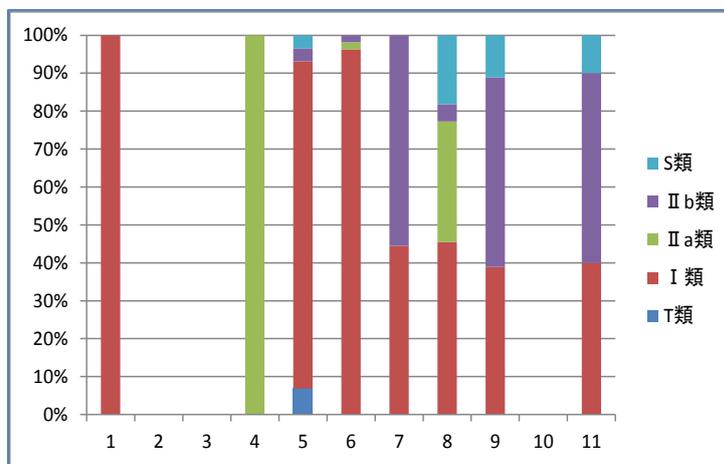


図 3-36 表 3-7 の図化 (割合)

(4) 分布

有銻矛にならない、図 3-21 に基づいて分布を把握する。バイカル地方で 1 点の発見があるが、それは便宜上地域 11 (エニセイ) に含めている。

型式分布

T 類はボルガ川流域の 2 点である I 類はカマ川流域を中心に東西に広く分布する (表 3-7、図 3-36)。一方で II a 類の分布はイリテシ川上中流域に中心がある。II b 類は II a 類よりもさらに東に分布が偏る。S 類はおおよそ II a 類の分布と同じような傾向を示している。

金属成分分布

有銻矛にならない、砒素、錫成分の有無によって型式ごとに比較する (図 3-37-①~⑦)。I 類では錫は東西においてそれほど偏りを見せない。砒素に関しては、カマ川流域より西に多い。I 類以外においては、数量的に少なく、型式同士の偏りの他に地域差を見出すことは困難である。

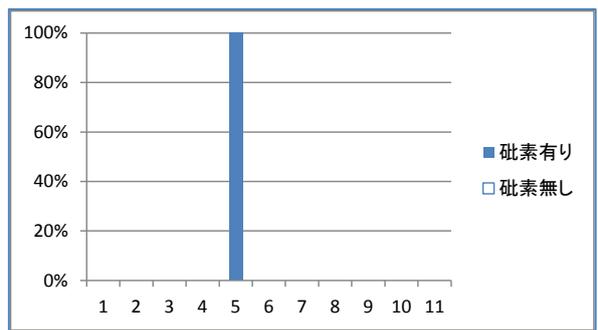
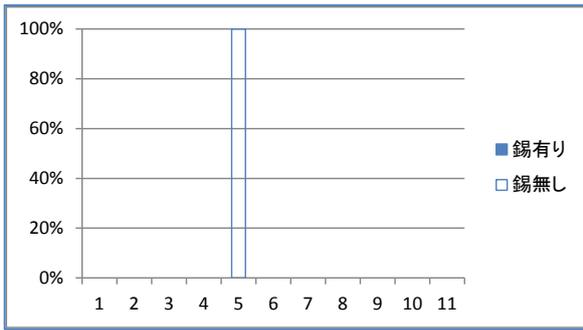


図 3-37-① 型式ごとの成分分布 (T類 左：錫の有無、右：珪素の有無)

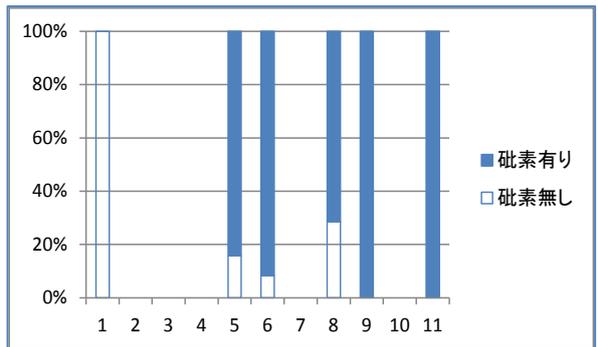
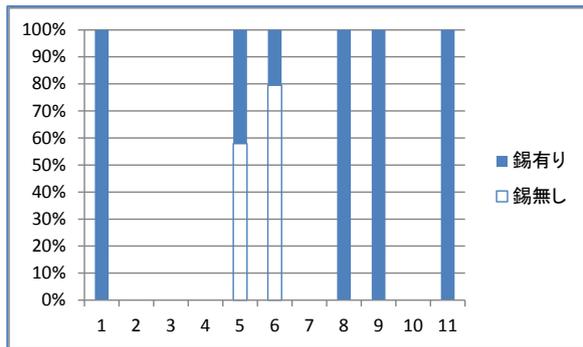


図 3-37-② 型式ごとの成分分布 (I類 左：錫の有無、右：珪素の有無)

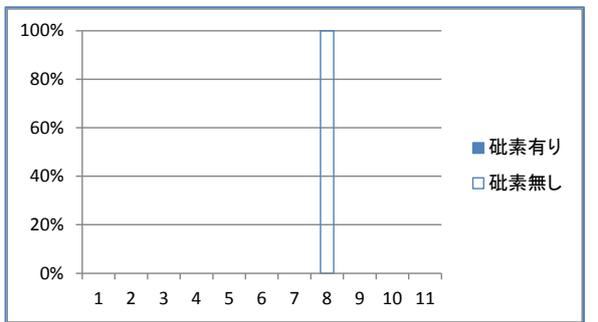
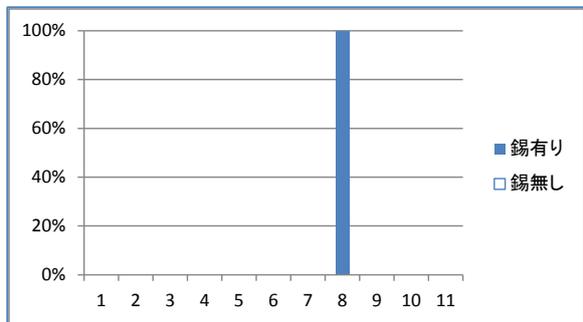


図 3-37-③ 型式ごとの成分分布 (IIa類 左：錫の有無、右：珪素の有無)

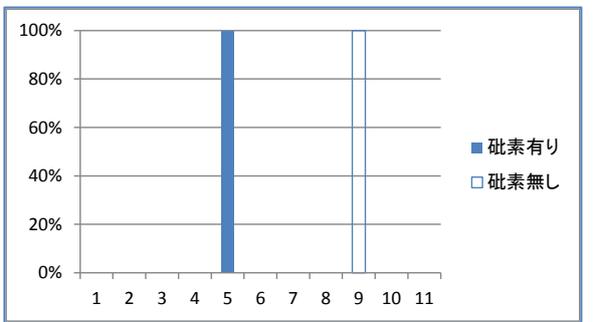
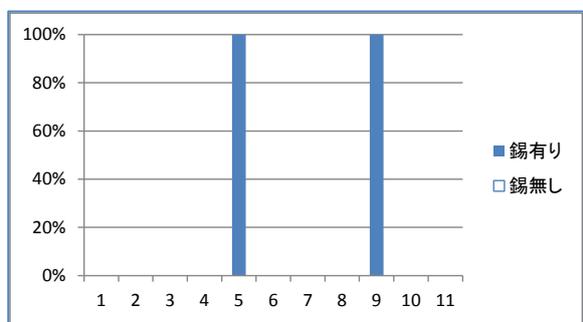


図 3-37-④ 型式ごとの成分分布 (IIb類 左：錫の有無、右：珪素の有無)

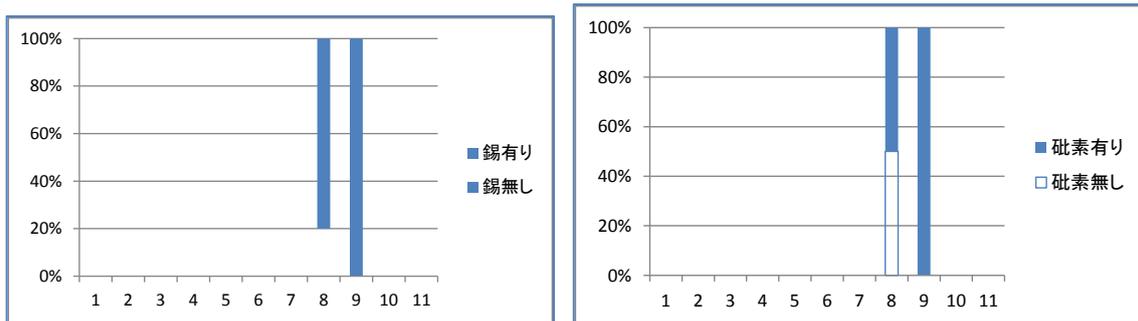


図 3-37-⑤ 型式ごとの成分分布 (S類 左：錫の有無、右：砒素の有無)

(5) 小結

得られた現象を有蓋矛と対比しつつ整理する。有蓋斧 T 類（鍛造）はウラル山脈付近に分布が知られ、このことは鍛造の有蓋矛 T 類と同様である。鑄造の有蓋斧 I 類は無紋のものから、装飾を伴うものまでさまざまな変異が知られ、金属成分に関しても多様であるが、細分は出来ず地域性も顕著でない。有蓋斧 I 類から派生した II a 類はウラル山脈より東部にその分布の中心がある。さらに有蓋斧 II a 類から II b 類が出現するが、この変化は以前までのランダムな変異とは異なり、耳の変化と器上各箇所 の法量の変化による漸移的なものである。また、その分布の中心も有蓋斧 II a 類よりもさらに東にある。このように有蓋斧に関しても、有蓋矛同様、ウラル山脈を中心として東西に幅広く分布する型式（I 類）が存在し、その後それらとは異なった変化傾向を持つ型式（II 類）がより東に偏った分布傾向を示すことが確認された。

第3章 新疆、長城地帯の初期青銅器とユーラシア草原地帯の青銅器文化

近年、モンゴリアの南に位置する長城地帯において、前2千年紀前半に位置づけられる青銅器が一定量発見されている。前2千年紀前半は、中国全体で見ても青銅器の本格的な開始の段階であり、この段階の青銅器は「(中国) 初期青銅器」と呼ばれている。本章では初期青銅器のうち、新疆、長城地帯の青銅器をユーラシア草原地帯の青銅器と比較し、そのあり方を分析することにより、モンゴリアにおける青銅器の開始およびその意義について考える基礎としたい。第1節では新疆、長城地帯における初期青銅器について、ユーラシアの諸青銅器との対比を基礎に分類する。そのうち、特にセイマ・トルビノ青銅器群と対比できるものについては、第2章で得られたデータとの対比を行うことにする(第2節)。さらに、以上の分類単位の分布およびその出土状況を第3節で検討することにする。

第1節 新疆、長城地帯における初期青銅器の分類

(1) 利器

有蓋鬮斧

A類：蓋部に一周の高まりが存在し、身が高まりから続いて出来ているもの(図4-1-1)。

B類：蓋に高まりは存在せず、蓋は長い円柱状である。また、身と反対側に出っ張りがある。

サンプル1点の出っ張りは半環状である(図4-1-2)。

A類は、従来からアンドロノヴォ文化の斧との類似が指摘され(Kuzmina1998、高濱1999)、アンドロノヴォ文化の所産とする意見もある(韓2005)。基本的にはEAMPの所産、あるいはその系譜を引くものと考えられる。蓋内部に綾杉紋を入れるものや、蓋上端に瘤がつくものなどバリエーションはあるが、中国国内資料のみからでは細分は難しい。

B類は次の殷墟期併行に長城地帯からみつかる有蓋斧に近い。これらは、高濱(2000)が「内」のある鬮斧としてシンタシュタ出土品(図5-34)と比較した一群と同様のものと考えられる。高濱が前2千年紀後半(商代併行)の例と多く比較しているように、B類は比較的遅いものであろうと考えられるが、A類からB類への系譜的变化はここに挙げた器物からだけでは想定できない。この系譜関係に関しては次章で触れることにし、ここではB類が後出で、前2千年紀後半(商代併行)まで下る可能性のあることを確認しておく。A、B類のような有蓋鬮斧は武器とは断言できないが、長さが25cm程度の大きいものも存在し、日常の生活用具としての使用には疑問が残る。また、他の器種に比べて造りもやや複雑である。よって、この器種は青銅利器具の中でもやや特殊な精製品として一応区別しておく必要がある。

有蓋斧

A類：上部から垂直方向に蓋が入る斧。最上部の縁には一周の高まりが存在する。上部に耳がつく場合がある(図4-1-3)。

B類：トンネル状蓋斧。全体が長方形を呈する有蓋の斧。蓋は、身から垂直方向に半周する形

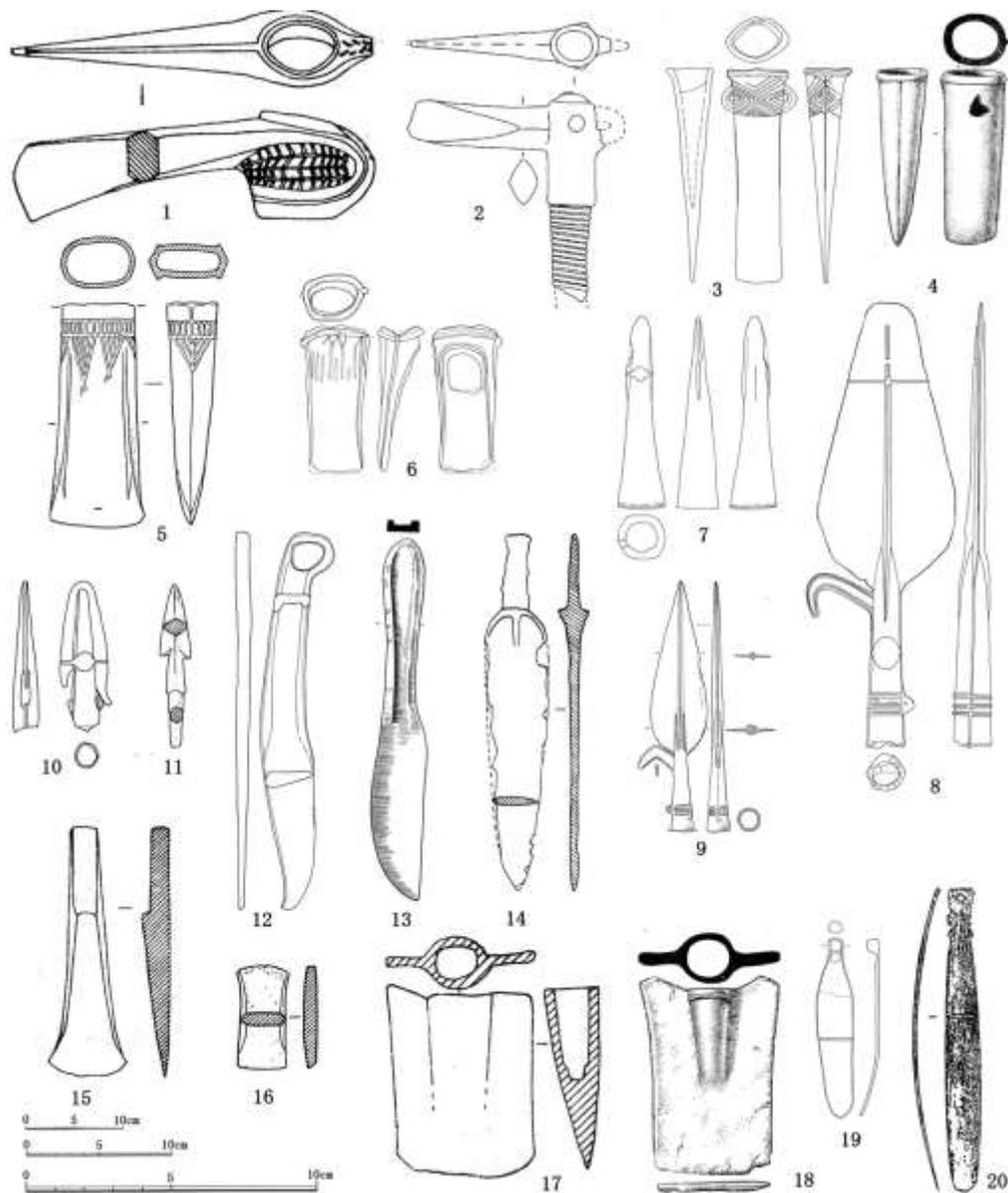


図 4-1 新疆、長城地帯の初期青銅器、骨器と EAMP の青銅器（精製利器、利器）

でつけられ、その上下は開いている（図 4-1-6）。チェルヌィフは EAMP の特徴として有蓋鬮斧を多く挙げているが、有蓋斧に関してはセイマ・トルビノ青銅器群（前章で検討）との関係が強調される（Cherykh 1992）（図 4-1-5）。確かに、有蓋斧はセイマ・トルビノ青銅器群において非常に特徴的な器物であるが、セイマ・トルビノ青銅器群の有蓋斧は前章で指摘したように、身両側のエッジ状の高まりが主要特徴として挙げられる。A 類のなかでは甘肅省火燒溝遺跡出土のサンプルにこの特徴がややみられ興味深い。しかしながら、A 類のような最上部の縁の高まりはセイマ・トルビノ青銅器群における全体的特徴ではない。A 類に類似するものとして、キルギスやタシケントからの出土例が紹介されている（Кузьмина1966、Kuzmina2004）（図 4-1-4）。これらの分布域はチェルヌィフのいう EAMP に相当し、A 類はセイマ・トルビノ青銅器群の有蓋斧より

むしろ EAMP に近いものと考えられる。

B 類は高濱 (2006) による諸地域の例の比較がある。ウラル地方まで類似品が広がることが指摘されており、EAMP にもみられるという。一方では B 類に類似するものに関して、モンゴルなど東方的影響を指摘する意見もある (Волков1967、Новгородова1970) が、現状では起源地の特定は難しい。

矛

I 類：基部では太い脊が先端に向かって細くなるもの (図 4-1-7)。

II 類：細い脊をもち、基部に鉤型のかえりが1つつくもの (図 4-1-8)。

他の器種と同様にそれぞれ A、B 類としたいが、前章の有蓋矛 (セイマ・トルビノ有蓋矛 A、B、C 類) との対比の際に混乱を生じるので、以上のように命名する。II 類は従来からセイマ・トルビノ青銅器群との関係性が説かれてきた (高濱 1999) (図 4-1-9) これに関しては、次節で詳しく検討を行う。I 類は EAMP に同様のものが多く見られる。なお甘粛省火焼溝遺跡出土品 (図 4-1-7) は刃部が非常に短いものである。

鏃

A 類：蓋式の鏃 (図 4-1-10)。

B 類：有茎鏃。茎の先端の断面は円形である (図 4-1-11)。

A 類は、翼の基部にかえりがつくものとつかないものがあるが、今回の資料だけでは細分できるか判断しにくい。蓋式の鏃は EAMP でも見られるものであるが、商代併行以降の長城地帯以北でも多数盛行した。かえりのつくものは、EAMP では顕著でないが、商代併行の陝西省断涇遺跡出土品 (中国社会科学院考古研究所涇渭工作队 1999) ほか、長城地帯で採集品が多く存在する (田広金、郭素新 1986)。かえりのつくものは、スキタイ系の鏃 (Медведская1980) との関連から言っても興味深い。先の有蓋斧などと伴に、草原地帯全体での検討が今後必要であろう。一方 B 類は「円鋌鏃」と呼ばれ、むしろ中国中原に多い型式である。

刀子

A 類：刃柄一鑄の片刃刀子で、両范および単范で製作されたものが存在する (図 4-1-12)。

B 類：刃柄一鑄の両刃の刀子。全体としては後代の剣に似た形態である (図 4-1-14)。

C 類：有茎あるいは、無柄無茎の刀子。従来、削とされていたものも含める。甘粛省火焼溝遺跡では木製の柄部をつけたものが知られる。

A 類の大部分の柄の先端は環状か穿孔されるかになっている。A 類、B 類に類似するものとしては、EAMP の刀子 (図 3-1-13) や、セイマ・トルビノ青銅器群の刀子、剣 (図 2-5) にみられるが、形態上どちらの系譜か判別しがたい。C 類は簡素かつ多様な形態のものが含まれ、比較は難しい。

無蓋斧

A 類：全体が撥形を呈する、無蓋の斧。上部 (刃部と反対側) は1段薄く、茎かと思われる (図

4-1-15)。

B類：全体が長方形あるいは台形の、無蓋の斧（図 4-1-16）。

A類に関してはキルギスからの例（Кузьмина1966）が存在し、鑄型から考えて単范と思われる。チェルヌيوفのいう EAMP の範疇に入る可能性が高い。A類に類似する形態でかつ単范のものが、長城地帯の採集品で知られる。しかしながら、これらの資料は、茎部の段はなく、身中ほとんど上部両側に突起が生じている点が異なり A類とは即断できない。B類は形態が単純で比較が困難である。

鑿

A類：有蓋の鑿。全体に縦に長く、蓋の断面が円形を呈するものが多い（図 2-6-4）。

B類：無蓋の鑿。細長い台形を呈し、断面は長方形のもの。

鍬：幅広の長方形の身の上辺にソケットが付く（図 4-1-17）。

鎌：大部分のものは孔を持っており、単范で鑄られたものが多いと思われる（図 2-6-2）。

斧状ハンマー：全体が直方体を呈し蓋のように中は中空である。報告では錘とされる（図 2-6-3）。

匕：へら状の製品（図 4-1-19）。へら状の骨器は齐家文化の墓地において、被葬者の傍らでしばしば見られ、何らかの関連が予想される（図 4-1-20）。

錐：棒状で、断面は四角形を呈す。

針：全体に細い棒状で先端が尖るもの。

鑿以下の項目に示した各器種において、鑿 B類、錐、針は、形態が比較的単純で EAMP やセイマ・トルビノ青銅器群などとの比較が困難なものである。一方、鑿 A類、鍬、鎌、斧状ハンマーはシャムシデポ（図 2-7）、EAMP に類似したものが存在する。

(2) 装身具

装飾品

装飾品には多様であり、明瞭に識別可能な種類でも 1 個体しかないものが多数ある。そこで、今回は学史上重要な位置を占め、比較的數量が多い 5 種について取り上げる。

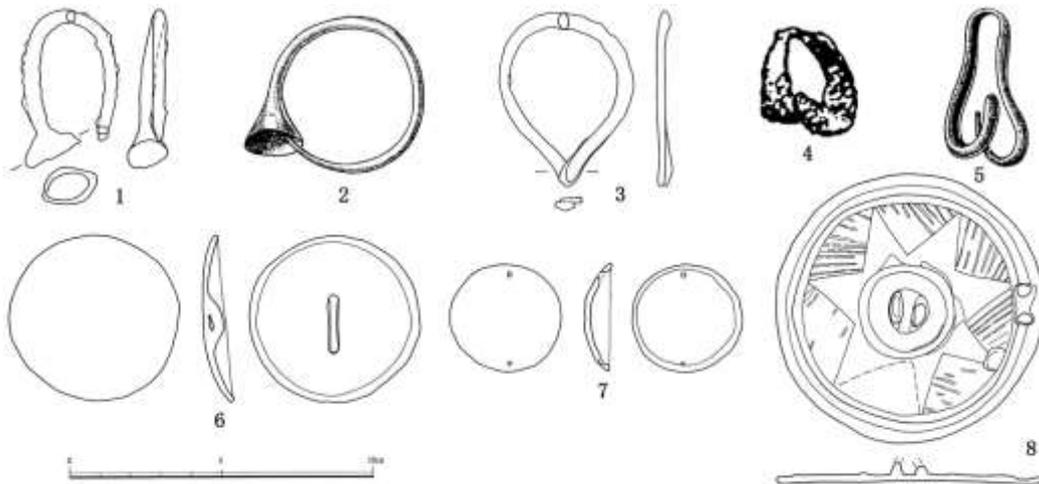


図 4-2 新疆、長城地帯の初期青銅器と EAMP の青銅器（装具）

A 類… 1 端が朝顔形になった環 (図 4-2-1)

B 類… 1 端もしくは両端が扁平になった環 (図 4-2-3)

C 類… 幅広の板を曲げた釧 (図 4-2-4)

D1 類… 扣 (泡) と呼ばれるボタン状の銅製品のうち、裏に鈕がつくもの (図 4-2-6)

D2 類… 扣 (泡) と呼ばれるボタン状の銅製品のうち、縁の 2 箇所穴が開くもの (図 4-2-7)

A 類に関しては、アンドロヴォ文化そのものの所産、またはそれらの変形という指摘が多い (図 4-2-2)。B 類も長城地帯での類似性が、高濱 (2000) により指摘されている。C 類で塔姆ヶ¹雷一号墓地 2 号墓出土のやや小型のものに関しては、アバネサバ (Аванесова1975) の指摘する 8 字形ペンダント (図 4-2-5) に似ていなくもない。D1、D2 類は、EAMP でも見られるが、形態が比較的単純である点は注意が必要である。

鏡

装飾品 D 類との区別し難いものもあるが、装飾品 D 類より大型で、鏡面が比較的平坦かつ背に鈕が付くものとする (図 4-2-8)。シャムシデポに類似品がみられる (Kuzmina 2001)。

(3) 分類結果

以上の結果を他領域との比較の観点から大まかにまとめよう。

以上で記述してきたように、新疆や長城地帯の初期青銅器には、当該地域以西 (北) に主体のある EAMP やセイマ・トルビノ青銅器群といった青銅器群と対比できるものが多く含まれることが明らかとなった。これらの初期青銅器を①群としよう。このうち、有蓋鬩斧 A 類、有蓋斧 B 類、矛 I 類、刀子 A 類、B 類、無蓋斧 A 類、鑿 A 類、斧状ハンマー、装飾品 A 類、C 類、装飾品 D1、D2 類、鏡は、新疆以西の EAMP 中にこれらに類似する青銅器を確認でき、これらを①a 群とする。一方で、矛 II 類はセイマ・トルビノ青銅器群に類似品がみられ、①b 群とする。この器種については、次節で、セイマ・トルビノ青銅器群本体と併せて検討する。有蓋鬩斧 B 類、有蓋斧 A 類、鏃 A 類については、新疆以西にも類似品がみられるが、検討すべき点が多く残るものであり、仮に①c 群としておく。これらは、ユーラシア草原地帯全体で考えた場合、長城地帯を含めた東方に起源をもつ可能性があり、より広範囲での検討および位置づけが今後必要である。

一方で、鏃 B 類は、新疆、長城地帯の東南に位置する中国中原の青銅器に類似品が確認でき、これを②群とする。また、刀子 C 類、無蓋斧 B 類、鑿 B 類、針、錐は形態が単純なため、他地域の青銅器文化との比較が難しく、これを③群としておく。さらに、匕や装飾品 B 類は新疆や長城地帯独特のものとして出ることが出来、④群とする。

これとは別に、①a 群の有蓋鬩斧 B 類や①b 群の矛 II 類は、これら以外の実用向きの利器、装身具とは異なる特異な大きさ、形態を示している。そこで、これらを利器の中でもやや特殊なものとして、精製利器としておく。

¹ 「ヶ」は「乃」の下に「小」を附す字。読みは ga。

第2節 初期青銅器とセイマ・トルビノ青銅器群

(1) 初期青銅器の矛Ⅱ類について

前節で矛Ⅱ類としたものは、第1章で検討したセイマ・トルビノ青銅器群の有銚矛A~C類に

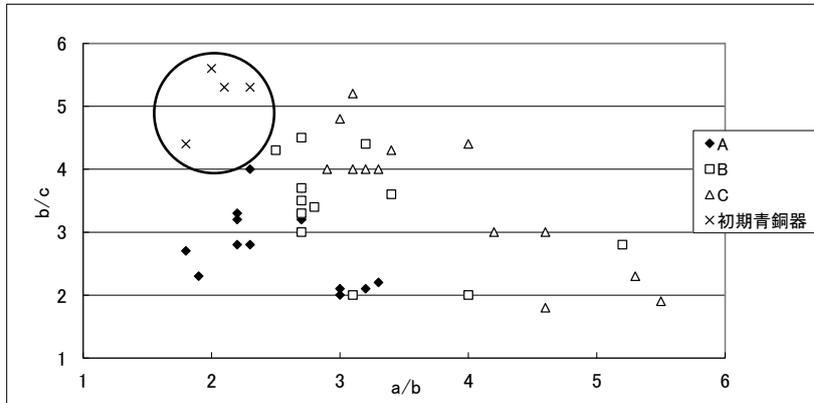


図4-3-① セイマ・トルビノ有銚矛A~C類と初期青銅器矛Ⅱ類の対比
(横 a/b 縦 b/c (値は図3-3による))

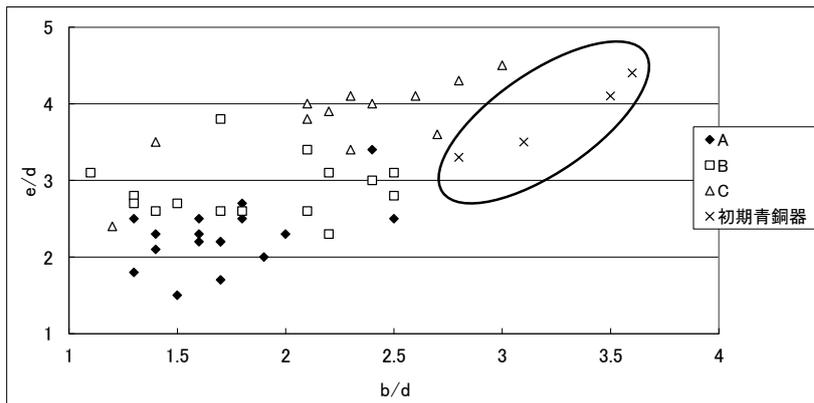


図4-3-② セイマ・トルビノ有銚矛A~C類と初期青銅器有銚矛Ⅱ類の対比
(横 b/d、縦 e/d (値は図3-3による))

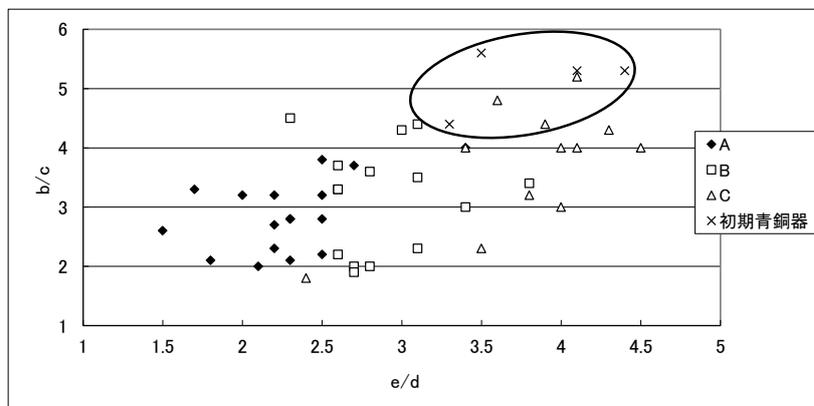


図4-3-③ セイマ・トルビノ有銚矛A~C類と初期青銅器有銚矛Ⅱ類の対比
(横 e/d、縦 b/c (値は図3-3による))

類似したものである。従来指摘されてきた類似点としては、本体基部の鉤状突起や、脊の基部が3つに分化するなどが挙げられる。本節ではこれらについて、各々検討を加える。矛Ⅱ類は4点が知られている。1つは青海省沈那出土品であり(高濱 2000、宮本編 2008)、全長 61.7cm、観察者の報告では銚部に内型がつまった状態であったという(宮本編 2008)。同様の形態の矛は山西省博物館でも知られ、こちらは鉤を失うがその基部が残存している。また、伝陝西省出土品がキセリョフによって紹介されている(高濱 2000)。さらに、新疆、長城地帯からは大分離れるが、河南省下王崗遺跡からも長さ 37cmの似た形態の矛が近年報告された。同一の灰坑から複数件出土したが、年代的には二里头~西周中晩期の可能性があるという(何 2009)。

(2) 初期青銅器矛Ⅱ類とセイマ・トルビノ青銅器群有蓋矛C類

初期青銅器の矛Ⅱ類を、第2章の有蓋三叉矛の型式分類(A、B、C類)に照らし合わせると、値、すなわち身の広さにおいては、セイマ・トルビノ青銅器群のA～C類とはやや異なった傾向が読み取れ、これは初期青銅器の特異性として把握できるであろう。

また、沈那出土の矛はセイマ・トルビノ青銅器群C類に比べてもかなり大型のものであり、内型の存在から言っても、明らかに通常の矛としての機能を失ったものである。さらに、セイマ・トルビノ青銅器群C類と初期青銅器矛Ⅱ類を比較すると、Ⅱ類の矛先は非常に丸くなっている。セイマ・トルビノ青銅器群では出土する際、壁や床に突き刺さって発見される例があることを考慮すれば、この点、初期青銅器では鋭利さまでもが失われているので、この点で両者は異なる。しかしながら、セイマ・トルビノ有蓋矛自体にそもそも大型化する傾向があった。初期青銅器矛Ⅱ類はセイマ・トルビノ有蓋矛C類の形だけの単なる模倣で、中国内で突然大型化したものというよりも、セイマ・トルビノ有蓋矛A～C類が本来有した大型化傾向の延長上にあるものと把握できる。

第3節 初期青銅器の分布

(1) ①a、c、②、③、④群(有蓋矛Ⅱ類以外)の分布

新疆、長城地帯における初期青銅器の分布状況を把握したいが、特異な分布を示す矛Ⅱ類を除いたものについてまず検討したい。資料数が少ないので、ある程度まとまった資料を中心に地理的に近い遺跡は1つにまとめているが、これは便宜上であって土器様式のまとめ(文化)とは関わりがない(表4-1)。青銅器全体を利器、装身具に非常に大まかに区分して分布を示したものが図4-4、4-5であり、各図表の地区は基本的に西から東へ順に並べている。まず、数量での変化であるが、利器では河西回廊附近にピークがきて、そこから東西では減る傾向にある。ただし、西側では塔城附近でまた若干増加する。装身具も同様の傾向にあるが、遼西附近ではまた増えることが読み取れる。次に、精製利器、利器、装身具の割合でみると、大まかには巴里坤附近で装身具の増加

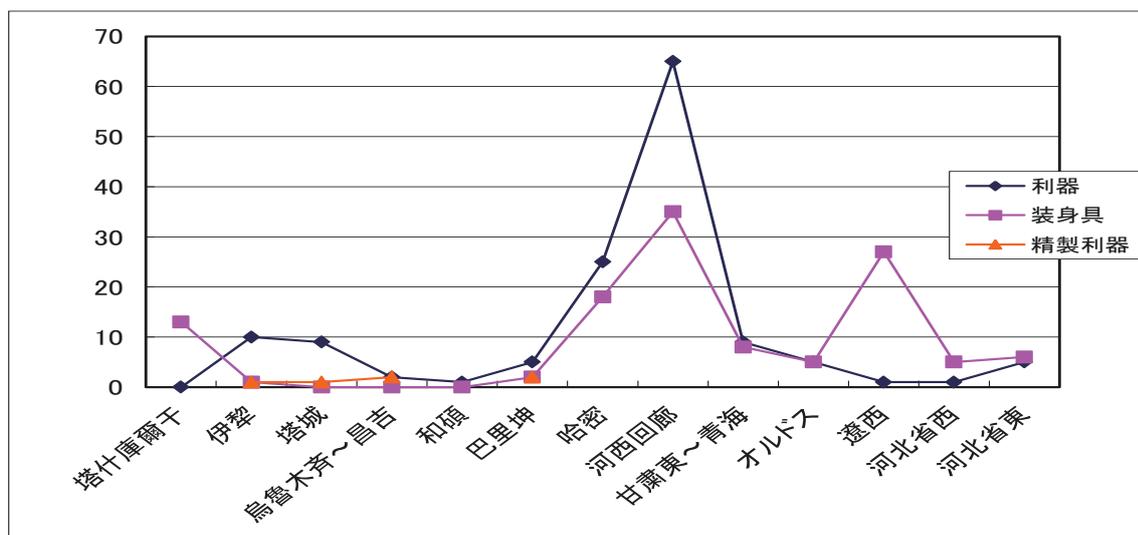


図4-4 各地区における青銅器出土数

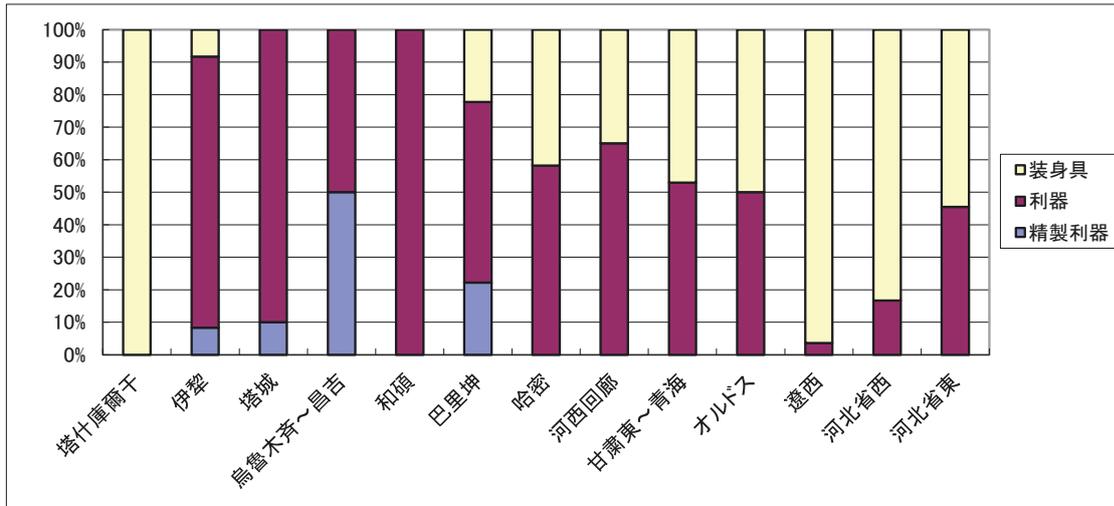


図 4-5 各地区における青銅器出土割合

表 4-1 型式と各地の出土数

型式	形式	群	塔什庫爾干	伊犁	塔城	烏魯木齊~昌吉	和碩	巴里坤	哈密	河西回廊	甘肅東~青海	オルドス	遼西	河北省西	河北省東
有?鬮斧A	精製利器	①a		1	1	2		1							
有?鬮斧B	精製利器	①b						1							
有?斧A	利器	①b					1		1	2	2				
有?斧B	利器	①a			1				1	1					
矛I	利器	①a													
矛II	精製利器	①b									1				
鏃A	利器	①b								5(6)				1	1
鏃B	利器	②										1			1
刀子A	利器	①a		3					13	8	2				
刀子B	利器	①a		1					1						
刀子C	利器	③						2	4	25			1		3
無?斧A	利器	①a			3	1									
無?斧B	利器	③									1	1			
鑿A	利器	①a		2											
鑿B	利器	③		1				1	1						
?	利器	①a			1	1									
鏃	利器	①a		2	4			1	2						
斧状ハンマー	利器	①a		1											
匕	利器	④							1	8	2				
針	利器	③									1				
鏃	利器	③						1	1	14		3			
装飾品A	装具	①a	7							2		1	1	4	5
装飾品B	装具	④							1	11		4	26	1	1
装飾品C	装具	①a	6	1											
装飾品D1	装具	①a						2	6	15					
装飾品D2	装具	③							7	7	6				
鏡	装具	①a							4		2				

傾向が始まる。また、数量のピークよりもむしろ西に精製利器は存在する。以下ではさらに細かく型式分布をみてみよう。

図 4-6 は型式分布を示すかわりに、分類で抽出した①~④ (①b は除く) の単位の分布を見たものである。先ほど大まかに見た傾向がより明瞭に現れ、烏魯木齊地区以西では型式構成の類似度が高く、EAMP の青銅器と比較可能な型式 (①a) が殆どである。さらに、当該領域以西にも類似品がみられるが、検討すべき点が多く残るもの (①c)、あるいは比較的単純な利器 (③) は

東のほうに多い傾向にある。なお、これは利器のみでより明瞭な傾向を示す（図 4-7）。さらに烏魯木齊以西、以東では出土状況（表 4-2）も異なる。烏魯木齊地区以西の青銅器はデポや採集が多いのに対し、巴里坤地区以東では墓地、遺跡の包含層などからの出土が多い。少なくともここでデポ、採集とした状況以外は、基本的に特定の土器文化に属するものと考えられる。以上のことから、烏魯木齊と、和碩、巴里坤の間で境界を引くことにし、これを境界 1 と呼ぶ。

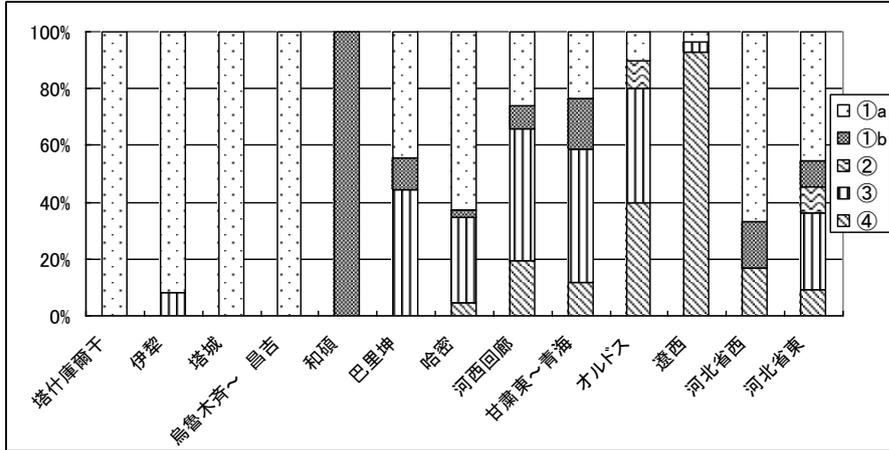


図 4-6 各地区における型式群の割合（全体）

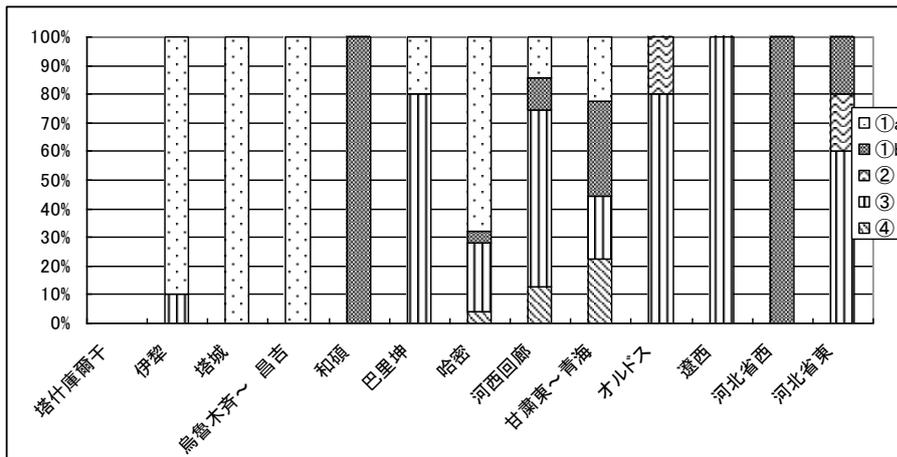


図 4-7 各地区における型式群の割合（利器）

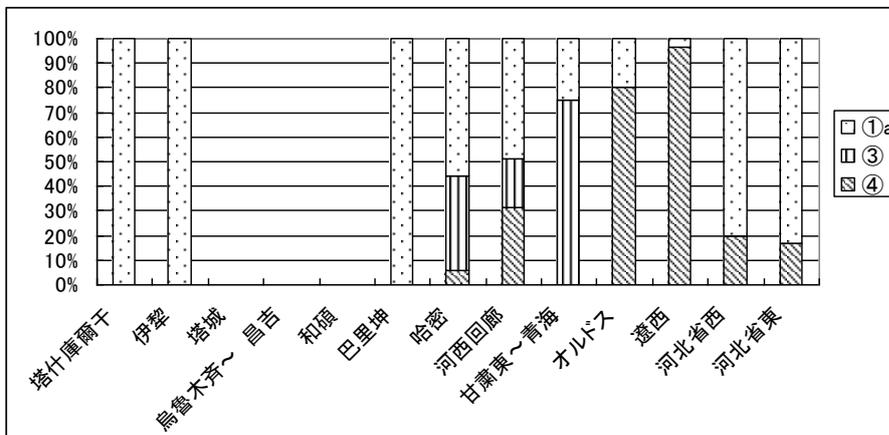


図 4-8 各地区における型式群の割合（装具）

次に境界 1 から東にいくと、オルドス以東で利器の型式がかなり減少するが、一方では中原的な器物である (2) 鏃 B 類が出現し、独自の型式 (4) が増加する傾向にある。装飾品では D 類が顕著でなくなる (図 4-8)。型式構成の変化はそれほど緩慢ではなく、数量での急な減少と一致する。従って甘肅東部～青海と、オルドスの間に境界が引くことが出来、境界 2 と名づける。EAMP 的な器物 (1a) は冀南西で割合的にやや増加するが、これは装具によるものであり、利器によるものではない。数量上では河西走廊を挟む地理勾配が認められたが、主に EAMP との対比による型式からみると両側の内容は著しく異なることが認められた。

なお、これらの差異が現在における各地の調査状況に起因する場合を考え、形態が単純でない①a、①cのみで型式比較を試みたが、そこでも境界は認められた（図 4-9）。

以上で得られた現象を【型式の組み合わせ】、【型式の系譜】、【出土状況】ごとにまとめると以下のようなになる（図 4-10）。

- ・境界 1 以西（塔什庫爾干～烏魯木齊）
 - 【型式の組み合わせ】 精製利器である有銚鬪斧 A 類が、利器や装飾品と併せて存在
 - 【型式の系譜】 それら青銅器の大部分は EAMP に類似品がみられる（①a）
 - 【出土状況】 デポや単独の発見が多いが、墓葬も存在
- ・境界 1 以東、境界 2 以西（和碩、巴里坤～甘肅東部、青海）
 - 【型式の組み合わせ】 精製利器は少なくなる一方で、単純な工具や装飾品は非常に多い
 - 【型式の系譜】 工具、装飾品では①a が減るが、EAMP と異なる①c、③、④が出現
 - 【出土状況】 ほぼ全てが特定の土器文化に帰属する遺構や遺跡で出土
- ・境界 2 以東（オルドス～河北省東）
 - 【型式の組み合わせ】 精製利器はなく、利器の数量も非常に減るが、装飾品は非常に増える。
 - 【型式の系譜】 EAMP と比較できる①a は装飾品 A 類が大部分を占める
中原的な器物（②）が出現
 - 【出土状況】 ほぼ全てが特定の土器文化に帰属する遺構や遺跡で出土

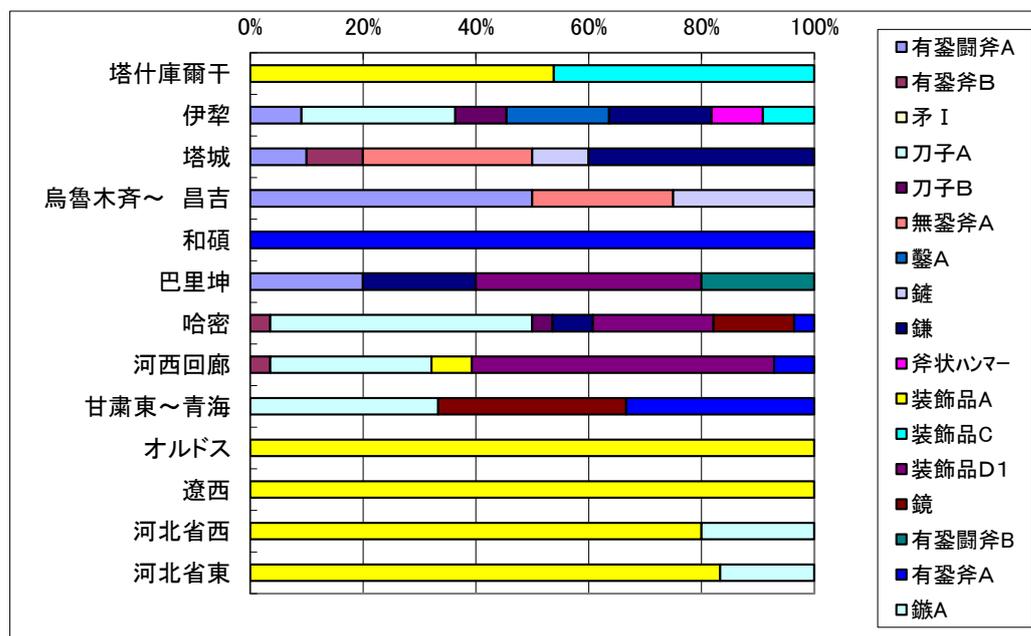


図 4-9 各地区の型式群①a、①cにおける型式の割合

(2) 矛Ⅱ類の分布

矛Ⅱ類の出土地は、青海省、陝西省、山西省、河南省であり、うち 2 点は明確な出土地は不明であるが、本節（1）で検討した分布地である長城地帯よりも南に位置している。矛Ⅱ類の出土地況であるが、河南省下王崗遺跡では灰坑から矛複数が出土し、通常の墓葬における副葬品では

ない。また、青海省沈那出土品のコンテクストの詳細は不明であるが単独で出土しているという。本節（1）で検討したような甘肅、内蒙古の初期青銅器は、主に墓葬か集落の包含層出土であり、矛Ⅱ類の状況とは異なることを確認しておこう

表 4-2 各地区の出土状況における青銅器出土個数の比較

	デポ	採集	墓葬	灰坑	住居	包含層
塔什庫爾干			13			
伊犁	6	5	1			
塔城		10				
烏魯木齊～ 昌吉		4				
和碩						1
巴里坤		8	1			
哈密		1	42			
河西回廊			97			2
甘肅東～ 青海		10				7
オルドス			3	2		5
遼西			26			2
河北省西			3	2		1
河北省東			3	1	2	5



図 4-10 初期青銅器の分布に見られる各境界の位置

第4章 カラスク期における青銅器様式の展開

前2千年紀後半のモンゴリアを中心とする地域では、前段階（初期青銅器）に比して多量の青銅器が出現する。それらには獣の頭を象ったものなど、形態が複雑で、紋様も非常に精緻なものが含まれ、モンゴリア全体で広く見つかっている。一方で、ミヌシンスクを中心とする南シベリアではオクネフ、アンドロノヴォ文化に続くカラスク文化がこの段階に成立すると言われ（Вадецкая1986）、この文化に属すると言われる青銅器は、採集品を含めると膨大な量に達する。このように、前2千年紀後半のユーラシア草原地帯東部においては、前段階に比して豊かな青銅器文化が突然起こってきた印象を受けるのである。そして、これらの青銅器の起源に関して、従来、南シベリアからモンゴリアへという流れを指摘する説（A説）とその逆方向の影響を指摘する考え（B説）の二つがあることは、第1章で詳しく述べたとおりである。本章ではまず、当該段階を代表する遺物である剣と刀子の分析を行うことにより、第1章で述べたA、B説の解決を目指したい。その際、様式論を用いて分析を進めることにする。第1節、第2節ではそれぞれ青銅剣、刀子について、製作技法に注目しつつ、分類、編年、分布の検討を行う。刀子については従来得られている金属分析結果も加味して分析を行う。その上で両器種の併行関係を明確にし、様式の設定を行う（第3節）。さらに第4節においては他の若干の器種の動態を把握することで、既に得られた青銅器様式の動態との比較、および当該段階の青銅器の起源について考察する基礎としたい。

第1節 剣の検討

（1）分類

形式分類

形式分類のために使用する属性は4つ（柄頭形態、柄断面、柄形態、柄頭下の小環）である。ここでの形式分類に相当するものとして、学史上の大別分類があり、これらの属性はそこで重要視されてきたものである。ここでは、高濱（1983）の分類を中心に従来見出された属性の変異はあまり変更せず、その組み合わせを検討し、形式としての妥当性を検証することに重点を置く。

属性のうち柄構造と柄頭形態はかなりの変異が知られる。そこで、煩雑さを回避するため、まず変異のうち個体数が多いもの（主要変異）で形式を見出すことにする。柄頭形態の主要変異には、傘付き鈴、傘なし鈴、突出した目鼻の獣頭、キノコ形、環、広がった棒状、柄頭なし、がある（図5-1）。柄の構造における主要変異には、柄断面楕円形（以下、楕円柄）、柄断面I字形もしくは水平方向のラインが多数入る柄（以下、I字柄）、ブリッジをもつ断面C字形柄（以下、C字柄）、全体的に平らな柄（以下、扁平柄）、がある（図5-2）。柄形態の変異は、真直ぐな柄（以下、直柄）、および曲がった柄（以下、曲柄）である。柄頭下の小環の変異は、柄頭の下に独立した小環、柄頭の一部と化した小環、小環なしである（図5-3）。

属性間の相関は表5-1に示しており、表中の「その他」はサンプルの少ない（1または2個体）ものである。C字柄はキノコ形と主に相関し、楕円柄は主に傘なし鈴や突出した目鼻の獣頭と相

関する。そこで、学史に鑑み、前者を B1 類、後者を A2 類とする。さらに、大部分の I 字柄は傘なし鈴と対応し A2 類に近いものであるが、これらは柄頭の他の変異は殆どもないことで、A2 類とは区別可能であり、A1 類とする。同様に、扁平柄は柄断面 C 字形の B1 類に近いが、キノコ形以外の柄頭を多く有することで B1 類とは区別でき、B2 類とする。これらは他の属性においても大まかには相関が得られる。大部分の A1 類と A2 類は曲柄と、柄頭の下に独立した小環を持つ。一方、B1 類と B2 類は直柄で小環はない (表 5-2、5-3)。



図 5-1 柄頭形態の主要変異

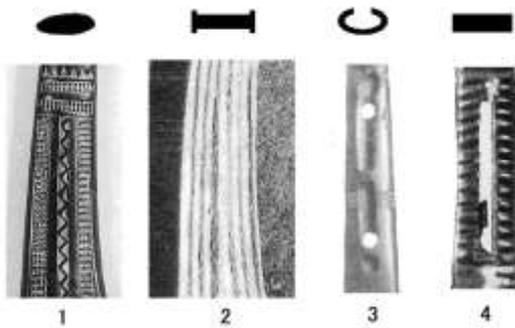


図 5-2 柄の構造の主要変異

1 : 楕円柄、2 : I 字柄、3 : C 字柄、4 : 扁平柄



図 5-3 柄頭下の小環の変異

1 : 柄頭の下に独立した小環
2 : 柄頭の一部と化した小環

表 5-1 柄構造と柄頭形態の相関

	傘付き鈴	傘なし鈴	突出した目鼻の獣頭	キノコ形	環	広がった棒状	柄頭なし	その他, 不明	形式
楕円柄	6	7	1	1				1	A2類
I字柄	11	2			2			1	A1類
C字柄		6		17	3	1	1	7	B1類
扁平柄		1		2	3	2	2	5	B2類
その他, 不明		1		3	2			2	

表 5-2 柄形態と形式の相関

	A1	A2	B1	B2
直柄		2	37	15
曲柄	14	24	1	1

表 5-3 柄頭下の小環と形式の相関

	A1類	A2類	B1類	B2類
小環なし	2	9	34	16
柄頭の下に独立した小環	12	14	2	
柄頭の一部と化した小環		3		

形式分類は以下のような結果となった。

A1 類 : 柄断面 I 字柄のもの (図 5-4-1) 傘付き鈴が柄頭に付されるものが多い。

A2 類 : 柄断面楕円柄のもの (図 5-4-2) 柄頭には鈴の他、獣頭がつくものも多く、装飾紋様は緻密である。

B1 類 : 柄断面 C 字柄のもの (図 5-4-3) 柄頭には傘がつくものが多い。

B2 類 : 柄断面扁平柄のもの (図 5-4-4)

A1、A2 類と B1、B2 類の差異は、曲柄剣とカラスク式短剣の差にほぼ相当する。このように、高濱（1983）による4つの型式¹が属性間の対比からいっても妥当であることが明らかとなった。

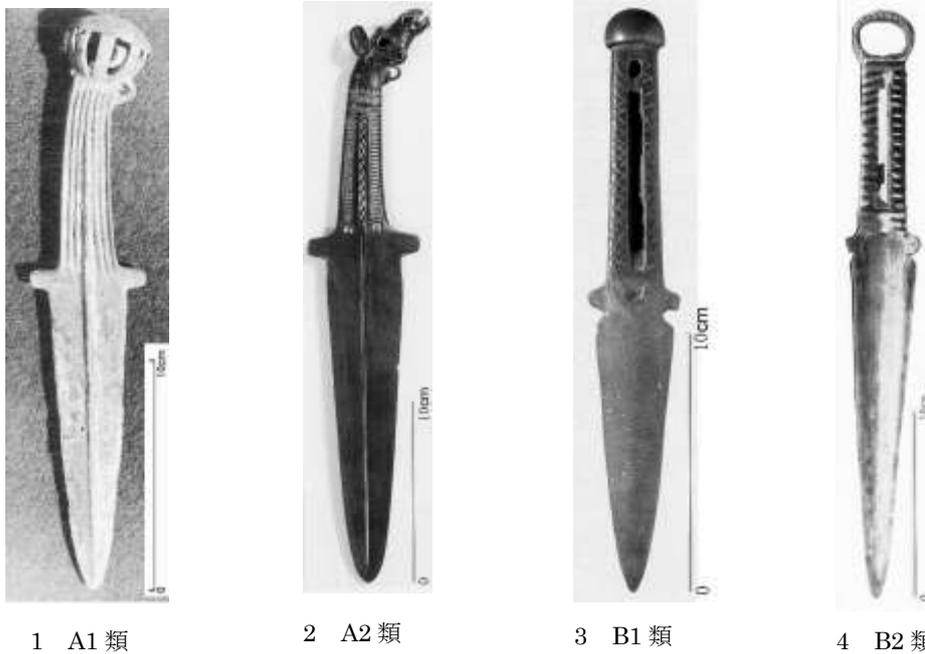


図 5-4 剣における諸形式の例

上記表中においても諸形式は完全に排他的というわけではなく、これらの形式はかなり緩やかなものである。また、ごく僅かながら、柄断面のみでは判別し難い資料及び、柄断面の主要変異以外のもの（図 5-5）がある。それらの形式帰属について以下若干検討する。

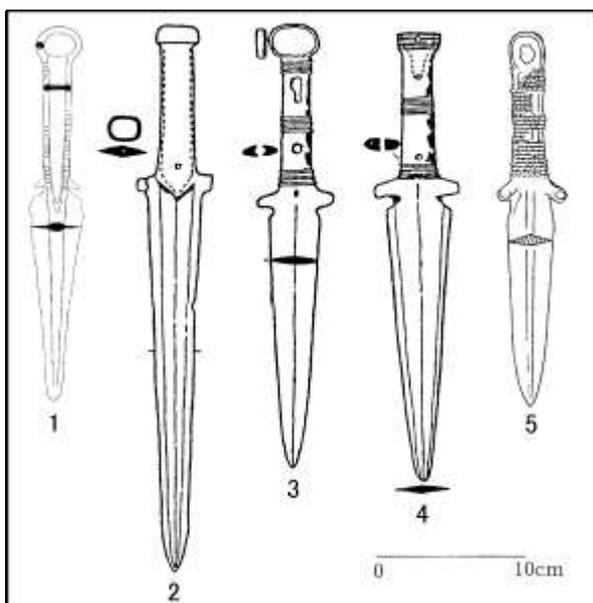


図 5-5 柄断面の主要変異以外の剣



図 5-6 朱開溝遺跡出土剣と対比可能な剣
(縮尺不明)

¹ 本論の形式名も高濱のものに対応している。

A1類に含めたもののうち、図5-5-1は直柄で小環がなく、A1類に含めるには躊躇されるものである。このような太い脊形態、および切れ込み状の鏢はB1、B2類に特徴的なものである。本製品は柄の両端が立ち上がっていることをのぞいては扁平柄のB2類とほぼ同じであり、これに帰属させることにする。次に、柄断面の主要変異以外のものであるが、図5-5-2は直柄で小環がなく、A1、A2類よりB1、B2類に近い。B1類、B2類のどちらに属するかを決める決定素は持っていないが、柄は小さいスリットや穴を持つ管状柄であるのでB1類の柄にやや近く、B1類に含めておく。図5-5-3、5-5-4は直柄で小環がない点では上と同じくB1、B2類に近いが、柄は中空でない。それ以上の帰属は難しいが、ここではB1類にしておく。断面の形態が知られない資料はここでは取り扱っていないが、朱開溝遺跡出土の資料(図5-5-5)は学史上重要であるので一言しておく。この資料は公開された図だけでは柄の構造に不明な点が多く、分類は困難である。報告書の図面では剣身の断面は菱形であるが、中央に直線が走っているように見える。筆者が内蒙古博物院でガラス越しに実見したところ、うっすらと脊が確認された。柄には紐が巡っており、観察は難しかったが、柄の中央に脊から連続するような直線がみられた。柄まで連続した脊はA1、A2類に全てではないが、見られる特徴である。なお、本資料は柄が扁平に近く、環柄頭を持つ点では、ターナー所蔵品(江上、水野1935)(図5-6)に近く、A1類とする。なお、本資料はその切れ込みの入る鏢の形から、カラスク式短剣(すなわち本論のB1、B2類)との近さが従来指摘されてきた。しかし、形式上でもB1、2類とは異なる。さらに以下で検討するようにこの種の鏢はカラスク式短剣の早いものに特徴的ではない。

型式分類 (B1類)

A1類の多くのサンプルは見出される殆どの属性(鏢形態、脊形態、柄頭)変異でほぼ完全に一致する。A2類は非常に多くの変異が認められるが、どの属性も関連しないことが知られた。従って、A1、A2類はそれぞれ一つの型式とし、型式分類はB1、B2類にのみ行う。

カラスク式短剣(B1、B2類)の時間的変遷を示す属性としては、ノヴゴロドヴァによる鏢部の発達への指摘があり、ある程度有効と考えられる。しかしながら、新たな変異も見出せ、明確に変遷を示す為、以下のように新たに属性を抽出する。

図5-7~5-11はB1類各属性の変異とその変化の方向性を示したものである。刃の基部形態(図5-7)には、スムーズにカーブするもの「あ」と、角をもつもの「い」がある。後者はカラスク文化に後続するタガール文化の剣に多く見られ、カーブから角を持つものへの変化が想定される(あ→い)。鏢形態(図5-8)には四変異がある。1:独立して突出した鏢を形成しないもの。2:刃の基部に小さな切れ込みをいれることで鏢を形成するもの。3-1:刃の基部に大きく切込みが入り、明瞭に鏢を形成するもの。3-2:3-1と同じではあるが、鏢部が円柱状になるもの。3-1や3-2はタガール文化や夏家店上層文化に見られ、1から3-1へは鏢の飛び出しが明瞭になる形での変化、1から3-2へは鏢自身の形態の変化が想定される。ただし、3-2はミスシンスクには稀であり、この変異は全ての場所で起らなかった可能性がある。脊形態(図5-9)には3つの変異があり、A:細く真直ぐな脊。B:脊なし。身部の断面はレンズ状になる。C:刃の基部では太いが、先端に向かってだんだん細くなる脊、がみられる。脊形態Bはタガール文化の剣にみられ、

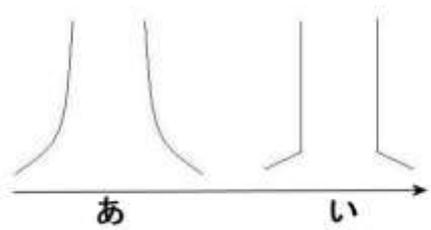


図 5-7 B1 類における刃の基部形態の変異

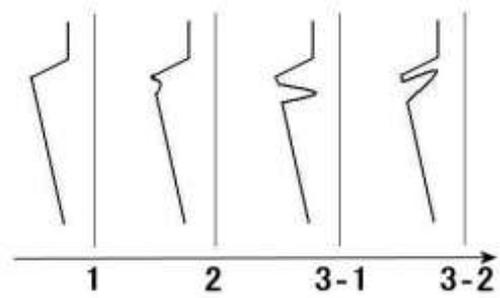


図 5-8 B1 類における鏢形態の変異

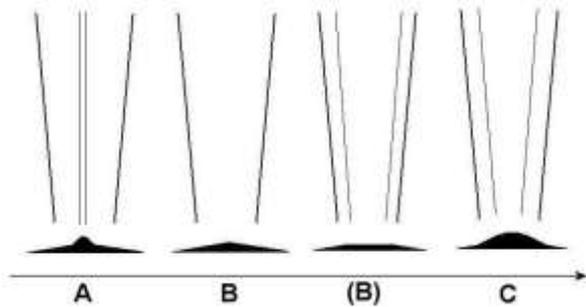


図 5-9 B1 類における脊形態の変異（下は上半分の断面）

(B) は脊形態 B のうちよく研がれたもの（図 5-10 参照）



図 5-11 B1 類における柄断面の変異（上の細線はブリッジ）



図 5-10 図 5-9 (B) の例

表 5-4 B1 類における柄断面（縦）、脊形態（横）の相関（*型式設定の主要属性）

表 5-5 B1 類における鏢形態（縦）、脊形態（横）の相関

表 5-6 B1 類における鏢形態（縦）、柄断面（横）の相関

表 5-7 B1 類における刃の基部形態（縦）、柄断面（横）の相関

表 5-4

表 5-5

表 5-6

表 5-7

	A	B	C
ア	3		
イ	2	4	
ウ	1	14	10
エ		3	1

	A	B	C
1	2	1	1
2	3	3	
3-1	1	17	5
3-2		1	5

	ア	イ	ウ	エ
1	2	1	1	
2	1	2	2	1
3-1		3	17	3
3-2			5	1

	ア	イ	ウ	エ
あ	2	3		
い	1	3	25	4

脊が消失する形での A から B への変化が想定できる。B を持つ例のなかには、刃部が顕著に研がれ、C に非常に近い形態のものがある(図 5-10)。C は夏家店上層文化に見られ、B から C の発生が想定可能である。しかし、C はミヌシンスク盆地では非常に稀であるので、B から C の変化は、鏢 3-2 同様全ての場所で起ったわけではない可能性がある。柄断面(図 5-11)には4つの変異がある。ア：柄両端が立ち上がることにより、コ字形を形成するもの、イ：コ字形であるが、比

較的厚いもの。大きな溝が中央に走る形態ともいえる、ウ：C 字形。柄は中空であり、縦長の大きな溝を持つもの、エ：中空または円形、柄全体におよぶ溝は入らないもの、である。エはカラスク文化に後続するタガール文化の剣にしばしば見られる。アからウへの変化が、溝が狭くなり器壁が丸みを帯びる方向で想定できる。さらにウからエは溝が消失し中空になり、さらに柄が実柄になる変化である。エは二分することが可能であるが、数量的に少ない為まとめておく。

表 5-4 から 5-7 に示されるように、これらの属性は大まかには相関し、上記諸属性で想定した変化の正しさを示すものである。一方で、鏝形態 3-1、3-2 と柄断面ウ、エおよび脊 B、C はそれほど相関しない(表 5-5、5-6)。このことは、上で想定したように、両属性におけるある種の変異が全ての場所で起ったわけではないことを示すと考えられる。型式はよりよく相関する脊形態と柄断面により(主に表 5-4) 設定する。変化の方向は B1a 類→ B1b 類→B1c 類、B1c'類が考えられる²。

B1a 類：柄断面アまたはイのもの、および柄断面ウかつ脊 A のもの(および…以下の資料(1点)は柄断面 3 のなかでも 2 に近いもの)

B1b 類：柄断面ウかつ脊 B のもの

B1c 類：柄断面エかつ脊 B のもの

B1c'類：柄断面ウかつ脊 C のもの、および柄断面エかつ脊 C のもの

型式分類 (B2 類)

B2 類の型式分類のための属性変異は B1 類分類時のものと共通するものが多い。刃の基部の形態(図 5-7) および脊形態(図 5-9) がそれぞれあり、表 5-8~5-10 には B1 類同様の変異を使用している。ここでは、鏝形態のみあらたに区分する。鏝形態には 4 つの変異がある(図 5-12)。1：刃の基部から明瞭に突出した鏝。2：刃の基

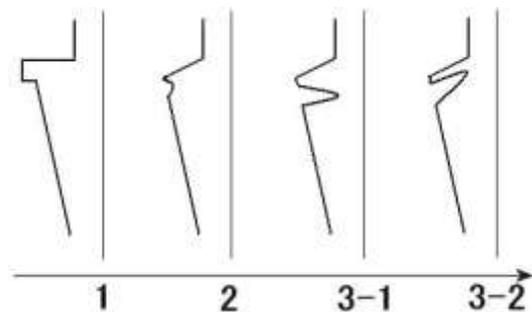


図 5-12 B2 類における鏝形態の変異

部に小さな切れ込みをいれることで鏝を形成するもの。3-1：刃の基部に大きく切込みが入り、明瞭に鏝を形成するもの。3-2：3-1 と同じではあるが、鏝部が円柱状になるもの。3-1 や 3-2 は当該時期に後続するタガール文化や夏家店上層文化に見られるので、1 から 3-1 へは鏝の飛び出しが明瞭になる形での変化、1 から 3-2 へは鏝自身の形態の変化が想定される。

これらの属性はおおまかには相関し(表 5-8~5-10)、上記想定の正しさを示すものと考えられる。よりよく相関した鏝形態と脊形態により以下のように型式を設定する。変化の方向は B2a 類→B2b 類→B2c 類である。

² 2009 年の論考においては、形式(組列)の単位として類(A 類、B 類)を用い、型式(組列内細分)の単位として式(B(類) 1a 式)を用いた。形式と型式を異なる単位として階層的に捉える方向は本稿でも同様であるが、煩雑になるので以下では全ての単位に「類」を付すことにする。

B2a 類：脊 A かつ鏢形態 1 または 2 のもの

B2b 類：脊 B かつ鏢形態 2 または 3-1 のもの

B2c 類：脊 C かつ鏢形態 3-1 または 3-2 のもの

表 5-8 B2 類における鏢形態（縦）、脊形態（横）の相関

表 5-9 B2 類における鏢形態（縦）、刃の基部形態（横）の相関

表 5-10 B2 類における刃の基部形態（縦）、脊形態（横）の相関

表 5-8

	A	B	C
1	2		
2	5	1	
3-1		5	1
3-2			3

表 5-9

	あ	い
1	2	
2	4	2
3-1		6
3-2		3

表 5-10

	A	B	C
あ	5	1	
い	2	5	4

(2) 編年と形式間関係

各型式の年代

中原系の彝器や武器などの共伴により、年代が明らかなものを示す。

1) A1 類

商代末期併行。山西省石楼県曹家垣墓葬にて彝器を伴い出土。

2) A2 類

商代末期併行。陝西省甘泉県下寺湾墓葬にて彝器を伴い出土。さらに、A2 類は西周早期～中期に位置づけられる北京市昌平白浮墓葬からも出土しているが、その形態は非常にイレギュラーなものであり、A2 類の衰微を示すと考えられる。

3) B1a 類

西周早期併行。河北省小河南窖蔵にて彝器を伴い出土。

4) B1b 類

西周早期～中期併行。北京市昌平白浮墓葬にて彝器を伴い出土。さらに、寺窪文化に属する文化甘肅省合水県九站遺跡の墓葬から出土例がある。寺窪文化はおおよそ西周に併行すると考えられており、ここからもおおよその年代が判る。

5) B1c' 類

西周早期～中期併行。北京市昌平白浮墓葬にて彝器を伴い出土。

6) B2c 類

西周併行の可能性。寺窪文化に属すると考えられるものが甘肅省で出土。

資料不足の点は否めないが、以上の年代は、各型式分類で示された組列と矛盾するものではない。

形式間関係

ここでは、とくに各型式の折衷的要素をもつ資料に注目しつつ各形式の関係を求める。これら

折衷的資料は形式分類の際、便宜的にある形式に含めておいたものである。例えば、A2 類の多くは突出した目鼻の獣頭柄頭を持つ。しかし、1 例が B1 類に特有のキノコ形柄頭を持つ。分類を簡潔にする為、この資料は A2 類に含めておいたが、A2、B1 類の折衷形として評価できるものである。以下ではこれら折衷形の偏りに注目して議論を進める。

1) A1、A2 類と B1 類の関係

前の年代の検討により、B1 類は A1、A2 類よりも後出であることが知られる。仮に両者に系譜関係があるとすれば、B1 類の最早の型式 (B1a 類) に A1、A2 類との共通性があることが必要である。B1a 類の多くは脊 A を持っており、この脊は A1、A2 類に特有であるが、B1 類で比較的早い B1b 類以降にはない (表 5-14)。また、B1a 類の幾つかは曲柄で、柄頭下に小環を伴うものもあり、特徴を A1、A2 類と共有する (表 5-12、5-13)。刃の基部の形態「あ」は B1 類では B1a 類に特有のものであるが、この部分が類似するものは A1 類でなく A2 類に存在する。また、B1a 式には柄に波状の文様を持つものがあり、それは A2 類の柄模様と共通する。以上のことから、B1 類は A2 類をかなり改変して生じたものである可能性が高い。両形式は系譜関係を持つが、一形式内の型式間関係 (ex. B1a→B1b 類) のように、すべての A2 類が B1 類に変化したわけではない。B1 類の最も早いものが A2 類と密接な関係を持っていたことを確認できると同時に、両形式には型式的な断絶も見られるのである。

表 5-11 型式 (縦) と柄頭形態 (横) の相関

	傘付き鈴	傘なし鈴	突出した目鼻の獣頭	キノコ形	環	広がった棒状	柄頭なし	その他
A1 類	11	2			1			
A2 類	6	7	11	1				1
B1a 類		2		5		1	1	
B1b 類		1		8	3			2
B1c 類				1	1			1
B1c' 類		3		3				5
B2a 類					1	2	2	2
B2b 類				2	2	2		
B2c 類		1			1			1

2) A1、A2 類と B2 類の関係

系譜関係の有無を先と同様の論法で示す。B2 類のうち最も早い B2a 式は脊 A をもつ。また、その多くが刃の基部の形態 あ、および鏢形態 1 を持つ。これらの特徴は A1、A2 類に共通し、なかでも刃の基部の形態からいえば、A2 類との共通性が高い。従って、B2 類も A2 類をかなり改変して生じた可能性が高い。

3) A1 類と A2 類の関係

A1 類と A2 類の折衷形は、A2 類のうち傘付き鈴柄頭をもつものである。しかしながら、A1、A2 類間に時間的な差異を想定できる属性はなく、これら折衷形が派生によるものかどうか不明である。

4) B1 類と B2 類の関係

型式変化上、B1 類と B2 類は非常に類似した形態的変遷 (脊、鏢形態) を辿ることが知られた。形態的特徴に基づくと、B1a 類は B2a 類に、B1b 類は B2b 類に、B1c 類は B2c 類に相当する。

つまり、B1 類と B2 類は柄断面および柄頭で区分されるが、各型式において共通する特徴が見られ、両者は時期を通じて互いに交渉があったことが知られる。

表 5-12 型式（縦）と柄形態（横）の相関

表 5-13 型式（縦）と柄頭下の小環（横）の相関表

表 5-14 型式（縦）と脊形態（横）の相関

表 5-12

	曲柄	直柄
A1類	14	
A2類	24	2
B1a類	1	9
B1b類		14
B1c類		3
B1c'類		11
B2a類	1	6
B2b類		6
B2c類		3

表 5-13

	小環なし	柄頭の下に独立した小環	柄頭の一部と化した小環
A1類	2	12	
A2類	9	14	3
B1a類	7	2	
B1b類	14		
B1c類	3		
B1c'類	11		
B2a類	7		
B2b類	6		
B2c類	3		

表 5-14

	A	B	C
A1類	13	1	
A2類	25	1	
B1a類	6	4	
B1b類		14	
B1c類		3	
B1c'類			11
B2a類	7		
B2b類		6	
B2c類			3



図 5-13 各型式と期の設定（実線は系譜関係を示し、点線は派生関係を示す。）

期の設定

分布を検討するために、諸型式の共時性を把握する必要がある。上記の検討から、商代晚期併行においてA1類はA2類とほぼ同時であることがわかる。そして、諸特徴を共有するB1c類とB1c'類とB2c類は後続するタガール文化や夏家店上層文化の剣の要素を持ち、諸型式の終末段階と位置づけられる。B1、B2類のほかの型式に関して

は一括資料の不足により位置づけが難しいが、A1、A2類と、帰結段階であるB1c、B1c'、B2c類の中間段階として扱うこととする。一般的にいて、型式の変化は緩慢であり、各期には主要型式のほか、前後の型式も少数ながら含まれることが予想される。それは本論の資料においても例外ではなく、昌平白浮墓葬におけるA2類が、B1、B2類段階におけるA2類の存続例として挙げられる。しかしながら、以下では資料数および一括資料数の都合上、純粹に主要型式のみで構

成される期を便宜的に設定している（図 5-13）。

剣第 1 期：A1、A2 類。おおよそ商代に併行する（前 2 千年紀後半）

剣第 2 期：B1a、B1b、B2a、B2b 類。おおよそ西周前期に併行する（前 2 千年末から前 1 千年初頭）

剣第 3 期：B1c、B1c'、B2c 類。おおよそ西周中期に併行する。（前 9、8 世紀頃）

（3）分布

今回分析する資料の多くは、正確な出土地点が知られない。本来ならば、ポイントで分布を示すべきであるが、上の理由より便宜的に図のように 7 地域を設定して分布を検討する（図 5-14）。表 5-15 は各地域における型式の個体数を示し、図 5-15 は出土数の多い主要地域（ミヌシンスク、クラスノヤルスク、長城地帯）における型式の割合を示したものである。以下、期ごとに検討する。

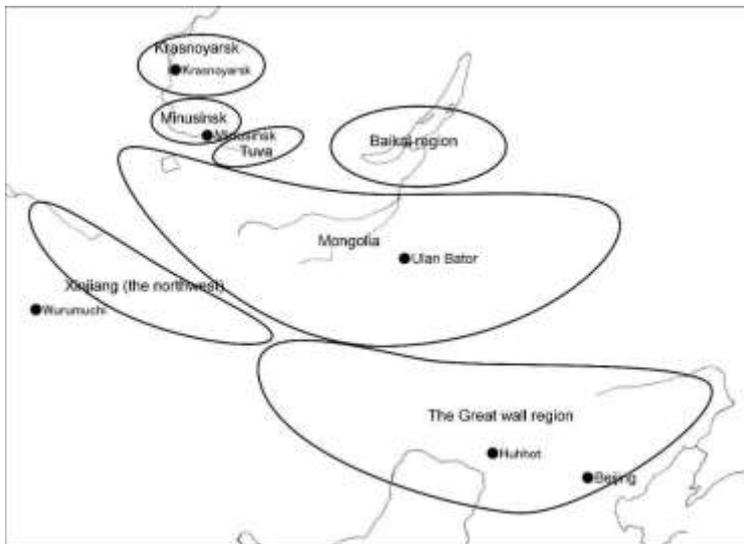


図 5-14 剣の型式分布状況把握のための地域設定

剣第 1 期

A1 類と A2 類が長城地帯、モンゴル、トゥバ、バイカル地方に分布する。一方、ミヌシンスクとクラスノヤルスクには型式は見られない。採集品が多く、当時の正確な分布範囲は明確にし難いが、長城地帯では、遼西、北京周辺を含む河北省、山西省北部、陝西省北部からそれぞれ出土例が知られており、それ以西ではない。このことは、当該型式

が新疆でまだ見つかっていないことと関連するかもしれない。

剣第 2 期

B1a、B1b 類が主にミヌシンスクを中心に分布し、長城地帯にも達している。一方、B2a、B2b 類はクラスノヤルスクに分布し長城地帯に達する。ミヌシンスクとクラスノヤルスクにはこの前の段階、第 1 期には諸型式が存在しないにもかかわらず、B1、B2 類の最も早い型式である B1a、B2a 類が集中する。この事実は非常に重要である。また、この段階には新疆東北部（青河県）での発見が確認されている。長城地帯では、遼西で前段階に引き続き出土例が知られるが、甘肅省東部（寺窪文化）における出土例は、前段階この地域に A1、A2 類が入らなかったことと対照的である。

剣第3期

B1c 類がミヌシンスクを中心に分布する一方、B1c'、B2c 類は長城地帯に主に集中する。長城地帯内では遼西から甘肅省東部までその分布域が知られる。B1c'類の分布に関してはこれが B1a から B1c 類への変化の傾向とは異なる、派生形であることと一致する。

表 5-15 各地域の型式数

期	型式	ミヌシンスク	クラスノヤルスク	トゥバ	新疆	バイカル地方	モンゴル	長城地帯	合計
↓	図5-14の表記	Minusinsk	Krasnoyarsk	Tuva	Xinjiang	Baikal	Mongolia	the Great wall region	
1	A1類							14	14
	A2類			1		3	2	20	26
2	B1a類	5	2	1	1			1	10
	B1b類	7						7	14
	B1c類		5				1	1	7
	B1c'類	1	4					1	6
3	B2a類	3						3	6
	B2b類		1					10	11
	B2c類							3	3

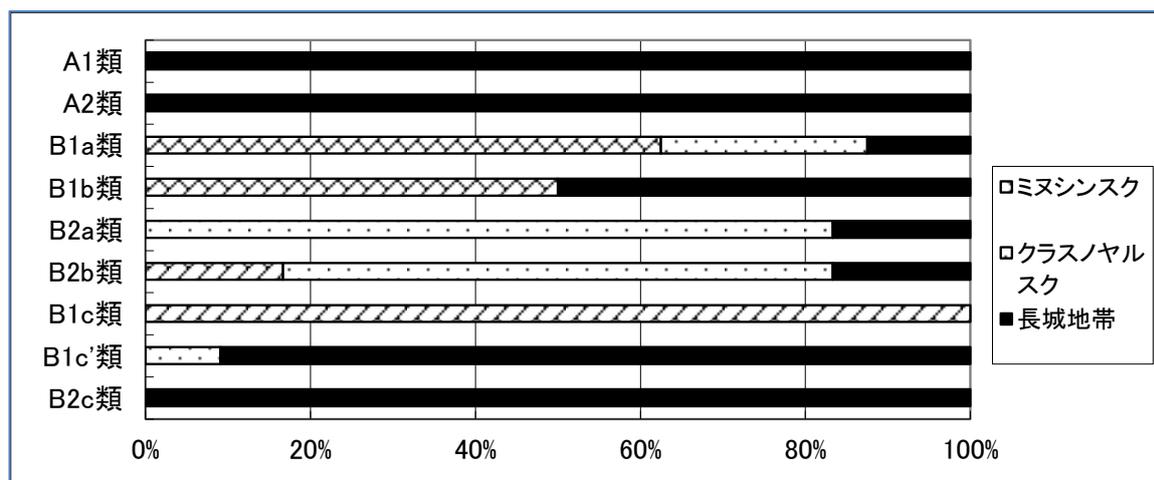


図 5-15 主要地域における型式割合

(4) 小結

以上の分布の検討により、全期を通じたおおまかな地域的差異が明らかとなった。すなわち、南シベリア（ミヌシンスク、クラスノヤルスク）およびモンゴリア（長城地帯、モンゴル、バイカル地方）である。トゥバと新疆に関しては評価が難しい。

剣第1期にはA1、A2類がモンゴリアで盛行する。これらは従来の曲柄剣にあたり、この中では朱開溝の剣が最も時期的に遡るものである。この剣に型式として比較できるものは、モンゴリア以西には存在しない。このことは、A1、A2類が、前段階にEAMPやセイマ・トルビノ青銅器群の影響が顕著であった新疆や長城地帯西部（甘肅）で見つからないこととも関連すると考えら

れる。初期青銅器の両刃の刀子は第 3 章でみたとおり、鏢を持たない点、脊の形態などから言っても、A1、A2 類の直接の祖形とすることはできない。A1、A2 類はモンゴリアで生まれた独特の型式とできよう。ただし、最古である朱開溝の剣には A1、A2 類でよく見られる獣頭や鋸歯紋、波状紋などは見られず、型式全体としての起源地を朱開溝付近（内蒙古鄂爾多斯）に特定しうるかどうかは、現段階では判断しがたいところである。

剣第 2 期は、系譜関係および分布から考えると、B1、B2 類の発生と拡散の 2 時期に細分できよう。B1、B2 類が従来カラスク式短剣と呼ばれてきた一群である。剣第 2 期前半において、まず B1a 類はその分布の中心であるミヌシンスクで A2 類から発生したと考えられる。B2a 類も同様にクラスノヤルスクで発生したと考えられる。しかし、B1a、B2a 類の祖型である A2 類は型式として両地域には存在しない。従って、A2 類を有するモンゴリアからの大きな影響は見込めない。B1a、B2a 類の発生はむしろ、南シベリアの両地域におけるモンゴリア的要素の受容の結果とみなせる。こうして B1、B2 類は成立した後、剣第 2 期後半においてモンゴリアへ拡散したと考えられる。B1a、B2a 類は長城地帯に型式として存在するので、この場合の南シベリアからモンゴリアへの影響は、前の B1a、B2a 類発生時における南シベリアへの影響とは異なることが考えられる。以上からわかるように、長城地帯を中心としたモンゴリアのみでは剣の形式変化は説明できないのである。また、拡散した B1、B2 類は従来のモンゴリアに固有であった A1、A2 類を駆逐する形で南下していったと考えられる。このことは、北京市昌平白浮墓葬において数多くの B1 類のなかに、異様に変形した A2 類が B1 類との折衷要素を持たずに存在している事実が如実に示している。他では、当該段階の剣の分布域が、剣第 1 期に比して西へ拡大していることも興味深い。B1、B2 類が南シベリアで発生したとすれば、新疆や長城地帯西部で見つかるこれらについても、モンゴリアを介した流入経路よりも、南シベリアからの直接のルートを含めたさらにひろいコンテクストで考える必要がある。以上のように、モンゴリアにおいて独自に発生した A1、A2 類（曲柄剣）は、その分布域の外である南シベリアにおいて B1、B2 類（カラスク式短剣）の祖形となったのであるが、その次の段階において、南下した B1、B2 類に席卷され姿を消すことになったのである。なお、剣第 2 期における以上のような諸変化の年代が、中原における克殷の時期と凡そ同じであることは興味深い。

剣第 3 期にはミヌシンスクで B1c 類が B1b 類より発生する。一方、B1c'類と B2c 類はその分布の中心である長城地帯で主に発生したと考えられる。逆に、B1c'、B2c 類は南シベリアでは稀で、B1c 類もモンゴリアには殆どない。このような地域性は剣第 2 期とは異なる様相である。剣第 3 期では剣第 2 期のような南シベリアからモンゴリアへの影響は見られず、モンゴリアは固有の型式をもつに至ったと考えられる。

第 2 節 刀子の検討

(1) 分類

形式分類

組列の抽出が目的であり、時間的変化が比較的起きにくい製作技法に関わる属性に注目する。

ここでいう製作技法とは鋳型作成の段階で想定されるものである。まず、以下の通り属性を抽出した。

1) 柄断面形態 (図 5-16)

- a : 断面工字形のうち、上下の端部は平坦でなく、山状であるもの。窪みは深いものが多い。
 - a2 : a を半切した形態のもの。
 - b : 工字形ではあるが、上下の端部は平坦であるもの。窪みの浅いものも多く、中には文様区画の為と思われるほど極めて浅いものもある。
 - b2 : b と同じく上下の端部は平坦であるが、片面のみ窪むもの。
 - c : 窪みを持たず扁平なもの。各厚みの変異は多様である。上下の端部は平坦である。
 - d : a に近いが、窪み部の厚さが比較的一定で、上下端部が平坦なもの。類例は僅かである。
 - e : 断面楕円形のもの。
- その他：柄全体に大きな透かし彫りが入るもの (2 例)、筒状の柄 (1 例) がある。

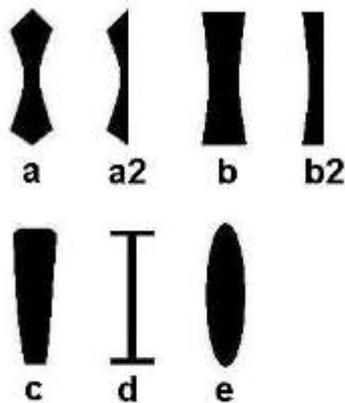


図 5-16 柄断面形態の変異

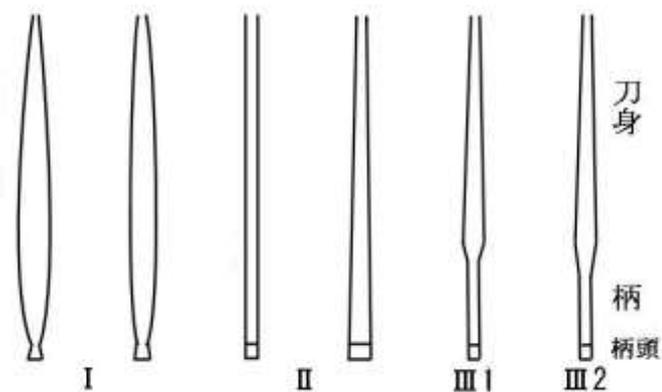


図 5-17 背部形態の変異

2) 背部形態 (図 5-17)

刀子の刃部を下にして背部を俯瞰した時の形態。

- I : 全体がカーブを描くもの。柄と刃の境界位置に相当する背部あたりで最も厚くなるものが最もよく見られる。この変異では、背から柄頭に移行する際に、境界付近で僅かに窪む特徴がある。また、背の輪郭全体的にみても、直線的でなくデコボコしているものが多い。
- II : 全体が直線的なもの。幅がほぼ一定のものもあれば、柄頭に向かって開いていくものもある。Bで は背と柄頭の背はほぼスムーズに移行する。
- III1 : 身と柄の境界付近に明瞭な段があるもの。
- III2 : 身と柄の境界付近に不明瞭な段や屈曲があるもの。I と類似するものもあるが、III1、2 の段は柄刃境界線の厚みにより直接生じていること、外形が直線的であることにおいて A と異なる。

3) 紋様 (図 5-18)

紋様のある資料のみに適用できる属性である。紋様自体より、その鑄出す方法に注目する³。

凸：刀子表面のうち、刃から連続する面より突出する形で紋様が鑄出されるもの。

凹：上とは逆に、刃から連続する面より下に紋様が入るもの。

見かけ上は「上」に類似するが、紋様面が刃から連続する面と同レベルかそれ以下にあるものがあり注意を要する (図 5-18 下)。

4) 范線の明瞭性

この属性に関しては摩滅による変化が考えられ、副次的に用いる。

明瞭：側面において、二つの鑄型での鑄造による、范の合わせ目が明瞭に残されたもの。

不明瞭：側面に范の合わせ目が認められ、二つの鑄型による鑄造と判断できるものの、合わせ目がそれほど顕著に認められないもの。

なし：側面に鑄造文様が入っており、范線が当初からなかったことがわかるもの。



図 5-18 紋様の変異

柄断面形態 (以下、断面) と背部形態 (以下、背部) の相関を見たものが表 5-16 である。両属性間に相関が認められ、断面 a,a2/背部 I 附近に一まとまり、また断面 b,b2,c,d/背部 II,III2 附近に一まとまり、さらに数少ないが断面 e/背部 III1 に一まとまりの計 3 グループが認められる。次に、各組み合わせに他の属性を掛け合わせた上で、想定できる製作技法を考えてみよう

(表 5-17)。比較的安定していた断面 a,a2/背部 I グループでは、紋様では凸、范線は明瞭なものが多くを占める。断面 a,a2 を持つ製品の場合、石製の鑄型に器物の輪郭線を彫りこんだ後、その内部を薄く削ることで鑄型は完成する。紋様凸は、本体の形成後に鑄型をさらに彫り窪めることで形成できる。このグループは石などの鑄型の素材を直接彫り窪めて形成するのに一番適した属性変異を含んでいる。さらに、范線が明瞭であることや、背部形態の縁がデコボコしているものが多いこと⁴も、次のグループと対照的であり、石製鑄型の使用を強く示唆するものである。なお、実際にこの組み合わせを持つ石製鑄型が存在する。以上により、断面 a,a2/背部 I グループを A 類とする。

³ 起伏のある紋様については、「陽」「陰」の表現 (それぞれ relief、incised に対応) があるが、これは主に出来上がった紋様自体に注目したものである。本稿では紋様自体の起伏よりも、製作技法的な視点 (刃部表面からの上下) が判断の基準となるので、以下のような表現にした。

⁴ 輪郭のデコボコの原因として、石製鑄型における湯の凝固の温度差による可能性が挙げられる。

表 5-16 柄断面形態（縦）と背部形態（横）の相関

断面 形態 ↓	背部形態→						
	I	I / II	III2 / II	III2	II	III1 / III2	III1
a	77	3 @			1 @		
a2	3						
b	5 @	5 @	1	5	48		
b2			1	8	10		
c	2 @	2 @	1	33	37	1	
d					3		
その他				3			
e	1			3			4

表 5-17 范線、模様（縦）と形式（横）の相関

	断面 a, a2 ／背部 I	断面 b, b2, c, d ／背部 II, III2	断面 e ／背部 III1
形式	A 類	B 類	C 類
明瞭	75	29	
不明瞭	4	113	
無？		6	1
無	1		3
凸	12	14	
凸(境界線のみ)	17	4	
凹	1	59	1
凹(+鍛刻)		7	
無	49	67	

次に断面 b, b2, c, d / 背部 II, III2 附近のまとまりを考える。本組み合わせは、変異は広いものの、他の属性との相関では、紋様凹、范線不明瞭なものが多い。仮に素材を彫り窪めて鑄型を形成すると、断面 b, b2, c, d は上の A 類のように線的に鑄型素材を彫り窪めた後、その内部を外形線と同じ深さまで窪める必要がある。また紋様凹は、鑄型における本体形成後に追加して彫り窪めることは出来ない⁵。このグループの各属性変異は石型によっても形成できなくはないが、模を利用した土、砂、金属製鑄型の方がより容易に製作できる。また、范線が不明瞭なものが多いことや、背部形態の線が比較的シャープであることも、より可塑性の高い材質の鑄型を用いたと考えれば理解しやすい。以上により、断面 b, b2, c, d / 背部 II, III2 の一群を B 類とする。なお、学史上のいわゆる「屈曲形」は殆どが B 類になる。

断面 e / 背部 III1 の組み合わせは少数であるが、製作技法上きわめて特殊な一群である。文様は凹、范線はなしと相関する。これは、高濱が指摘する蠟型技法に類するもの（高濱 2008）を想定せざるを得ない。実見した資料は少ないが、これに類するものは他にも知られており（江上・水野 1935、Andersson 1932、鄂爾多斯博物館編 2006 など）、いずれも造形的にかなり複雑なものである。断面 e / 背部 III1 を C 類とする。なお次のタガール文化の青銅器について、グリシンは模の利用の可能性を示唆し、複雑なものに関しては蠟より脂肪を用いた技法の可能性を挙げている（Гришин 1960）。

さて、ここで以上に外れた若干を考えたい。まず、A 類と B 類の中間にあたるものは范線不明瞭なものが多く、ひとまず B 類に帰属させることにする。なお、これらの資料は表では (@) と示しており、これらを介した形式同士の関係の可能性については後述する。断面 e / 背部 I、III2 の 3 点も紋様は凹で、范線もある程度は確認されることから B 類とする。また、A 類の資料には 1 点例外がある（京都大学文学部 1963 : p181, 84 上）。この資料は范線がなく背部に模様が入り、製作技法面より C 類に含める。

⁵ 幾つかの資料には鑄造後に、紋様を製品上から刻み付けた疑いがあるが、それらは少数である。表 2 では凹 (+ 鍛) のように示した。

型式分類 (B 類)

B 類においてのみ可能である。B 類では、チレノヴァが指摘した屈曲形から弧状へという変遷が考えられる[Членова 1972]。非常によく屈曲するものには、柄の前方に窪みを残すもの(図 5-21-2 の矢印参照)がある。ミヌシンスクには骨柄に対してほぼ垂直に石刃や銅刃をはめ込んだ刀子が知られており、図 5-21-6 のように柄の差込部が貫通している例も存在する。B 類における柄の前方の窪みは、骨柄銅刃刀子の差込部の痕跡器官と考えられる。上述のように、B 類が仮に骨柄銅刃刀子そのものを模として利用したとすれば、このような痕跡器官が残ることもよく理解できよう。以下ではこのことを考慮して属性を抽出する。

1) 全体の形状 (図 5-19)

屈曲 1 : 柄刃境界付近で非常によく屈曲するもの。

屈曲 2 : 柄刃境界付近でよく屈曲するが、屈曲度は屈曲 1 より低い。

弧状 : 全体にカーブあるいは直状を呈するもの。やや屈曲するものもあるが、屈曲する点は柄刃境界付近ではない。

2) 柄刃境界の表現 (図 5-20)

あ : 境界が刃に対して斜めであり、柄が厚く刃は薄く表現されるもの。

い : 境界が刃に対して垂直に近くなり、柄を厚く刃は薄く表現するか、太い線を入れるもの。

う : 境界が薄く細い線で表現、あるいはないもの

両面で表現が異なるものは、「あ・い」のように表記した。

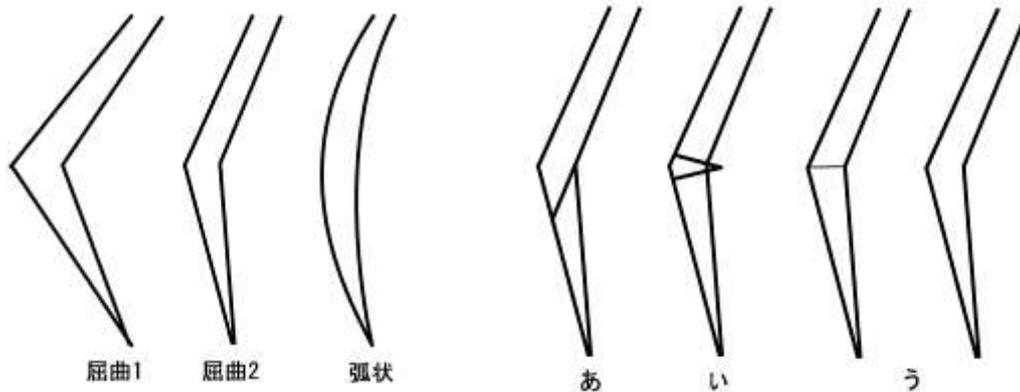


図 5-19 全体の形状の変異

図 5-20 柄刃部境界の変異

表 5-18 全体の形状 (縦) と刃柄境界表現 (横) の相関

	あ	あ・い	い	い・う	う
屈曲1	7		2		4
屈曲2	3	4	19	3	13
弧状	1		11	6	97

両属性の対応関係をみると(表 5-18)、ゆるやかな相関が見られる。チレノヴァのように細かくは区分できず、変化はかなり緩慢である。そこで、屈曲 1/柄刃境界あ、屈曲 2/柄刃境界あ、

あ・い、を Ba 類、弧状／柄刃境界う、を Bc 類⁶とし、その中間の全てを Bb 類とする。なお、次につづくタガール文化では Bc 類がほぼ全てであり、Ba→Bb→Bc 類の変遷が考えられる。以下に各形式、型式の資料を提示する（図 5-21）。

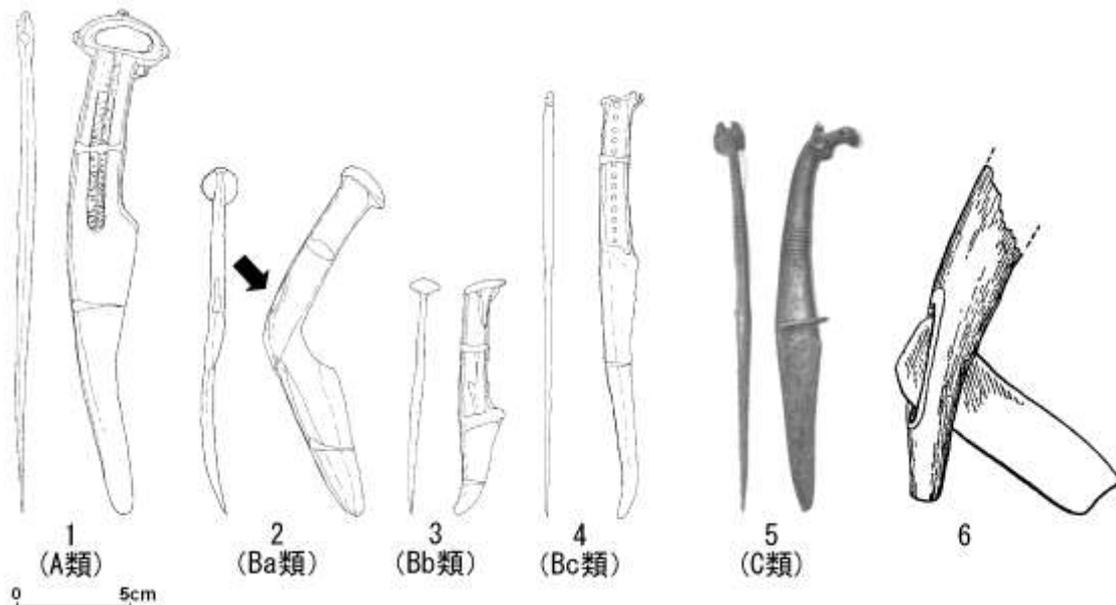


図 5-21 型式の例

（2）編年と形式間関係

年代の明確な資料については未実見のものが多く、以下ではこれらを使用する。前項において、各形式、型式の単位としての存在は検証済みであり、各々に認められた諸特徴を参考にして、未実見資料の型式を判断する。その際、既に報告された写真、記載などにより属性を総合的に判断したが、背部形態や范線の明瞭性などについて今後調査が必要なことは言うまでもない。

各型式の年代

共伴関係により凡その絶対年代が把握できるのは中国の出土品である。A 類は内蒙古朱開溝 1040 号墓（内蒙古文物考古研究所・鄂尔多斯博物館 2000）、山西高紅墓葬（楊 1981）、河北抄道溝窖藏（河北省文化局文物工作隊 1962）、遼寧楊河窖藏出土品（錦州市博物館 1978）などが該当し、およそ商代併行である。北京瑠璃河 264 号墓出土品（北京市文物研究所 1995）など西周併行のもの若干はあるが、主体は商代併行と考えてよい。Ba、Bb 類は中国での共伴出土例がなく不明である。典型的な Bc 類は北京西揆子出土品（北京市文物管理处 1979）など西周併行にあったとみられる。陝西断涇 4 号墓（中国社会科学院考古研究所涇渭工作隊 1999）や北京昌平白浮 2 号墓（北京市文物管理处 1976）の刀子も Bc 類にあたる可能性もあるが、西周早期より遡ることはない。また、Bc 類は夏家店上層文化（西周～春秋併行）以降にも見られる。C 類は河北抄道溝窖藏や山西旌介 2 号墓出土品（山西省考古研究所 2006）（商代併行）に見られる。北京小河南窖藏（鄭 1994）、甘肅白草坡 1 号墓出土品（甘肅省博物館文物隊 1977）など西周の例もあるが、曲柄剣との対比からいっても、その主体は商代併行である。総じて言えば、A、C 類が商代には

⁶ Bc 類が数量的に極めて多いのは、B 類の内この型式が長城地帯にも数多く認められるためと考えられる。

ば併行し、Bc 類が西周に併行する。

形式間関係と期の設定

形式同士は製作技法上では基本的に排他的関係にある。ただし視覚的に模倣可能な特徴では形式間関係の粗密が変動する場合がある。

まず、A 類と C 類は同時存在（商代併行）で形式間にはほぼ排他である。ただ、両者が互いに参照されうる状況にあったことはその柄頭より明らかである。C 類には複雑な目鼻の突出する獣頭（北方系獣頭（以下、北獣）a）（図 5-22 参照）が附属する 경우가多く、A 類にも目鼻の突出する獣頭が附される場合がある。しかし、A 類の獣頭は C 類のそれに比べて単純であり、目と鼻が玉状になっているだけのもの（北獣 b（図 5-22 参照））が多い⁷。つまり、A 類と C 類は互いに同様のものを意図していた可能性があるが、それが表現される際には各形式の製作技法に基づく精粗差で排他的に区別されているのである。



- ・傘a: 傘の裏が平らなもの、全体に扁平なものが多い
- ・傘b: 傘の裏が深く窪むもの、半球状になるものが多い
- ・傘ab: 傘a傘bの中間形態を示すもの
- ・環: 環状のもの
- ・双環: 双環状のもの
- ・孔: 柄頭に孔が開くもの
- ・北獣a: 目鼻の突出する北方系獣頭のうち写実的で複雑なもの
- ・北獣b: 目鼻の突出のみで北方系獣頭を教すもの
- ・三凸環: 環に3つの突起が附属するもの

図 5-22 柄頭形態の変異

次に A 類と B 類である。Ba、Bb 類については年代の明確な資料を欠くが、Bc 類が西周併行であるなら、Ba、Bb 類はそれに遡るものであり時期的には A、C 類と同じである可能性が高い。ここで、形式分類において B 類に含めた、

表 5-19 各形式の柄頭変異

	傘a	傘ab	傘b	無	環	双環	孔	Bc 類特有	北獣b	北獣a	三凸環
C類	1		2		1					1	1
A類				4	63	3	3		1		2
Bc類	10	9	3	3	36		2	28			4
Bb類	18	26	3		4	1					
Ba類	5	7		1							

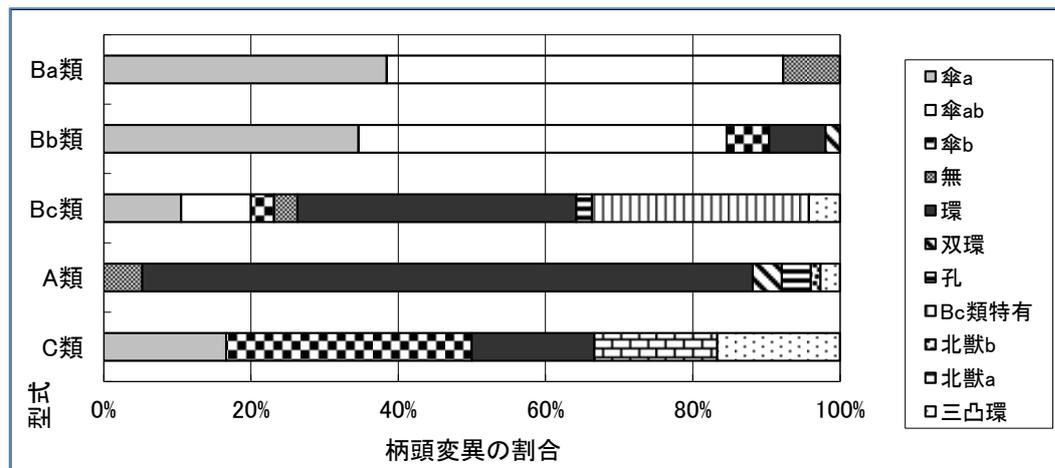


図 5-23 表 5-19 のグラフ化

⁷ これは重要な事実であるが、調査不足により個数の数値化が出来ていない。今後の課題である。

数少ないA、B類の中間タイプ（表 5-16 の@）について考えよう。型式分類の結果、これらのうち1点以外は全てBc類になる。@を介した形式変化を考えるなら、一つはA類→@→Bc類（→Ba、Bb類）となり、検証されたB類の組列に矛盾する。もう一つの可能性はBc類→@→A類であるが、これは先に挙げた各地域の年代と全く逆転するものである。従って、@を介して各形式全体が発生するという事は有り得ない。

さて、表 5-19、図 5-23 は各形式の柄頭変異を示したものである（便宜上、Bc類のみに見られる変異は一まとめにしている）が、Ba類からBc類に下るにつれて、B類がA類の要素を多く持つていくことが知られる。また、A類には全体の形態が弧状のものしかなく、Bc類はこの点でもA類により近づいている。B類はA類と当初は排他的関係にあったが、変化する際A類からの影響を受けたと考えられ、先の@もその所産（折衷）であろう。ただし、B類がA類から受けたのは、全体の形態および柄頭という視覚的に模倣可能な情報に限られていたことは注目できる。

B類とC類についても上と同じく、Ba、Bb類とC類の同時存在が考えられる。表 5-19、図 5-23 ではサンプル数が少ないものの、Ba類ではC類と共通する柄頭は殆どないが、Bb、Bc類となるにつれてC類と同じ柄頭を含むものが増えており、B類とC類に関しても、A、B類と同様、排他性が徐々に緩和された可能性がある。

以上より、A、Ba、C類がほぼ排他的にある段階を刀子第1期、A、C類とB類の形態上の排他性が緩和される段階を刀子第2期、Bc類のみの段階を刀子第3期とする。

剣との対比

剣の諸型式との対比を行なう。製作技法上対比可能であるのは、刀子C類（図 5-21）と剣A2類（図 5-4-2、断面卵形の曲柄剣）である。両者は片刃か両刃かを除く属性についてほぼ共通しており、年代的にもほぼ同時期と考えられる。また、刀子B類で、柄にブリッジが掛かるものがクラスノヤルスク博物館所蔵品およびトゥバ出土例としてある。これらの柄は剣B1aの構造と基本



図 5-24 刀子 B 類と剣 B1a 類の比較

全体の期	第1期	第2期	第3期
	(刀子第1期)	(刀子第2期)	(刀子第3期)
刀子	A類 a	B類 b	C類 c
剣	A1類 A2類	B1類 a	B2類 b c c'
	(剣第1期)	(剣第2期)	(剣第3期)
	商代併行	西周併行	
代表的遺跡	・朱開溝第五段階 ・抄道溝窖藏	・小河南村窖藏	・白浮基址 ・西坡子窖藏

図 5-25 刀子、剣の型式と画期

的に同じであり（図 5-24）、両者はほぼ併行していると考えられる。ミヌシンスクの例は裏面が不明であり、Bb、Bc 類のどちらかが不明であるが、トゥバのものは Bb 類であり、剣 B1a 類は刀子 Bb 類の段階にあったと考えられる。

次に剣と刀子の共伴事例をみる。山西高紅墓地では剣 A1 類と刀子 A 類が、河北抄道溝窖藏では、剣 A2 類と刀子 A、C 類が共に発見された。北京白浮墓地では異形化した剣 A2 類、と共に剣 B1b、刀子 Bc 類が出土している。北京小河南窖藏では剣 B1a と共に変形した刀子 C 類が出土した。また、クラスノヤルスク、ポリショイ・カマリ川上流墓葬（Членова1972）では剣 B2b 類と刀子 Bc 類が共伴している。

以上より、剣 A1、A2 類と刀子 A、C 類（剣第 1 期、刀子第 1 期）、また剣 B1a 類と刀子 Bb 類（剣第 2 期、刀子第 2 期）、さらに剣 B1b 類、B2a 類以降と刀子 Bc 類以降（剣第 2、3 期、刀子第 3 期）がそれぞれ併行していると考えられる。刀子 Bc 類の出現は剣 B1c、B2c 類の出現よりずっと早いので、刀子第 3 期は剣第 2 期半ば以降全てを含むことになる（図 5-25）。

（3）分布

刀子各期の型式分布を確認する（表 5-20、図 5-26）。

表 5-20 型式の分布

	ミヌシンスク	長城地帯
A類	33	46
Ba類	14	0
Bb類	57	2
Bc類	60	37
C類	3	3

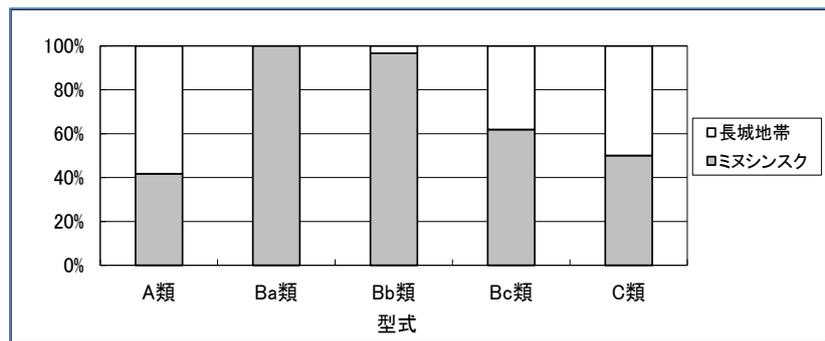


図 5-26 表 5-20 のグラフ化

第 1 期では、A 類は長城地帯とミヌシンスク両方において見られる。長城地帯以外でも、新疆（王 1986）、遼東（郭 1993）、バイカル（Гришин 1981）、トゥバ（Кызласов1979）、モンゴル（Новгородова 1989）、カザフスタン（Черников1960）に類するものが存在する。長城地帯内においては、遼西から内蒙古中部、寧夏、青海での出土、採集例がある。ただし、寧夏、青海の資料は量的に少ない。C 類も長城地帯とミヌシンスク両方において見られ、類するものが新疆（新疆维吾尔自治区文物事業管理局 1999）、遼東（郭 1993）、モンゴル（Новгородова 1989）にも見られる。ただし、これらは長城地帯にかなり多いが、ミヌシンスクでは少数である。長城地帯内では遼東以西、陝西北部以東で見られる⁸。Ba 類は長城地帯にはない。類するものが新疆に 1 点

⁸ 青海省卡路乱山遺跡から出土した首鈴刀（宮本編 2008、p98-176）は柄断面の形状から言えば刀子 A 類であるが、背部分に波形の紋様が入る点が特徴的である。背に紋様を持つ刀子としては先に挙げた資料（京都大学文学部 1963：p181、84 上）があり、こちらは范線が確認できず C 類とした。卡路乱山遺跡出刀も、柄頭が鈴である点から言っても、C 類の技法で作られた可能性があるが、范線等の確認ができていないため、本論では評価を保留しておく。

知られる（古代オリエン特博物館 1986）が、かなり異形化している。

第 2 期にも A 類、C 類も存続しているが、これらは時期的に細分する手立てがない。便宜的に Bb 類の分布のみをみると、Bb 類は Ba 類同様長城地帯には少数であることが判る。

第 3 期において、Bc 類は長城地帯とミヌシンスク両方において見られる。類するものは、新疆（張 1993）、バイカル（Гришин 1981）、トゥバ（Кызласов 1979）、モンゴル（Новгородова 1989）にみられる。遼東の例がないことは、剣 B 類（カラスク式短剣）同様興味深い。

（4）金属成分の検討

当該期の金属成分分析について

本章対象の資料では青銅のほかにはヒ素銅が知られ、錫、鉛、ヒ素が意図的に添加された可能性がある。これらの配合の割合を、上記の鑄型製作で得られた型式、分布と対比し、パターンを検証または異パターンの抽出を目指す。ミヌシンスクでも長城地帯でも成分分析結果を提示した資料は存在するが、その中で発表者が実見したのはわずかである。そこで、これらの資料については図面、写真から先で明らかにした型式を推定する。なお、特に長城地帯の剣に関しては対象資料の測定例が少なく、今後の課題としておく。

本論で使用した資料および、その報告について触れておく。まず、東京国立博物館の所蔵資料については蛍光 X 線分析結果が報告されている（高浜 1998）。長城地帯出土のいわゆる北方系青銅器を時期ごとに区分、測定しているが、殆どが鉛入りで、時期的に明確な差は見出せないとする。なお、大部分は鑄上からの測定で、変質している可能性があるため、成分を百分率で示すのではなく、銅との相対強度としてのデータを提示している。本発表では他資料との比較の為、銅、錫、鉛、砒素の合計を 100 とした比率を求めることにする（殆どが比率 1%未満である他の成分は捨象、報告上の+は強度 0.05、-は強度 0 として計算）。サックラー財団所蔵資料における蛍光 X 線分析（Chase and Douglas 1997）でも、測定は表面が中心であり、成分に偏り、鑄の影響の可能性があるとされる。なお、性質から言って、鉛、砒素は錫、銅、鉄よりも偏りが生じやすいことが指摘されている。また、ミヌシンスクには鉛青銅が少ない一方、砒素を多く含むものがあり、出土地推定の基準としている。しかしながら、全体としての時期的傾向は顕著でないという。一方、ミヌシンスクでも古くから成分分析は行われている（Наумов 1972）が、大部分はヒ素銅（1~2%）であるという報告中ではチレノヴァの見解に従って、屈曲型、直刃型、凸背型の成分を対比し、後者になるほど錫銅が多くなり、技術発展がみられるとしている。

刀子の諸型式と金属成分

以上のデータについて、写真、図面からの判断ではあるが、A、B、C 類に区分し、錫、鉛の各成分を対比した。まず、錫、鉛成分比で A、B 類は明確には排他性を示さないが、異なる傾向を示した（図 5-27）。B 類は A 類に比べ低錫低鉛の傾向にあるものと、高錫高鉛に位置する二つの領域に分かれる。C 類は A、B 類の領域の中間にくるが、サンプル数が少なく評価は難しい。従って、錫、鉛成分においても A、B 類の分類単位は妥当であることが示された。次に、A 類と、B 類内の各型式を比較した。A、Ba 類を比較すると、Ba 類は A 類に比して低鉛低錫の傾向がある。

次に A 類と Bb 類の対比でもほぼ同様の傾向がみられた。さらに A 類と Bc 類を比べると、先ほど Ba、Bb 類のように Bc 類は A 類に比して低鉛低錫のものが見られるが、一方である程度 A 類の領域に近づいていることが確認される。このような各型式の成分傾向は、前項で示した形式間関係の粗密と基本的に合致するものであり、A 類と Ba 類は本来排他的であったのであるが、Bc 類になるとその排他性は緩和されるのである。

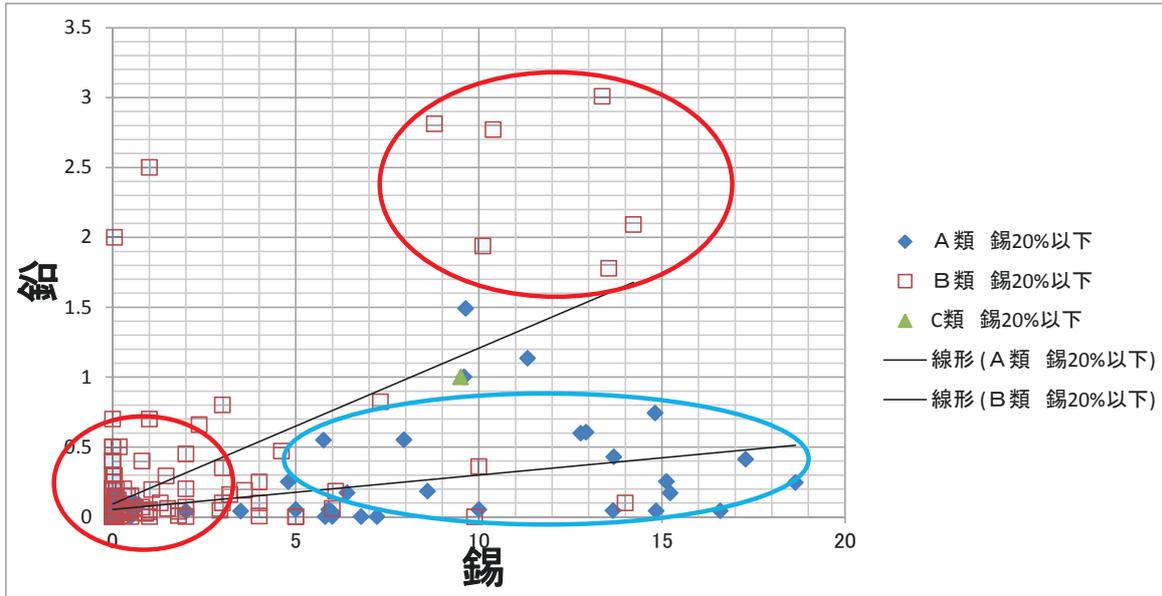


図 5-27 刀子 A、B、C 類の金属成分比較（錫、鉛）

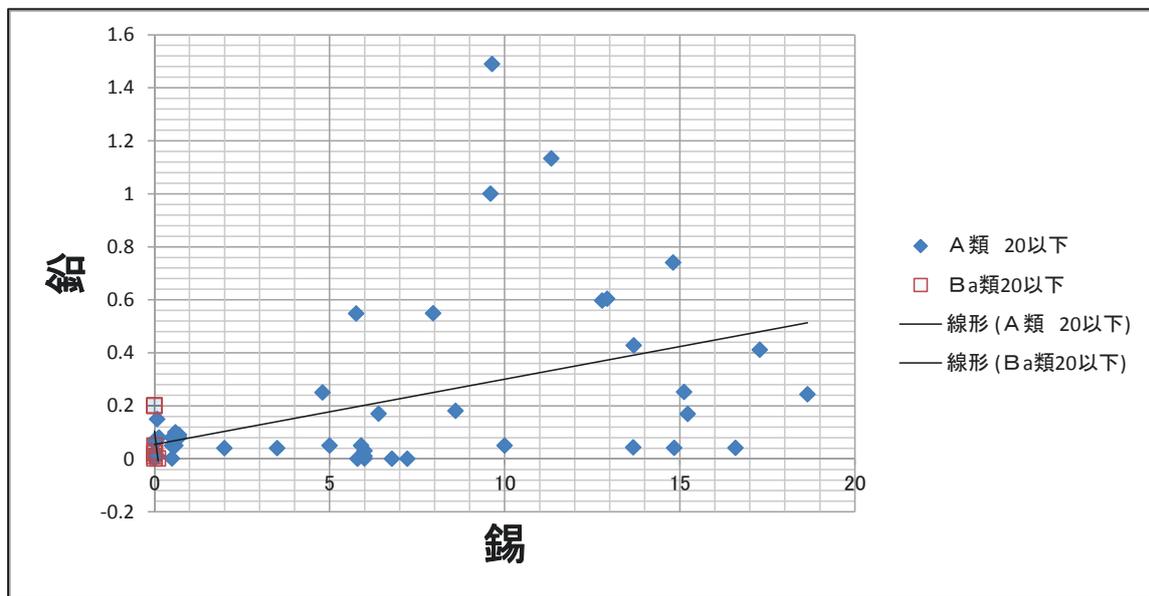


図 5-28 刀子 A、Ba 類の金属成分比較（錫、鉛）

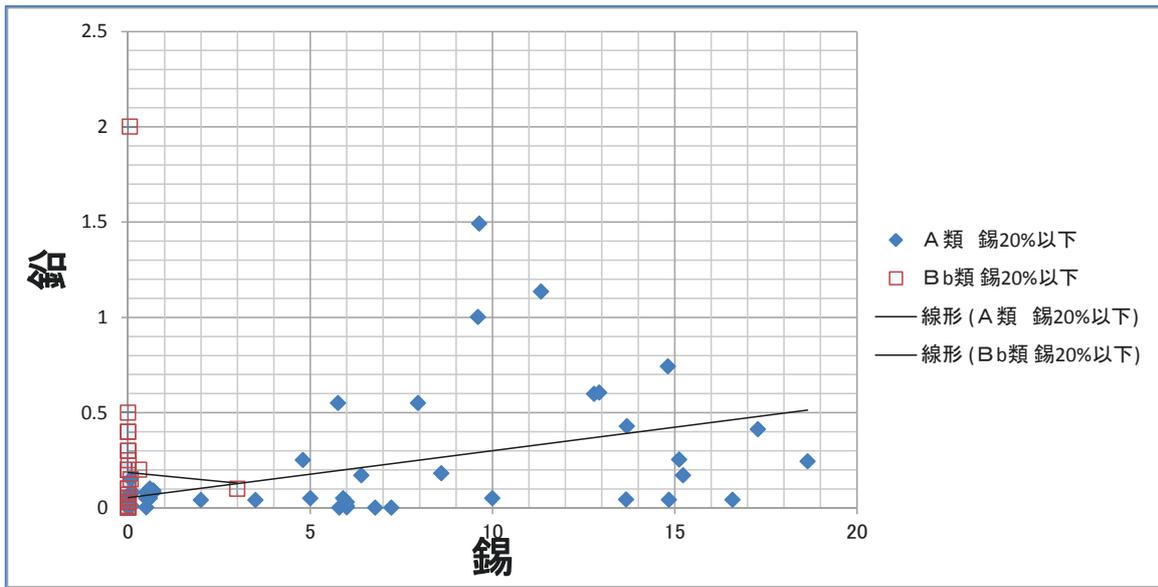


図 5-29 刀子 A、Bb 類の金属成分比較（錫、鉛）

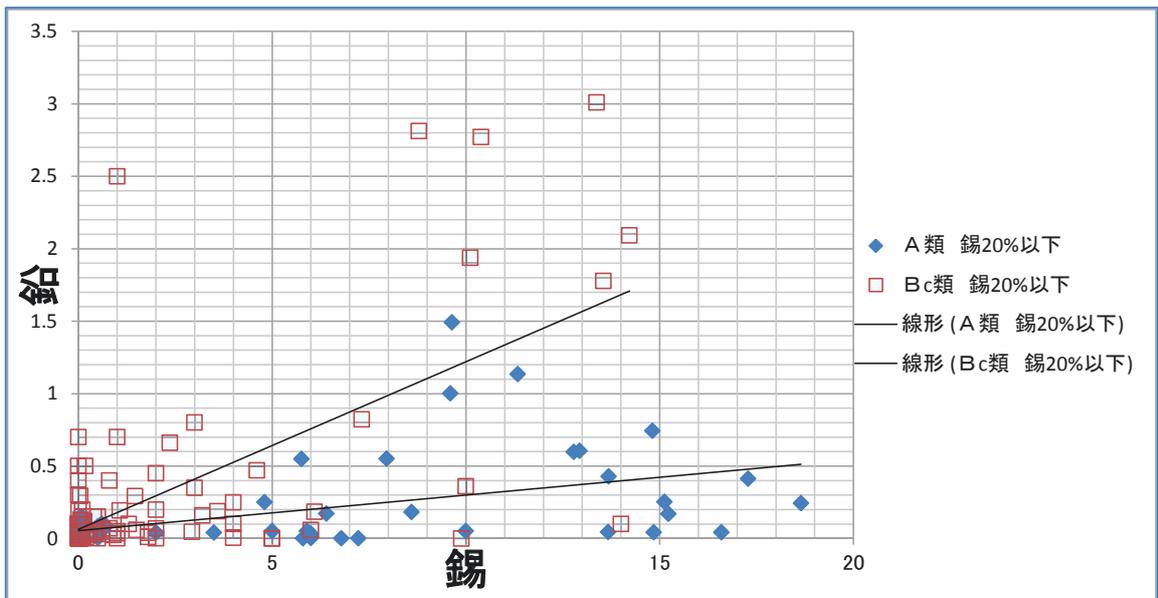


図 5-30 刀子 A、Bc 類の金属成分比較（錫、鉛）

金属成分の地域間比較

次に、各型式における成分を地域（ミヌシンスク、長城地帯）ごとに比較し、形態上では想定が難しかった A 類の起源地について考えたい。A 類は刀子第 1 期から長城地帯、ミヌシンスク双方で豊富にみられる。まず上の分析により、A 類と Ba、Bb 類（Bc 類は上の分析で A 類との折衷色が濃いことが判明しているのを除く）を比較した場合、A 類は B 類に比して高錫高鉛であることを確認しておこう（図 5-28、5-29）。次に A 類をミヌシンスク由来のもの、長城地帯由来のものに二分し、鉛錫成分比を比較した。すると、長城地帯由来のものの方が、ミヌシンスク由来品に比べ高錫の傾向にあった（図 5-31）。従って、A 類と B 類全体を比較した場合得られる A 類の

高錫傾向は長城地帯で強いといえ、A類の起源は長城地帯を含めたモンゴリアに存在する可能性が高いと考えられる。さらに細かな起源地の特定にあたっては、長城地帯、モンゴル国での出土場所が明確な資料に対する詳細な金属成分分析が今後期待される。

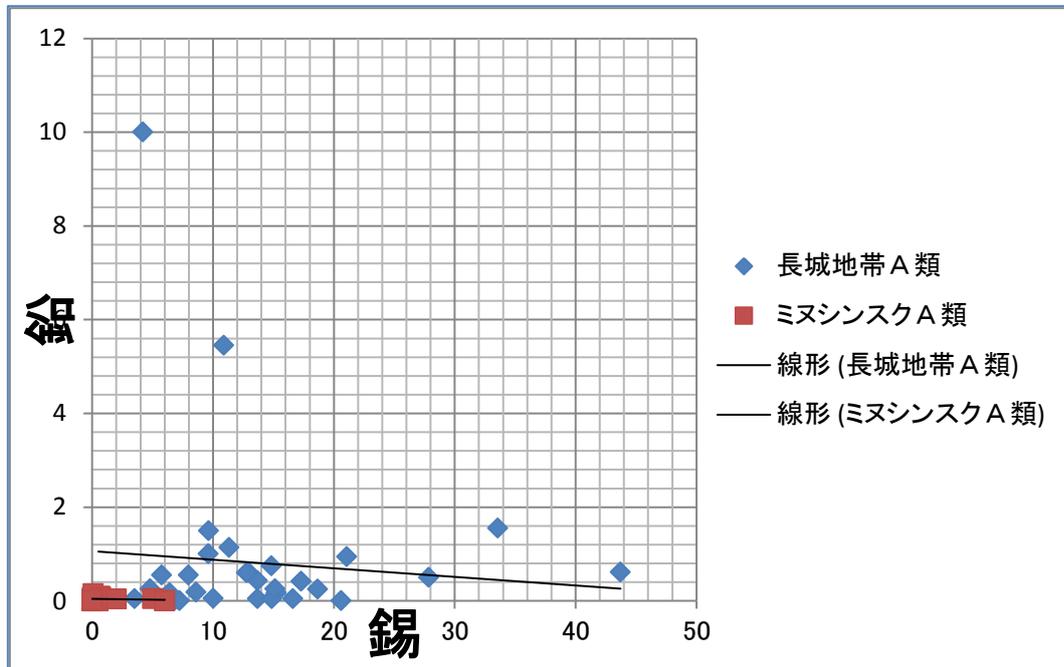


図 5-31 各地域における A 類の金属成分比較

(5) 小結

刀子第 1 期

ミスシンスクが Ba 類を有する点で特徴的である。B 形式の諸技法はミスシンスク固有と考えられる。Ba 類の祖形は、型式設定の項で述べた痕跡器官からいって、ミスシンスクのカラスク文化に先行するオクネフ文化の骨柄銅刃刀子に求めることが出来よう。なお、この痕跡器官の存在は、Ba 類が実際に骨柄銅刃刀子を模として形成されたと考えれば理解しやすい。

それでは A 類、C 類はどうか。これらのうち、古手のものを分別する手段がない以上、ミスシンスクにおいて両形式の技法が B 類と並んで、当初から排他的に存在していたと考えることも可能である。しかしながらミスシンスクにおける C 類には、蠟型に類する C 類特有の技法を生かした複雑な造形のものも極めて稀である⁹。一方で長城地帯の C 類は実見した資料の他に、数多くが知られ、それらは非常に精緻な文様と複雑な柄頭（北獣 a、鈴など）を持つ場合が殆どである。従って、少なくとも C 類に関しては長城地帯を含むモンゴリアにその主体があったと見なしたい。また、A 類も変異の豊富さあるいは上記の金属成分などを考えると、C 類同様モンゴリア主体の可能性が高い。刀子第 1 期の年代は A 類、C 類が盛行した商代併行である。

⁹ 例えば、長城地帯の C 類に見られる鈴、北獣 a 柄頭はミスシンスクには極めて少ない。また、文様に鑄造後に直線的な文様を刻んだ可能性のあるものもあり、C 類本来の精緻な文様を鑄出す技法とはいえない。

刀子第 2 期

Bb 類が、A 類のうち視覚的に模倣可能な情報を Ba 類に加えて作られた。この変化は Ba、Bb 類が豊富に存在するミヌシンスクで起きたと考えてよい。また Bb 類を造る際、技法は在来のものによっており、A、C 類のうち模倣された属性は、その視覚的情報が中心であったことは注目できる。A、C 類は共にモンゴリアにその主体があり、ミヌシンスクに伝わったが、そこでは長続きせず形態のみ B 類に取り込まれた可能性がある。いずれにせよ Bb 類がミヌシンスクで開発された事実は動かず、長城地帯にわずかにある Bb 類はミヌシンスクから南下したものと考えられる。年代は商末周初併行である。なお、刀子については第 1、2 期における長城地帯での分布差は明確ではない。しかしながら、新疆、長城地帯の西部での発見例が遼西、内蒙古中部などと比べて著しく少ないことは剣と共通する現象である。

刀子第 3 期

Bc 類も Bb 類の延長上で A 類の視覚的要素を附加しつつミヌシンスクで生まれた。長城地帯における Bb 類は稀であるので、長城地帯の Bc 類はミヌシンスクからの再びの影響と考えられる。この段階には C 類はほぼ消滅し、A 類も一般には見られなくなる。A 類の技法は、夏家店上層文化における単范有茎刀子などの形で長城地帯の一部に残っていくが、以後の有柄刀子にはその痕跡を残さなくなる。刀子第 3 期の年代は西周前期併行以降である。

以上をまとめると、刀子第 1 期にはミヌシンスクには Ba 類、モンゴリアには A、C 類という排他的な分布圏が示される可能性がある。刀子第 2 期にはミヌシンスクにおいて Ba 類が A、C 類の視覚的情報を取り込みつつ Bb 類に発展した。さらに刀子第 3 期にはミヌシンスクにおいて刀子第 2 期の延長として Bc 類が生まれ、それが長城地帯を含むモンゴリアへ流入したのである。以上の影響の方向性は以前に示した剣第 1 期から 2 期の動態（図 3）と同様のものである。

第 3 節 様式の設定

ここでは、刀子、剣両器種を合わせて様式を設定したい。刀子の第 1 期は剣の第 1 期と対応し、併せて第 1 期（全体の期は図 5-25 の上を参照）とする。長城地帯をはじめとするモンゴリアには剣 A1、A2 類、刀子 A、C 類が分布し、モンゴリア青銅器様式とする。また、ミヌシンスクに刀子 Ba 類を主体に A 類、そして僅かに C 類が分布する。これを前期カラスク青銅器様式とする。全ての剣と刀子がセットで出現するモンゴリア青銅器様式の成立は現状では殷墟併行段階である。前期カラスク青銅器様式もこれとほぼ同時期と考えられるが、年代を示す確かな資料を欠いている。

刀子第 2 期は、剣第 2 期のうち B1a、B2a の時期と対応し、これを第 2 期とする。ミヌシンスクでは刀子 A 類の影響を受けつつ刀子 Bb 類が、剣 A2 類より剣 B1a、B2a 類が成立する。剣 A2 類は現段階では型式としてミヌシンスクに流入していないので、明らかにモンゴリアに主体がありミヌシンスクに影響したことがわかるが、刀子 A、C 類に関しても同様の可能性を上で指摘し

た。ミヌシンスクにおいて、前期カラスク青銅器様式を基礎に、モンゴリア青銅器様式からの影響をうけて成立した様式を後期カラスク青銅器様式とする。成立した刀子 Bb 類、剣 B1a が第 2 期の長城地帯に僅かにみられるものの、ここではモンゴリア青銅器様式が衰退しつつも存続していたと考えられる。

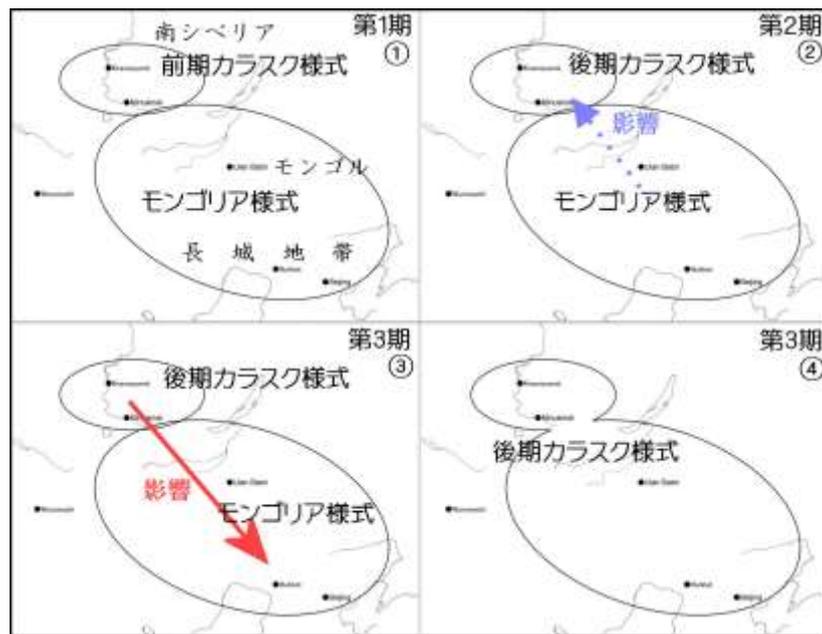


図 5-32 青銅器様式の変遷

刀子第 3 期は剣第 2 期のうち、B1b、B2b 以降と第 3 期に対応し、併せて第 3 期とする。剣 B1b、B2b 類とともに刀子 Bc 類がミヌシンスクで成立後、長城地帯まで拡散する。長城地帯にみられたモンゴリア青銅器様式は消滅し、後期カラスク青銅器様式の斉一的分布が見られるのである。この段階の後半（剣の第 3 期）では、剣 B2c、B1c'に見られるような長城地帯に特徴的なものも出現するが、後期カラスク青銅器様式の範疇を出るものではない。

第 4 節 その他の器種の検討

ここでは数量的に少なく取り扱いが困難であるが、特にモンゴリア青銅器様式の起源について考える際重要な器物若干を挙げる。

(1) 有蓋鬮斧

前 2 千年紀後半の有蓋鬮斧

ここでいう有蓋鬮斧とは蓋付きの横斧であり、一般には鬮斧 (battle axe) と呼ばれる。この器種についてはユーラシア草原地帯に限らずヨーロッパや近東にも似たような形態のものが多く、その起源に関する議論は盛んである。従って、この器種については学史において A、B 説（モンゴリアと南シベリアとの関係）とは異なる脈絡で言及されることが多かった。第 1 章でも少し触れたが、やや詳細にこの器種について述べておく。

前 2 千年紀前半の EAMP あるいは初期青銅器にもこの器種がみられることは、第 3 章でみたとおりであるが、前 2 千年紀後半以降のユーラシア草原地帯東部で盛行する有蓋鬮斧は、それらとは異なる特徴を持っている。それは蓋において斧身と逆に突出する、戈でいう「内」部の存在（高濱 2000）（図 5-33）である。この評価が研究者によって大いに分かれる。なお、ミヌシンスクでカラスク期以降とされる有蓋斧にはほとんど「内」部がある。「内」部の存在を重視するのは高濱

や朱永剛である。高濱は「内」部の存在から、長城地帯の当該期に一般である有蓋鬮斧は、近東の斧と比較するよりも、ユーラシア草原地帯西部のシンタシュタ遺跡における有蓋鬮斧と対比している（図 5-34）。ところが朱の場合、「内」部は中原の戈の影響とする（朱 2003）。シンタシュタの年代は EAMP の前半（前 2 千年紀前半）であり、中原の「内」付きの戈も二里頭期には出現しているため、年代だけでは両論の当否は決められない。一方、烏恩（1985、2008）、林澐（1987）、李剛（2011）は内の存在をそれほど重視せず、起源について、おおよその年代から近東との関係を指摘する（図 2-14）が、比較対象地域があまりにも遠いのが難点である。



図 5-33 有蓋鬮斧（鄂爾多斯地区採集）
（左側が刃部、右側が「内」）

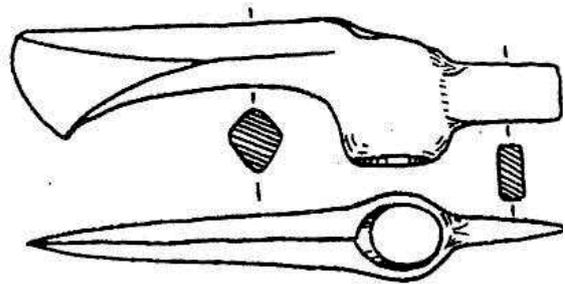


図 5-34 有蓋鬮斧（シンタシュタ遺跡出土）

分類

I 類：器身の外周全体に高まりが存在するもの。外周の高まりと同様の太さの線が器身中央にもはいる。器身は狭く刃が幅広になる。柄の突出は殆どなく、外周の高まりによってほぼ表現されている。（図 5-35-2～3）

IIa 類：I 類のような外周全体の高まりがなく、柄の長さが I 類よりやや長いもの。両側に出る柄も存在する。「内」の部分が柄部とは明確に区別されるものも多く、「内」の形態は多様である。刃部と垂直方向に数条の平行線が入り、それが刃部と柄部をまたいでいるものも多く、刃部と柄部の区分はそれほど顕著ではない。器身は I 類に類似するもの以外に、刃部がほぼ長方形を呈するものもある。（図 5-35-4～7）

IIb 類：IIa 類よりさらに柄が長い、あるいは「内」と柄部の区別の他に、刃部と柄部の区別も明確であるもの。このことは、柄部と刃部が異なる紋様を持つことにより判断される。「内」の形態に加え、刃部の形態も多種多様であり、楕円を描くものも多く存在する。IIb 類に付される紋様は剣 A2 類や刀子 C 類と同様のものが確認される（図 5-35-8～10）。

編年と祖形

以上の変化をまとめると、I 類では刃部から「内」部までがほぼ一体となっているのに対し、そこからまず「内」部が発達し（IIa 類）、さらに柄部が発達した（IIb 類）と考えられる。IIb 類には、刃部と垂直に併行線の紋様が数多く入る特徴を持つものが多いが（図 5-35-5、6、7、10）、それは I 類で外周全体と器身中央に入っていた線が、IIa 類で「内」部には入らなくなり、さらに刃部のみに数多くの平行線が附されるようになるというような出現過程を考えることが出来る。



図 5-35 有銚鬪斧の変遷

て山西省林遮峪出土品（図 5-35-7）などが挙げられ、殷墟期に併行すると考えられるが、南シベリアのタガール文化や小黒石溝遺跡でもみられるので、比較的晩くまで残ったと思われる。モンゴル国立博物館所蔵資料（図 5-35-6）は柄部と刃部は区別されるが、外周の高まりが比較的よく残っている点から考えて、IIa 類に含められよう。IIb 類は山西省曹家垣出土品（図 5-35-9）を挙げることが出来、殷墟期に併行すると考えられる。現状では I 類→IIa 類（一部→IIb 類）という変化は妥当と考えられる。

I 類の特徴は器身も外周全体に高まりが存在し、柄部突出が殆どないことであった。このような特徴によく似たものは EAMP の有銚鬪斧（図 5-35-1）に見られる。I 類における外周の高まりは、本来は刃部から連続する高まりであったことが理解され、刃部および「内」部の扁平化によって高まりが独立、装飾化していったと考えられるのである。このように、有銚鬪斧の「内」

部は器形全体の発達の中で理解でき、中原などの影響によって単なる要素として付加されたものではないことは明らかであろう。また、近東の事例を出さずとも、出現はユーラシア草原東部の中で考えることが十分可能なのである。さらに重要なことは、EAMPの有蓋鬮斧は、前2千年紀前半の段階では新疆西部までには認められるが、内蒙古には達していないこと（第3章）であるが、この点は考察において詳述しよう（第6章第2節（2））。

分布

I類、IIb類はモンゴリア（長城地帯、外蒙古）にしかない。I類は長城地帯の遼西、内蒙古中部（朱開溝遺跡）で発見されている。IIb類はモンゴル国にも例があり、長城地帯では遼西から内蒙古中部、山西、陝西北部、青海と幅広く発見されている。ただし、剣、刀子同様、長城地帯の寧夏、甘肅、それから新疆ではごくわずかである。一方でIIa類はモンゴリア（長城地帯、外蒙古）の他、南シベリアでも多く発見される。従って、I類からIIa類の発生を認める限り、有蓋鬮斧においても前2千年紀後半の段階にモンゴリアから南シベリアへの影響が認められるのである。上の様式との対比でいうと、I類からIIb類まではモンゴリア青銅器様式の所産であり、そのうちIIa類が後期カラスク青銅器様式に取り込まれたと考えられる。IIa類はモンゴリア青銅器様式でもある程度存続していたと考えられるが、前1千年紀以降の有蓋鬮斧の例は少なく、剣や刀子のように後期カラスク青銅器様式からの影響をみることは現段階では困難である。

（2）ヒレ付き装飾品

前2千年紀後半段階に特徴的な装飾品の例として、モンゴルのテブシュ・オール（*Новгородова*1989）の金製品（図5-36-5）が知られる。これは先端に目鼻の突出する獣頭（図5-22「北獣a」）がつく点から考えても、剣A類や刀子C類と対比でき、モンゴリア青銅器様式の一部をなすものと考えられる。テブシュ・オール出土品と同様の形態の銅製品は採集資料でも知られ（図5-36-6）、獣頭と針金の背に突起を持つこれらをヒレ付き装飾品II類としよう。一方、獣頭はつかないが、全体が湾曲した針金状を呈し、突起のかわりにヒレ状のものが外周につく装飾品がいくつか知られており、ヒレ付き装飾品II類と一連のものをなすと考えられる（*Bunker*1997）。年代が判るものは、内蒙古朱開溝遺跡V段階発見の有蓋鬮斧の鋳型（図5-35-3）に刻まれたもの（図5-36-4）で、前2千年紀半ばに遡る。同様のものは採集品（図5-36-3）でも知られており、特にヒレの部分は多数の細かい線で構成され、各線は先端が玉状になっている（Ib類）。同様のヒレを持つものの中には、端がラップ状になったものがあり、これをIa類とする。内蒙古自治区採集の鋳型にはIa類、Ib類が一つの鋳型に彫り込まれていた（図5-37）。モンゴル国立博物館所蔵品（図5-36-2）もIa類とできるだろう。

現状ではIb類が最も遡る例であるが、Ia類の形態は、EAMP（アンドロノヴォ文化）の耳環（図5-36-1）と比較できよう。モンゴル国立博物館の資料に関しては、既に高濱（2000）がEAMPの他、初期青銅器との（図4-2-1、4-2-2）対比を行っているが、Ia類は初期青銅器を介さずにEAMPから直接発生したことも考えられる（第6章第2節（2））。なお、次章で述べる鹿石I類における動物表現にも数本の突起を伴うものがあり、ヒレ付き装飾品との関連が想定できる（図

5-36-7)。ヒレ付き装飾品は今のところモンゴリア以外では見られず、モンゴリア青銅器様式の所産と考えられる。



図 5-36 ヒレ付き装飾品



図 5-37 ヒレ付き装飾品 I a、I b 類の鋳型 (縮尺不明)

第5章 青銅器様式から見た「初期遊牧民文化」と動物紋出現の意義

前1千年紀初頭に出現する「初期遊牧民文化」はユーラシア草原地帯全体の画期として広く使用されてきた。しかしながら第1章でみたように、草原地帯東部において「初期遊牧民文化」と考えられる要素が、その前段階のカラスク期において見出されるにつれ、「初期遊牧民文化」とそれ以前のカラスク期の文化との境界が不明瞭となってきた。この問題に対し、本論文では、「初期遊牧民文化」の開始という従来の画期を、以前のカラスク期の動態を含め、文化様式全体から再検討したい。そこで、本章では前章で得られたカラスク期の分析を基礎に、「初期遊牧民文化」成立期における青銅器の動態を整理し、「初期遊牧民文化」の諸要素で非常に重視されてきたスキト・シベリア動物紋出現の意義を考える基礎データを得ることを目的としている。青銅器の検討では、第4章で得られた剣の動態を参考にしつつ、「初期遊牧民」出現段階の青銅剣について、分類、分布を把握する(第1節)。刀子については、型式学的検討は困難であるので、金属成分において得られたデータを提示し、その地域性について考えることにしたい。そのうえで、当該段階においても様式の設定を行う(第2節)。第3節では、第4章および本章の第2節までで得られた青銅器の動態において、各種動物紋がどのような消長を示すか確認し、それらと鹿石の紋様との対比を行うことにする。

第1節 剣の検討

(1) 分類

当該段階直前(後期カラスク青銅器様式)の剣は前章で検討したカラスク式短剣(B1c/B1c'、B2c類)であり、それらの型式変遷を考慮して型式設定を行う

B1c類

カラスク式短剣の項で立てた型式であるが、もう一度特徴を見ておこう(図6-1-1)。剣身基部を切り込むような形で鏝が形成される。B1a類→B1b類→B1c類の変化では鏝部が肥大化する変化が認められた。B1c類はB1c'類とは異なり、鏝部が剣身に対してほぼ垂直に取りつく。また、鏝部は柄から区別されない。環状および傘形の柄頭がつく。

B1e類

格が突出するが、剣身側に切れ込みを持たないもの(図6-1-~6)。格は柄に対して斜めに付く。両格を結ぶ部分全体が帯状になって、柄と格部は区別される。柄頭は棒状、筒状になったものや猪像が知られる。傘形柄頭はない。

B1d類

B1c類、B1e類の中間形態(図6-1-2~3)。B1c類⇒B1d類⇒B1e類の変化は鏝部の肥大化お

よび、切れ込みが広がりつつ消失し、鐔部が刃と垂直方向に区画されていく変化と捉えることが出来る。柄頭も B1c、B1e 類両方の要素を持つ。なお、B1c 類⇒B1d 類⇒B1e 類では柄に平行線以外の紋様が入るものは認められない。

B1c'類および B2c 類

カラスク式短剣の型式である。B1c'類は剣身基部を切り込むような形で鐔が形成されるが、鐔は細く柱状になる（図 6-1-7）。鐔は柄に対して斜めにつき、柄の外形線が鐔の基部を通っている。B1c 類とは異なり、B1c'類は鐔が前型式（B1b 類）に比して小さくなる。また、B1c'類は基部が太く先端が細い脊が入る。柄頭には環、鈴が付属するものが多く、柄の紋様は綾杉紋に限られる。B2c 類も柄が扁平になる以外は B1c'と同様の傾向を持つ（図 6-1-8、6-1-9）。

B3a 類¹

突出する鐔が非常に小さいか、鐔を形成しないもの（図 6-1-10～13）。鐔あるいは剣身基部の外形線は、柄に対して斜めであり、B1c'類における鐔の退化がさらに進んだものと理解できる。脊は持たないものが多い。B1c'類であるスウェーデン東アジア博物館所蔵資料（図 6-1-10）を見ると、脊が極めて細くなっているため、脊も同時に退化したと考えられる。この資料では退化した鐔が剣身基部に接するようになっており、B3a 類の若干の例において基部が数ミリ幅の文様等で区別されていることも、この資料が B1c'、B3a 類の中間にくることを示している。なお、内蒙古東部に特徴的な蓋柄の剣は B1c'類に見られる脊を残しており、B3a 類出現と同時かそれ以前に B1c'類より派生した可能性が高い。柄頭は棒状になったものが多いが、B1d、B1e 類とは異なり、多くの棒はその下に孔を持つ。柄全体が筒状になったものも存在し、柄全体がネコ科の動物像をなす場合もある（図 6-1-13）。柄の紋様は綾杉紋を中心とするが、列状動物紋も現れている。柄に表現されたネコ科の動物像全体に入る斜線も綾杉紋の一種とみなせる。B3a、B3b 類における虎像や列状動物紋は従来、「初期遊牧民文化」における「スキト・シベリア動物紋」として重視されてきたものである。

B3b 類

鐔が剣身から離れて柄の途中に形成されるもの（図 6-1-14～16）。これらの鐔は剣身、柄に対してほぼ垂直についていることから考えても、B3a 類で既に退化した鐔とは異なるものである。剣身基部は斜めであり、B3a 類とは異なる新たな鐔を別に付加したと考えられる。柄には列をなした動物紋を持つものが多い。柄頭は棒状が多数を占める。以上のように、B1c'／B2c 類⇒B3a 類⇒B3b 類は鐔が完全に退化、消失したのち新たに付加される変化である。柄頭や紋様も推移的に異なったものを持つようになる。

¹ B3 は B1b⇒B1c'や B2d⇒B2c に後続する型式である。B の後にくる数字は B 内部の系譜を示しているため、本来ならば B1d' かつ B2d とすべきであるが、煩雑なので B3 とする。

(2) 編年

B1c'、B2c 類は、第 4 章で検討の通り、北京市昌平白浮墓や甘肅の寺窪文化（西周中期～後期併行）で見つかっている。B3a、B3b 類は南山根 101 号墓（西周後期～春秋初期併行）（図 6-1-11、6-1-12）、小黑石溝 98AIII M5（図 6-1-16）や、同 92AII M5 に（図 6-1-15）、B1e 類はトゥバのアルジャン古墳（前 9～8 世紀）（図 6-1-6）に見られる。

(3) 分布

B1d 類はミヌシンスク、B1e 類はミヌシンスク、トゥバに存在する。Ba、B3b 類の出土品は内モンゴ東部に知られるが、採集品も含めればその分布は内モンゴ中部付近（鄂爾多斯）にまで分布が拡大する可能性が高い。

以上のように、剣はカラスク式短剣でみられた形式ごとにそれぞれ異なる分布地を持ち、直前の段階（剣第 3 期、p78）からの傾向がより顕著になったものと理解される。

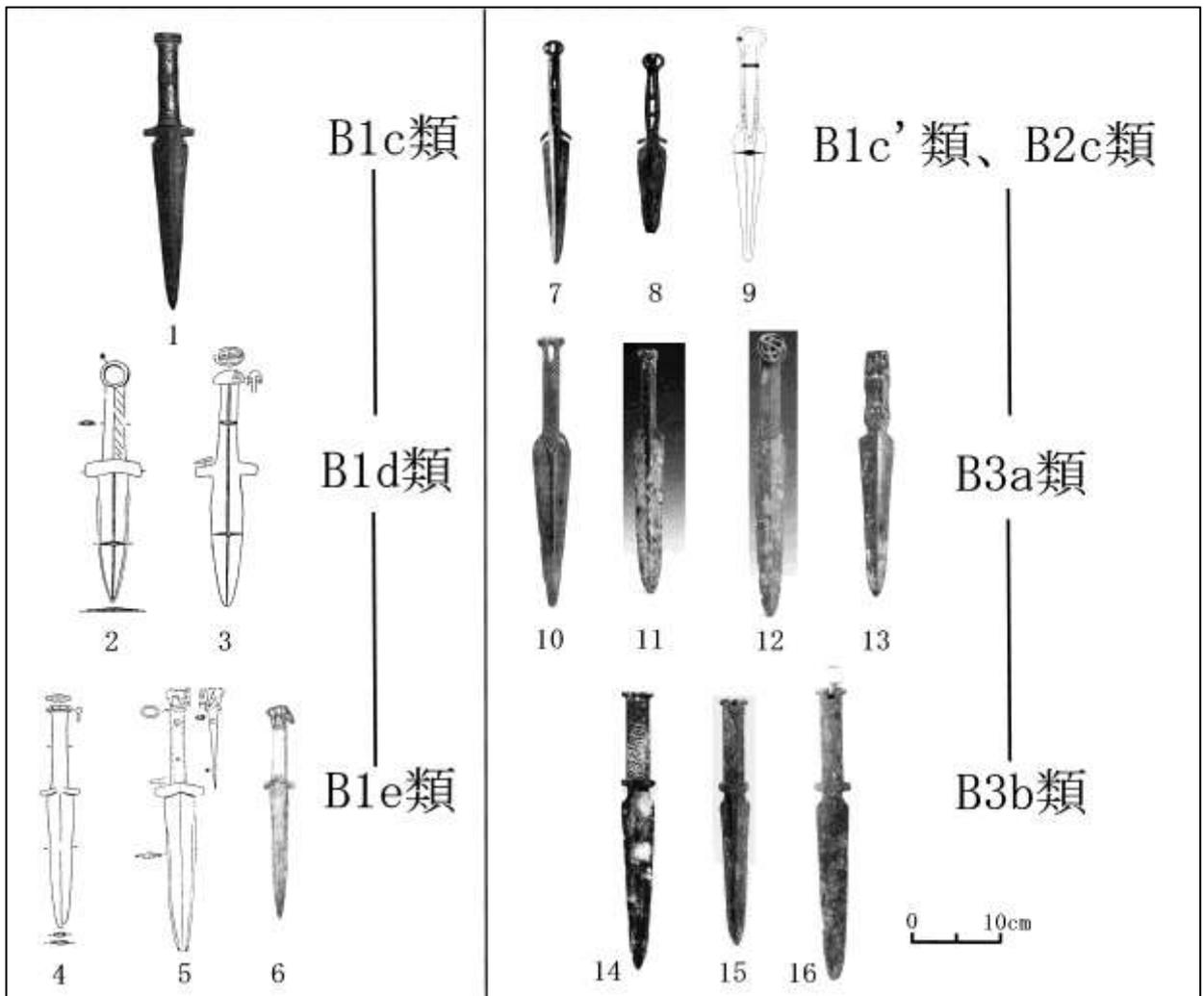


図 6-1 カラスク式短剣に後続する剣の変遷

第2節 刀子の検討と青銅器様式

(1) 刀子 Bc 類の形態変異と金属成分

刀子では後期カラスク青銅器様式以降は Bc 類がずっと存続する。刀子 Bc 類の変異は極めて多いものの、形態的特徴で細分する手立は見つかっていない。しかしながら、剣における地域性現出という事象を念頭に置くと、青銅器の金属成分においても同様の現象を見出すことが出来る。

第4章第2節(4)で言及した東京国立博物館所蔵資料(高濱 1995)、およびサックラーコレクション(Bunker 1997)で金属成分分析がなされた刀子 Bc 類と考えられるものは、長城地帯(モンゴリア)由来の可能性が高いものである。そこで、それらを刀子と剣に共通する要素である柄頭形態と柄紋様を基準に、モンゴリアを中心に分布するカラスク式短剣(B1b、B1c'、B2b、B2c 類)と、それ以降の型式(B3a、B3b 類)に対応するものに二区分することを試みた。前節で示したように、剣 B3a 類以降に最も特徴的であったのは、柄紋様では単純な綾杉紋以外に、列状動物紋が出現することであり、柄頭では棒状のものが多数を占めるようになることであった。

表 6-1 刀子 Bc 類における柄頭形態と紋様の相関

紋様		柄頭形態→										
		孔	杏仁	その他	ホック	環	動物像	棒状	環(扁平)	傘形	匙	斜
幾何学紋のみ		6	4	9	4	18	1	12	10	3	2	5
動物紋を持つ		2	4	6	4	10	1	4	1			



図 6-2 刀子 Bc 類における(古)と(新)

刀子 B3 類において、柄紋様と柄頭形態の相関を見たものが表 6-1 である。ここでは上記 2 機関所蔵資料以外のものも含めている。表 6-1 において、動物紋を有するものとほぼ相関しない柄頭形態(環(扁平)、傘形、匙、斜)を Bc 類(古)とし、残りを Bc 類(新)とする(図 6-2)。

柄文様、柄頭形態からいうと、刀子 Bc 類(古)はカラスク式短剣(B1b、B1c'、B2b、B2c 類)に、刀子 Bc 類(新)は剣 B3a、B3b 類に対応する。なお、表のごとく、Bc 類(古)は幾何学紋のみをもち、

なおかつ動物紋とは相関しない柄頭形態を持つという基準で選んでいるので、Bc 類(新)にも幾何学紋のみをもつものが多く含まれている。従って、Bc 類(新)に動物紋のような複雑な紋様を有するものが集中し、それによって金属成分が左右されるというようなことはない。

Bc 類(古)、(新)で、金属成分における鉛、砒素の割合を比較する(図 6-3)と、Bc 類(新)は Bc 類(古)に比して、鉛の割合が高く砒素の割合が低いことが判明した。南シベリアの Bc 類においては、図面と金属成分データの照合が現状では難しいが、Bc 類に併行するタガール文化の

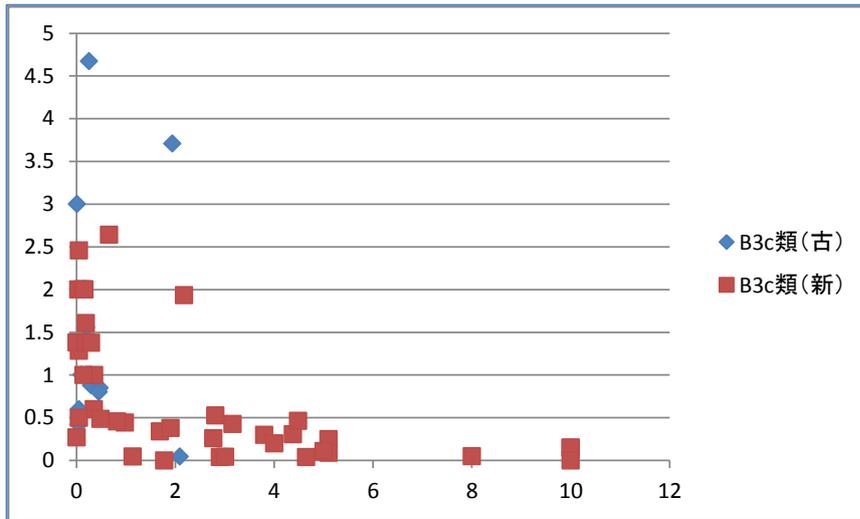


図 6-3 刀子 Bc 類における金属成分比の比較 (縦：砒素 横：鉛)

青銅器では、鉛の比率において比較的低い値（1%以下）が得られている（グリッシン 1960）。第 4 章の成分分析を併せて考えると、ミヌシンスクにおいて鉛比率が相対的に低いことは、これ以前の段階から続く、当該地域の地域性と評価できよう。本来、Bc 類は

は南シベリア（ミヌシンスク）に由来する技法で作られたものであった。モンゴリアの Bc 類（古）が成分においても南シベリアに近いことはこのことを物語るものといえる。一方で、Bc 類（新）において鉛成分比が増加していくことは、南シベリアのタガール文化とは異なる傾向であり、刀子におけるモンゴリア（長城地帯）の地域性として評価できる可能性がある。

(2) ポストカラスク青銅器様式

以上で示した剣と刀子の各型式を組み合わせると、おおよそ次のようになる。第 3 期（第 4 章参照）の終わりには、ミヌシンスクにおいて剣 B1c 類、刀子 Bc 類が、長城地帯では剣 B2c、B1c' 類、刀子 Bc 類（古）がみられた。これは前章において後期カラスク青銅器様式としたものである。それに続く第 4 期はミヌシンスクでは剣 B1d、B1e 類、刀子 Bc 類、モンゴリア（長城地帯）では剣 B3a、B3b 類、刀子 Bc（新）の段階とする。第 4 期の諸型式は、大きくいえば後期カラスク青銅器様式の諸型式の系譜をそれぞれ引くものであり、全体をポストカラスク青銅器様式とする。ポストカラスク青銅器様式ではミヌシンスク、長城地帯といった地域によって型式差が顕著になっている。この地域差は第 3 期の剣の鏢部の変化にすでにみられ、それが第 4 期になってさらに明瞭化したものといえよう。

第 3 節 青銅器様式と動物表現

第 1 章で述べたように、動物表現は「初期遊牧民文化」の起源を論じる際など、ユーラシア草原地帯の研究では重要な位置を占めてきた。本節では、モンゴリア青銅器様式からポストカラスク青銅器様式に至る青銅器と鹿石では各種動物表現がどのように現れるのかを検討する。

(1) 青銅器における動物表現

モンゴリア青銅器様式でみられる動物表現は「目鼻の突出した獣頭」（図 6-4-1～3）にほぼ限ら

れる。剣、刀子などの柄頭に獣頭形が単体であらわされ、体全体が表現されることはない。第4章で論じたように、「目鼻の突出した獣頭」の変異は多いが、大きくは二種が知られる。一つは、目鼻の孔が窪んで比較的細かい部分まで精緻に現されるもの(図6-4-1~2)、もう一つは目と鼻を玉状で表すのみのものである(図6-4-3)。前者は剣A2類、刀子C類に見られ、顎部の内側が空洞になるなど、両形式で想定した蠟型に類する鑄造技法での製作が想定される。後者は刀子A類に付され、石製の双范でも十分に製作可能である。モンゴリア青銅器様式では他に、蛇首七の柄頭において蛇表現が知られるが、数量的にわずかであり、地域も山西、陝西省北部にほぼ限られる。また、上記獣頭以外に器物上に鑄込まれる紋様としての動物表現はなく、「目鼻の突出した獣頭」の紋様も知られない。

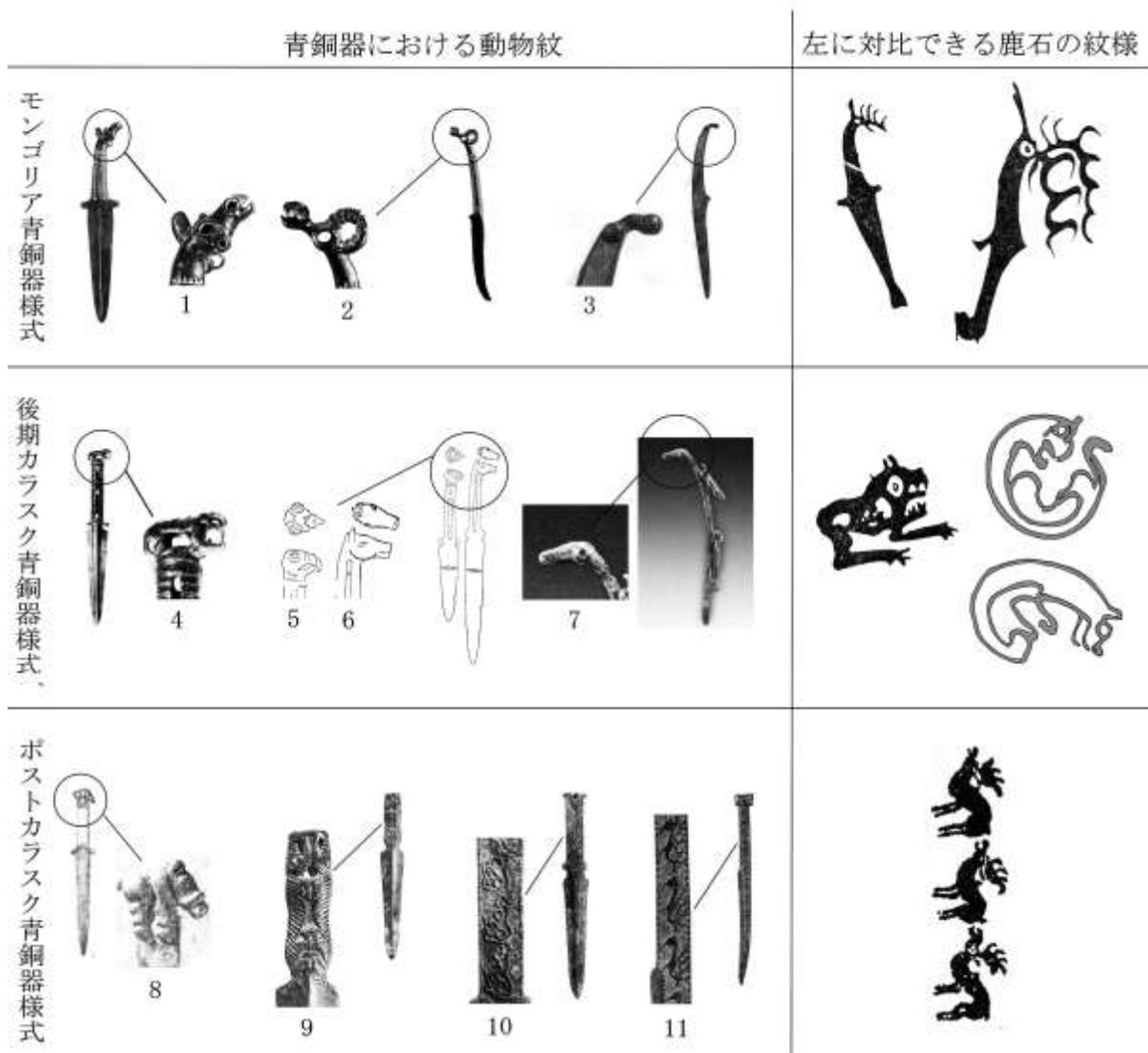


図6-4 各青銅器様式に典型的動物紋(縮尺は非統一)

前期カラスク青銅器様式では「目鼻の突出した獣頭」がわずかに知られる(刀子C類)他は、青銅器における動物表現は知られない。

後期カラスク青銅器様式では長城地帯において「口を大きく開けたネコ科の動物像」(図 6-4-4)「鳥頭」(図 6-4-5)「馬頭」(図 6-4-6)の柄頭が存在する。いずれも1点ないし数点であり、青銅器様式全体として動物像は稀である。器上に表される動物紋様も存在しない。なお、後期カラスク青銅器様式には、モンゴリア青銅器様式に見られた「目鼻の突出した獣頭」の退化したものと思われる柄頭(図 6-4-7)が存在する。これらは「目鼻の突出」という主たる特徴を既に失いつつあり、モンゴリア青銅器様式の衰退を示している。なお、以上のものは全てモンゴリアにおいて見られ、ミヌシンスクにおいては、青銅器の動物表現は知られない。「口を大きく開けたネコ科の動物像」が青銅器に現れるのはモンゴリアが最初であるが、この像に類似したものが、ミヌシンスクのカラスク文化に先行するオクネフ文化の岩刻画で多数確認されている(図 6-5)。これは、後期カラスク青銅器様式がミヌシンスクで発生したことを考えわせると非常に興味深い。

ポストカラスク青銅器様式の長城地帯においては、剣 B3a、B3b 類を中心に、後期カラスク青銅器様式に存在した「口を大きく開けたネコ科の動物」像(図 6-4-9)の以外に、蛇(図 6-1-12)を象った柄頭がみられる。さらに、紋様では列状動物紋(鹿、馬、鳥、猪)が多く出現する(図 6-4-10~11、6-2-右)。これらはモンゴリア青銅器様式に見られたような獣頭のみではなく、動物の全身の表現である。ミヌシンスクではポストカラスク青銅器様式(剣 B1e 類)以降、剣の柄頭において猪(図 6-4-8)、が多くみられ、刀子では列状動物紋が確認できる。ポストカラスク青銅器様式で見られる以上の動物意匠は従来、「初期遊牧民文化」要素の代表とされた「スキト・シベリア動物紋様」である。

以上のように、従来カラスク期の所産とされてきた動物紋の大部分は、モンゴリア青銅器様式で盛行した「目鼻の突出した獣頭」で占められているが、これらは後期カラスク青銅器様式以降衰退することが判明した。また「初期遊牧民文化」のスキト・シベリア動物紋は後期カラスク青銅器様式において「口を大きく開けたネコ科の動物像」のみが僅かに出現し、ポストカラスク青銅器様式になってそれに加え、列状動物紋が大量に出てくることがわかる。



図 6-5 オクネフ文化の岩刻画に見られる虎像

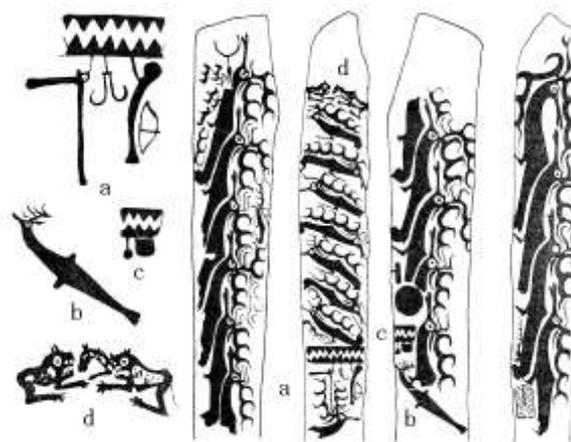


図 6-6 オーシギーン・ウブル 15 号鹿石

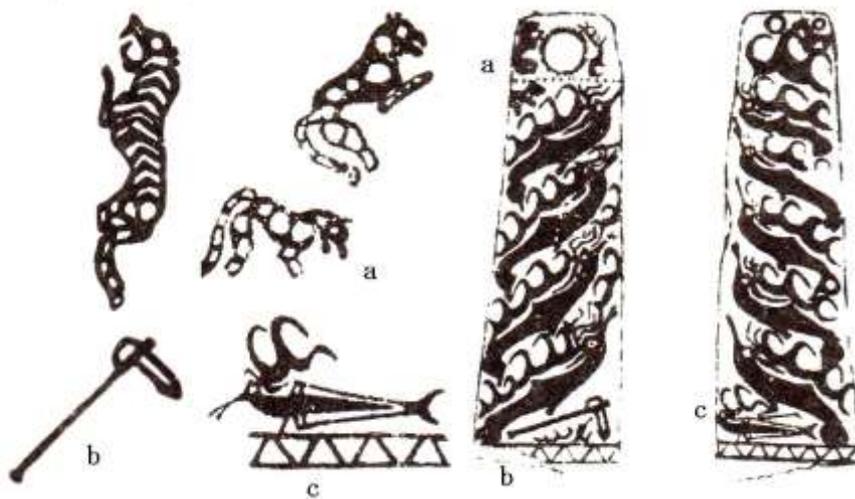


図 6-7 ジャルガラント・ソム 13 号鹿石

(2) 鹿石における動物表現との関係

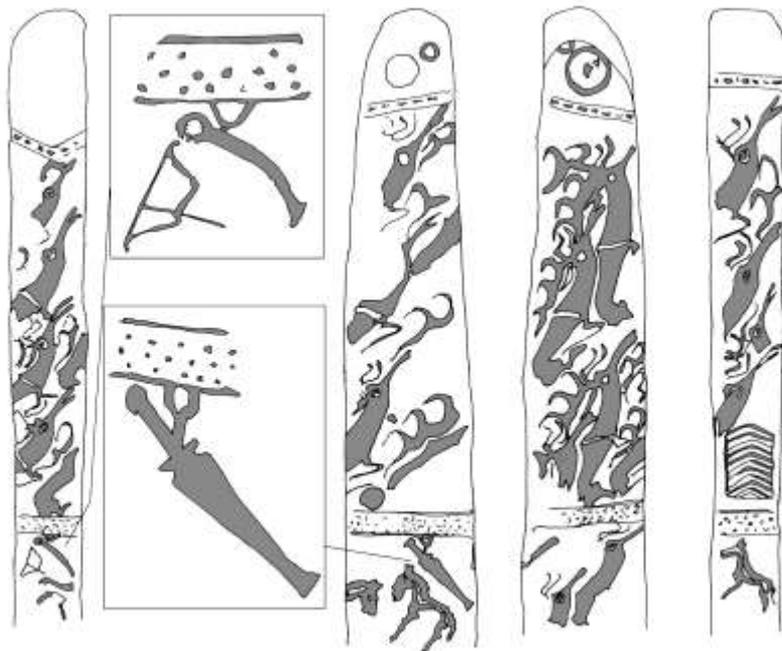


図 6-8 シルスト・ソム 2 号鹿石

鹿石 I、II 類と青銅器様式

第 1 章で述べたように、鹿石には、嘴をもつ抽象的な鹿文様を持つもの（I 類）（図 6-6、6-7、6-8、6-9）、写実的な列状の動物紋（鹿を含む）を持つもの（II 類）（図 6-10）、動物紋を持たないもの（III 類）の区分が一般的である。本論でもこの区分に従いつつ、鹿石と青銅器様式を比較する。この場合、鹿石に刻まれた武器表現による必要があり、大雑把な形態上の特徴から形式を推定するほかない。

I 類の鹿石には、剣 A 類（曲柄剣）（図 6-6）、剣 B1、B2 類の早いもの（カラスク式短剣）（図 6-8）とそれに続く剣が表現される（図 6-9）。図 6-8 などは鏢状の切れ込みがみられ、典型的なカラスク式短剣（本論文の剣 B1c'、B2c 類以前の型式）を表現した可能性があるが、鏢部がとび出るだけの単純な表現（図 6-9）もあり、それらが剣 B、C 類内のどの型式にあたるかについて特定

は困難である。分布はモンゴル北部、バイカル、新疆の北部におよび、モンゴリア青銅器様式、後期カラスク青銅器様式、ポストカラスク青銅器様式の一部の地域（モンゴリアの北側）に存在したといえる。Ⅱ類の武器表現では、剣A類、B類がみられない。分布はサヤン・アルタイが中心であり、Ⅰ類の分布域より西に偏る（Новгородова1989）。

各青銅器様式中における鹿石動物紋の位置づけ

モンゴリア青銅器様式では鹿石Ⅰ類における鹿表現（様式化された鹿）と、青銅器における「目鼻の突出した獣頭」がみられる。鹿石Ⅰ類に見られる鹿の形態は、同鹿石上にある武器表現に非常に類似している場合がある。図6-7は鹿石下部の帯の上から短い線が引かれ、帯と水平に一体の鹿が表現される。この鹿が鞆状のものに入っていること、さらに多くの武器表現は鹿石の帯の付近にあることから考えて、この鹿は武器の表現と同様であるとできよう。同じ表現は図6-6でもみられる。ここから類推するならば、モンゴリア青銅器様式の「目鼻の突出した獣頭」を持つ剣A類や刀子C類は、器形全体で鹿石Ⅰ類の様式化された鹿を現している可能性がある（図6-4上段）。つまり、モンゴリア青銅器様式の鹿石分布圏においては、鹿石の主要表現と青銅器の表現が一致しているのである。一方でわずかながら、Ⅰ類においてもスキト・シベリア動物紋の「口を大きく開けたネコ科の動物」像や、列状動物紋（馬）といったものが存在する。ただし、これらはいずれも、様式化された鹿の周囲を充てんするように小さく描かれることが殆どである（図6-6、6-7、6-8）。仮に、典型的なⅡ類がこの時期にあり得たとしても、様式化された鹿がその他の動物紋の間を埋めるようにして表現されることは鹿石全体においてない。従って、様式化された鹿以外の動物紋は、モンゴリア青銅器様式の段階では、青銅器にも現れず、鹿石においても副次的な扱われ方であることが理解される。

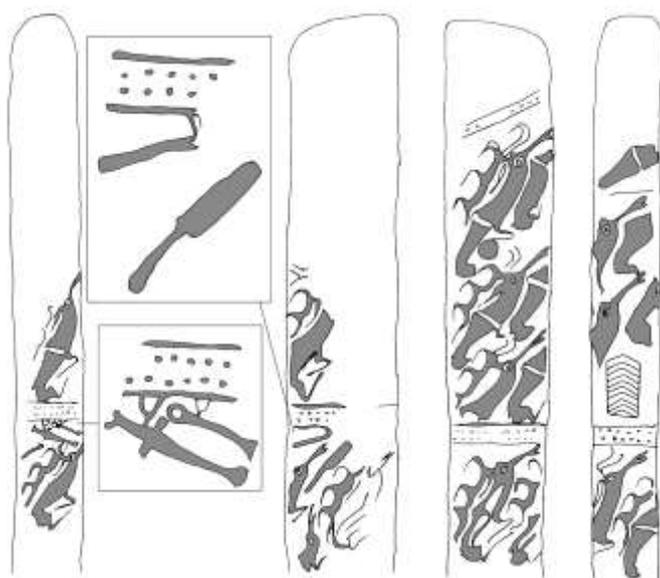


図6-9 シルススト・ソム3号鹿石

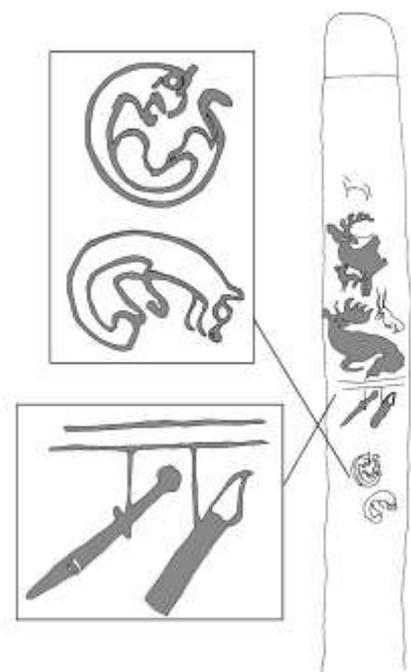


図6-10 モドティン・アム鹿石

後期カラスク青銅器様式では、鹿石Ⅰ類における様式化された鹿に対応すると考えた「目鼻の突出した獣頭」が青銅器にはない。青銅器に現れる「口を大きく開けたネコ科の動物」像は、鹿石Ⅰ類に見られるが、主文様の鹿に対して客体的でしかない(図6-6、6-7)(図6-4中段)。また、これ以外の動物紋も副次的扱いである。つまり、後期カラスク青銅器様式では、様式化された鹿が青銅器からは姿を消し、前様式とは逆に、鹿石の主要表現と青銅器の表現が一致しないことが指摘出来る。一方で「口を大きく開けたネコ科の動物」が青銅器に現れ始めるが、その数は限られており、鹿石においても副次的な扱いであることに前段階と変化はない。他の動物紋も青銅器には現れず、鹿石においては「口を大きく開けたネコ科の動物」と同じ位置づけである。

ポストカラスク青銅器様式では、鹿石Ⅰ類が存続しているとすれば、後期カラスク青銅器様式同様、鹿石の主要表現と青銅器の表現が一致しない。ポストカラスク青銅器様式以降に出現するⅡ類の鹿石には列状動物紋が主体で刻まれ、多くの青銅器の表現と一致している(図6-4下段)。

以上、青銅器様式内の動物紋の変遷を鹿石とともに検討した。動物紋における青銅器と鹿石の関係性という点でまとめると、「目鼻の突出した獣頭＝様式化された鹿」と、それ以外の副次的な動物紋というモンゴリア青銅器様式で確認された特徴的な主従関係が、後期カラスク青銅器様式では主に鹿石上で続くが、ポストカラスク青銅器様式に至って崩れていくという変化を示している。ただし、上の主従関係が完全に逆転する現象(様式化された鹿が、他の動物紋の副次的要素となる場合)は、Ⅰ、Ⅱ類の存続期間にかかわらずほぼあり得ない。

第6章 ユーラシア草原地帯東部における青銅器文化の形成と展開

第1節 前2千年紀前半における動態

(1) セイマ・トルビノ青銅器群分布の背景

西漸説の再検討

第2章で行った分析を基に、チェルヌィフのセイマ・トルビノ青銅器群西漸説を再検討しよう。本論で分析対象としたのは有鋸矛、有鋸斧の二つのみで、セイマ・トルビノ青銅器群には他の器種も存在する(図2-5)が、器形が簡素もしくは数量が少ないものであり、型式学的検討は困難であった。さて、セイマ・トルビノ青銅器群の起源地であるが、特にウラル以東に広がりつつ時期的変化を示す有鋸矛A、B、C類に注目しても、ウラル山脈より東のアルタイを中心にA類が多く、西にC類が多いとはいえない。また、これらの金属成分でも、アルタイ(東方)起源説を積極的に支持する情報は得られなかった。有鋸斧I類も分布全域におおよそ等質に広まるものであり、錫を含むものもアルタイ付近に特に多いと言えない。現状では、有鋸矛、斧ともに鍛造品から鑄造品の幅広い型式(サムシ・キジロボ青銅器群(有鋸矛D類、有鋸斧II B類)は除く)が安定して存在するウラル山脈附近が、その発生地としての可能性を有すると考えられる。このこ



図7-1 セイマ・トルビノ青銅器群拡散の状況

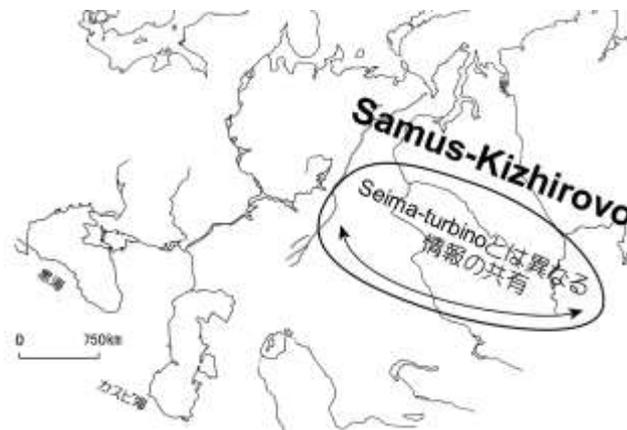


図7-2 サムシ・キジロボ青銅器群拡散の状況

とは、成分分析とも矛盾しない。

さらに注目したいのは、有鋸矛ではウラル山脈附近からオビ川流域(西シベリア)附近までが有鋸矛A~C類という変化を共有していることである。これは特定時期における一度きりの集団移動では説明できず、モノや情報の特定の起源地が存在したとしても、一定期間、上の領域でコミュニケーションの更新が可能であったことを示している。もちろん、さらに細かい型式やコンテキストの分析で地域性が析出される可能性は十分に考えられ、アルタイあるいはウラルでの地域的な発展を考えることも必要であるが、このような領域の関係性がいかにして保持、再生産されていたかということも今後の重要な課題といえよう。さらに有鋸矛HA、HB類の変化も有鋸矛A~C類のそれに類するもので、ウラル山脈をはさ

で重なりつつも、東西でそのコミュニケーションに大きく域差がみられることが示された(図7-1)。有蓋斧Ⅰ類については分布域全体に等質に分布するが、有蓋矛Ⅲ類との共伴例が知られる有蓋斧ⅡA類はウラル山脈以東にその分布が偏り、有蓋矛A~C類に見られたコミュニケーションに対応する可能性がある。

セイマ・トルビノ青銅器群とサムシ・キジロボ青銅器群

次に、セイマ・トルビノ青銅器群よりも時期的に後出するとされるサムシ・キジロボ青銅器群について考えよう。両者の前後関係を層位、一括資料から検証することは現状では困難であるが、有蓋矛の脊の三叉部の形態や有蓋斧の偽耳などから考えて、セイマ・トルビノ青銅器群を基にしてサムシ・キジロボ青銅器群が発生したと考えられる。さて、分析で示したように、有蓋矛および有蓋斧ではサムシ・キジロボ青銅器群(有蓋矛Ⅳ類、有蓋矛Ⅱb類)は、上述のセイマ・トルビノ青銅器群の諸型式から系譜はたどれるものの、両者は明らかに型式的傾向、分布が異なる。現状ではサムシ・キジロボ青銅器群に関して、ウラル山脈より東の何処に起源するかを決めることは難しいが、セイマ・トルビノ青銅器群とサムシ・キジロボ青銅器群は、その背後にある内容については異なるものであろう。セイマ・トルビノ青銅器群に見られるコミュニケーションはしばらく保持されたが、そのままウラル山脈を中心に一定方向へ変化していくのではなく、新たなサムシ・キジロボ青銅器群に示されるように内容や中心が変化したのである(図7-2)。この点が本論文の分析で得られた、チェルヌيوفのアルタイの一元拡散モデルとの大きな差である。特定の内容を持つ青銅器文化圏が長く続かず、内容、中心地を変えていく現象は、第2節で記すカラスク期における状況とも共通している。

セイマ・トルビノ青銅器群の性格

セイマ・トルビノ有蓋矛A~C類、HA~HB類の大型化で、蓋の部分を中心に細める、或いは蓋の口部を広げることを示唆したが、これらは実用的とは言えず、チェルヌيوفの言う戦士集団とはあまり符合しないように思われる。ただし、写真で見る限り明瞭に研がれたものもあり、実用性の議論にはさらに詳細な観察が不可欠である¹。有蓋斧における変化に対する評価は難しいが、総じて装飾が豊かになる傾向であり、機能的な変化ではない。

セイマ・トルビノ青銅器群は詳細な出土状況が不明なものが多い。しかしながら、人骨を全く伴わず、利器が床や壁に突き刺さって発見される「空墓」が一定程度存在する。チェルヌيوف自身も言及しているが、当該青銅器群の出土状況は非常に特殊なものである(Chernykh 2008)。ロストフカ墓地でも墓本体以外に、墓に伴う埋納も多く存在する。このような状況も有蓋矛の大型化となんらか関係するかもしれない。またサムシ・キジロボ青銅器群に関しても、「祭祀遺跡」での発見が多いという。このように考えてくると、ユーラシア草原地帯では、実用的な青銅利器(簡素な刀子など)を主体とする以外に、特殊な青銅器を広範囲で共有していることとなる。特殊な青銅器の広範囲での共有という事象も、後述の前2千年紀後半におけるモンゴリア青銅器様式の

¹ 仮に、セイマ・トルビノ有蓋矛のA~C類が実用品でないとしたら、錫青銅という強靱な合金で最初期に出現するものとして興味深い。

状況と類似するものである。

(2) 初期青銅器分布の背景

第3章の検討により、前2千年紀前半の新疆、長城地帯において、二つの境界が引くことが出来た。まず新疆東部の天山山脈における境界1により、EAMP（チェルヌィフのユーラシア冶金圏）との類似性が低下する。さらに内蒙古西部における境界2において、工具と装飾品の割合が逆転する。以下ではまず、第3章における初期青銅器の①a群（EAMPに類似品がみられるもの）を中心に上げ、それぞれの境界の意味を考察しよう。

境界1における青銅器の変化について

まず学史での認識を整理しておこう。梅建軍は哈密地区（境界1のすぐ東）の青銅器とアンドロノヴォ文化（EAMP）の青銅器との類似性を強調している。そして、ユーラシア草原地帯と河西走廊との中間地点として、新疆の哈密地区を重視する（Mei 2003）。一方で、劉学堂（2005）はおおよそ境界1を挟む青銅器の器種を中心とする相違について指摘している。つまり、新疆の青銅器に関して、天山以北、以南（本稿の区分とほぼ同じ）に区分し、両者は本来文化系譜が異なったもので、天山以南の青銅器が長城地帯に伝播したとする。

本稿の分析結果では境界1は型式、出土状況差によって確認され、劉学堂の見解がある程度支持される。しかし、境界をはさんで対比可能な型式も相当あるので、劉学堂の言うように境界1をそれほど強固なものにみなせるかどうかは不明である。境界1以東は以西と区別されながらも、梅建軍の言うように何らかの関係は有していた可能性が高い。境界1以西では、青銅器の型式の殆どがEAMPあるいはそれと同様の領域に分布の主体がある青銅器群と対比可能なものである。さらに、デポの存在から考えて、基本的に境界1以西はEAMP（アンドロノヴォ文化）の広がりの一連のものともみなせる可能性が高い（Kuzmina 1998、2001）。土器の分析（韓 2005）でも、新疆の西部がアンドロノヴォ文化に含まれることになっており、この結果がある程度支持される（図 7-3）。なお、新疆の最西に位置する塔什庫爾干では今のところ墓地しか見つかっておらず、同じく境界1以西である温泉県における墓葬と、その様相において若干相違がある。この差に関しては、アンドロノヴォ文化あるいはEAMP全体を含めて議論する必要がある、今のところは保留しておく。アンドロノヴォ文化のそのものの広がりに関しては、非常に議論が多いところである。クジミナは牧畜の開始による階級分裂の進行を想定し、青銅器のデポに関しては軍事的緊張の結果で、工人と家族のそれがあるとする（Kuzmina 1998、2001）。一方、コルヤコバはアンドロノヴォ文化の段階はその前段階より社会の複雑性は減退するものの、総じて、社会的不均衡は増す傾向にあるという（Koryakova 2002）。いずれにせよユーラシア草原地帯中部以西における本格的な青銅器時代の開始として、社会進化が想定されている。

一方、境界1以東では青銅器の数量自体は増えるものの、EAMPに類似する青銅器（①a群）は減少し、在地の土器文化に帰属する主に墓葬から出土するものが多い。在地の土器文化の土器は基本的に彩陶であり（図 7-4）（韓 2005）、アンドロノヴォ文化の土器とは異なり、その彩陶は甘粛の方へ分布が続いていく（Mei 2003、韓 2005）。初期青銅器の①a群のうち、特に有蓋鬲斝

A類という精製品のほか、かなりの型式が欠落していることから、EAMPの総体的東漸は見込めない。青銅器は出土状況では在地の土器文化に帰属するので、在地集団の主体的対応が想定される。ヒなどは在地の骨器を模倣した可能性もある(図4-1-20)。④群などの独自の型式はあるものの、主に実用面に特化したものが多く、それが境界2以東全体で共有されることはない。すなわち、精製から粗製という青銅器の様式的まとまりの共有関係においても境界1以西と以東は異なるのである。この要因に関しては、長城地帯において佐野(2004)が指摘した、青銅器を受け入れる側の社会の社会構造、あるいは他の文化的要因(Черных 2005)の可能性もある。非常に大雑把にいうと、青銅器様式としてのEAMP自体はその主体となる土器、墓葬文化(アンドロノヴォ文化)からそう逸脱することはなかったと考えられる。なお、劉学堂(2005)も指摘するように境界1はほぼ天山山脈を挟んでおり、現在では草原とオアシスという環境差が存在する。同様のことが前2千年紀においても想定可能かどうかは今後の問題であろう。

さて、以上のような解釈は、本論で取り扱った境界1以東の青銅器が以西のものより時期的に早い場合には難しくなるであろうか。EAMPはより遅くまで存続した可能性があり、比較の対象としたシャムシデポが、境界1以東より遅い可能性も残っている(Ke 1998, Kuzmina 2001)。また境界1以東では、当該段階以前から青銅器が幾分存在し、それらとの在地的連続性が存在する可能性もある(佐野 2008)。しかしながら、境界1以東の青銅器がまとまりを持って、境界1を越えて西へ大きく影響を及ぼすことはない。また、境界1以東では精製品を広域で共有する現象は、今のところみられず、これも境界1以西と異なる現象といえる。境界1自身は年代的問題では動かないのである。さらに、EAMPの幾つかの要素は確実に境界1、2以東にも達していることを考えると、境界1以東においてEAMPは欠落的に伝播してきた可能性が高い。

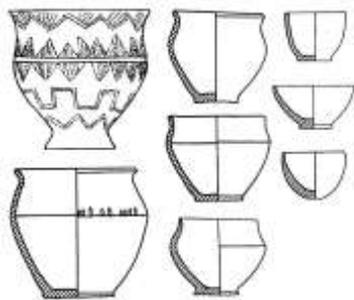


図7-3 境界1以西の土器(新疆薩孜、下坂地遺跡出土)



図7-4 境界1以東の土器(新疆天山北路遺跡出土)

境界2における青銅器の変化について

林澐(2002)や高濱(2006)は、境界1以東においては、他地域の青銅器文化の影響を受けつつ、独自の青銅器を開始したとする。林澐は中原の青銅器文化の影響もかなりの程度認めている。佐野(2004)は社会階層化が遅れた長城地帯では、青銅器は特別な意味が付与されず実用的に使用されたとし、中原との対比を示した。また、上述のように宮本(2008)は長城地帯内部における西から東への青銅器における情報の欠落を示している。

表 7-1 前 2 千年紀におけるユーラシア草原地帯中～東部の青銅器文化の年代

アルタイ、サヤン山脈以西		アルタイ、サヤン山脈以東 (モンゴリア)	
草原地帯	森林草原地帯		
EAMP	セイマ・トルビノ 青銅器群	初期青銅器	B.C.2000
	↓		
	サムシ・キジロボ 青銅器群		
	↓		
	前期カラスク 青銅器様式 (ミヌシンスク)	モンゴリア 青銅器様式	B.C.1500
			B.C.1100

セイマ・トルビノ青銅器群自体にそもそも大型化する傾向があったことは強調されてよい。下王崗遺跡では灰坑から複数件が出土し、通常の墓葬における副葬品の形ではない。青海省沈那出土品のコンテクストの詳細は不明であるが、この矛にやや後出する卡約文化では有蓋矛は一般に墓葬で発見されるのに対し、沈那では単独で出土している。このように、初期青銅器の有蓋矛Ⅱ類は現状ではやや特異なコンテクストを持っており、前で検討したセイマ・トルビノ青銅器群の性質を考えれば興味深い。つまり、有蓋矛Ⅱ類はセイマ・トルビノ青銅器群の有蓋矛Ⅲ類の単なる模倣で、中国内で突然大型化したものというよりも、Ⅲ類の本来持つ大型化、非実用化の延長上にあるものと把握できるのである。このことは EAMP の影響を受けた諸地域が単純な工具や装飾品を中心に受容したのとは対照的である。さらに有蓋矛Ⅱ類は新疆にはなく、その分布域は境界 1 の東南にあたる青海、陝西、山西、河南であり、長城地帯の南部につづいている。有蓋矛Ⅱ類の数量はまだ少なく確定的ではないが、この分布域は現状では前項の EAMP の西からの欠落的伝播域とは異なる様相を示している。①c 群（新疆、長城地帯以西にも類似品がみられるが、検討すべき点が多く残るもの）に関しては、次段階（前 2 千年紀後半）以降の青銅器との関連も指摘できて興味深い、評価は難しいのが現状である。

新疆、長城地帯の初期青銅器における 2 系統性

第 1 章で記したように、前 2 千年紀半ばまでのユーラシア草原地帯を中心に EAMP が、より北方の森林草原地帯を中心にセイマ・トルビノ青銅器群（そして、やや東に偏りつつも、それに後続するサムシ・キジロボ青銅器群）が、互いに重なりつつ広まっていた。新疆、長城地帯は草原地帯の最も東部に位置し、その青銅器の開始において、EAMP およびセイマ・トルビノ青銅器群の影響を受けていたといえる。しかしながら、新疆、長城地帯の大部分では、両青銅器文化全体が直接流入することではなく、各地域によって異なる対応を示しており、対応の傾向は、現状では影響の発信側である青銅器文化によって大きく二分できた。まず、EAMP の影響は、この段階の新疆、長城地帯全域に及んだことになるが、その影響は等質なものでない。まず、境界 1 以西までは、ほぼダイレクトに EAMP の影響を受けた可能性がある。境界 1 以東では EAMP や中原の

青銅器は様式としては現れないが、小型の実用品や装飾品を中心に EAMP の要素を取り入れるか、あるいは新たな型式を若干創作した。その要因は佐野の指摘する在地の社会構造に起因する可能性もある。さらに、境界 2 以東では、EAMP の要素はさらに欠落する一方、中原の影響を受けた痕跡がみられる。以上のように、EAMP の要素が欠落的に流入する新疆東部、甘肅、内蒙古では、EAMP の影響を受けつつも、各々で実用工具や装飾品を志向したのである。このような新疆東部から長城地帯における様相と、有蓋矛 II 類を出土する青海地域では青銅器への対応の差がある、すなわち前者が実用工具や装飾品を、後者が非実用器を志向することが従来指摘されている（宮本編 2008）。ただし本論で示したように、青海地域に見られる対応は、そこから陝西、山西、河南と長城地帯の南部につづいており、分布においても EAMP の要素を受容する地域と相違が確かめられた。また、この非実用的性質はセイマ・トルビノ青銅器群本来においても確認できることを指摘した。最後に注意する必要があるのは、以上で検討した初期青銅器はいずれの地域にあっても、EAMP およびセイマ・トルビノ青銅器群全体あるいはそれに匹敵するような精製品から粗製品まですべて備えた青銅器の様式ではないということである。境界②以東の河西回廊や遼西などからは、やや複雑な形をした、用途不明の器物（四壩文化の権杖頭など）が発見されている。それらは各地域の諸集団のなかで、青銅器様式の精製品として機能していたかもしれないが、地域をこえて広まることはない。また、有蓋矛 II 類も他の青銅器との共伴は知られない。従って、境界 1 以東では、青銅器の様式を創作して長城地帯全体で共有するというのではなく、EAMP の周辺的、あるいは不完全な様式としての様相を呈していると考えられる。長城地帯の独自性を主張する根拠の 1 つとして、装飾品 A 類がアンドロノヴォ文化のそれそのものではなく、ある程度改変されたものであることが従来では挙げられた。その観察は確かに正しく、本論の有蓋矛 II 類などにおいても同様のことを指摘でき、その意味では独自といえる。しかし、それが独自の型式として、さらに他の型式も伴った幅広い様式として、境界 1 以東を結びつけるとまでは評価できない。さらに、青銅器の型式における割合の分布はおおよそ東西に地理勾配を示しており、新疆、長城地帯内における各地域同士の関係性はネットワーク的でなく、連鎖的なものであると想定で

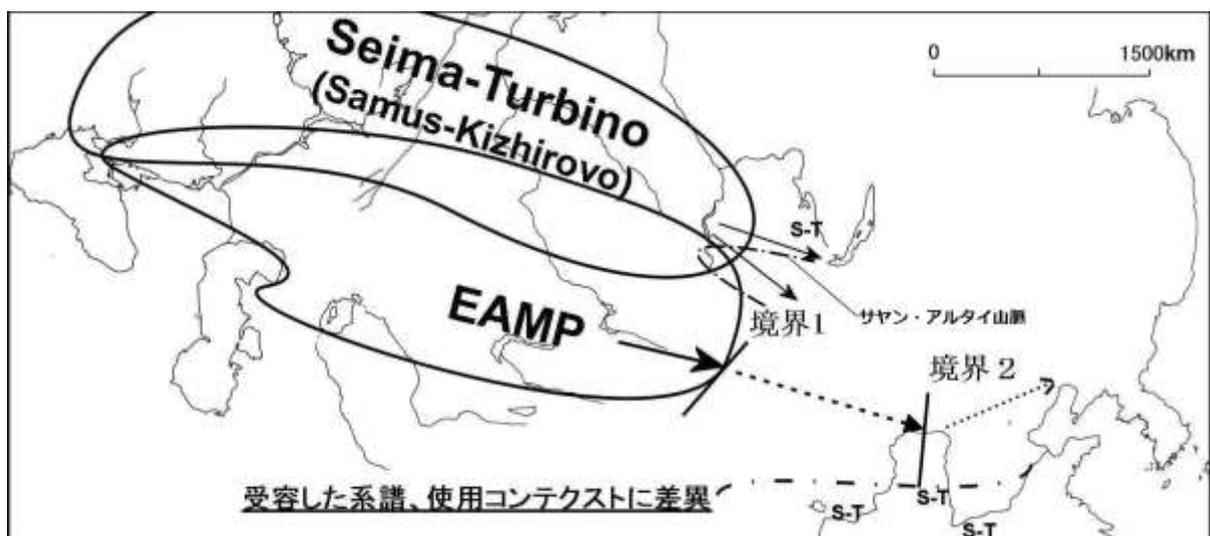


図 7-6 ユーラシア草原地帯東部における初期青銅器の位置づけ

きる。このような境界1以東の関係のあり方は、新石器時代の土器における交流（宮本 2000）の延長である可能性が高いであろう。すなわち、セイマ・トルビノ青銅器群や EAMP がセットとして確認できる南シベリアのミヌシンスク、新疆北部（境界1以西）以外の地域（モンゴリア）では、この段階は、青銅器が様式として現れる前2千年紀後半以後とは大きく様相が異なることが把握できる。

第2節 前2千年紀後半から前1千年紀初頭における青銅器様式の動態

ここでは第4章、第5章における分析に基づき、設定した各青銅器様式の内容およびその変化の要因について考えることにしたい。先に様式の変遷を整理しておくとして、前2千年紀後半にモンゴリアでモンゴリア青銅器様式が、南シベリアで前期カラスク青銅器様式が成立する（第1期）。前2千年紀末に前期カラスク青銅器様式がモンゴリア青銅器様式の影響を受け、南シベリアにおいて後期カラスク青銅器様式が発生する（第2期）。発生後、後期カラスク青銅器様式はモンゴリアに拡散し、前1千年紀初頭の南シベリアからモンゴリア斉一的様式圏を形成する（第3期）。第4期には南シベリア、モンゴリア両地域は、後期カラスク青銅器様式の伝統にあるものの、地域性を帯びるようになり、これらをポストカラスク青銅器様式とした。なお、モンゴリア青銅器様式、前期、後期カラスク様式は従来の「カラスク期」に、ポストカラスク青銅器様式の成立時期は従来の「初期遊牧民文化」の成立期におよそ相当する。

（1）前2千年紀後半における青銅器様式の起源

ここで、前段階（前2千年紀前半）までの状況を踏まえ、前期カラスク青銅器様式、モンゴリア青銅器様式の起源について考えよう。前期カラスク青銅器様式は南シベリアの分布の中心はミヌシンスク盆地であり、トゥバまで確認される。新疆北部まで分布が広がる可能性があるが、後のモンゴリア青銅器様式と比較するとその範囲はかなり限定的である。形式的に最も遡る刀子 Ba 類に類似した青銅製品は南シベリア以西にはないが、ミヌシンスク盆地のオクニョフ文化の骨柄銅刀がその祖形となった可能性がある。既に第4章で言及した通り、刀子 Ba 類は模を用いた製作が想定され、祖形の骨柄銅刀を模して同様の形に比較的容易に作ることができ、また刀子 Ba 類のあるものには痕跡器官が残っている点から考えても、骨柄銅刀が祖形である可能性は高いと考えられる。ただし、様式発生の実年代について、前2千年紀半ばから後半のいずれの段階かを決定することは困難である。前節で見たとおり、前2千年紀前半のミヌシンスクでは、EAMP（アンドロノヴォ文化）およびセイマ・トルビノ青銅器群がセットとして確認できた。しかしながら、器種や型式から言って、両者は前期カラスク青銅器様式以降の青銅器様式には殆ど影響を及ぼすことはなかった。後期、ポストカラスク青銅器様式以降、南シベリアで発達していく有蓋鬮斧に関しても、分析で明らかにした通り、剣、刀子同様モンゴリア青銅器様式との関係の中で発達した可能性が高い。前2千年紀半ば以降は、ミヌシンスク固有の青銅器文化である前期カラスク様式が発達していくのである。このように、前期カラスク青銅器様式の開始は、山脈に囲まれたミヌシンスク盆地が強い独自性を発揮していく画期として、またそれがモンゴリア青銅器様式の開始時期とほぼ同時である点でも注目できるが、EAMP、セイマ・トルビノ、サムシ・キジロボ青

銅器群を駆逐しつつ、前期カラスク青銅器様式が如何に形成されたかについては、今後の課題である。

モンゴリア青銅器様式はトゥバ、バイカル湖東部、モンゴル、長城地帯に広がる。比較的出土品が多い長城地帯では、遼西の遼寧省法庫が東限であり、そこから内蒙古東、中部、河北北部、山西北部、陝西北部までひろがる。ただし、オルドス以西の寧夏、甘肅、新疆には様式としては広がらない。内蒙古西部から甘肅は乾燥した砂漠地帯が続き、新疆はアルタイ山脈を隔てているので、モンゴリア様式の分布域はモンゴル高原にはほぼ相当するといつてよい。モンゴリア青銅器様式で最も遡る出土品は内蒙古朱開溝遺跡Ⅴ段階出土の劍 A 類、刀子 A 類である。当該青銅器様式の精製品によくみられる目鼻の突出した獣頭は、長城地帯の例ではないが、河北省台西遺跡出土の匙に付属するものが年代的に最も遡る（河北省文物研究所編 1985）。モンゴリア青銅器様式の劍と刀子のすべての形式がセットで現れるのは殷墟併行の段階であるが、その発生は二里岡併行（前 2 千年紀半ば）まで遡る可能性がある。モンゴリア青銅器様式の系譜的起源に関して、まず考える必要があるのは前節で検討した初期青銅器である。従来でも長城地帯における青銅器を前 2 千年紀前半以降から連続的に考える見解が存在し（林澐 2002）、その他多くの研究でも「北方系青銅器」として長城地帯の青銅器を一括して考える傾向がある。しかしながら、初期青銅器とモンゴリア青銅器様式には大きないくつかの差があり、結論から言えば、両者は系譜関係をほとんど持っていないと考えられる。まず最も顕著な差は両者の分布である。初期青銅器の多くは新疆から甘肅・青海付近（図 7-5、7-7 の境界 2 以西）に集中しているが、その範囲はちょうどモンゴリア青銅器様式の空白地になる。宮本はこの現象を長城地帯の東西の地域差として把握し、長城地帯西部における鉄器化をその要因の可能性として挙げている（宮本編 2008）。さらに興味深い現象が新疆東部の哈密地域（前節の境界 1 以東、境界 2 以西）で見られる。哈密地域においては、初期青銅器を多く出土した在地の天山北路文化の後に、土器の系譜上つづく在地文化として焉不拉克文化が知られる。焉不拉克文化は時期的にはモンゴリア青銅器様式以降に相当するが、初期青銅器と同様の比較的単純な器種の青銅器を有する。一方で、モンゴリア青銅器様式に特徴的な青銅器は発見されていない。ところが、焉不拉克文化には属さない哈密近くの遺跡（デポの可能性）において、モンゴリア青銅器様式の刀子 A、C 類が発見されている（王 1986）。この事象も初期青銅器の系譜を引く青銅器とモンゴリア青銅器様式の器物が同時期において異なった存在であることを示すものと言える。これに関連して、近年、林澐（2011）によって新疆北部のアルタイ山脈南側を通じた、青銅器時代の東西交流が指摘されており、ユーラシア草原地帯において東方からの影響を巨視的に論じたものとしては注目できよう。しかしながら以上に示したように、前 2 千年紀後半には、新疆北部から甘肅、内蒙古という初期青銅器の流入ルートが衰退する様相を呈している。さらに、林澐がカラスク式短劍（本論文の劍 B1、B2 類）の始まりとする朱開溝遺跡出土の短劍は形式的には曲柄劍の部類（本論文の劍 A1、A2 類）にあたるものであり、モンゴリア（内蒙古）からカラスク式短劍が西方へ直接的に拡散したという説は成り立たない。カラスク式短劍は前 2 千年紀の終盤から前 1 千年紀の最初期にミヌシンスクを中心にして拡散したのである。このように、前 2 千年紀以降の青銅器時代では、各段階において、異なった文化領域が形成され、それに伴う青銅器の拡散ルートも一定ではないことが知られる。

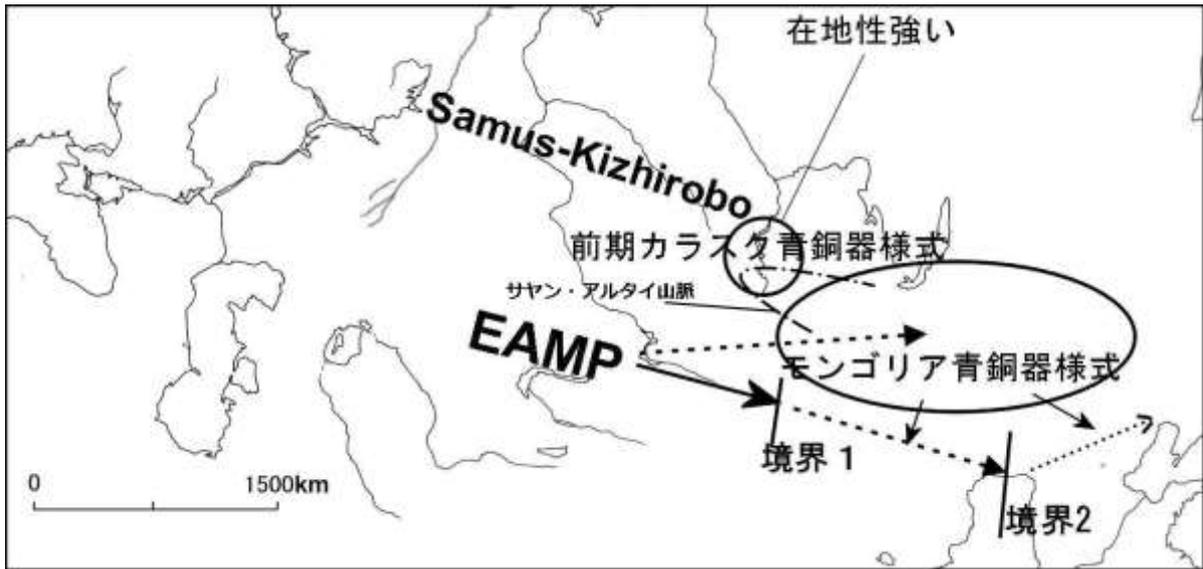


図 7-7 前 2 千年紀半ばのユーラシア草原地帯東部

さて、モンゴリア青銅器様式の系譜的起源を考えるにあたって特に重要であるのは有蓋鬮斧である。有蓋鬮斧の分析において、モンゴリア青銅器様式で最も遡る型式は EAMP（アンドロノヴォ文化）の有蓋鬮斧の「内」の部分が発達したものであることを明らかにした。ところが、EAMP の有蓋鬮斧は初期青銅器の段階には境界 1 以東の地域には達していない。従って、初期青銅器段階かそれ以降にモンゴリア付近に達した EAMP の別の一群が存在し、そこからモンゴリア青銅器様式が発生したと考えられる。祖形を EAMP（アンドロノヴォ文化）のラップ形耳環とするまたタテガミ付き装飾品も、初期青銅器の装飾品 A 類から直接発生したものではなく、EAMP から新たに生じてきたものであろう。ただし、モンゴリア青銅器様式には EAMP にはない新要素が多く含まれるほか、刀子 C 類で想定した蠟型に類する技法や、錫の含有量が比較的高いといった金属成分についても EAMP にはみられず、その発生の詳細については今後の課題とするほかない。モンゴリア青銅器様式は EAMP の系譜は引きつつも、全く独自の青銅器様式と評価できる。なおセイマ・トルビノ青銅器群は錫の含有量が高いという点ではモンゴリア青銅器様式に類似するが、モンゴリア青銅器様式において矛という器種はそれほど顕著ではなく、セイマ・トルビノ青銅器群特有の諸型式も存在しないので、現状で両者を結び付けるのは難しい。以上より、モンゴリア青銅器様式は EAMP との接触地帯である、アルタイ山脈を挟んだモンゴル西部附近で生じ、剣 A、刀子 C 類に見られる特殊な技法を開発しながら、徐々に広まった可能性が考えられる（図 7-7）。

いずれにせよ前 2 千年紀半ばから後半にかけて、精製品から粗製品まで持つモンゴリア青銅器様式がモンゴル高原において成立する。従来、2 千年紀半ば以降において、長城地帯から南シベリアにかけての南北ルートが以前の新疆、甘粛を通じた東西ルート（図 7-5）に替わり活発化したことが指摘されてきた（Mei2003、宮本編 2008）。確かに前 2 千年紀後半から末にかけて、南シベリアとモンゴリアの結びつきが強くなることは、本論でも示してきたとおりであるが、南シベリアとの関係が強くなるのに先立ち、南シベリアとは異なるモンゴリア独自の青銅器様式が成立することが前 2 千年紀における最も重要な事象と考えられる。後述のようにモンゴリア青銅器

様式は、特にその精製品に特長があり、それらは広範囲における諸集団を結びつける指標として機能していた可能性がある。つまり、この段階に青銅器を媒介としたモンゴリア独自のコミュニケーションが成立し、初期青銅器の盛んであった新疆から甘肅地域はそこから外れていたのである。新疆から甘肅地域の特異性は宮本の言うように鉄器化によって理解できる可能性もあるが、モンゴリア青銅器様式そのものを生み出した要因については、モンゴリアの内的要素あるいはユーラシア草原地帯東部全体でのモンゴリアの位置づけを考える必要があるだろう。この問題については、本節で各青銅器様式の背景を考えた上で、以前の段階も考慮しつつ結言にて述べることにしたい。

(2) 各青銅器様式の内容

モンゴリア青銅器様式において想定した製作技法は、石范を用いるか蠟型に類する技法であり、この差異は製品における形態、文様の複雑性という形で現れている。従って、前者が想定される刀子 A 類を粗製品、後者による剣 A2 類、刀子 C 類を精製品と考えることができよう。さらに、剣 A 類、刀子 C 類と同様の文様を持つ有蓋鬮斧 IIb 類もモンゴリア青銅器様式における精製品といえよう。一方で剣と刀子という器種間には、製作技法のみならず、湾曲した剣の柄からみても、それほど隔絶性は認められない。モンゴリア青銅器様式においては、剣、刀子の機能差よりも技法差を伴う、精粗差が重要な区別とされていたといえる。

前期カラスク青銅器様式固有の形式は刀子 Ba 類のみである。これは装飾的要素があまりなく、実用品の可能性が高い。その意味ではモンゴリア青銅器様式の刀子 A 類と対比できよう。

後期カラスク青銅器様式では、刀子 Bb、Bc 類の製作技法は前期カラスク青銅器様式と同技法である。剣に関しても、刀子 Bb と剣 B1a が対比できたように同一の製作技法による可能性がある。また、剣 B1、B2 に附加される文様、柄頭は刀子 B 類と同じく簡素なものが多く、精製、粗製品の区別は当該様式内ではそれほど明確ではない。一方で、剣 B1、B2 類の柄は直状になり、刃の先端も尖ったものが多くなる。従って、剣と刀子の機能的な区別は増大したと考えられる。後期カラスク青銅器様式に続くポストカラスク青銅器様式も諸型式の位置づけはほぼ同様である。

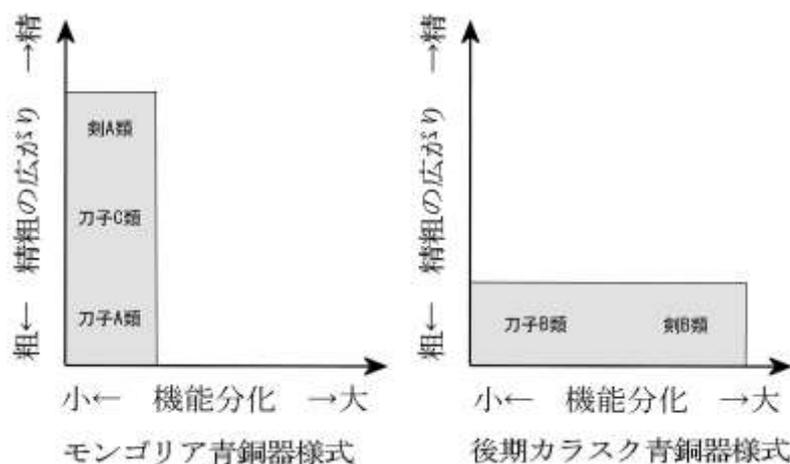


図 7-8 青銅器における様式構造の比較

ポストカラスク青銅器様式においては、確かに動物表現を多く持つ青銅器とそうでないものがあるが、両者はモンゴリア青銅器様式のように形式や技法により明確に区分されているわけではないからである。

以上のようにモンゴリア青銅器様式と、後期カラスク、ポストカラスク青銅器様式を対比した場合、等しく剣と刀

子の組み合わせを持つものの、精粗、機能を含む様式の内容にもかなりの差があったとみられる（図 7-8）。様式における精製品がそれを保有する社会において一定の価値付けを得ていると考えれば、後期カラスク青銅器様式におけるその消滅は、青銅器全体の実用化を示すと考えられる。精製品の消滅と機能性の拡大を伴うような、実用性に根ざした青銅器様式が青銅器時代の終末に出現する意義は極めて大きいといえよう。

（3）青銅器様式の変化過程

前 2 千年紀から前 1 千年紀初頭において見出された青銅器様式の変化は三つである。一つは第 2 期のミヌシンスクにおける、前期カラスク青銅器様式から後期カラスク青銅器様式への変化であり、もう一つは主に第 3 期のモンゴリアにおける、モンゴリア青銅器様式から後期カラスク青銅器様式への転換である。さらに一つは、ポストカラスク青銅器様式における地域性の出現である。表 7-2、3 はポストカラスク青銅器様式を除く様式変化の際、在来の様式に外部からどのようなものが確認されるのかを整理したものである。表の○はその項目の存在、△は僅かに存在、×は不在を示している。例えば、表 7-2 の縦軸、剣 A 類以下はモンゴリア起源の諸要素である。このうち、剣 A 類について、ミヌシンスクにおいては型式としては確認できていない（型式 ×）が、型式の一部の要素（脊、紋様など）はみられる（属性部分 ○）。また、剣 A 類、刀子 A、C 類は型式、技法の両面において第 3 期以降のミヌシンスクでは完全にみられない（その後の存続 ×）。本表を参考にしながら、以下に変化についての考察を行なう。

表 7-2 第 1 期～第 2 期のミヌシンスクにおけるモンゴリア様式要素

	型式	属性部分	技法	精粗位置	その後の存続	様式の伝達
剣A類	×	○	△	×	型式・技法共×	
刀子C類	△	○	△	×	型式・技法共×	
刀子A類	○	○	○	○	型式・技法共×	
						×

★ミヌシンスク在来の剣B類、刀子B類がモンゴリア様式の属性の一部を取り込んで発展

表 7-3 第 3 期の長城地帯（モンゴリア）における後期カラスク様式要素

	型式	属性部分	技法	精粗位置	その後の存続	様式の伝達
剣B類	○	○	○	○	型式・技法共○	
刀子Bc類	○	○	○	○	型式・技法共○	
						○

★モンゴリア在来の剣A類、刀子A、C類は基本的に消滅

後期カラスク青銅器様式の発生

第 2 期のミヌシンスクにおいて、後期カラスク青銅器様式が発生した変化であるが（表 7-2）、この変化は製作技法上から言って、前期カラスク青銅器様式が主体となり、モンゴリア青銅器様式のうち形態を中心とする、視角的に模倣可能な部分を取り込んだと考えられる。モンゴリア青銅器様式の刀子 A 類そのものが南シベリア（ミヌシンスク）においても相当数認められるので、この変化の直接的な要因はモンゴリアからのヒトの移動による可能性が高い。しかしながら、モンゴリア青銅器様式の製作技法は長続きせず、形態のみが刀子 B 類に取り入れられるのである。

つまりこの変化は、ある様式が他に存在する様式の表現を独自に解釈して自らの様式を発展させる、いわば「他要素取り込み型の変化」とすることが出来る。また、モンゴリア青銅器様式の精製品ほどミスシンスクでの痕跡が少ないことは、後述するように、モンゴリア青銅器様式を存続せしめている中核はこれら精製品であったことを物語っていよう。この解釈の過程においてカラスク青銅器様式側では、モンゴリア青銅器様式では精製品としての区別が重要であった剣を実用的に特化させたものと考えられる。

ところで、モンゴリア青銅器様式で発生した剣 A1、A2 類は東アジアにおける最古級の青銅剣である。当該様式においては、剣は機能的利便性よりむしろ精製品の一部として生まれてきた。より一般化すれば、機能的に優れた可能性を持つ道具は、当初からその機能性を意図されていたわけではなく、他の様式との関係の中で機能的な意味を徐々に帯びてくるものといえよう。このことは前節で論じた、最古級の錫青銅を用いて創作されたセイマ・トルビノ青銅器群の有蓋矛が非実用的な面を色濃く持っていたことを考えると一層興味深い。

モンゴリア青銅器様式から後期カラスク青銅器様式への変化

第3期のモンゴリアにおける青銅器様式の変化はどうであろうか（表7-3）。モンゴリア青銅器様式から後期カラスク青銅器様式へというこの変化は前項の変化とは異なり、様式全体が入れ替わってしまうドラスティックな変化である。この場合、先のように既存様式自体に存続を認める「他要素取り込み型の変化」を想定することは出来ない。従って、既存様式の崩壊（モンゴリア青銅器様式）と新様式の成立（後期カラスク青銅器様式）双方の説明を要しよう。様式がそっくり交替する背景として、まず考えられるのは青銅器様式の構成主体がそっくり交替した可能性である。当該期のモンゴリアにおける青銅器以外の要素も考慮すると、集団全体の交替の可能性は極めて低いと考えられるのであるが、ここでは青銅器様式交替の概略を述べるにとどめ、変化の説明については、本節（4）の「青銅器様式変化の背景」にて詳しく検討することにしたい。なお、後期カラスク青銅器様式の範囲は、前期カラスク青銅器様式とモンゴリア青銅器様式の分布圏を併せたものにおよそ相当する。長城地帯では、モンゴリア青銅器様式では空白であった甘粛で剣B類が確認できるが、数量的に多くなく、後期カラスク青銅器様式拡大の基礎にはモンゴリア青銅器様式があったことが知られる。

ポストカラスク青銅器様式への変化

ポストカラスク青銅器様式は、南シベリアとモンゴリアそれぞれにおいて前段階（後期カラスク青銅器様式）からの連続的な発展傾向が強いことが認められた。現状の資料は少ないが、ポストカラスク青銅器様式の分布域は後期カラスク青銅器様式から大きく外れるものではない。第5章の分析結果から考えると、当該段階は、南シベリアからモンゴリア全体で斉一的様相を呈する後期カラスク青銅器様式から地域色が顕在化していく段階と捉えることが出来る。このことは、長城地帯における地域的な青銅器文化の形成（宮本編2008）と連動した動きである。後期カラスク様式において既に剣（B2c、B1c'類）がモンゴリアで独特の特徴を持つことが知られ、地域性の出現は緩慢なものであるといえよう。さて、この段階に地域差が明確化する要因とは何であろう

か。まず考えられるのは、上の 2 つの様式変化時とは逆に南シベリアとモンゴリア間の交渉が薄くなった可能性である。ところが、動物紋という要素に注目すると、ポストカラスク青銅器様式においても南シベリアからモンゴリアにおいて列状動物紋が共有されることが知られる。これはさらに西へ広がりを見せる「スキト・シベリア動物紋」の一種であり、これによって従来では「初期遊牧民文化」としてポストカラスク青銅器様式におけるユーラシア草原地帯全体の類似性、ひいては地域間の関係性が指摘されてきたのである。それでは、この動物紋によって示される共通性は、ポストカラスク青銅器様式以前の諸様式または様式間で起こっていた事象と比べてどのように評価できるのであろうか。以下ではモンゴリアを中心に様式を通じた変化の背景を、鹿石などの要素も含めつつ考察してみよう。

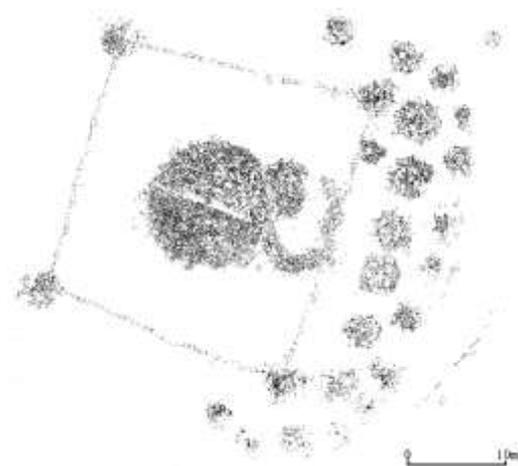


図 7-9 オラーン・オーシグ I1 号ヘレクスル

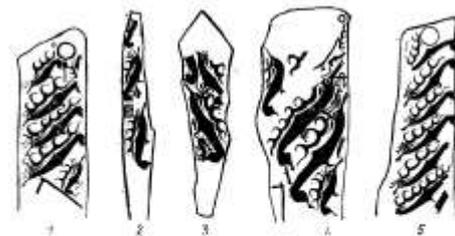


図 7-10 ブリヤーチャにおける板石墓（手前）

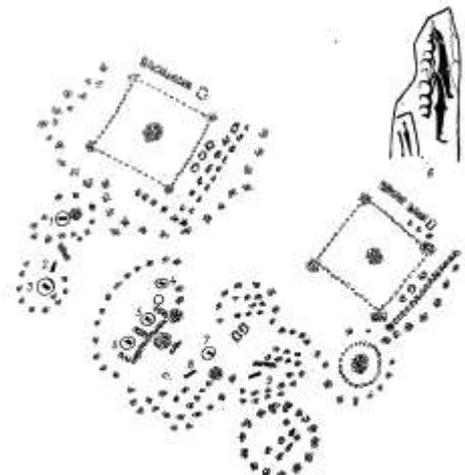


図 7-11 ズニ・ゴールにおけるヘレクスルと鹿石の複合

(4) 青銅器様式変化の背景

本節 (1) ~ (3) で示したように、前 2 千年紀後半から前 1 千年紀初頭にかけてのアルタイ以東では、青銅器様式が段階的に大きく変化していくわけであるが、その背景を探ることは非常

に難しい。というのも、青銅器を伴う遺構が極めて少ないからである。ミヌシンスクや長城地帯においては、青銅器を副葬する墓葬が若干知られるが、発見例は地域的に限られている。また、長城地帯南辺の墓葬は彝器を伴うものが多く、明らかに中国中原の影響を受けており、これらを当時のモンゴリアの典型的な墓として扱うには配慮が必要である。しかしながら、前2千年紀後半以降、モンゴリア、特に外蒙古においては、特殊な遺構が広く分布することが知られている。これらの遺構は青銅器を伴うことが少なく、学史で紹介したような青銅器文化の動態と組み合わせることは少なかったが、本論で明らかにしてきた青銅器様式と対比させると極めて興味深いものである。また、青銅器様式動態の背景を探るうえで不可欠のものと考えられ、以下、これらの紹介を交えつつ論を進めたい。

前2千年紀後半から前1千年紀初頭のモンゴリアにおける代表的な遺構としては、ヘレクスル、板石墓、そして第5章でも論じた鹿石が知られる。ヘレクスルは、円形の石積とそれを囲う円形、あるいは方形の囲で主に構成される遺構である(図7-9)。方形の囲いの四隅に小さい積石(石堆)を伴うもの、中央の積石と囲いが石列で結ばれるものも存在する。また、囲いの内外に石堆(図7-9の右側に並ぶ塚)を多数伴うヘレクスルも知られる。石堆には通常馬の頭骨が東向きで埋置されており、大きいヘレクスルでは1700以上の石堆を伴う場合もある。ヘレクスルは外モンゴル西部を中心に分布し、バイカル東南部、トゥバでも発見されている。近年の高濱秀らによる調査では、中央の積石の中央に石棺が置かれ、それを取り囲むように石が積まれていくことや、石堆の構築法などが明らかにされた。このように、ヘレクスルの中央の積石内部からは埋葬施設および人骨が見つかる例が増えているが、人骨を伴わないものも多数ある。ヘレクスルのすべてが墓であるかどうかは不明であるが、儀礼的要素が強い遺跡であることは共通見解と言ってよい。

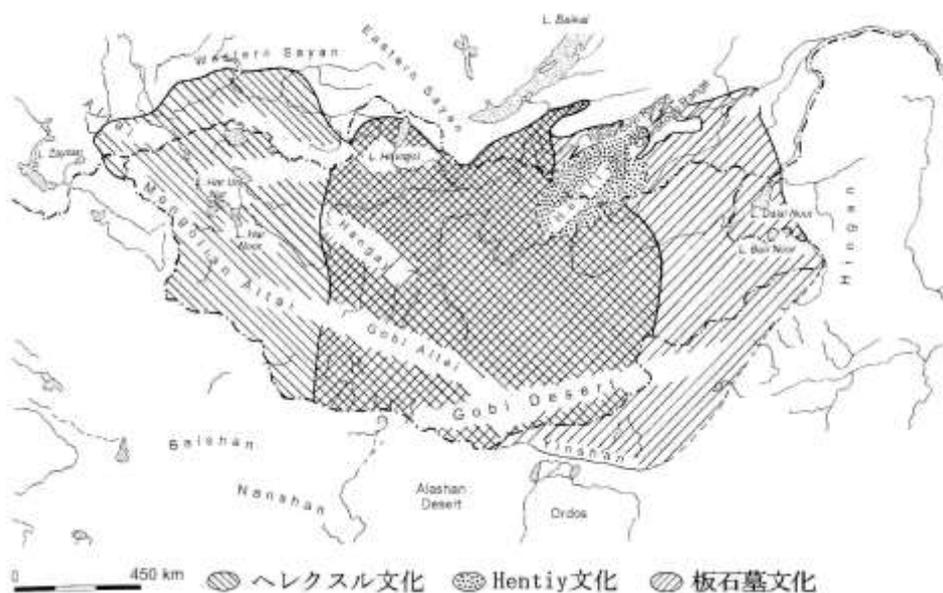


図7-12 ツビクタロフによる青銅器時代後期から初期鉄器時代のモンゴリアの文化圏

(ヘレクスル文化：ヘレクスルと鹿石の主な分布域 板石墓文化：板石墓の主な分布域)

なお、ヘレクスルに付随する石堆と同様のものが、鹿石を取り囲む場合がある（図 7-11）ことから、鹿石とヘレクスルを関連付け、両者を同文化の所産であるとする見方が多い（Худяков1987、Takahama et al.2006、林 2007、Fitzhugh2009）。ヘレクスルの年代に関しては多様な見解が存在するが、近年の C14 データでは前 2 千年紀後半から前 1 千年紀初頭という年代が得られている。板石墓とは板石を方形状に立てた墓で（図 7-10）、モンゴル西部に分布するヘレクスルに対して、板石墓は東部を中心に分布する。板石墓は長方形を呈するものが一般であり、ソスノフスキーの分類案が知られる。これ以外にも、figured tomb と呼ばれる、長辺が内側に湾曲する撥形を呈したもののや、卵形や長方形の積石を伴う Dvortsy 型というグループも知られている。

ヘレクスル、鹿石、板石墓の研究の方向としてまず挙げられるのは、ヘレクスル、鹿石と、板石墓がモンゴリアにおいておおよそ東西に分布差を見せることに注目するものである。これらの研究では、分布差から大きくモンゴリア東西の文化圏を捉えている。第 1 章の鹿石の項で紹介した、チレノヴァ、ノヴゴロドヴァの研究はこれにあたる。ただし、ヘレクスルや鹿石が初期遊牧民文化段階（本論でいうポストカラスク青銅器様式の段階）以後にモンゴリアへ流入したと考える説は、近年では出されていない。鹿石とヘレクスルを同文化の遺産とし、その一部を前 2 千年紀後半まで遡らせて考えるのが一般的である。ノヴゴロドヴァ（Novgorodva1989）は青銅器時代のモンゴルにおける東西の文化的差異（板石墓⇔鹿石）をモンゴロイドとユーロペイドに対比させる。氏の場合は青銅器時代から初期鉄器時代にかけて東部から西部への影響を強く見ている。ただし、スキト・シベリア文化の特徴である動物紋に関しては西部（鹿石）的要素とする。ツビクタロフ（Cybiktarov2003）は近年の調査資料を用いてモンゴリアにおける大きな文化変遷を、段階的に示している点で注目できる。氏もノヴゴロドヴァ同様、草原地帯における東西 2 つの文化領域が形質（モンゴロイド、ユーロペイド）に大まかに対応しているとする（図 7-12）。そして、両者の相互関係の結果、初期鉄器時代に至った（中央アジア型モンゴロイドの形成）とし、この過程は、大きく気候変動と対応すると考えている。まず、前 2 千年紀後半までに畜群構成の安定化と共に、東西に大きな文化圏が出現する。前 2 千年紀後半の乾燥化（前 11-9C）によって東西文化圏が接触するが、両文化圏の集団は環境、経済的要因で適地移動を行ったため、移動は対立的であったといわれる。そして、前 1 千年紀初頭（前 9-8C）には、モンゴリア西北部を中心とする連合が形成され、平和的な接触にいたったとする。以上と異なる研究視点としては、多様な遺構から当時の社会復元を目指したものが挙げられる。これらでは、まず、ヘレクスルが板石墓より相対的に遡るとし、前者を共同体的なもの、後者を個人的要素が強い、より社会進化した形態とする見解が存在する（Honeychurch et al.2009, Houle2009）。フジャコフはモンゴル東西における文化的差を示唆しつつ、鹿石、ヘレクスルを戦車、青銅器時代に対応させ、スキタイ期（騎馬）よりも前段階とした（Худяков1987）。一方で、ヘレクスルの規模等を集団成員の地位、富の表示と示す見解（Fitzhugh2009）、あるいはヘレクスルの大きさの大小から権力、階層化の進行を結びつける説（林俊夫 2007）が存在する。宮本もヘレクスルを板石墓よりも早く出現するものとし、板石墓を個人墓としている（宮本 2007a）。ただし、ヘレクスルに関しては墓制規模、あるいは子供が埋葬されていた事例（Takahama2006）から氏族間格差が大きいものとしている。さて、以上の動態と青銅器の動態の関係を統合的に論じたものは非常に少ない。本論で論じた青

銅器は採集資料が多いものの、大量かつ広範囲に分布し、当該段階のモンゴリアを考える上で不可欠なものである。

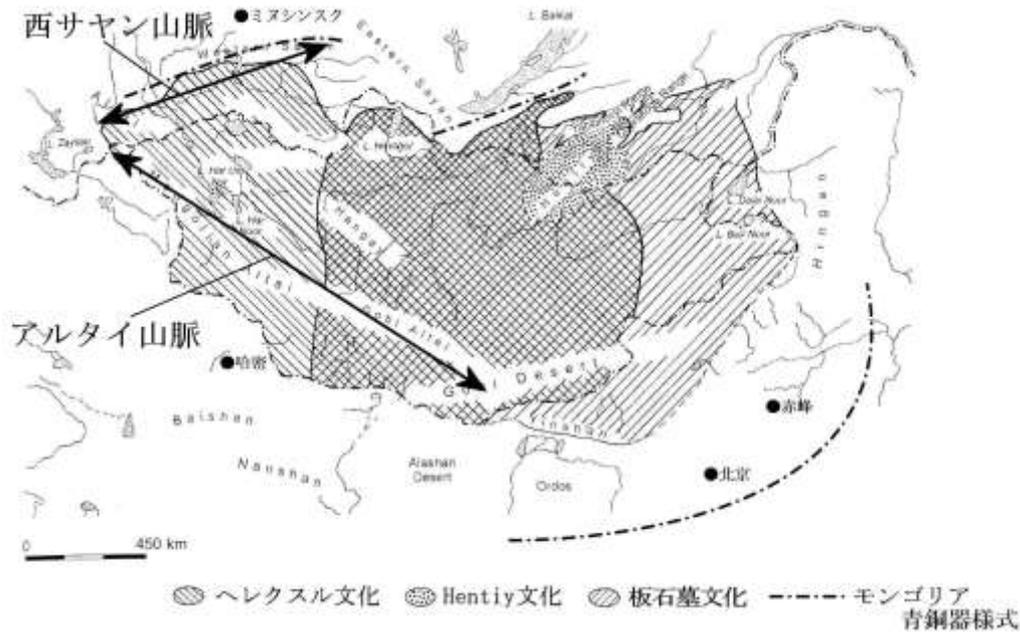


図 7-13 遺構の種類に基づく文化圏とモンゴリア青銅器様式の広がり

本論で明らかにしたところによれば、前 2 千年紀半ばに、南シベリアとモンゴリアにおいて独自の青銅器様式が形成される。まず、モンゴリア青銅器様式は、続く後期カラスク青銅器様式と比較すると、広域で型式的共通性が極めて高いという点では同じであるが、その共通性の高さを精製品という特殊なカテゴリーであえて示していることに特徴がある。モンゴリア青銅器様式の精製品である剣 A 類や刀子 C 類における獣頭形の柄頭は、目鼻の異様に突出するという特徴を持つ。この種の柄頭にはかなりのバリエーションがあるので、従来では、その表すところの動物について、羊、鹿、馬など多様なものが想定されてきた。しかしながら、このような異様に突出した目鼻を持つ動物は現実には存在しない。こういう非現実的な要素が共通して精製品を中心に示される事実は、突出した目鼻の獣頭表現が多様な動物に基づいた製作者の気まぐれではなく、共通性の高い厳格な規範の下で制作されていることを示すと考えられる。つまりこれら精製品には、かなりの広範囲における共通性、さらに踏み込めば共通性の背後にある何らかの社会的繋がりを青銅器の各保有者または集団に示す狙いがあったと捉えられる。さらに、モンゴリア青銅器様式の特徴である精製品は、様式全体の共通性の高さを示すと同時に、それらは蠟型に類するような特殊な技法で労力を要するものであった。つまり、このような技法的にも形態的にも厳格な物的カテゴリーで明示する必要があるほど、モンゴリア青銅器様式の基盤にある社会的紐帯は脆弱であったと考えられる。以上の青銅器における事象を、年代的にも同時期と考えられる、ヘレクスルの分布状況と対比しよう。図 7-13 に示したように、ヘレクスル、鹿石は外モンゴルの西部を中心に分布し、トゥバやバイカル湖東南地方にも及んでいる。この範囲はモンゴリア青銅器様式の西部から中部全体を含み込むものである。モンゴリア西北部、トゥバから西サヤン山脈を越えた

ミスシンスクがヘレクスルの分布域から外れていることも、モンゴリア青銅器様式、前期カラスク青銅器様式の排他性を考える上で興味深いと言えよう。また、モンゴリア青銅器様式は、新疆の哈密で刀子C類が発見されているが、様式としてはアルタイ山脈を越えておらず、分布の西南限についても青銅器、ヘレクスルは大体一致している。さらに、学史において見解が統一されているわけではないが、ヘレクスルが権力の指標というより、むしろ社会集団のメンバーシップの確認、統合の指標といったいわば共同体的なものであると考えれば、モンゴリア青銅器様式の精製品のあり方と非常に合致したものとなる。

ヘレクスルより東には板石墓が分布するが、時期的にヘレクスルと併行するかどうかは不明である。ただし、figured tomb（撥形墓）と呼ばれる長辺が内側に湾曲した板石墓に類似した墓からは、本論でいう刀子A類が発見されており（Амартувшин, Жаргалан2010）、ある種の板石墓は年代がヘレクスルと同時期、すなわちモンゴリア青銅器様式の段階に遡る可能性がある。さらに東南の長城地帯はヘレクスル、板石墓共に不在の地域である。そのなかでも南に位置する山西省、陝西省北部などでは蛇首ヒなど特有の器物が知られ、青銅器彝器が墓において共伴しているので、中国中原の影響を受けつつ、独自の地域性を発現しているといえる。他では、第5章で論じた鹿石I類は、モンゴリア青銅器様式と同時期から存在するものの、分布域はヘレクスルに重なるがやや狭い。このように、青銅器では一様な様式の内部に、異なる墓、あるいはモニュメントを指標としてまとまる、多くの領域集団が存在したと考えられる。当時、実態として存在した集団を考えた場合、共同体的な性格を持つ領域集団として部族などが挙げられるが、ヘレクスルや鹿石の分布も東西数千キロにおよぶものであり、実態に近づくにはさらに詳細な分析が必要である。例えば、ヘレクスルには上で指摘したように多様な形態があることが知られているが、モンゴリア全体における型式差が悉皆的に論じられているわけではない。また、青銅器では金属成分などの調査を、おおよその出土地の判明する器物で積極的に行うなどが今後の研究の方向性として挙げられよう。

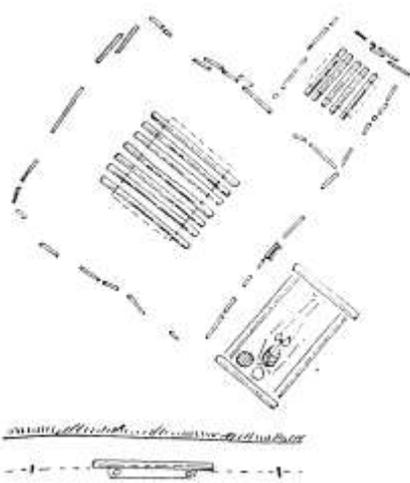


図7-14 カラスク文化の墓葬における

囲いと建て増し（右上）

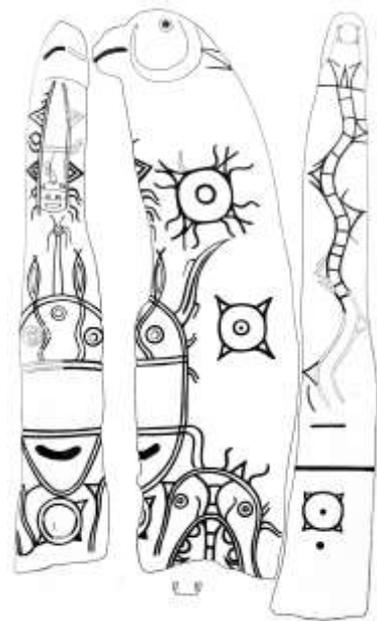


図7-15 オクネフ文化の石柱

いずれにせよ、以上のような青銅器やヘレクスルの動態は、前 2 千年紀の前半には知られておらず、物的指標を媒介とするような、ある程度の広がりを持つ社会的紐帯がこの段階にモンゴリアの各地で形成された可能性が高い。この要因について、ツビクタロフは、前 2 千年紀半ば以前の気候乾燥化により、牧畜経済が徐々に形成され、前 2 千年紀半ばにおける短期の気候湿潤化によって生活の安定化が進んだことを指摘する。そして、この段階からモンゴリアにおける文化状況は劇的に変わったとする。本論ではモンゴリア青銅器様式の青銅器の起源について、長城地帯の初期青銅器とは別に、EAMP から派生した可能性を示唆した。EAMP 自体は南シベリアからカザフスタン、新疆北部にまで達しているが、南シベリアのミヌシンスクでは前期カラスク青銅器様式という在地色の濃い青銅器様式が存在していたことを考えると、アルタイ山脈を介してモンゴリアに EAMP の情報が西から及んだ可能性がある。また、ヘレクスルのような、墳墓を石列、板石で囲うような墓制も南シベリアを含む EAMP の分布域で広く認められるものである。さらに、学史においてヘレクスルを含む文化の担い手にユーロペイドがあげられている点も、当時における西からの文化の流れを示すものとして示唆的である

このように、青銅器あるいは各種遺構において、西側の影響をある程度は受けつつも、それとは一線を画す指標を以て各地で領域集団が形成されていくことが当該段階のモンゴリアの特徴といえる。その要因の一つとして、気候変動の中での安定した牧畜形態の形成は重要であると考えられる。生業の安定化により、生産力の増大と余剰の蓄積、それらに伴う季節移動の範囲、サイクルの一定化が起きた可能性がある。モンゴリア青銅器様式における大量の青銅器生産の開始も、このような状況下での鉱山開発の進展を反映するものであろう。また、移動サイクルの安定性が牧草地の拡大と相まって、空間的により広いコミュニケーションが世代を通して可能になったことも想像できる。青銅器やヘレクスルによって示される集団がどのレベルの領域集団に該当するかは明確にし難いが、ヘレクスルに付属する石堆における大量の馬犠牲や、高度な青銅器技術（剣 A1、A2 類、刀子 C 類）が次段階に突然途絶することから考えて、それらが示す集団の紐帯は脆弱かつ即物的で、常に分裂する危機をはらんでいたことも、同時に重要な点として確認しておきたい。

一方、南シベリアのミヌシンスクにおける前期カラスク青銅器様式も不明な点が多い。ミヌシンスクのカラスク文化の墓において、本論でいう前期カラスク青銅器様式のもののみを抽出することは現段階ではできない。カラスク文化一般では四角の囲いの中に数基の墓が知られ、さらに囲いの建て増しが確認されている。建て増しについては、家族墓とされ、氏族からの独立が主張されている (Gryaznov 1969)。レグランドも階級化の進展と家父長制を想定している (Legrand 2006)。また、クルガンと呼ばれる墳丘が知られ、大きいものは氏族や部族のリーダーの墓とされる (Gryaznov 1969、Вадецкая 1986)。さらに、ミヌシンスクではカラスク文化以前のオクネフ文化において人面を彫った石柱 (図 7-15) があり、これはモンゴリアにおいて次の段階に現れる鹿石と対比できよう。このような石柱がミヌシンスクにおいては、モンゴリアより早い時期 (前 2 千年紀半ば以前) に既に集団指標として機能していた可能性がある。つまり、氏族の解体がこの時期に起きていたかどうかは置くとしても、ミヌシンスクでは同時期のモンゴリアに比して一

層複雑化した社会状況にあったことが予想されるのである。このように考えると、集団指標としてではなく、一層実用性を帯びた青銅器で構成される後期カラスク青銅器様式が、ミヌシンスクを中心とする南シベリアにおいてモンゴリア青銅器様式の要素を取り込みつつ形成されたことも理解できよう。南シベリアにおいては、前期カラスク青銅器様式より以前から後期カラスク青銅器様式に至るまで、その独自性が保たれていたのもあって、外部の影響を受けつつ、独自の社会的結合を形成していったモンゴリアとは状況が異なっていたといえる。

次に南シベリアにおいて成立した後期カラスク青銅器様式がモンゴリアに浸透していく状況、すなわち、モンゴリア青銅器様式から後期カラスク青銅器様式への変化の背景について考えよう。

モンゴリア青銅器様式は、前 2 千年紀末に南シベリアで成立した後期カラスク青銅器様式の南下により消滅する。後期カラスク青銅器様式は、それが持つ鋳型製作の技術、金属成分比までもモンゴリアに伝わっているから、ある程度の人の移動が考えられ、その詳細な動きについては今後の調査を待つ必要がある。モンゴリア青銅器様式消滅の直接的要因について、モンゴリアで発見される後期カラスク青銅器様式の青銅器の金属成分までミヌシンスクに類似したものに变化する傾向にあることから、従来使われていた資源の枯渇等が挙げられる。しかしながら注目すべきは、青銅器様式崩壊後のモンゴリアがすぐに、後期カラスク青銅器様式の様式構造をそのまま受容している点である。ここから考えると、モンゴリア青銅器様式内部でも、その終盤においては、何らかの社会的要因が働き、後期カラスク青銅器様式を発生させた南シベリアの状況と近くなっていた可能性がある。つまり、モンゴリア青銅器様式においても次第に青銅器が社会集団の結合

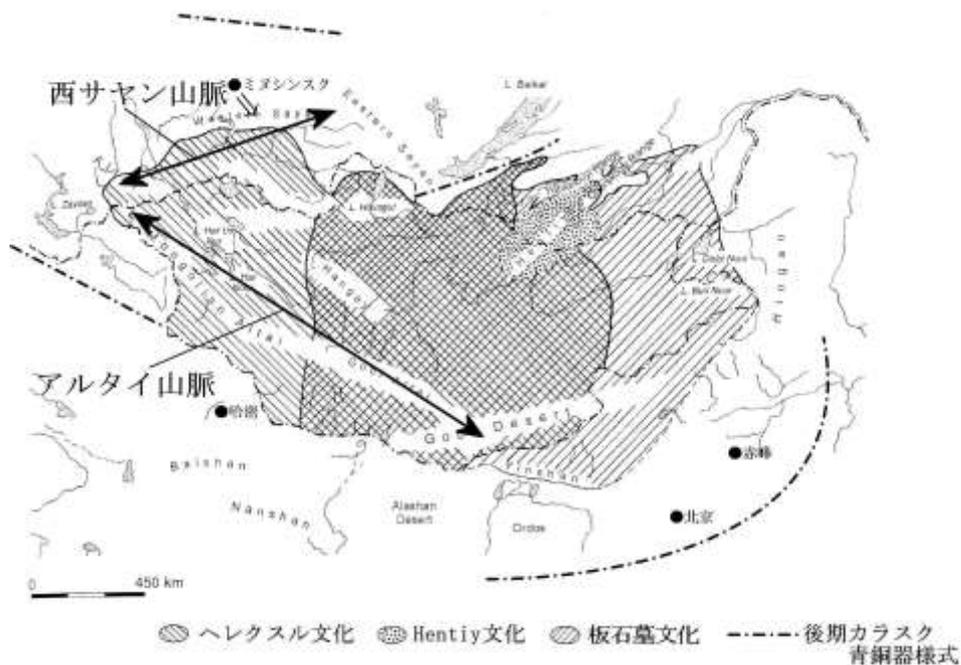


図 7-16 遺構の種類に基づく文化圏と後期カラスク青銅器様式の広がり

の指標としてではなく、実用的な機能を主に帯びるようになっていったと考えられるのである。この背景を考察するにあたって参考になるのは、ツビクタロフが示唆する外モンゴルの動態である。氏によれば、前 2 千年紀後半以降、気候乾燥化が進み、好条件（牧草地）を求めての大移動

が起こるといふ。その結果として、前 11 世紀から前 9 世紀にかけてモンゴル西部のヘレクスル、鹿石を持つ文化と東部の板石墓文化が衝突し、このことは板石墓における鹿石の再利用や、板石墓に切られたヘレクスルなどによって知られると言われる (Cybiktarov2003)。この考えは、前 2 千年紀後半以降のモンゴリアで、ヘレクスル、鹿石と板石墓を持つ東西の文化が、排他的していたという説に基づくものであり、直ちに承認するわけにはいかない。しかしながら、前 2 千年紀後半以降の気候乾燥化と、それによる騎馬を伴う遊牧の発生は、ハザノフによっても指摘されているところであり (Khazanov1994)、ユーラシア草原地帯の中でもモンゴリアで騎馬遊牧がいち早く出現した可能性を指摘する意見も存在する (Koryakova, Epimakhov 2007)。騎馬遊牧の開始により牧畜民の行動範囲が拡大し、遊牧化することが考えられ、ここから従来では物質文化の広域的類似性や、大規模な集団形成が考えられてきた。しかしながら、半径数千キロにも及ぶような広範囲の集団統合より以前に、牧畜集団の移動、生活圏が広まり、集団の接触が増えることが想定しうる。そして、そのような集団間の接触の増加は必ずしも最初から統合化に向かうとは限らない。逆に当初は牧草地や水、金属資源などをめぐって集団間の軋轢が増加した可能性がある。騎馬遊牧開始による集団間の接触とその摩擦は、モンゴリア青銅器様式におけるような即物的指標によって維持されるような紐帯を徐々に無意味なものにし、同時に指標そのものである青銅器生産および流通にも影響を及ぼしたのであろう。ただし、ツビクタロフの指摘するように東西の大きな文化圏の中で、互いが衝突していたかどうかは不明である。むしろ、適地移動はヘレ



図 7-17 チャルガランタ 2 号ヘレクスル

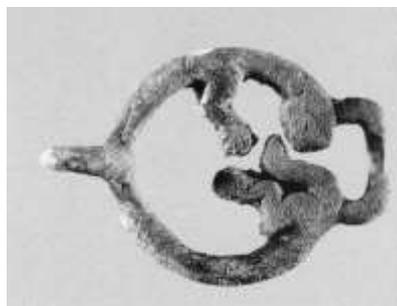


図 7-18 チャルガランタ 2 号ヘレクスル出土帯扣 (左) と玉皇廟墓地 M261 出土帯扣 (右)

クスルの分布圏より下位にあるような、より小さな領域集団ごとに行われ、それに伴う軋轢も小地域ごとに生じたと考えられる。したがって、モンゴリア内部の各地域において、変化様相は多

様であったことが予想されよう。ヘレクスルの年代にしても前 2 千年紀後半に全てが収まるわけではなく (Allard, Erdenebaatar2005)、南ブリヤーチヤのチャルガランタ (Zhargalanta) 2 号ヘレクスル (図 7-17) で発見された青銅帯扣 (Cybiktarov2003) は、北京玉皇廟墓地出土品 (北京市文物研究所 2007) と対比でき (図 7-18)、前 6 世紀以降のものである可能性が高い。後述のポストカラスク期に位置づけられるアルジャン古墳においても、外側に石堆が付属する構造が存続している。さらに第 5 章で検討したように、鹿石 I 類は、モンゴリア青銅器様式の件 A 類、刀子 C 類と共通する動物意匠 (目鼻の突出する獣頭) を持ちながら、後期カラスク青銅器様式以後も存続している。このように、モンゴリア青銅器様式に伴う文化様式の諸要素は、南シベリア由来の後期カラスク青銅器様式の流入の中で、完全に消滅したわけではない。物的指標を媒介として集団が繋がる従来の有り方も、地域によっては存続した可能性が高い。ただし、青銅器については、その製作技術の情報、そして資源が他の物質文化に比べて限定されたものであったため、以上の変化を敏感に反映し、モンゴリア全体でほぼ完全に交替する様相を呈していると考えられる。ヘレクスルや鹿石に替わる、後出の遺構として板石墓が挙げられ、上述のように個人的指標、不平等の表れとする見解が多い。前 1 千年紀初頭に墓制が変化していく事実は青銅器様式と対比した場合興味深いものであるが、この変化が後期カラスク青銅器様式期、またはポストカラスク青銅器様式期のいずれにあたるのかは今の段階では不明である。いずれにせよ、以上のように、モンゴリア青銅器様式が主に内的要因で消滅し、新たな青銅器様式をとりうる下地が準備されて

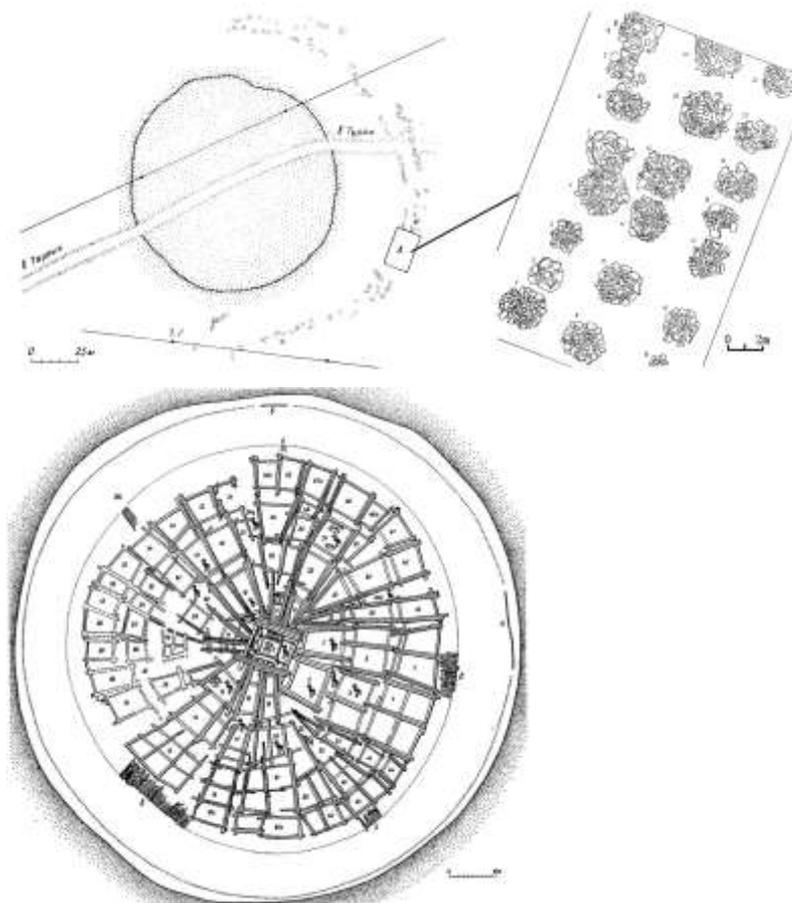


図 7-19 アルジャン古墳平面図 (左：発掘前、右：発掘後)

いたとすれば、大規模な集団の交替を伴わずとも青銅器様式全体の変化は起こり得る。以上のように、モンゴリアの前 2 千年紀終末から前 1 千年紀の最初期においては、青銅器においてミヌシンスクを中心とする南シベリアの影響が認められ、かつモンゴリア全体で大きな社会変化の時期にあったと見られよう。しかしながら、その変化の程度については、各地域でかなりの差が予想されることにも注意する必要がある。また、図 7-16 に示されるように、モンゴリア青銅器様式とは異なり、後期カラスク青銅器様式はミヌシンスクを初

現地として、西サヤン山脈を越えるだけでなく、例えば新疆北部などアルタイ山脈より西側にも広がりを見せている。また、カラスク式短剣はさらに西へ分布することが知られている(高濱 1995)。従って、上のような社会変化はモンゴリアに限らず、同時期のユーラシア草原地帯で広く起きていた可能性がある。後期カラスク青銅器様式は限られた地域の緩やかな結合ではなく、逆にその解体を意味しており、特定のコミュニケーションへの参与に関わらず、各地域における社会構造の変化の結果として受容しやすい青銅器様式であったと考えれば、後期カラスク青銅器様式が非常に広く拡散し、直後に地域性が現出していくことも理解しえよう。ポストカラスク青銅器様式は、従来「初期遊牧民文化」あるいは「スキト・シベリア文化」の段階とされてきた時期であり、前 1 千年紀初頭における騎馬遊牧の開始と、それに伴う類似した文化帯の形成が学史上つとに指摘されてきた。しかしながら、南シベリア、モンゴリアという対比でみる限り、ポストカラスク青銅器様式の地域差は後期カラスク青銅器様式に比して増大している。前段階までの状況を考えると、この地域性は前 2 千年紀後半に見られたミスシンスク(前期カラスク青銅器様式)、モンゴリア(モンゴリア青銅器様式)という、西サヤン山脈を介した地域性が再び現れたものと考えられる。前に記したとおり、後期カラスク青銅器様式の斉一性はミスシンスクを中心とする南シベリアからの働きかけよりも、むしろモンゴリアの各地域社会の複雑化に伴って生じた、それほど長期にわたらない現象といえる。ポストカラスク青銅器様式ではモンゴリア青銅器様式以来の動物紋(目鼻の突出した獣頭、鹿石 I 類の鹿)に替わり、虎像や列状動物紋などが青銅器に現れるようになる。これらはモンゴリア青銅器様式では僅かながら存在が確認できるが、鹿石 I 類中に見られることはあっても、主体たる紋様ではありえなかった。このことから、後期カラスク青銅器様式期を通じての、即物的指標を媒介とする結合の解体が、ポストカラスク青銅器様式では一段と進んでいることが考えられよう。巨大な墳丘および多数の副葬品を持つアルジャン古墳(図 7-19)が、この段階のトゥバに出現することから、ツビクタロフはこの段階に、前段階の集団間の軋轢に替わって、アルジャン古墳を中心とする新たな連合の形成を示唆する(Cybiktarov2003)。アルジャン古墳は当該段階に該当する傑出した墳墓であり、トゥバにはアルディ・ベリスクルガンと呼ばれるアルジャンよりも小規模な同時期の墳丘が存在するといわれる(Грач1970)。また、当該青銅器様式に含まれる長城地帯東部の夏家店上層文化では、通常の墓に加えて、内蒙古自治区の小黒石溝遺跡、南山根遺跡に見られるような多量の青銅彝器を伴う墓が出現する(遼寧省昭烏達盟文物工作站・中国科学院考古研究所東北工作隊 1973、内蒙古自治区文物考古研究所・寧城県遼中京博物館 2009)。このように、以上の各地域においてはある程度の階層分化が進んでいたことが予想され、それに伴って集団の統合化が促進された可能性もある。ただし、現段階ではトゥバや内蒙古東部を中心として物質文化が拡散する状況は確認できていない。また、ポストカラスク青銅器様式の段階は、青銅器以外でも地域性が顕在化する。南シベリアにはタガール文化、外蒙古にはチャンドマン文化、内蒙古東部には夏家店上層文化、新疆の吐魯番盆地には蘇貝希文化が形成され、墓葬や土器においても互いに異なる一定の地域文化が形成されていく。従って、仮にポストカラスク青銅器様式期に一定の統合化が起きていたとしても、その範囲自体は少なくとも、モンゴリアから南シベリア全体を含み込むようなものではない。むしろ、モンゴリア青銅器様式で想定した小地域とあまり変わらなかった可能性があるだろう。しかしいずれにせよ、モ

ンゴリア青銅器様式のような、即物的指標を媒介とする等質な集団統合から社会的複雑化が進行したことは想定でき、リーダーが目に見える形で出現してきたことがこの段階の重要な事項であるといえよう。一方で、アルジャン古墳における石堆の付設や、大量の馬犠牲、夏家店上層文化における中原系の青銅彝器など、内外由来の財によって階層を誇示していることから考えれば、特定個人の階層が世代間で継承される安定した階層システムには至っていないことが予想される。他に重要な問題としてポストカラスク様式に特有の動物紋が、モンゴリア、南シベリア、さらには黒海沿岸まで広がっていく現象が問題となり、これについては本論の枠を超えたものである。ただし、上に考察した事象に照らすと、その背景として、数千キロに及ぶ集団の統合や大規模移動などが考えられる可能性は低いと考えられよう。

終章 青銅器時代から初期鉄器時代のユーラシア草原地帯東部

本論では前 2 千年紀のユーラシア草原地帯において、草原地帯西部から東部への影響に加え、東部から西部へという逆の流れが近年指摘されていることを踏まえ、その起源地ともいべき草原地帯東部の様相を明らかにしてきた。はじめに指摘したように、先学においては、時期を通じて見出したそれぞれの具体的な影響に対して、その起源地あるいは影響の方向の決定に主眼を置く個別的説明が大部分であった。その背景には、ユーラシア草原地帯では先史時代、歴史時代を通じて文化的流動性が高いこと、さらにユーラシアの他地域に影響を及ぼし、その影響の起源の探究に関心が集まってきたというような固有の事情があったと考えられる。しかしながら、ユーラシア全体を視野に入れた場合重要であるのは、前 2 千年紀から前 1 千年紀初頭が、ユーラシア全体において青銅器時代から鉄器時代へという運動した変化の時期であり、そこでユーラシア草原地帯東部がどのような位置を占めていたかということである。つまり、ユーラシア草原地帯東部における具体的な個々の影響関係が、青銅器時代を通じて鉄器時代初頭に向かう、より一般的な変化に関連付けて説明され、なおかつ当該地域の特色ともいえる騎馬遊牧社会の成立をも考慮する必要がある。

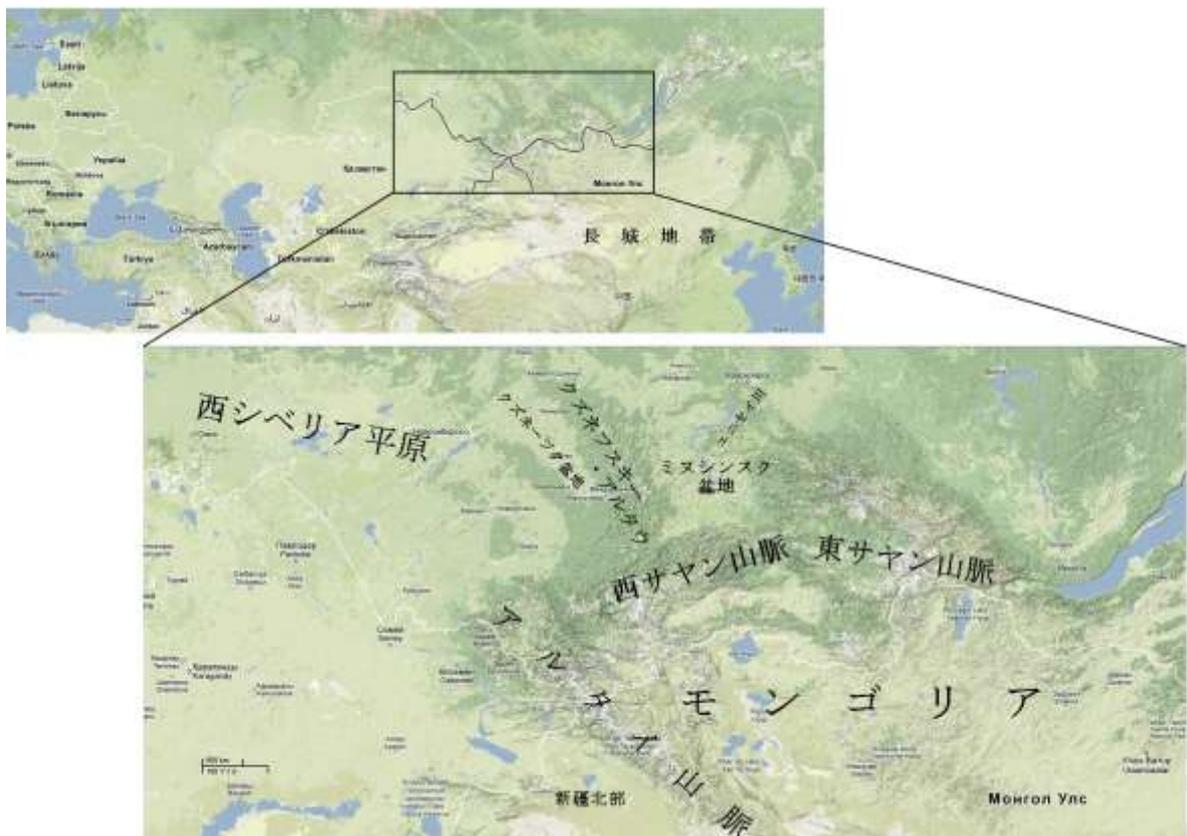


図 8-1 ユーラシア草原地帯東部の地理状況

以下では第 6 章までで得られた各段階における文化動態を整理し、本論を結論付けたいが、そ

の前にユーラシア草原地帯東部における地理的特徴を説明のためにおさえておこう。本論ではユーラシア草原地帯東部を、アルタイ山脈を境として区分している。ユーラシア草原地帯全体においてアルタイ山脈は、ウラル山脈を挟んで続く大平原がその東でぶつかる、非常に大きな地形変換地である（図 8-1 上）。アルタイ山脈は現在のロシア、カザフスタン、中国、モンゴル国の国境を含んでおり、山脈内でそれが X 字状に交わっている。X 字の左上から右下へ沿うラインがアルタイ山脈であり、その北部から東側へ向かう別のラインはサヤン山脈である（以下、図 8-1 下を参照）。サヤン山脈（西サヤン山脈）の北側にはミヌシンスク盆地があるが、サヤン山脈自体はそこからさらにバイカル湖の西側まで伸び、その付近（モンゴル北部）で海拔 3000m 以上の最高峰を有している。このようなアルタイ、サヤン両山脈に西側を取り囲まれた地域がモンゴリアであり、その外側の平地とは対照的に山地、高地で構成される地形が続くのである。一方、本論の第 2、3 章で言及したユーラシア草原地帯中部、西部はアルタイ山脈の外側に位置し、新疆北部付近までも同様に、本山脈の外（南西）側に沿うような地域といえる。また、南シベリアのミヌシンスク盆地は位置的に言えば、アルタイ山脈の東側に位置するが、サヤン山脈でモンゴリアとは区別される。盆地と言われるように、その西側にはアルタイ山脈から北へ伸びるグズネフスキー・アラタウ山脈が控え、西に位置するクズネーツク盆地、西シベリア、あるいは新疆とも隔たっている、特殊な地理的状況にある。ただし、ミヌシンスク盆地は大きく見ればシベリアの低地に向かって開けている平原（西シベリア平原）の一部であり、どちらかと言えばサヤン、アルタイ両山脈の外側と捉えられるであろう。

中原	暦年代	ユーラシア草原地帯東部の青銅器文化（学史）	本稿における編年			
			ミヌシンスク		モンゴリア	
二里頭期 商（二里頭期） （殷墟期）	前1300年 前1000年	EAMP セイマ・トルピノ青銅器群	青銅器時代 第一期 第二期 第三期 第四期 第五期	EAMP, セイマ・トルピノ青銅器群	青銅器様式未形成（初期青銅器）	青銅器時代 第一期 第二期 第三期 第四期
西周		SEAMP （カラスク期の青銅器文化）		前期カラスク青銅器様式	モンゴリア青銅器様式	
春秋	前700年	「初期遊牧民文化」の青銅器文化		後期カラスク青銅器様式 ↓ ポストカラスク青銅器様式		

図 8-2 ユーラシア草原地帯東部における青銅器文化の編年

図 8-2 は本稿における各青銅器様式のおおよその年代と学史との対比を試みたものである。これを基に、青銅器文化の動態を通時的に整理してみよう。ユーラシア草原地帯東部では既に前 3 千年紀以前に遡ると考えられる青銅器が出現している。南シベリアではアフアナシェボ文化に多くはないものの、金属器が認められ、その影響を受けた可能性のあるものとして、甘粛省林家遺跡出土の銅刀や新疆ロプノール付近の小河墓地出土の銅片などが挙げられる。それらは、器種も

単純なものに限られ数量的にもわずかであった。ユーラシア草原地帯東部で多くの青銅器が確認され始める段階は、前2千年紀前半であり、本論ではセイマ・トルビノ青銅器群と（中国）初期青銅器を取り上げた（図8-3）。新疆、長城地帯における初期青銅器は、ユーラシア草原地帯の最も東の地域における青銅器の開始を示すものであるが、それらはチェルヌィフがいうところのEAMP、セイマ・トルビノ青銅器群が部分的に西から東へ伝達してきたものであった。この段階における新疆東部から長城地帯では、青銅器によって広域的に諸集団が結合することはなく、新石器時代以来の連鎖的な交流関係が続いていると想定される。製品としての青銅器が流入、そして製作されていても、装飾品や工具がそれらの大部分を占めており、精製品のような社会的位置づけが高い青銅器が同時期のセットとして広範囲に拡散することはない。この段階の青銅器は、次のモンゴリア青銅器様式に見られるように、一定の広い範囲の諸集団を、相互関係によって新たに関係づけるには至らないのである。

第1章で記したように、チェルヌィフはユーラシア草原地帯全体で青銅器時代の時期区分を行っており、草原地帯東部に広く青銅器がみられる段階は青銅器時代後期（Late Bronze Age）であるとする。つまり、氏の区分では本稿で扱ってきた青銅器文化は全て青銅器時代後期のものとなる。氏の区分はユーラシア草原地帯全体における冶金の広がりを見つめる場合は妥当であるが、草原地帯東部において、突如として発達した青銅器文化が西方からそのまま現れたわけではないことは本論で示してきたとおりである。草原地帯東部においても、青銅器時代の始まりから初期鉄器時代へ続く青銅器文化の漸移的な変化、そしてその背景が想定され、これらに基づいて、当該地域の段階区分を新たに考えることが出来よう。さて、前2千年紀前半のモンゴリアのように、青銅器が流入あるいは製作されているものの、青銅器の精製品を欠き、それらや他の物質文化を媒介とした広範な諸集団の結びつきが確認出来る以前の段階を、青銅器時代第一段階と呼ぶことにしよう。EAMPあるいは以下に述べるようなセイマ・トルビノ青銅器群の分布圏外にあたる、前2千年紀前半のモンゴリアが青銅器時代第一段階にあたるといえよう。

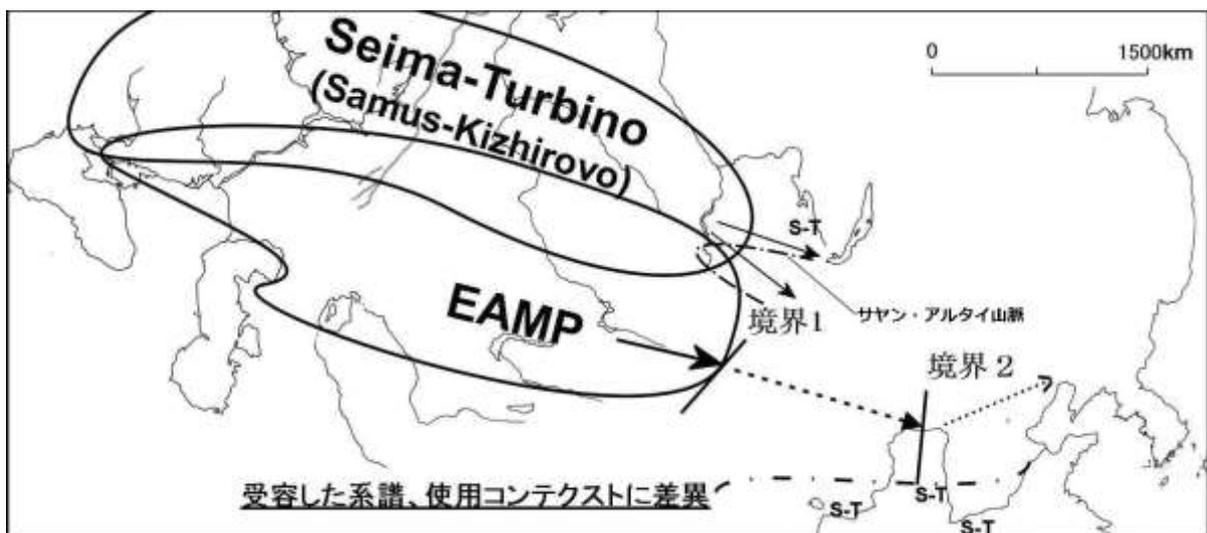


図8-3 前2千年紀前半における青銅器の動態

初期青銅器と同時期にユーラシア草原地帯全体に広がるセイマ・トルビノ青銅器群について、従来ではアルタイを起源とした集団の一元的拡散が想定されていたが、本論ではウラル山脈を中心としつつも、非実用的である特殊な青銅器の共有が分布域全体で一定期間続いた状況を考えた。このように、青銅器の特に精製品を即物的な指標とし、諸集団間の広範な結びつきが形成される段階を青銅器時代第二段階と定義づけ得る。青銅器時代第二段階の諸集団の結合はあくまでも特殊な製品に依存する脆弱なものであり、製作技術や資源が途絶えると直ぐに解体したと考えられる。事実、セイマ・トルビノ青銅器群は一定期間を経ると、ウラル山脈以東を中心としたサムシ・キジロボ青銅器群にみられる新たな関係性に置き換わっていく。また、以降の青銅器様式からもその形態、技術的影響は殆ど看取されない。セイマ・トルビノ青銅器群の分布域に含まれる南シベリアのミヌシンスクにおいては、セイマ・トルビノ青銅器群と凡そ同年代であるオクネフ文化に石柱がみられ、これらは後のモンゴリアにおける鹿石に対比できる可能性がある。従って、モンゴリアや新疆の大部分を除く地域では、前2千年紀前半に青銅器時代第二段階に入っており、初期青銅器の分布するモンゴリアよりも複雑化した社会状況にあったことが考えられる。これ以前のミヌシンスクでは、前3千年紀から前2千年紀にかけて、アフアナシェボ文化が存在し、これが本論でいう青銅器文化第一段階にあたる可能性がある。このように、前2千年紀前半のユーラシア草原地帯東部ではサヤン、アルタイ山脈を境として、その内側であるモンゴリアと、外側に位置するミヌシンスク、新疆北部以西という、社会の複雑化の程度に基づく、大きな地域性が認められよう（図8-4）。そして、この山脈を介した大地域の相互接触が、以後の文化動態において重要な役割を果たすことになるのである。

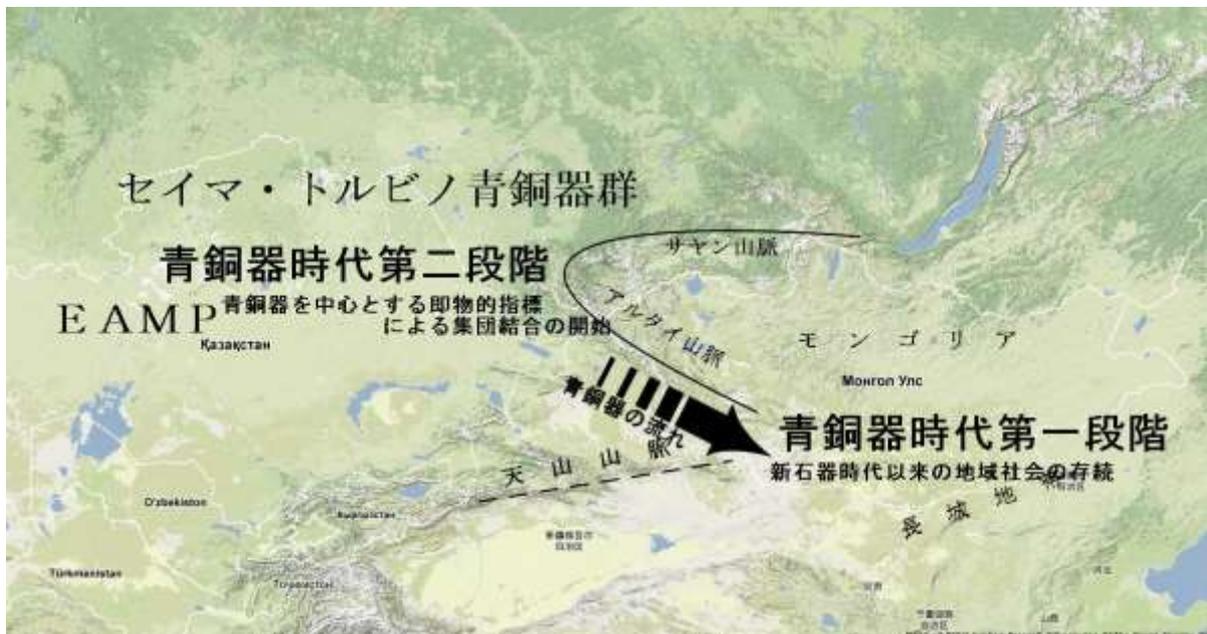


図8-4 ユーラシア草原地帯東部の前2千年紀前半における文化動態と段階区分

前2千年紀半ばにサヤン、アルタイ山脈以東に位置するモンゴリアに大きな変化が訪れる。モンゴリア青銅器様式の成立である（図8-5）。モンゴリア青銅器様式の製品のあるものにはEAMP

の影響が認められ、当該段階における山脈を越えた西からの影響が予測される。しかし全体としてみれば、独自の要素が多くを占めている。特に精製品においては目鼻の突出した獣頭を持つものが多く、その製作技法も蠟型に近いものが予想される。モンゴリア青銅器様式は、特殊な精製品を特色とし、内部において一元的拡散源をもたない点でセイマ・トルビノ青銅器群と共通しており、ここでも青銅器の精製品を媒介とした、一定の広まりを持った諸集団の結合関係の存在が

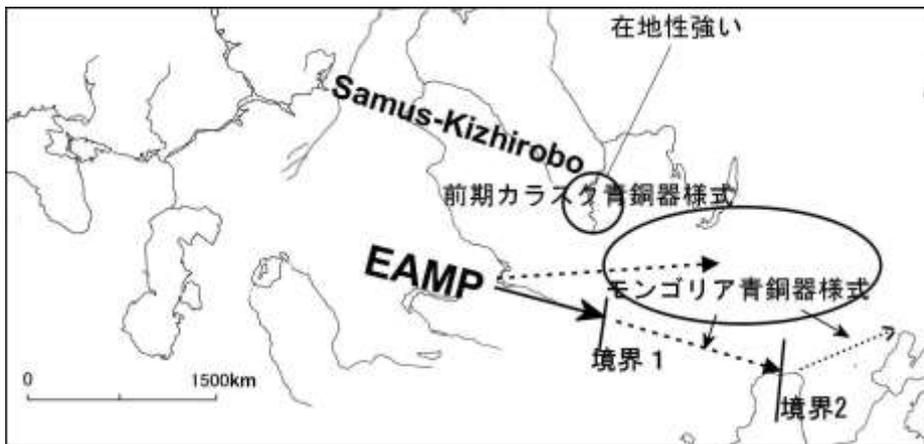


図 8-5 前 2 千年紀半ばにおける青銅器の動態



図 8-6 ユーラシア草原地帯東部の前 2 千年紀半ばにおける文化動態と段階区分

考えられよう。従って、前 2 千年紀後半のモンゴリア青銅器様式の成立以降に、モンゴリアは青銅器時代第二段階に入ったといえる (図 8-6)。この後、モンゴリア青銅器様式は一挙に消滅し、その技術が継承されないことも、セイマ・トルビノ青銅器群の状況と類似するものであり、青銅器を指標とした即物的な集団間関係の存在を示唆するものである。さらに、当該段階のモンゴリアにおいては、青銅器以外にヘレクスル、鹿石、ある種の板石墓の広まりを見ることが出来、学



図 8-7 前 2 千年紀末における青銅器の動態 (1)



図 8-8 ユーラシア草原地帯東部の前 2 千年紀末における文化動態と段階区分 (1)

史に照らせば、青銅器と同調した現象であるとできよう。それらの分布はモンゴリア内部において東西の地域性を示しており、形態の変異も顕著である。従って、実態としての集団の結合単位は、青銅器の分布圏よりずっと小さいものであったことが予想される。いずれにせよモンゴリアにおいては、前 2 千年紀半ばにサヤン、アルタイ山脈を越えた西からの影響を基にして、モンゴリア独自の新たな集団間関係が構築されていく。このプロセスの詳細な解明については今後の課題であり、既に学史で指摘されているような気候変動やそれに基づく牧畜を中心とする生業の成立はモンゴリアにおける内的要因として注目できる。しかしながら、より巨視的に考えた場合、EAMP やセイマ・トルビノ青銅器群の東端でモンゴリア青銅器様式が生まれる背景として、サヤン、アルタイ山脈による地理的差異と隔絶性、およびそれに伴う内外両地域の社会状況の差異が重要であるように思われる。高原地帯を主とするモンゴリアにおいては、低地の西シベリア平原に比して、牧畜を主とする安定した生業体系や、それを基盤とする広範なコミュニケーションの成立が一段階遅れて進展していた可能性がある。このことが、EAMP やセイマ・トルビノ青銅器

群全体が同時期のモンゴリアに入らずに、やや遅れて独自の青銅器様式が出現した要因の一つであるかもしれない。モンゴリアの南部に位置する長城地帯を中心に考えると、当地では、前2千年紀前半にサヤン、アルタイ山脈の外側で顕著であった EAMP やセイマ・トルビノ青銅器群の影響を、新疆北部を通じて部分的に受けていたのであるが、前2千年紀後半には山脈内部のモンゴリアにおける新たな集団関係に組み込まれていくのである。従って、学史で指摘されたような、同じ地域を介した東西交流（林雲 2011）とは異なり、各地域、各段階における社会状況に基づいて、文化圏の有り方、内容、影響の方向は異なったものであることが指摘できよう。前期カラスク青銅器様式は製作技術や形態においても EAMP、セイマ・トルビノ青銅器群、モンゴリア青銅器様式とは異なり、在地性の強いものである。そしてその起源はミヌシンスク在来のオクネフ文化にある可能性が高い。前期カラスク青銅器様式に該当する遺構は特定できないが、南シベリアのカラスク文化一般では家父長制が想定される（Legrand 2006）など、同時期のモンゴリア青銅器様式の分布圏に比してやや複雑な社会状況にあったと考えられる。すなわち、ミヌシンスクで

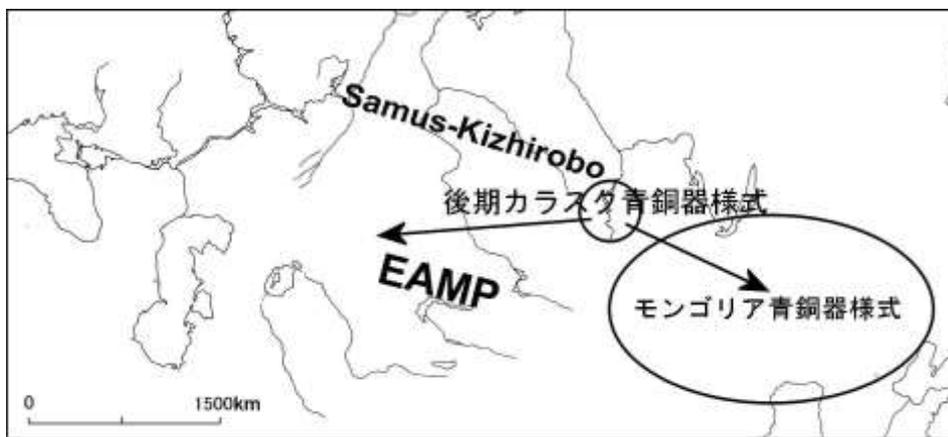


図 8-9 前2千年紀末における青銅器の動態（2）



図 8-10 ユーラシア草原地帯東部の前2千年紀末における文化動態と段階区分（2）

は青銅器をはじめとした物質文化を媒介とする即物的な集団結合関係が既に解体していた可能性があり、この段階は青銅器時代第三段階と定義づけられる。

この状況は、ミヌシンスクにおける前期カラスク青銅器様式から後期カラスク青銅器様式への変化において一層顕著に捉えられる。前 2 千年紀末頃、モンゴリア青銅器様式の一部の要素がミヌシンスクにおいて見られるようになる。ミヌシンスク在来の前期カラスク青銅器様式は、それらの主に形態的特徴のみを採用し、従来の技法を存続させつつ後期カラスク青銅器様式を形成した（図 8-7）。モンゴリア青銅器様式に見られる精製品はミヌシンスクでは顕著でなく、前に想定したモンゴリア青銅器様式における即物的な集団結合がミヌシンスクで再び形成されることはなかった。青銅器は集団結合の媒介物としてではなく、実用的なものとして現れており、このことは直刃、直柄のカラスク式短剣の出現によって代表される。社会複雑化の中で武器として特化した剣が出現したことは戦闘の役割の増大を示す可能性があり、特筆できよう。つまり、前 2 千年紀末のミヌシンスクで看取されるモンゴリアの要素は、モンゴリアを中心とした、青銅器時代第二段階に特有の集団結合の広がりではなく、ミヌシンスク側が自らの青銅器の実用化、多機能化という要求に従って、他地域の要素を取り込んでいった帰結と捉えられるのである。しかしながら、別の側面から考えると、青銅器時代第三段階における完成された様式として広範に拡散していく、後期カラスク青銅器様式の成立は、ミヌシンスクの社会的先進性やその発展だけでは説明できないことになる。すなわち、ミヌシンスクにおける以上の変化は、サヤン山脈を越えて異なった文化、社会段階にあったモンゴリアとの交渉の上に成り立っていたと言えるのである（図 8-8）。

前 2 千年紀末から前 1 千年紀初頭、後期カラスク青銅器様式がモンゴリアに拡散し、ミヌシンスクからサヤン山脈を越えた、前段階とは逆方向の強い影響が認められる（図 8-9）。そこには当然、青銅技術を伴う人の移動が想定される。しかしながら、モンゴリアにおいては、在来のモンゴリア青銅器様式がほぼ消滅すると同時に、後期カラスク青銅器様式がそのまま受容されている点から考えると、モンゴリア内部において、同時期に大きな社会状況の変化があったことが見込まれる。すなわち、モンゴリア青銅器様式に見られるような即物的指標を媒介とした集団間の結びつきが解消され、媒介物としての青銅器がその役割から降り、実用的な器物として機能しただのである。これは、モンゴリアが青銅器時代第二段階を経て、この段階に初めてミヌシンスクと同様の青銅器時代第三段階に入ったことを示すものである（図 8-10）。この要因としてはモンゴリアにおける前 2 千年紀後半以降の乾燥化の帰結としての、各地域における集団間の軋轢の増加を想定できよう。また、騎馬とそれに伴う遊牧の開始も、牧畜民の生活圏を広げ、適地を巡る争いの要因となったことが考えられる。モンゴリアにおける在来の社会的紐帯の解消は、鹿石やヘレクスルが本段階以降にも残存することから考えて、極めて漸移的で、モンゴリア内部の小地域による程度の大小を含みつつ進行した可能性が高い。本論では検討できなかったが、アルタイ山脈を越えた、ユーラシア草原地帯中部、西部においても、前 2 千年紀末には EAMP 系の青銅器文化が衰退し、本論でいう後期カラスク青銅器様式の文化圏に侵食されるという現象が確認されている（Chernykh 1992）。またカラスク式短剣や銅鍔の西漸（高濱 1995）もこれと軌を一にする現象と評価できるものである。つまり、前 2 千年紀末頃には、ユーラシア草原地帯全体において、青銅器時代第二段階における集団結合の解消が起きていた可能性があり、南シベリアのミヌシ

スクは、一歩先んじて変化を経験していたことが考えられる。同時に、豊富な銅資源によって多くの実用的な器種を開発（改変）したミノシンスクは、青銅器様式の拡散に関して言えば中心的な役割を果たしていたと予測されるのである。しかしながら、本論の分析結果を鑑みると、以上の諸変化は在地社会における内的変動と、複雑度の異なる他地域社会との接触という両要素の相互性に起因するものであり、草原地帯におけるミノシンスクの優位性や、そこからの大規模な集団移動だけでは決して説明しえないことは強調しておく必要がある。

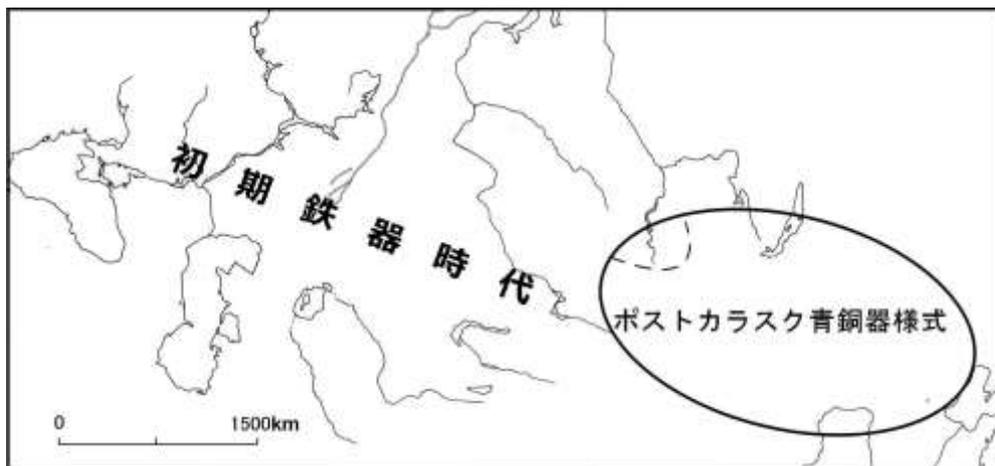


図 8-11 前 1 千年紀初頭における青銅器の動態

前 1 千年紀初頭は「初期遊牧民文化」形成期として、ユーラシア草原地帯全体に類似した文化が形成される時期として捉えられてきた。本論ではポストカラスク青銅器様式の段階にあたり、基本的には後期カラスク青銅器様式の様式構造を引き継いだ青銅器様式が展開するが、南シベリア、モンゴリアという大きな単位でみると、前段階に比して地域性が増大している（図 8-11）。これは、後期カラスク青銅器様式期においてみられたミノシンスクからモンゴリアへの影響によって、一時的に弱まったサヤン、アルタイ山脈という地理的境界が再び意味を帯びてきたものと考えられる。この段階の外モンゴルにおいては、個人墓と考えられる板石墓がより顕著となり、モンゴリア南部の夏家店上層文化では中原系の彝器を伴った厚葬墓が知られる。さらに、トゥバのアルジャン古墳のような、多くの副葬品に加え、木槨と積石を伴う大型の墳丘が出現する。従って、この段階はモンゴリアの各地におけるリーダーの顕在化の時期といえよう。このように、青銅器時代第三段階から一層階層化が進行した状況は、青銅器時代第四段階とできよう。南シベリアの場合、墳丘の出現はやや遅く、その社会状況の分析は今後進める必要がある。さらにサヤン、アルタイ山脈を挟んだユーラシア草原地帯中部以西の諸地域の社会複雑化の程度についても、後期カラスク青銅器様式以前の状況との比較検討を進める必要がある。ただし、アルジャン古墳の大量の馬犠牲や夏家店上層文化における外的財物の集中副葬は、出現したリーダーの不安定を示すものあり、さらに一部の地域ではヘレクスルも残存することから、青銅器時代第二段階（モンゴリア青銅器様式期）以来の状況の存続も予想される。リーダーの顕在化と同時に、各地域における統合化もある程度は進行した可能性があるが、当該期における地域文化の有り方などからいっても、その範囲はそれほど広くなかったと考えられよう。ポストカラスク青銅器様式では、

こうした小地域を超えて特殊な動物紋（口を大きく開けた虎像、列状動物紋など）がモンゴリア、南シベリアのみならずユーラシア草原地帯全体に広まり、従来スキト・シベリア動物紋として注目されてきた。この種の動物紋は、「目鼻の突出した獣頭＝様式化された鹿」の表現が顕著なモンゴリア青銅器様式においては非常に少数であったもので、後期カラスク青銅器様式以後散見される。従って、ポストカラスク青銅器様式の様式構造から考えると、いわゆるスキト・シベリア動物紋は、青銅器時代第二段階における動物紋のような、集団統合の媒介物たり得るものではない。むしろ、この種の動物紋の出現は、青銅器時代第二段階以来の集団結合の解消および、階層化の進行と軌を一にするものと言えよう。「スキト・シベリア動物紋」の拡散については、今後より視野の広い検討が必要となるが、旧来の社会的紐帯が解体する中で新たに出現してきた各地域のリーダーが、外部との関係を誇示するアイテムとしてこれらの動物紋を採用した可能性を挙げておきたい。このように、前1千年紀初頭はユーラシア草原地帯の各地域で地域差を含みつつ、階層化に伴う社会再編が進行した段階と捉えられる。また、当該期のユーラシア草原地帯西部、中部では鉄器化が進行する。草原地帯東部では、利器は青銅器が中心であるが、以上のような社会状況を重視すれば、青銅器時代第四段階は、草原地帯全体における初期鉄器時代と捉えてもよいであろう（図8-12）。



図8-12 ユーラシア草原地帯東部の前1千年紀末における文化動態と段階区分

結 語

本論では、ユーラシア草原地帯における西から東への影響とともに、草原地帯東部を起点とした逆の動きが近年指摘されていることを踏まえ、草原地帯東部における青銅器文化の形成、変容過程そしてその要因について論じてきた。当該地域の青銅器時代から初期鉄器時代については、ミヌシンスクや内蒙古など特定の地域に文化拡散の中心を置く研究、あるいは各段階で地域間の多様な影響関係を指摘する研究が、学史上既に存在している。しかしながら、西部に影響するような青銅器文化が、当該地域でどのように発生、展開するのかを地域全体、かつ通時的な資料を用いて、整合的に論じたものはなかった。また、従来示唆されてきた影響関係が、いずれもその内容について不明瞭であったことを本論では指摘し、青銅器時代から初期鉄器時代を通じた当該地域の社会変化プロセスを考慮しつつ、以下の結論を得た。

まず、前 2 千年紀前半には EAMP、セイマ・トルビノ青銅器群がユーラシア草原、森林草原地帯に広く拡散し、このうち、セイマ・トルビノ青銅器群に関しては、アルタイを中心とする東方起源説が唱えられてきた。しかしながら、本論の検討によれば、セイマ・トルビノ青銅器群は、ウラル山脈付近を中心とした広域での、特殊な青銅器の共有関係によるものであった可能性が高い。このような、精製品を媒介とした青銅器文化を特徴とする段階を、本論では青銅器時代第二段階と定義づけた。前 2 千年紀前半に、EAMP、セイマ・トルビノ（サムシ・キジロボ）青銅器群がコンプレクスとして分布する、サヤン、アルタイ山脈を挟んで西側に位置する新疆北部やミヌシンスク盆地が、この第二段階に位置づけられる。一方、同時期の山脈の東側、モンゴリアでは、上記諸青銅器文化が欠落的に伝わってきており、ここでは、青銅器の特に精製品を媒介とした広範囲の集団の結びつきが未だ形成されていない。この状況は青銅器時代第一段階と定義づけられ、山脈を挟んだ西側との差異が指摘できる。つまり、モンゴリアにおける青銅器は、その開始時点において、より西方の青銅器文化の影響を受けつつ、サヤン、アルタイ山脈という自然的境界とそれに基づく東西両地域の社会状況の差異を、背景として既に持つことが看取できるのである。前 2 千年紀半ばには、サヤン、アルタイ山脈を挟んで、ミヌシンスク盆地では前期カラスク青銅器様式、モンゴリアではモンゴリア青銅器様式が成立した。モンゴリア青銅器様式は EAMP と一定の系譜関係を持つことが指摘できるが、モンゴリア、前期カラスク青銅器様式はそれぞれ極めて独自性の濃い青銅器文化である。また、両青銅器様式の青銅器は、学史上におけるカラスク期の青銅器 (SEAMP) の一部に相当するが、これらは決して単一の青銅器文化では有り得ない。前段階（前 2 千年紀前半）から続く、山脈を挟んだ地域性が、両青銅器様式の基礎となっているのである。モンゴリア青銅器様式では、特殊な青銅器、すなわち精製品が広範囲で共有される特徴を持ち、青銅器を媒介とする即物的結合関係が、広範囲の諸集団間で形成されたことが予想される。つまり、ここにおいて、モンゴリアは青銅器時代第二段階に入ったと考えられるのである。前 2 千年紀末には、両様式の相互関係の下、ミヌシンスクにおいて後期カラスク青銅器様式が生まれた。本様式では、特殊な青銅器の共有化という側面より、青銅器の実用化が進んでおり、社

会の複雑化に伴う、青銅器時代第二段階における精製品を媒介とした集団結合の解体が予想される（青銅器時代第三段階）。後期カラスク青銅器様式は、成立直後にモンゴリアに拡散し、モンゴリアを含めたユーラシア草原地帯東部全体が青銅器時代第三段階となる。この要因としては、ミヌシンスクからの影響だけではなく、当該期における乾燥化、そしてそれに伴う騎馬遊牧の出現という、モンゴリアにおける内的要因が重要であった可能性がある。そして、前1千年紀初頭には、後期カラスク青銅器様式の系譜を引くポストカラスク青銅器様式が、サヤン、アルタイ山脈を挟んだ地域性を保ちつつ、ユーラシア草原地帯東部全体に現れる。本様式では、墳丘や副葬品において階層化が顕著に表示され、一層の社会複雑化が想定できる段階である（青銅器時代第四段階）。本段階は、学史上の「初期遊牧民文化期」の始まりに相当し、また初期鉄器時代の開始期としても、従来非常に重視されてきた。しかしながら、本論で示したところによれば、「初期遊牧民文化期」開始の指標として重要とされてきた、いわゆるスキト・シベリア動物紋の発達は、ユーラシア草原地帯東部において青銅器時代第三段階以降、顕著に進展する社会複雑化の進行と軌を一にしている。つまり、青銅器時代第二段階における広域の諸集団の結合関係の解体と、それに伴う各種要素の衰退が徐々に生じた帰結として、青銅器時代第四段階は捉えられる。いわゆる「初期遊牧民文化」形成の背景には、少なくとも青銅器時代第三段階以降における、サヤン、アルタイ山脈を挟んだ両地域の内的発展と相互関係を基礎とする、社会の複雑化のプロセスが存在するのである。以上のように、当該地域では、サヤン、アルタイ山脈を挟んだ二つの大きな地域性とその相互作用が通時的に認められた。少なくとも本論で明らかにした初期鉄器時代まで、これが、草原地帯東部の歴史的な構造であった。すなわち、山脈を挟んだ両地域は各段階において、社会複雑化の程度を異にしており、青銅器時代を通じて、山脈外側は内側のモンゴリアに比して一段階進んだ社会状況にあった。そして、両地域の相互交渉によって地域全体の歴史動態が進行し、青銅器時代から鉄器時代に至るのである。当該地域の其々において、従来指摘されてきた様々な影響関係、あるいは社会、生業の変化は、この構造の中で歴史的により深く理解しうるものである。

さて、ユーラシア草原地帯東部の青銅器文化をこのように理解したとき、当該地域を起点とした影響を、ユーラシア草原地帯における西部からの流れと対比すればどうであろうか。従来では、前2千年紀前半（セイマ・トルビノ青銅器群）、後半（「カラスクの器物」の拡散）、前1千年紀初頭（「初期遊牧民文化」）に、西からの影響に対峙する形、あるいは単独で、青銅器文化が草原地帯東部に忽然と出現、拡散するという捉え方が主流であり、それぞれの質的な差異も不明であった。しかしながら、ユーラシア草原地帯における「東方からの影響」は、各段階に突如として現れたものではない。西部の影響を受けながら、草原地帯東部において独自の歴史的構造が形成されるという、一層複雑な過程の下、段階を経ながら西へ向かう流れが生み出されたのである。また、草原地帯東部が、青銅器時代から鉄器時代へという同時代のユーラシア全体の社会複雑化において、ユーラシア草原地帯西部においてより早く出現した青銅器文化を成熟させ、地域間の相互関係の中で鉄器時代へと続く変化を独自に成し得たことは特筆すべきである。後期およびポストカラスク青銅器様式の諸要素が、各地域において鉄器時代へ向かう社会複雑化を伴いつつ、ユーラシア草原地帯西部まで拡散したとすれば、ユーラシア草原地帯全体における東部の位置づけ

は一層重要なものとなるであろう。

最後に、本論で扱い得なかった課題若干を記しておく。第一に挙げられるのは、本稿で見出したサヤン、アルタイ山脈を境界とする地域性の形成過程、背景をより具体的に解明することである。特にミヌシンスク盆地における社会複雑化の過程や、境界付近に位置するトゥバ、モンゴル西部がどのような様相を示すのかが注目される。また、山脈を挟んだ両地域において共に、階層化が顕著に進行する段階も、青銅器時代に続く鉄器時代さらに匈奴時代として新たに考察が要されよう。他では、中国中原との関係が挙げられる。ただ年代のみを比較すれば、モンゴリアにおける青銅器時代第二段階の開始（モンゴリア青銅器様式の成立）は中原の商代の開始に、青銅器時代第三段階（後期カラスク青銅器様式）のモンゴリアへの南下は中原では西周の始まりに、おおよそ相当するという興味深い現象が看取される。しかしながら、両者の有機的な関連を現段階で論じることは難しい。ここでは、ユーラシア草原地帯東部における青銅器文化は、青銅器時代第一段階に中原からの若干の影響を受けるほかは、当該地域内部の動態が、青銅器文化変化の極めて重要な因素であったというに留めておきたい。ユーラシア草原地帯においても、東アジアにおいても当該地域は独特な位置を保っていたのである。

図版出典

図 1-1 The Times atlas of the world .第 9 版 (1992) より抜粋、加筆

図 1-2 Chernykh1992

図 2-1 The Times atlas of the world .第 9 版 (1992) より抜粋、加筆

図 2-2 Chernykh1992

図 2-3 Chernykh1992 に加筆

図 2-4 Chernykh1992

図 2-5 Chernykh1992

図 2-6 増田 1970

図 2-7 王博 1987

図 2-8 Kuzmina2001

図 2-9 筆者作成

図 2-10 Chernykh2009

図 2-11 Chernykh1992

図 2-12 筆者作成

図 2-13 東京国立博物館編 1997

図 2-14 東京国立博物館編 1997

図 2-15 上 : Членова 1972、下左、中央 : 郭大順 1993、下右 : 江上、水野 1935 に加筆

図 2-16 李剛 2011

図 2-17 Мошкова1992

図 2-18 Watson1971

図 2-19 高濱 1995

図 2-20 Волков1981

図 2-20 Волков1981

図 2-22 韓建業 2005

図 2-23 水涛 2001

図 2-24 佐野 2004

図 2-25 Черных, Кузьминых1987 に加筆

図 2-26 Kuzmina2007

図 3-1 Черных, Кузьминых1989 に加筆

図 3-2 筆者作成

図 3-3 Черных, Кузьминых1989 に加筆

図 3-4 筆者作成

- 図 3-3 Черных, Кузьминых1989
- 図 3-6 筆者作成
- 図 3-7 筆者作成
- 図 3-8 筆者作成
- 図 3-9 筆者作成
- 図 3-10 Черных, Кузьминых1989
- 図 3-11 Черных, Кузьминых1989 を改変
- 図 3-12 筆者作成
- 図 3-13 筆者作成
- 図 3-14 筆者作成
- 図 3-15 筆者作成
- 図 3-16 筆者作成
- 図 3-17 <http://users.hartwick.edu/anthonyd/opening.html> より引用
- 図 3-18 Черных, Кузьминых1989 に加筆
- 図 3-19 筆者作成
- 図 3-20 筆者作成
- 図 3-21 筆者作成
- 図 3-22 筆者作成
- 図 3-23 筆者作成
- 図 3-24 Черных, Кузьминых1989
- 図 3-25 Черных, Кузьминых1989
- 図 3-26 Кузьмина1966
- 図 3-27 Черных, Кузьминых1989 に加筆
- 図 3-28 Черных, Кузьминых1989
- 図 3-29 Черных, Кузьминых1989
- 図 3-30 筆者作成
- 図 3-31 筆者作成
- 図 3-32 筆者作成
- 図 3-33 筆者作成
- 図 3-34 Черных, Кузьминых1989 に加筆
- 図 3-35 筆者作成
- 図 3-36 筆者作成
- 図 3-37 筆者作成

第 3 章

- 図 4-1 1・15・17：李肖、党彤 1995、2：呂恩国・常喜恩・王炳華 2001、3・6・7・8・10・19：宮本編 2008、4・13・18：Кузьмина1966、5・9：Черных, Кузьминых1989、11・16：内蒙古文物考古研究所、鄂尔多斯博物館 2000、14：北京科技大学冶金与材料史研究所、新疆文

物考古研究所、哈密地区文物管理所 2001、20 : 中国科学院考古研究所甘肅工作隊 1975

- 図 4-2 1・3・6・7・8 : 宮本編 2008、2・5 : Кузьмина1966、4 : 李金国、呂恩国 2003
- 図 4-3 筆者作成
- 図 4-4 筆者作成
- 図 4-5 筆者作成
- 図 4-6 筆者作成
- 図 4-7 筆者作成
- 図 4-8 筆者作成
- 図 4-9 筆者作成
- 図 4-10 筆者作成
-
- 図 5-1 左から順に、Andersson1932、東京国立博物館編 1977、鄂爾多斯博物館編 2006、東京国立博物館編 1997、東京国立博物館編 1997、Гришин1971 を改変
- 図 5-2 楊紹舜 1981、東京国立博物館編 1997、Гришин1971、Гришин1971 を改変
- 図 5-3 1 : Andersson1932、2 : 鄂爾多斯博物館編 2006
- 図 5-4 1 : 楊紹舜 1981、2 : 東京国立博物館編 1997、2 : 東京国立博物館編 1997、Гришин1971
- 図 5-5 1 : 江上、水野 1935、2~4 : Членова1976、5 : 内蒙古自治区文物考古研究所、鄂爾多斯博物館 2000
- 図 5-6 江上、水野 1935
- 図 5-7 筆者作成
- 図 5-8 筆者作成
- 図 5-9 筆者作成
- 図 5-10 Гришин1971
- 図 5-11 筆者作成
- 図 5-12 筆者作成
- 図 5-13 A1 類 : 楊紹舜 1981、A2 類 : 中国青銅器全集編輯委員会編 1995、B1a、B1b、B1c、B2a 類 : Гришин1971、B1c'類、B2b 類 : 東京国立博物館編 1997、B2c 類 : 祝中熹・李永平 2004
- 図 5-14 筆者作成
- 図 5-15 筆者作成
- 図 5-16 筆者作成
- 図 5-17 筆者作成
- 図 5-18 上、中 : 京都大学総合博物館所蔵資料 下 : 天理参考館所蔵資料 を筆者撮影、加筆
- 図 5-19 筆者作成
- 図 5-20 筆者作成
- 図 5-21 左から、東京大学、アバカン博物館、ミヌシンスク博物館、東京大学所蔵資料 を筆者実測
右 : 黒川古文化研究所所蔵資料を筆者撮影
- 図 5-22 筆者作成

- 図 5-23 筆者作成
- 図 5-24 左：Кызласов 1979、中：Гришин 1960 右：ミヌシンスク博物館蔵を筆者撮影
- 図 5-25 筆者作成
- 図 5-26 筆者作成
- 図 5-27 筆者作成
- 図 5-28 筆者作成
- 図 5-29 筆者作成
- 図 5-30 筆者作成
- 図 5-31 筆者作成
- 図 5-32 筆者作成
- 図 5-33 田広金・郭素新 1986
- 図 5-34 高濱 2000b
- 図 5-35 1：Гришин1971、2：郭大順 1993、3：宮本編 2008、4：Andersson1932、5：Andersson1932、6：宮本編 2008、7：呉振祿 1972、8、Andersson1932、9：楊紹舜 1981、10：青海省文物考古研究所 1994
- 図 5-36 1：Кузьмина1966、2：Волков1967、3：Zalmony1933、4：宮本編 2008、5：Bunker et al. 1997、6：Bunker et al. 1997、7：Волков1981
- 図 5-37 鄂爾多斯博物館編 2006
- 図 6-1 1：Гришин1971、2～5：Членова1967、6：Грязнов1980、7～8：東京国立博物館編 1997、9：江上、水野 1935、10：Andersson1932、11～12 中國内蒙古文物考古研究所、韓國東北亞歴史財團 2007、13：Andersson1932、14 東京国立博物館編 2005、15～16 中國内蒙古文物考古研究所、韓國東北亞歴史財團 2007
- 図 6-2 東京国立博物館編 2005
- 図 6-3 筆者作成
- 図 6-4 青銅器における動物紋…1：東京国立博物館編 1997、2：鄂爾多斯博物館編 2006、3：東京国立博物館編 2005、4：Watson1971、5：北京市文物管理处 1976、7：内蒙古自治区文物考古研究所、寧城県遼中京博物館 2009、8：Грязнов1980、9：Andersson1932、10：中國内蒙古文物考古研究所、韓國東北亞歴史財團 2007、11：鄂爾多斯博物館編 2006
左に対比できる鹿石の紋様…Волков1981 を改変もしくは再トレース
- 図 6-5 Вадецкая 1967
- 図 6-6 Волков1981 を改変
- 図 6-7 Волков1981 を改変
- 図 6-8 Волков1981 を再トレース
- 図 6-9 Волков1981 を再トレース
- 図 6-10 Волков1981 を再トレース

- 図 7-1 筆者作成
- 図 7-2 筆者作成
- 図 7-3 韓建業 2005
- 図 7-4 韓建業 2005
- 図 7-5 筆者作成
- 図 7-6 筆者作成
- 図 7-7 筆者作成
- 図 7-8 筆者作成
- 図 7-9 Takahama et al. 2006 を改変
- 図 7-10 Wikipedia ロシア語版 Культура плиточных могил のページより引用
(http://ru.wikipedia.org/wiki/%D0%9A%D1%83%D0%BB%D1%8C%D1%82%D1%83%D1%80%D0%B0_%D0%BF%D0%B%D0%B8%D1%82%D0%BE%D1%87%D0%BD%D1%8B%D1%85_%D0%BC%D0%BE%D0%B3%D0%B8%D0%BB)
- 図 7-11 Новгородова 1989 を改変
- 図 7-12 Cybiktarov 2003 を改変
- 図 7-13 Cybiktarov 2003 を改変
- 図 7-14 Вадецкая 1986 を改変
- 図 7-15 Вадецкая 1967
- 図 7-16 Cybiktarov 2003 を改変
- 図 7-17 Cybiktarov 2003
- 図 7-18 左 : Cybiktarov 2003 右 : 北京市文物研究所 2007
- 図 7-19 Грязнов 1980 を改変

- 図 8-1 google map 地形より抜粋、改変
- 図 8-2 筆者作成
- 図 8-3 筆者作成
- 図 8-4 google map 地形より抜粋、改変
- 図 8-5 筆者作成
- 図 8-6 google map 地形より抜粋、改変
- 図 8-7 筆者作成
- 図 8-8 google map 地形より抜粋、改変
- 図 8-9 筆者作成
- 図 8-10 google map 地形より抜粋、改変
- 図 8-11 筆者作成
- 図 8-12 google map 地形より抜粋、改変

表出典（筆者作成以外）

表 2-2 韓建業 2005

参考文献

【漢字、かな】著者名 50 音順

- 秋山進午 2000『東北アジア民族文化研究』, 同朋舎
- アリェクセイ・ミチューリン (佐藤純一訳) 1956/1957「南シベリヤの古代文化」(1) - (5)『古代学』 5-1, pp.77-94, 5-2, pp.174-185, 5-3,4, pp.325-336, 6-1, pp.76-95, 6-2, pp.209-219
- 安志敏 1954「唐山石棺墓及其相關的遺物」『考古学報』 7, pp.77-86
- 安志敏 1959「甘肅山丹四壩灘新石器時代遺址」『考古学報』 1959-3, pp.7-16
- イエットマー,K. (高浜秀訳) 1984「遊牧騎馬民族文化」『先史時代のヨーロッパ』(図説世界の考古学 3), pp.154-170, 福武書店
- 和泉市久保惣記念美術館 2002『和泉市久保惣記念美術館新収蔵品図録』(展覧会図録)
- 岩永省三 1989「土器から見た弥生時代社会の動態」『横山浩一先生退官記念論文集 I』, pp.43-105, 横山浩一退官記念事業会
- 岩永省三 1998「青銅祭祀とその終焉」『日本の信仰遺跡』, pp.75-99, 雄山閣出版
- 岩永省三 2003「武器形青銅器の型式学」『考古資料大観 6 弥生・古墳時代 青銅・ガラス製品』, pp.242-252, 小学館
- 烏恩 1978「關於我国北方的青銅短劍」『考古』 1978-5, pp.324-333,360,
- 烏恩 1981「我国北方古代動物紋飾」『考古学報』 1981-1, pp.45-61
- 烏恩 1984「論我国北方古代動物紋飾的淵源」『考古与文物』 1984-4, pp.46-59, 104
- 烏恩 1985「殷至周初的北方青銅器」『考古学報』 1985-2, pp.135-156
- 烏恩 1986「中国北方青銅文化与卡拉蘇克文化的關係」『中国考古学研究 夏鼐先生考古五十年記念論文集』二, pp.145-150
- 烏恩 (玉城一枝訳) 1986「オルドス式青銅器について」『古代学研究』 112, pp.1-8
- 烏恩 1993「朱開溝文化的發現及其意義」『中国考古学論叢』, pp.256-266, 科学出版社
- 烏恩 1994「論古代戰車及其相關問題」『内蒙古文物考古文集 第一輯』, pp.327-335, 中国大百科全書出版社
- 烏恩 2002「欧亜大陸草原早期游牧文化的幾点思考」『考古学報』 2002-4, pp.437-470
- 烏恩 2003「論蒙古鹿石的年代及相關問題」『考古与文物』 2003-1, pp.21-30
- 烏恩岳斯图 2006「欧亜草原早期游牧文化的比較研究」『海拉爾謝爾塔拉墓地』, pp.229-248, 科学出版社
- 烏恩岳斯图 2007『北方草原 考古学文化研究—青銅時代至早期鉄器時代』科学出版社
- 烏恩岳斯图 2008『北方草原 考古学文化比較研究—青銅時代至早期匈奴時期』科学出版社
- 梅原末治 1938『古代北方系文物の研究』星野書店

- ヴラディーミル D. クウバレフ (柘本哲訳) 1975 「アルジャン・クルガンの塚」『考古学ジャーナル』109, pp.22-24
- 烏蘭察布博物館・清水河県文物管理所 1997 「清水河県莊窩坪遺址発掘簡報」『内蒙古文物考古文集』第二輯, pp.165-178, 中国大百科全書出版社
- 江上波夫 1948 『ユウラシア古代北方文化』山川出版社
- 江上波夫、水野清一 1935 『内蒙古・長城地帯』(東方考古学叢刊乙種第一冊)
- 江上波夫 1962 「遊牧文化の発展」『北方ユーラシア・中央アジア』(世界考古学大系 9), pp.52-71, 平凡社
- エレオノーラ= ノヴゴロードヴァ (講演録 杉田くるみ、森安孝夫訳) 1980 「モンゴリアを中心とする北・中央アジアの先史学・考古学・神話学・歴史学・民俗学 1,2」『月刊シルクロード』9, pp.20-28, 10, pp.3-10
- 王雲剛・王国榮・李飛龍 1996 「綏中馮家発現商代窖藏銅器」『遼海文物学刊』1996-1, pp.51-55
- 王永剛・崔風光・李延麗 2007 「陝西甘泉県出土晩商青銅器」『考古与文物』2007-3, pp.11-22
- 王占奎・水涛 1997 「甘肅合水九站遺址発掘報告」『考古学研究(三)』pp.300-460, 科学出版社
- 王丹 1992 「吉林大学蔵北方青銅器」『北方文物』1992-3, pp.16-23
- 王長啓 1991 「西安市文管会蔵鄂尔多斯式青銅器及其特性」『考古与文物』1991-4, pp.6-11
- 王炳華 1986 「新疆東部発現的幾批銅器」『考古』1986-10, pp.889-890
- 王博 1987 「新疆近十年発現的一些銅器」『新疆文物』1987-1, pp.45-51
- 王博 1995 「新疆鹿石綜述」『考古学集刊』9, pp.239-260
- 王博・成振国 1989 「新疆巩留県出土一批銅器」『文物』1989-8, p.95
- 王峰 1990 「河北興隆県発現商周青銅器窖藏」『文物』1990-11, pp.57-58
- 王未想 1994 「内蒙古林東塔子溝出土の羊首銅刀」『北方文物』1994-4, p.31
- 王林山・王博 編著 1996 『中国阿爾泰山草原文物』新疆美術摄影出版社
- 大阪市立美術館 1954 『古代北方美術』(大阪市立美術館学報第二)
- 岡崎敬 1953 「鉞と矛について一般商青銅利器に關する一研究」『東方学報』23, pp.135-165
- 岡崎敬 1971 「ユーラシア草原世界の形成」『東アジア世界の形成Ⅲ 内陸アジア世界の形成』(岩波講座世界歴史 6), pp.297-325, 岩波書店
- 岡田英弘 1990 「中央ユーラシアの歴史世界」『中央ユーラシアの世界』, pp.1-21, (民族の世界史 04) 山川出版社
- 鄂爾多斯博物館 編 2006 『鄂爾多斯青銅器』 文物出版社
- 郭素新 1992 「内蒙古発現的鄂尔多斯式青銅器概述」『内蒙古文物考古』1992-1.2, pp.34-38
- 郭素新 1993 「再論鄂尔多斯式青銅器的淵源」『内蒙古文物考古』1993-1.2, pp.89-96
- 郭大順 1987 「試論魏營子類型」『考古学文化論集』(一) pp.,79-98, 文物出版社
- 郭大順 1993 「遼河流域”北方式青銅器”的発現與研究」『内蒙古文物考古』1993-1.2, pp.23-28
- 靳楓毅 1988 「大凌河流域出土的青銅時代遺物」『文物』1988-11, pp.24-35
- 郭物 2002 「欧亜草原考古研究概述」『西域研究』2002-1, pp.103-108
- 郭物 2012 「欧亜草原東部の考古発現与斯基泰的早期歴史文化」『考古』2012-4, pp.56-69

- 郭勇 1962 「石楼后蘭家溝發現商周銅器簡報」『文物』1962-4・5, pp.33-34
- 加藤九祚 1963 『シベリアの歴史』紀伊国屋書店
- 加藤九祚 1976 「スキト・シベリア文化の原郷について—とくにアルジャン古墳の発掘に関連して」『江上波夫教授古稀記念論集 考古・美術編』山川出版社, pp.265-280
- 何堂坤 1988 「銅鏡起源初探」『考古』1988-2, pp.173-176
- 加藤晋平監修 1987 『アルタイ・シベリア歴史文明展』(展覧会図録)
- 加藤晋平監修 1992 『草原の人間と自然 大モンゴル展-国交樹立20周年記念-』(展覧会図録)
- 角田文衛 1971 『増補 古代北方文化の研究』新時代社
- 角田文衛 編 1962 『北方ユーラシア・中央アジア』(世界考古学大系9) 平凡社
- 河北省博物館・文物管理处 編 1980 『河北省出土文物選集』文物出版社
- 河北省文化局文物工作隊 1962 「河北青龍県抄道溝發現一批青銅器」『考古』1962-12, pp. 644-645
- 河北省文物研究所編 1985 『藁城台西商代遺址』文物出版社
- 河北省文物研究所・張家口市文物管理处・懷来県博物館 2001 「河北省懷来県官庄遺址発掘報告」『河北省考古文集』(二), pp. 4-43 北京燕山出版社
- 香山陽坪 1970 『騎馬民族の遺産』(沈黙の世界史6) 新潮社
- 川又正智 1994 『ウマ駆ける古代アジア』講談社
- 川又正智 2006 『漢代以前のシルクロード—運ばれた馬とラピスラズリー』雄山閣
- 川本芳昭 2004 『中国史のなかの諸民族』山川出版社
- 韓金秋 2008 「商周長体刀起源再研究」『公元前2千年紀的晋陝高原与燕山南北』, pp.93-107, 科学出版社
- 韓建業 2005 「新疆青銅時代—早期鉄器時代文化的分期和譜系」『新疆文物』2005-3, pp.57-99
- 韓建業 2007 『新疆的青銅時代和早期鉄器時代文化』文物出版社
- 甘肅省文物局 編 2006 『甘肅文物菁華』文物出版社
- 甘肅省文物考古研究所・吉林大学北方考古研究室 1998 『民樂東灰山考古』科学出版社
- 甘肅省岷県文化館 1985 「甘肅岷県杏林齊家文化遺址調査」『考古』1985-11, pp.977-979
- 吉県文物工作站 1985 「山西吉県出土商代青銅器」『考古』1985-9, pp.848-849
- 牛宏仁 2002 「考古学上所見漢代以前の北疆草原地帯」『中原文物』2002-2, pp.16-19
- 龔国強 1997 「新疆地区早期銅器略論」『考古』1997-9, pp.7-20
- 拒馬河考古隊 1988 「河北易県涑水古遺址試掘報告」『考古学報』1988-4, pp.421-454
- 錦州市博物館 1978 「遼寧興城県楊河發現青銅器」『考古』1978-6, p.387
- 建平県文化館・朝陽地区博物館 1983 「遼寧建平県的青銅時代墓葬及相關遺物」『考古』1983-8, pp.679-694
- 高去尋 1967 「刀斧葬中の銅刀」『歴史語言研究所集刊』37 上, pp.355-381
- 項春松・李義 1995 「寧城小黒石溝石椁墓調査清理報告」『文物』1995-5, pp.4-22
- 高西省 2001 「論早期銅鏡」『中原文物』2001-3, pp.28-36
- 高雪 1984 「陝西清澗県又發現商代青銅器」『考古』1984-8, p.760
- 甲元眞之 1991 「遼西地方における青銅器文化の形成」『国立歴史民族博物館研究報告』35, pp.463-479

- 黒光・朱振元 1975 「陝西綏徳塢頭村發現一批窖藏商代銅器」『文物』1975-2, pp.82-87
- 胡進駐 2008 「石楼—綏徳類型管窺」『考古与文物』2008-2, pp.64-73
- 呉振祿 1972 「保徳県新發現的殷代青銅器」『文物』1972-4, pp.62-66
- 後藤健 2005 「東天山山脈北麓における地域文化の検討」『中国考古学』5, pp.31-48
- 後藤健 2005 「新疆ウイグル自治区における先史時代の社会」『社会考古学の試み』同成社
- 後藤健 2004 「新疆ウイグル自治区哈密地域における先史時代遺跡の考察」『史観』150, pp.95-112
- ゴドリエ・モーリス（山内昶 訳）1976 『人類学の地平と針路』紀伊国屋書店
- 戴應新 1980 「陝西清澗、米脂、佳県出土古代銅器」『考古』1980-1, pp.95,70
- 斎藤忠 1975 「モンゴルの配石墓」『考古学ジャーナル』115, pp.2-3
- 佐野和美 2004 「中国における初現期の銅器・青銅器」『中国考古学』4, pp.49-78
- 佐野和美 2008 「中国西北地域の銅器・青銅器の出現過程—新石器時代から二里頭併行期を中心に」『長城地帯青銅器文化の研究』シルクロード学研究センター, pp.14-29
- 山西省考古研究所 2006 『靈石旌介商墓』科学出版社
- 山西省文管会保管組 1958 「山西石楼県二郎坡出土商周青銅器」『文物参考資料』1958-1, pp.36-37
- 上海博物館編 『草原瑰宝-内蒙古文物考古精品』上海書画出版社
- 朱永剛 2003 「中国北方的管釜斧」『中原文物』2003-2, pp.30-44,50
- 朱華 1989 「山西洪洞県發現商代遺物」『文物』1989-12, pp.90-91
- 祝中熹・李永平 2004 『遥望星宿—甘肅考古文化叢書 青銅器』科学出版社
- 首都博物館書庫編輯委員会 2005 『燕地青銅芸術精品展』北京出版社
- 邵会秋 2008 「試論新疆阿勒泰地区的兩類青銅文化」『西域研究』2008-4, pp.59-65
- 昌吉回族自治州《庭州文物集萃》編委会、昌吉回族自治州文物保護管理所編 1993 『庭州文物集萃』新疆美術攝影出版社
- 邵国田 1983 「内蒙古敖漢旗李家営子出土的青銅器石范」『考古』1983-11, pp.1042-1043,1041
- 邵国田 1993 「内蒙古敖漢旗發現的青銅器及有關遺物」『北方文物』1993-1, pp.18-25
- 蔣剛 2008 「南流黄河兩岸出土青銅器的年代与組合研究」『公元前 2 千年紀的晋陝高原与燕山南北』, pp.68-84, 科学出版社
- 新疆維吾爾自治区博物館・新疆百石緣工美有限公司 主編 2005 『新疆維吾爾自治区博物館』香港金版文化出版社
- 新疆維吾爾自治区文化庁文物処・新疆大学歴史系文博干部專修班 1989 「新疆哈密焉不拉克墓地」『考古学報』1989-3, pp.325, 362
- 新疆維吾爾自治区文物事業管理局 1999 『新疆文物古迹大観』新疆美術攝影出版社
- 新疆考古所 1988 「新疆和碩県新塔拉遺址發掘簡報」『考古』1988-5, pp.399-407,476
- 新疆文物考古研究所 2003 「2002 年小河墓地考古調査与發掘報告」『新疆文物』2003-2, pp.8-64
- 新疆文物考古研究所 2004 「塔什庫爾干県下坂地墓地考古發掘報告」『新疆文物』2004-3, pp.1-59
- 新疆文物考古研究所・新疆維吾爾自治区博物館 編 1997 『新疆文物考古新収獲（続）1990-1996』新疆美術攝影出版社
- 新疆文物考古研究所、石河子市博物館 1994 「石河子市古墓」『新疆文物』1994-4, pp.12-19

- 新疆文物考古研究所、塔城地区文管所 1996「托里県薩孜村古墓葬」『新疆文物』1996-2, pp.14-22
- 新疆文物考古研究所、吐魯番地区文物局 2004「鄯善県洋海一号墓地発掘簡報」『新疆文物』2004-1, pp.1-27
- 新疆文物考古研究所編 1995『新疆文物考古新収獲（1979-1989）』新疆人民出版社
- 水涛 2001『中国西北地区青銅時代』科学出版社
- 青海省文物考古研究所 1994「青海湟中下西河潘家梁卡約文化墓地」『考古学集刊』8, pp.28-86
- 西北大学考古專業・哈密地区文管会 2005「新疆巴里坤岳公台—西黒溝遺址群調査」『考古与文物』2005-2, pp.3-12,17
- 石楼県人民文化館 1972「山西石楼又牒発現的商代銅器」『考古』1972-4, pp.29-30
- 石楼県文化館 1977「山西永和発現殷代銅器」『考古』1977-5, pp.355-356
- 曹桂林・許志国 1988「遼寧法庫県弯柳街遺址調査報告」『北方文物』1988-2, pp.18-20
- 曹建恩 2001「清水河県征集的商周青銅器」『万家寨—水利枢纽工程考古報告集』pp.79-80, 遠方出版社
- 宋新潮 1997「中国早期銅鏡及其相關問題」『考古学報』1997-2, pp.147-169
- 高濱秀 1979「ソ連における先スキタイ文化の研究」『オリエンツ』22-2 pp.100-115
- 高濱秀 1980「東京国立博物館保管 北方系の刀子」『MUSEUM』356, pp.8-23
- 高濱秀 1983「オルドス青銅短劍の型式分類」『東京国立博物館紀要』18, pp.93-131
- 高濱秀 1984 Early Scytho-Siberian Animal Style in East Asia 『江上波夫先生喜寿記念古代オリエンツ論集』, pp.45-54, 山川出版社
- 高濱秀 1993「オルドス青銅器竿頭飾について」『MUSEUM』513, pp.4-19
- 高濱秀 1995「西周・東周時代における中国北辺の文化」古代オリエンツ博物館編『江上波夫先生米寿記念論集 文明学原論』, pp.339-357, 山川出版社
- 高濱秀 1997「中国北方の青銅器」「作品解説」東京国立博物館編『大草原の騎馬民族』（展覧会図録）, pp.140-149, 156-186
- 高濱秀 1997「江上波夫の内蒙古における調査とオルドス青銅器研究」『精神のエクスペディション』, pp.84-89, 東京大学出版会
- 高濱秀 1998『中国北方系青銅器の研究』（平成7～9年度文部省科学研究費補助金・基盤研究B）
- 高濱秀 1999「第2章大興安嶺からアルタイまで」『中央ユーラシアの考古学』, pp.53-136, 同成社
- 高濱秀 2000a「北方草原地帯の美術」『世界美術大全集 東洋編1 先史・殷・周』, pp.333-348, 小学館
- 高濱秀 2000b「前2千年紀前半の中央ユーラシアの銅器若干について」『シルクロード学研究叢書3—金属と文明—』, pp.111-127, シルクロード学研究センター
- 高濱秀 2001「スキタイ動物紋様の起源」『騎馬遊牧民の黄金文化』（季刊 文化遺産12）, pp.18-19, 島根県並河萬里写真財団
- 高濱秀 2003「中央ユーラシアの初期王権研究の視点」「ユーラシア草原地帯東部における王権の成立」『古代王権の誕生III 中央ユーラシア・西アジア・北アフリカ編』, pp.9-12, pp.13-27, 角川書店
- 高濱秀 2005「中国北方青銅器」「図版解説」『東京国立博物館所蔵 中国北方系青銅器』, pp.7-21, pp.229-306, 竹林舎
- 高濱秀 2006a「北方ユーラシアの青銅器文化」『古代アジアの青銅器文化と社会』（歴博国際シンポジ

- ウム 2006 古代アジアの青銅器文化と社会 発表要旨集), pp.35-40
- 高濱秀 2006b 『ユーラシア草原地帯東部における騎馬遊牧文化の成立に関する研究』(科学研究費補助金研究成果報告書)
- 高濱秀 2008 「中国北方系青銅器の製作」『生産と技術の考古学』, pp.113-129, 朝倉書店
- 高濱秀 2011 「モンゴル高原のヘレクスルと鹿石の発掘」『東北アジアの歴史と文化』 pp.121-123, 北海道大学出版会
- 達列力汗・馬米汗 主編 1999 『中国 哈薩克』, 伊犁人民出版社
- 田中琢 1978 「型式学の問題」『日本考古学の基礎』(日本考古学を学ぶ(1)), pp.14-26, 有斐閣
- 田中良之 1982 「磨消縄文土器伝播のプロセス—中九州を中心として—」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 pp.59-96, 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
- 中国科学院考古研究所甘肅工作隊 1974 「甘肅永靖大何庄遺址発掘報告」『考古学報』1974—2, pp.29-62
- 中国科学院考古研究所内蔵工作隊 1975 「寧城南山根遺址発掘報告」『考古学報』1975—1, pp.117-140
- 中国科学院考古研究所甘肅工作隊 1975 「甘肅永靖秦魏家齐家文化墓地」『考古学報』1975—2, pp.57-96
- 中国科学院考古研究所内蔵工作隊 1974 「赤峰薬王廟、夏家店遺址試掘報告」『考古学報』1974—1, pp.111-144
- 中国社会科学院考古研究所 1998 『大甸子』 科学出版社
- 中国社会科学院考古研究所涇渭工作隊 1999 「陝西彬県断涇遺址発掘報告」『考古学報』1999—1, pp.73-96
- 中国社会科学院考古研究所内蔵発掘隊 1961 「内蔵赤峰薬王廟、夏家店遺址試掘簡報」『考古』1961—2, pp.77-81
- 中国青銅器全集編輯委員会編 1995 『北方民族』(中国青銅器全集 15) 文物出版社
- 中国内蔵文物考古研究所、韓国高句麗研究財團編 2006 『内蔵中南部の鄂爾多斯青銅器和文化』(中韓共同學術調査報告書 1)
- 中国内蔵文物考古研究所、韓国東北亞歴史財團 2007 『夏家店上層文化的青銅器』(中韓共同學術調査報告書 2)
- 張映文・呂智榮 1988 「陝西清澗県李家崖古城址発掘簡報」『考古与文物』1988—1, pp.47-56
- 張家口考古隊 1984 「蔚県夏商時期考古的主要收穫」『考古与文物』1984—1, pp.40-48
- 張文立・林澐 2004 「黒豆嘴類型青銅器中的西來因素」『考古』2004—5, pp.65-73
- 陳戈 1991 「略論焉不拉克文化」『西域研究』1991—1
- 沈振中 1972 「忻県連寺溝出土的青銅器」『文物』1972—4, pp.67-68
- 陳振中 1985 「我国古代的青銅削刀」『考古与文物』1985—4, pp.72-80, 83
- 陳万雄 1998 『草原文化—遊牧民族的広闊舞台』 商務印書館
- 鄭紹宗 1984 「中国北方青銅短劍の分期及形制研究」『文物』1984—2, pp.37-49
- 鄭紹宗 1994 「長城地帯発現の北方式青銅刀子及其有関問題」『文物春秋』1994—4, 28-43, 93
- 田毓璋 1983 「甘肅臨夏発現齐家文化骨柄銅刀」『文物』1983—1, p.76
- 田広金 1992 「内蔵石器時代—青銅時代考古発現和研究」『内蔵文物考古』1992—1.2, pp.1-20
- 田広金 1997 「中国北方系青銅器文化和類型的初步研究」『考古学文化論集』(四), pp.266-307

- 田広金・郭素新 1998「中国北方畜牧—游牧民族の形成と発展」『中国商文化国際学術討論会論文集』中国大百科全書出版社
- 田広金・郭素新 1986「鄂尔多斯式青銅器研究」『鄂尔多斯式青銅器』, pp.3-119, 文物出版社
- 田広金・郭素新 1988「鄂尔多斯式青銅器的淵源」『考古学報』1988—3, pp.257-275
- 田広金・郭素新 2004『北方考古論文集』科学出版社
- 田広金・郭素新 2005『早期中国文明 北方文化与匈奴文明』江蘇教育出版社
- 田広金・郭素新(小田木治太郎訳) 1997「北方民族青銅文化の起源と発展」『古文化談叢』36, pp.177-219
- 田広金・韓建業 2003「朱開溝文化研究」『考古学研究』5 上冊, pp.227-259
- 天津市文化局考古發掘隊 1966「河北大廠大坨頭遺址試掘簡報」『考古』1966—1, pp.8-13
- 天津市文物管理处 1977「天津薊県張家園遺址試掘簡報」『文物資料叢刊』1, pp.163-171, 91
- 天津市文物管理处考古隊 1983「天津薊県園坊遺址發掘報告」『考古』1983—10, pp.877-893
- 天津市歴史博物館考古部 1993「天津薊県張家園遺址第三次發掘」『考古』1993—4, pp.311-323
- 天理ギャラリー1994『騎馬民族の遺品—オルドス青銅器とその周辺—』(展覧会図録)
- 天理大学付属天理参考館 1993『オルドス青銅器—遊牧民の動物意匠—』(展覧会図録)
- 東亜考古学会蒙古調査班 1941『蒙古高原横断記』東京朝日新聞社
- 唐雲明 1982「河北境内幾処商代文化遺存記略」『考古学集刊』2, pp.44-46
- 童恩正(川崎保・竹原伸仁訳) 1994「中国東北から西南に至る辺地半月形文化伝播帯試論」『博古研究』7, pp.1-23
- 東京国立博物館編 1997『大草原の騎馬民族』(展覧会図録)
- 東京国立博物館編 2005『東京国立博物館所蔵中国北方系青銅器』竹林舎
- 唐山市文物管理处・遷安県文物管理所 1997「河北遷安県小山東庄西周時期墓葬」『考古』1997—4, pp.58-62
- 内蒙古敖漢旗博物館 編著 2004『敖漢文物精華』内蒙古文化出版社
- 内モン自治区文物工作隊 1965「内モン自治区寧城県小榆樹林子遺址試掘簡報」『考古』1965—12, pp.619-621
- 内モン自治区文物考古研究所 1988「内モン自治区朱開溝遺址」『考古学報』1988—3, pp.301-332
- 内モン自治区文物考古研究所・鄂尔多斯博物館 2000『朱開溝—青銅時代早期遺址發掘報告』文物出版社
- 内モン自治区文物考古研究所・清水河県文物管理所 2001「清水河県西岔遺址發掘簡報」『万家寨水利樞紐工程考古報告集』, pp.60-78, 遠方出版社
- 内モン自治区文物考古研究所・寧城県遼中京博物館 2009『小黑石溝 夏家店上層文化遺址發掘報告』科学出版社
- 西嶋定生 1970「総説」『東アジア世界の形成 I』(岩波講座世界歴史 4), pp.3-19, 岩波書店
- 日本経済新聞社 1983『中国内モン自治区北方騎馬民族文物展』(展覧会図録)
- 寧城県文化館・中国社会科学院研究生院考古系東北考古專業 1985「寧城県新發現的夏家店上層文化墓葬及其相關遺物的研究」『文物資料叢刊』9, pp.23-58
- 梅建軍 2002「新疆東部地区出土早期銅器の初步分析和研究」『西域研究』2002—2, pp.1-10
- 梅建軍 2005「關於中国冶金起源及早期銅器研究的幾個問題」『古代文明研究』1, pp.
- 梅建軍・高濱秀 2003「塞伊瑪—図比諾現象和中国西北地区的早期青銅文化」『新疆文物』2003—1,

pp.47-57

- 白雲翔 2002 「中国早期銅器的考古發現与研究」『21 世紀中国考古学与世界考古学』中国社会科学出版社, pp.
- 畠山禎 1992 「北アジアの鹿石」『古文化談叢』27, pp.207-225
- 林俊雄 1990 「草原の民—古代ユーラシアの遊牧騎馬民族」『中央ユーラシアの世界』(民族の世界史 04), pp.25-58, 山川出版社
- 林俊雄 1999 「草原遊牧民の美術」『世界美術大全集 東洋編 15 中央アジア』, pp.56-72, 小学館
- 林俊雄 2003 「中央ユーラシア遊牧民の古墳から見た王権の成立と発展」『古代王権の誕生Ⅲ中央ユーラシア・西アジア・北アフリカ編』, pp.46-69, 角川書店
- 林俊雄 2005 『ユーラシアの石人』雄山閣
- 林俊雄 2007 『スキタイと匈奴 遊牧の文明』(興亡の世界史 02) 講談社
- 林俊雄 2009 『遊牧国家の誕生』山川出版社
- 林俊雄 2011 「草原の考古学」『北東アジアの歴史と文化』, pp.105-120, 北海道大学出版社
- 林俊雄、高濱秀、雪嶋宏一、川又正智、末崎真澄 1993 「ユーラシア草原における騎馬と車馬の歴史」『馬の博物館研究紀要』6, pp.1-24
- 林巳奈夫 1972 『中國殷周時代の武器』京都大学人文科学研究所
- 林巳奈夫 1995 『中国文明の誕生』吉川弘文館
- 潘玲 2008 「論鹿石的年代及相關問題」『考古学報』2008-3, pp.311-336
- 樋口隆康 「弥生時代青銅器の源流」『大陸文化と青銅器』(古代史発掘 5), pp.87-95 講談社
- 平井尚志 1966 「モンゴールによるモンゴリアの考古学—現状とその問題点」『史苑』27-1, pp.11-21
- 平尾良光・榎本淳子 2005 「鉛同位体比から見た古代中国北方民族の青銅器」『東京国立博物館所蔵 中国北方系青銅器』, pp.307-318, 竹林舎
- ヴァディム・エリセエフ 1950 「古代のモンゴリア」『考古学雑誌』36-4, pp.1-21
- フィリップス 勝藤猛訳 1966 『草原の騎馬民族国家』創元社
- 福岡市博物館・西日本新聞社 編 2005 『アルタイの至宝展』(展覧会図録)
- 藤川繁彦 1982 「カラスク文化期の用途不明器物」『史観』107, pp.296-307
- 藤川繁彦編 1999 『中央ユーラシアの考古学』同成社
- 扶風県博物館 2007 「陝西扶風県新發現一批商周青銅器」『考古与文物』2007-3, pp.3-10
- 文浩・于堅監修 1983 『中国内蒙古 北方騎馬民族文物展』(展覧会図録)
- 北京科技大学冶金与材料史研究所、新疆文物考古研究所、哈密地区文物管理所 2001 「新疆哈密天山北路墓地出土銅器的初步研究」『文物』2001-6, pp.79-89
- 北京市文物管理处 1976 「北京地区的又一重要考古收穫—昌平白浮西周木椁墓的新啓示」『考古』1976-4, pp.246-258
- 北京市文物管理处 1977 「北京市平谷県發現商代墓葬」『文物』1977-11, pp.1-8
- 北京市文物管理处・中国科学院考古研究所琉璃河考古工作队・房山県文物局 1976 「北京房山琉璃河夏家店下層文化墓葬」『考古』1976-1, pp.59-60
- 北京市文物管理处 1978 「北京市新征集的商周青銅器」『文物資料叢刊』2, pp.14-21

- 北京市文物管理处 1979 「北京市延慶県西撥子村窖藏銅器」『考古』1979-3, pp.227-230
- 北京市文物研究所 1995 『琉璃河西周燕国墓地 1973-1977』文物出版社
- 北京市文物研究所 1999 『鎮江宮与塔照』中国大百科全書出版社
- 北京市文物研究所 2007 『軍都山墓地—玉皇廟』文物出版社
- 北京市文物研究所 2010 『軍都山墓地—葫芦溝与西梁堖』文物出版社
- 《北京文物精粹大系》編委会・北京市文物局編 2002 『北京文物精粹大系 青銅器卷』北京出版社
- 彭立平 1993 「圍場県博物館収集一件青銅獸頭彎刀」『文物春秋』1993-3, p.88
- 馮恩学 2002 「青銅時代到早期鉄器時代長城地帯对外貝加尔地区的文化影响」『辺疆考古研究』1, pp.219-231
- 馮恩学 2002 『俄国東西伯利亚与遠東考古』吉林大学出版社
- 馬潤臻 1984 「綏徳發現兩件青銅器」『考古与文物』1984-2, p.112
- 増田精一 1970 「青銅器時代の東西文化交流」『東西文明の交流 1 漢とローマ』, pp.84-118 平凡社
- 町田章 2006 『中国古代の銅劍』(奈良文化財研究所学報第 75 冊)
- 松本圭太 2009a 「カラスク式短劍の成立と展開」『古代文化』61-1, pp.37-55
- 松本圭太 2009b 「新疆、長城地帯の初期青銅器」『古文化談叢』62, pp.185-208
- 松本圭太 2011 「中国初期青銅器とセイマ・トルビノ青銅器群」『中国考古学』11, pp.133-153
- 松本圭太 2012 「モンゴリアにおける青銅器様式の展開」『中国考古学』12, pp.111-134
- 三船温尚・畠山禎・高濱秀・長柄毅一・劉治国・荒友里子「古代における燃焼消失原型鑄造法使用の可能性」『アジア鑄造技術史学会会誌 FUSUS』4 pp.55-62
- 三宅俊彦 1999 『中国古代北方系青銅器の研究』(國學院大學大学院研究叢書)
- 宮本一夫 2000 『中国古代北疆史の考古学的研究』中国書店
- 宮本一夫 2005 『神話から歴史へ』(中国の歴史 01) 講談社
- 宮本一夫 2006 「長城地帯の青銅器」『古代アジアの青銅器文化と社会』(歴博国際シンポジウム 2006 古代アジアの青銅器文化と社会 発表要旨集), pp.42-47
- 宮本一夫 2007 「エルミターージュ美術館所蔵ミスシンスク地方の青銅器」『東アジアと日本—交流と変容』4, pp.1-10
- 宮本一夫 2007a 「漢と匈奴の国家形成と周辺地域—農耕社会と遊牧社会の成立—」『東アジアと日本：交流と変容』(九州大学 21 世紀 COE プログラム 総括ワークショップ報告書), pp.111-121
- 宮本一夫 2008 「中国初期青銅器文化における北方系青銅器文化」『長城地帯青銅器文化の研究』, pp.169-183, シルクロード学研究センター
- 宮本一夫 2009 「結語」『中国初期青銅器文化の研究』, pp.207-216, 九州大学出版会
- 宮本一夫 2011 「東北アジアの相対編年を目指して」『AMS 年代と考古学』, pp.5-38, 学生社
- 宮本一夫編 2008 『長城地帯青銅器文化の研究』(シルクロード学研究 Vol.29) シルクロード学研究センター
- 宮本一夫・白雲翔編 2009 『中国初期青銅器文化の研究』九州大学出版会
- 護雅夫 1968 「匈奴—古代遊牧帝国の形成—」『東アジア文明の形成』(世界の歴史 3), pp.272-290 筑摩書房

- 護雅夫 1971「アジア・遊牧国家の形成と構造」『東アジア世界の形成Ⅲ 内陸アジア世界の形成』（岩波講座世界歴史 7）, pp.359-375 岩波書店
- 森安孝夫 2007『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史 05）講談社
- 楊建華 2000「冀北周代青銅文化初探」『中原文物』2000-5, pp.22-30
- 楊建華 2002「燕山南北商周之際青銅器遺存的分群研究」『考古學報』2002-2, pp.157-174
- 楊建華 2008「商周時期中国北方冶金区的形成—商周時期北方青銅器的比較研究」『公元前 2 千年紀的晋陝高原与燕山南北』, pp.221-255, 科学出版社
- 楊建華・Linduff,K.2008「試論“勺形器”的用途」『公元前 2 千年紀的晋陝高原与燕山南北』, pp.85-92, 科学出版社
- 楊紹禹 1959「石樓县發現古代銅器」『文物』1959-3, pp.71-72
- 楊紹舜 1974「山西石樓義牒会坪發現商代兵器」『文物』1974-2, p.69
- 楊紹舜 1976「山西石樓新征集到的幾件商代青銅器」『文物』1976-2, p.94
- 楊紹舜 1981「山西柳林县高紅發現商代銅器」『考古』1981-3, pp.211-212
- 楊紹舜 1981「山西石樓褚家峪、曹家垣發現商代銅器」『文物』1981-8, pp.49-53
- 姚生民 1986「陝西淳化县出土的商周青銅器」『考古与文物』1986-5, pp.12-22
- 羅豐・韓孔樂「寧夏固原近年發現的北方系青銅器」『考古』1990-5, pp.403-418
- 李維明 1988「簡論商代青銅刀」『中原文物』1988-2, pp.42-47
- 李海榮 2003『北方地区出土夏商周時期青銅器研究』文物出版社
- 李亨求 1984「銅鏡的源流 - 中国青銅文化与西伯利亚青銅文化的比較研究」『故宮學術季刊』1-4, pp.29-70
- 李金国・呂恩国 2003「温泉县阿敦喬魯遺存的考古調查和研究」『新疆文物』2003-1, pp.20-27
- 李剛 2011『中国北方青銅器的欧亚草原文化因素』文物出版社
- 李肖・党彤 1995「准口葛爾盆地周緣地区出土銅器初探」『新疆文物』1995-2, pp.40-51
- 李水城 2005「西北与中原早期冶銅業的区域特征及交互作用」『考古學報』2005-3, pp.239-278
- 李水城 1999「從考古發現看公元前二千紀東西方文化的碰撞与交流」『新疆文物』1999-1, pp.53-65
- 李水城・水涛 2000「四壩文化銅器研究」『文物』2000-3, pp.36-44
- 李伯謙 1988「從靈石旌介商墓的發現看晋陝高原青銅器文化的帰属」『北京大学學報(哲学社会科学版)』1988-2, pp.
- 李賓漢 2003「銅斧文化圈」『考古學研究』5 上冊, pp.346-358
- 李明華 2011「從青銅短劍看早期草原青銅文化的傳播」『草原文物』, pp.40-45
- 劉学堂 1998「中国早期銅鏡起源研究—中国早期銅鏡起源于西域說」『新疆文物』1998-3, pp.55-72
- 劉学堂 2005「新疆早期青銅文化及相關問題初探」『吐魯番學研究』2005-2, pp.63-73
- 劉建忠 1988「河北懷安獅子口發現商代鹿首刀」『考古』1988-10, p.941
- 劉国瑞 主編 1997『哈密古代文明』新疆美術攝影出版社
- 遼寧省昭烏達盟文物工作站・中国科学院考古研究所東北工作隊 1973「寧城县南山根的石椁墓」『考古學報』1973-2, pp.27-40
- 遼寧省文物考古研究所・喀左县博物館 1989「喀左和尚溝墓地」『遼海文物學刊』1989-2, pp.110-115

- 遼寧省文物考古研究所・吉林大学考古学系 1992 「遼寧阜新平頂山石城址発掘報告」『考古』1992-5, pp.399-417
- 林滙 1987 「商文化青銅器与北方地区青銅器関係之再研究」『考古学文化論集』(一), pp.129-155
- 林滙 1994 「早期北方系青銅器的幾個年代問題」『内蒙古文物考古文集』, pp.291-295, 中国大百科全书出版社
- 林滙 (佐野和美訳) 2002 「北方系青銅器の開始」『東北アジアにおける先史文化の比較考古学的研究』(平成 11~13 年度科学研究費報告), pp.43-52
- 林滙 2011 「絲路開通以前新疆的交通路綫」『草原文物』2011-1, pp.55-64
- 廊坊市文物管理所・香河县文物保管所 1999 「河北香河县慶功台村夏家店下層文化墓葬」『文物春秋』1999-6, pp.26-30
- 呂恩国・常喜恩・王炳華 2001 「新疆青銅時代考古文化淺論」『蘇秉琦与当代中国考古学』pp.172-193 科学出版社
- 呂知榮 1989 「試論李家崖文化的幾個問題」『考古与文物』1989-4, pp.75-79
- 呂知榮 1991 「朱開溝古文化遺存与李家崖文化」『考古与文物』1991-6, pp.47-52, 112

【アルファベット】著者名 ABC 順

- Allard, F., Erdenebaatar, D. 2005 Khirigsuurs, ritual and mobility in the Bronze Age of Mongolia. In *Antiquity* 79, pp.547-563.
- Andersson, J.G. 1932 Hunting Magic in the Animal Style. In *Bulletin of museum of Far Eastern Antiquities*.4, pp.221-317.
- Anthony, D. W. 1998 The opening of the Eurasian steppe at 2000 BCE. In *The Bronze Age and Early Iron Age Peoples of Eastern Central Asia.*, pp.105-107
- Bokovenko, N. 2006 The emergence of the Tagar culture. In *Antiquity* 80, pp.860-879.
- Bokovenko, N. 1995 The Tagar culture in the Minusinsk basin. In *Nomads of the Eurasian Steppes in the early iron age.*, pp.299-313.
- Bokovenko, N. 1995 History of studies and the main problems in the archaeology of Southern Siberia during the Scythian period. In *Nomads of the Eurasian Steppes in the early iron age.*, pp.255-263
- Bokovenko, N. 2005 Migrations of early nomads of the Eurasian steppe in a context of climatic changes. In *Impact of the Environment on Human Migration in Eurasia.*, pp.21-33
- Bunker, E.C. 1993 Gold in the ancient chinese world: a cultural puzzle In *Artibus Asiae* 23 1/2, pp.27-50.
- Bunker, E.C. 1998 Cultural diversity in the Tarim basin vicinity and its impact on ancient Chinese culture. In *The Bronze Age and early Iron Age peoples of eastern Central Asia* (中亜東部青銅和早期鉄器時代の居民); v. 2., pp.604-618.
- Bunker, E.C. 2002 *Nomadic Art of the Eastern Eurasian Steppes.*
- Bunker, E.C., et al. 1997 *Ancient Bronzes of the Eastern Eurasian Steppes from the Arthur*

M.Sackler Collections.

Chase, W. T., Douglas, J. G. 1997 Technical studies and metal compositional analyses of bronzes of the Eastern Eurasian Steppes from the Arthur M. Sackler Collections. In *Bunker 1997*, pp.306-318

Chernykh, E. N. 1992 *Ancient metallurgy in the USSR.*

Chernykh, E. N. 2004 Ancient metallurgy of Northeast Asia: From the Urals to the Saiano-Altai. In *Metallurgy in ancient Eastern Eurasia from the Urals to the Yellow river.*, pp.15-36

Chernykh, E. N. 2008 Formation of the Eurasian “steppe belt” of stockbreeding cultures: viewed through the prism of archaeometallurgy and radiocarbon dating. In *Archaeology Ethnology & Anthropology of Eurasia.*, 2008-3, pp.36-53.

Chernykh, E. N. 2008 Ancient metallurgy in the Eurasian steppes and China: problems of interactions. In *Metallurgy and civilisation.*, pp.3-8

Chernykh, E. N. 2009 Formation of the Eurasian Steppe Belt Cultures. In *Social complexity in prehistoric Eurasia: monuments metals, and mobility.*, pp.115-145

Childe, G. 1930 *The Bronze Age.*

Childe, G. 1954 *What happened in history.* (チャイルド著 (今来陸郎・武藤潔訳) 1958 『歴史のあけぼの』)

Chilenova, N. L. 1995 On the degree of similarity between material culture components within the “Scythian World”. In *The archaeology of the steppes, methods and strategies.*, pp.499-552.

Cybiktarov, A. D. 2003 Central Asia in the Bronze and early Iron ages. *Archaeology, Ethnology and Anthropology of Eurasia* 2003-1, pp.80-97

Dergachev, V. 1989 Neolithic and Bronze Age cultural communities of the steppe zone of the USSR. In *Antiquity* 63, pp.793-802

Earle, T. 2002 *Bronze Age Economics: The Beginnings of Political Economies.*

Erdenebaatar 2002 Brial materials related to the history of the bronze age in the territory of Mongolia. In *Metallurgy in ancient eastern Eurasia from the Ural to the Yellow river.*, pp. 189-222.

Fitzhugh 2009 Pre-Scythian Ceremonialism, Deer Stone Art, and Cultural Intensification in Northern Mongolia. In *Social Complexity in Prehistoric Eurasia.*, pp.378-411.

Gimbutas, M. 1956 Borodino, Seima and their contemporaries. In *Proceedings of the prehistoric society* 22, pp.143-172

Gimbutas, M. 1956 *Bronze Age Cultures in Central and Eastern Europe.*

Gryaznov, M. P. 1969 *Southern Siberia.*

Han Rubin, Sun Shuyun 2004 Preliminary studies on the bronzes excavated from the Tianshanbeilu, cemetery, Hami, Xinjiang. In Linduff, K. M. ed. *Metallurgy in ancient Eastern Eurasia from the Urals to the Yellow river.*, pp.157-172

Hanks, B. K., A. V. Epimakhov, A. C. Renfrew 2007 Towards a refined chronology for the Bronze Age of the southern Urals, Russia. *Antiquity*, 312, pp.353-367

- Honeychurch et al 2009 Re-writing Monumental Landscapes as Inner Asian Political Process. In *Social Complexity in Prehistoric Eurasia.*, pp. 330-357
- Houle 2009 Socially Integrative Facilities and the Emergence of Social Complexity on the Mongolian Steppe. In *Social Complexity in Prehistoric Eurasia.*, pp.358-377
- Institute of Historical Metallurgy and Materials USTB. 2006 *Metallurgy and civilisation. The 6th International conference on the beginning of the use of metals and alloys.*
- Jettmar,K 1950 The KARASUK culture and its South-Eastern affinities. In *Bulletin of museum of Far Eastern Antiquities.No.22*, pp.83-126
- Jettmar,K 1970 Cross-dating in Central Asia. In *Central Asiatic Journal.* 14.pp.253-276
- Jettmar,K 1981 Cultures and Ethnic Groups West of China in the Second and First Millennia B.C. In *Asian Perspective* 24-2, pp.145-162
- Karlgren,B. 1945 Some weapons and tools of the Yin dynasty. In *Bulletin of museum of Far Eastern Antiquities.No.17*, pp.101-144
- Khazanov, A.M. 1994 *Nomads and the Outside World. 2nd edition.*
- Kohl,P. L. 2006 The early integration of the Eurasian steppes with the ancient Near East: movements and transformations in the caucasus and central asia. In *Beyond the Steppe and the Sown.*
- Kohl,P. L. 2007 *The making of bronze age Eurasia.*
- Koryakova, L. and Epimakhov,A. 2007 *The Urals and Western Siberia in the bronze and iron ages.*
- Koryakova,L.N 2002 The Social Landscape of Central Eurasia in the Bronze Age and Iron Ages: Tendencies, Factors, and Limits of Transformation. In ed.Karlene Jones-Bley and D.G. Zdanovich. *Complexes Societies of Central Eurasia from the 3rd to the 1st Millennium BC.vol.1.*, pp.97-118
- Kristiansen,K. 1984 Ideology and material culture: an archaeological perspective. In *Marxist perspectives in archaeology.*, pp.72-100
- Kristiansen,K. 1991 Chieftoms, states, and Systems of social evolution. In *Chieftoms: power, economy, and ideology.*, pp.16-43
- Kristiansen,K. 1998 *Europe before history.*
- Kristiansen,K., Larsson,T.B. 2005 *The rise of bronze age society.*
- Kuzmina,E.E. 1998 Cultural Connections of the Tarim Basin People and Pastoralists of the Asian Steppes in the Bronze Age. In ed.H.Mair, *The Bronze Age and Early Iron Age Peoples of Eastern Central Asia vol.1.*,pp.63-93
- Kuzmina,E.E. 2000 The Eurasian Steppes: The Transition from Early Urbanism to Nomadism. In *Kurgans, Ritual Sites, and Settlements Enrasian Bronze and Iron Age.*, pp.118-125.
- Kuzmina,E.E. 2001 Pre-history of the Great Silk Road: Cultural Connections of Xingjiang Population with Andronovo Culture Tribes in the Bronze Epoch. In *Silk road art and archaeology*, 7, pp.1-21

- Kuzmina, E.E. 2004 Historical Perspectives on the Andronovo and early metal use in Eastern Asia. In Linduff, K.M. ed. *Metallurgy in ancient Eastern Eurasia from the Urals to the Yellow river.*
- Kuzmina, E.E. (ed. Mallory, J.P.) 2007 *The Origin of the Indo-Iranians.*, pp.37-84
- Legrand, S. 2004 Karasuk metallurgy: technological development and regional influence. In Linduff, K.M. ed. *Metallurgy in ancient Eastern Eurasia from the Urals to the Yellow river.*, pp.139-155
- Legrand, S. 2006 The emergence of the Karasuk culture. In *Antiquity*, 80, pp.843-879
- Lin Yun 1986 A Reexamination of the Relationship between Bronzes of the Shang Culture and of the Northern Zone. In ed. K.C.Chang, *Studies of Shang Archaeology.*, pp.237-273
- Linduff, K.M. 2003 A Walk on the Wild Side: Late Shang Appropriation of Horses in China In *Prehistoric steppe adaptation and the horse.*, pp.139-162
- Linduff, K.M. 2004 How far does the Eurasian metallurgical tradition extend? In Linduff, K.M. ed. *Metallurgy in ancient Eastern Eurasia from the Urals to the Yellow river.*, pp.1-14
- Linduff, K.M. 1995 Zhukaigou, steppe culture and the rise of Chinese civilization. In *Antiquity*, 69., pp.133-145
- Linduff, K.M. 1998 The Emergence and Demise of Bronze-Producing Cultures Outside the Central Plain of China In *The Bronze Age and Early Iron Age Peoples of Eastern Central Asia* vol.2., pp.619-646
- Linduff, K.M., Han Rubin, Sun Shuyun ed. 2000 *The beginnings of metallurgy in China.*
- Loehr, M. 1949 Ordos Daggers and Knives New Material, Classification and Chronology. First Part: Daggers. In *Artibus Asiae* vol.XII., pp.23-83
- Loehr, M. 1951 Ordos Daggers and Knives New Material, Classification and Chronology. Second Part: Knives. In *Artibus Asiae* vol.XIV., pp.77-162
- Mei, Jianjun 2004 Metallurgy in bronze age Xinjiang and its cultural context. Linduff, K.M. ed. *Metallurgy in ancient Eastern Eurasia from the Urals to the Yellow river.*, pp.173-188
- Mei, Jianjun 2000 *Copper and bronze metallurgy in late prehistoric Xinjiang.*
- Mei, Jianjun 2003 Cultural Interaction between China and Central Asia during the Bronze Age In *Proceedings of the British Academy*, 121., pp.1-40
- Mei, Jianjun 2004 Early Copper-based Metallurgy in China: Old Question, New Perspective. In 『金沢大学考古学紀要』 VOL.27., pp.109-118
- Mei, Jianjun 2009 Early metallurgy in China: some challenging issues in current studies. In *Metallurgy and civilisation.* pp.9-16
- Mei, Jianjun and Colin, Shell 1999 The existence of Andronovo cultural influence in Xinjiang during the 2nd millennium BC. In *Antiquity* 281., pp.570-578
- Nicola Di Cosmo 1999 The Northern frontier in pre-imperial China. In *The Cambridge history of ancient China from the origins of civilization to 221B.C.*, pp.885-966
- Parzinger, G. 2000 The Seima-Turbino phenomenon and the origin of the Siberian animal style. In

- Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia.* 2000-1., pp.66-75
- Renfrew, C. 1973 *Before Civilization.* (レンフルー著 (大貫良夫訳) 『文明の誕生』)
- Renfrew, C. 2002 Pastoralism and Interaction: some introductory questions. *Ancient interactions: east and west in Eurasia.*, pp.1-10
- Roberts, B.W., Thornton, C.P. and Pigott, V.C. 2009. Development of metallurgy in Eurasia. In *Antiquity*, 83, pp.1012-1022.
- Salmony, A. 1933 *Sino-Siberian art in the Collection of C.T.Loo.*
- Serikov, Y.B., Korochkova, O. N., Kuzminykh, S.V. and Stefanov, V. I. 2009 SHAITANSKOYE OZERO II: new aspects of the Uralian bronze age. In *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia.*, 2009-2, pp.67-78.
- Sherratt, A. 2006 The Trans-Eurasian Exchange: The Prehistory of Chinese Relations with the West In *Contact and exchange in the ancient world.*, pp.30-61
- Sherratt, A. 1976 Resources, Technology and Trade: An Essay on Early European Metallurgy. In *Economy and Society in prehistoric Europe.*, pp.557-581
- Sinor, D. 1990 Introduction: the concept of Inner Asia. *The Cambridge History of Early Inner Asia.*, pp.1-18
- State Museums of Berlin 2007 *Under the Sign of the Golden Griffin royal graves of the Scythians.*
- Takahama Shu, Hayashi Toshio, Kawamata Masanori, Matsubara Ryuji, D. Erdenebattar 2006 Preliminary report of the archaeological investigations in Ulaan Uushig I in Mongolia In 『金沢大学考古学紀要』 28, pp.61-102
- Takahama Shu 1983 Early Scytho-Siberian Animal Style in East Asia. In *Bulletin of The Ancient Orient Museum. vol.V.* (『古代オリエント博物館紀要』 第5号) pp.45-51
- Trigger, B.G. 1985 *Archaeology As Historical Science.* (トリッガー著 (菊池徹夫、岸上伸啓訳) 『歴史科学としての考古学』)
- Volkov, V.V. 1995 Early nomads of Mongolia. In *Nomads of the Eurasian Steppes in the early iron age.*, pp.319-332
- Watson, W. 1971 *Cultural Frontiers in Ancient East Asia.*
- Zalmony, A. 1933 *Sino-Siberian Art in the Collection of C. T. Loo.*

【キリル文字】 著者名 АБВ 順

- Аванесова, Н. А. 1975 Серьги и височные подвески андроновской культуры. В кн. *Первобытная археология Сибири.* стр.67-73
- Амартувшин, Ч., Жаргалан, Б. 2010 Хурал зэвсгийн уеийн булшны судалгаа. In Амартувшин, Ч., Ханичёрч, В. *Дундговь аймагт хийсэн археологийн судалгаа: бага газрын чулуу.*
- Вадецкая, Э.Б. 1967 *Древние идолы Енисея.*
- Вадецкая, Э.Б. 1986 *Археологические памятники в степях среднего Енисея.*

- Боковенко, Н. А. 2011 Эпохи бронзы и раннего железа южной Сибири: критерии выделения. *Переход от эпохи бронзы к эрхе эпохи железа в северной Евразии*. стр.16-18.
- Волков, В.В. 1981 *Оленные камни Монголии*. (中文訳: 王博、呉研春訳『蒙古鹿石』中国人民大学出版社)
- Волков, В.В. 1967 *Бронзовый и ранний железный век северной монголии*.
- Волков, В.В., Новгородова, Э.А. Оленные камни Ушкийн-Увэра (Монголия). В кн. *Первобытная археология Сибири*. стр.78-84.
- Грач, А. Д. 1983 Центральная Азия как историко-археологический регион. В кн. *История и культура центральной Азии*. стр.244-265.
- Грязнов, М.П.1980 *Аржан : царский курган раннескифского времени*.
- Гришин, Ю.С. 1960 Производство в тагарскую эпоху. В кн. Тихонов,Б.Г. и Гришин,Ю.С. *Очерки по истории производства в приуралье и южной Сибири в эпоху бронзы и раннего железа*. Академии наук СССР
- Гришин, Ю.С. 1971 *Металлические изделия Сибири эпохи энеолита и бронзы*.
- Гришин, Ю.С. 1981 *Памятники неолита, бронзового раннего железного веков лесостепного Забайкалья*.
- Диков,Н.Н. 1958 *Бронзовый век забайкалья*.
- Кирюшин,Ю.Ф. 2002 *Энеолит и ранняя бронза юга западной сибир*.
- Киселев,С.В. 1951 *Древняя история Южной Сибири*.
- Киселев,С.В. 1960 Неолит и бронзовый век Китая. *Советская археология* No.4. стр.244-266
- Кузьмина,Е.Е. 1966 *Металлические изделия энеолита и бронзового века в средней Азии*. (Археология СССР : свод археологических источников ; вып. В4-9)
- Кызласов,Л.Р. 1979 *Древняя Тува*.
- Лазаретов, И. П. 2006 *Заключительный этап эпохи бронзы на Среднем Енисее*.
- Леонтьев.С.Н. 2007 “Клад” бронз сейминско-турбинского типа из деревни верхняя мульга (юг Красноярского края). *российская археология* No.3. стр.141-143.
- Максименков,Г.А. 1961 Новые данные по археологии района Красноярска. *Вопросы истории сибир* и дальнего востока. стр.43-46.
- Максименков,Г.А.1975 Современное состояние вопроса о периодизации эпохи бронзы Минусинской котловины. В кн. *Первобытная археология Сибири*. стр.48-58.
- Мошкова,М.Г.1992 *Степная полоса Азиатской части СССР в скифо-сарматское время*.
- Новгородова,Э.А.1970 *Центральная АЗИЯ и карасукская проблема*.
- Новгородова,Э.А.1989 *Древняя Монголия*.
- Тихонов.Б.Г. 1960 Металлические изделия эпохи бронзы на среднем урале и в приуралье. в Тихонов Б.Г. и Гришин Ю.С. *Очерки по истории производства в приуралье и южной сибир* в эпоху бронзы и раннего железа. стр.5-115.
- Хлобыстина,М.Д.1974 Многофигурные изображения в зверином стиле из Восточной Сибири.

В кн. *Древняя Сибирь*. 4. стр.55-64.

Худяков Ю.С.1987 Херексуры и оленные камни. В кн. *Археология, этнография и антропология Монголии*. стр.136-162.

Черных,Е.Н. Кузьминых.С.В 1989 *Древняя металлургия северной евразии*.

Черных, Е. Н. 2005 Пути и модели развития археометаллургии (старый и новый свет). *Российская археология* 4. стр.49-60

Членова,Н.Л.1962 Об оленных камнях Монголии и Сибири. В кн.: *Монгольский археологический сборник*. стр.27-35.

Членова,Н.Л.1967 *Происхождение и ранняя история племен тагарской культуры*.

Членова,Н.Л.1968 Карасукские находки в излучине Чулыма. *Краткие сообщения института археологии*. 114. стр.84-93

Членова Н.Л. *Хронология памятников карасукской эпохи*. М., 1972.

Членова,Н.Л.1976 *Карасукские кинжалы*.

Hermann Parzinger 2006 *Die frühen völker eurasiens*.